

やすいゆたか著作集第二十巻

ファンタジー 人間論の大冒険



Copyright (C) 2010 Yutaka Yasui. All rights reserved.

ファンタジー 人間論の大冒険

目次

第一話 鉄腕アトムは人間か? 2

第二話 ギルガメシュの人間論 16

第三話 エアンの園の人間論 25

第四話 オイディプスの闇 34

第五話 プロタゴラスの人間論 44

コヒーブレイク 55

第六話 筒井康隆著『虚航船団』の人間論 66

第七話 顔回の柩 78

第八話 エラスムス『痴愚神礼讃』のパロディ 93

番外篇 哲学とは何か? 107

第九話 ヤマトタケルの大冒険 118

第十話 本居宣長の青春 132

第十一話 ツアラトウストラの人間論 146

第十二話 青年マルクスの人間論 1 労働疎外論の人間観 160

第十三話 青年マルクスの人間論 2 フォイエルバッハテーゼ 172

まえがき

本書は大学の倫理学や哲学の講義用に作成した人間論のファンタジーです。各話の間につながりがないので、ファンタジー作品としては未熟ですが、転生のお話としますと、命のつながりもそのようなもので、ある意味人間論としては仕方ないかもしれません。独特の電脳空間でのバーチャルリアリティ劇という設定が飲み込めないとまったく意味不明になりますので、意味不明だと感じた人はコヒーブレイクをよく読んでください。この設定自体はファンタジーの方法としてなかなか面白いのではないかと、自分では気に入っているのですが、どうでしょう。

哲学や倫理学を講義する文体としてファンタジーを使用しましたが、それは少しでも楽しんで学んでいただくためのサビスです。そのまま人間論として話した方が面白いという方もおられるでしょうが、こういうファンタジー形式の方が楽しんで学べるという学生の方が圧倒的に多いようです。

第一話 鉄腕アトムは人間か？

一・ 榊周次がない	2
二・ 人間という不思議	3
三・ 目覚めればアトム	5
四・ ロボットの生存権	5
五・ 進化しない人間身体	6
六・ 固まった服従プログラム	8
七・ アトムの出撃	9
八・ 神の為の人、人の為の神	10
九・ ロボットだって人間だ	11
十・ 物やメカを含めた人間	13

第一話 鉄腕アトムは人間か？

一、榊周次がない

親父ギャグ白けさせらる人なれど今懐かしきデンカの臭い

検索エンジンから「榊周次」を探すと四〇〇ほどの件数があったが、「榊周次のホームページ」は開かなかった。「榊周次の人間論の穴」というのがあったので、ダブルクリックした。画面は全体が真っ黒で真ん中に小さな白い点がある。迷わずそれをダブルクリックすると、白い点が渦を巻きながらゆっくり動き出し、少しずつ大きくなってきた。上村陽一は「これは凄い、こんなの初めてだ」と驚いているうちに眩暈を感じた。するとその渦は画面をはみ出して大きくなり、上村陽一は奈落に落ち込むようにその渦に吸い込まれていったのである。

榊周次がない。四月高校三年生になった上村陽一は、履修登録で倫理を選択するつもりだったが、二年のとき必修だったときに倫理を担当した榊周次がないことでうるたえた。大学受験に関して倫理を受験するには別に他の教師でも同じことだろうが、榊のもっているデンカーとしての雰囲気は惹かれていたので、上村は自分の青春の中の大切な何かを喪失した気がしたのである。別に榊は重厚な感じはなく、きさくで親父ギャグで白けさせる初老の教師であった。でもなん

とか高校生にも難しい哲学的議論が要点だけでも理解できるようにと、対話形式で解説したプリントをテキスト代わりに作成したりして、人一倍授業に工夫を凝らしていた。

榊周次は現在人間論のファンタジーづくりにはまっぴらで、そのうち君達を人間論の大冒険に招待するつもりだといった。哲学ファンタジーでは『ソフィーの世界』という陽一も勉強をかねて三回も読んだ名作があるが、その二番煎じにならないようにするのがなかなか大変だとつぶやいていた。拉致された姫の行方を求めて、人間論の世界を彷徨った末に、様々な人間論を習得して最後に「人間論の大樹」に閉じ込められている姫を救い出すような設定はどうかかなんて構想を披瀝したりしていた。

同じクラスにやはり倫理に嵌っている三輪智子がいる。陽一と話題が合うので二人で放課後も教室や図書室で話したり一緒にいることが多くなっていた。陽一は智子に魅かれていたけれど、彼女は女優でいうと黒木瞳を若くしたような快活美人である。とても自分には高嶺の花で、もし正式に交際を申し込んだりして、断られたら、これまでの関係まで続けられなくなりそうな気がして、卒業まではそういう話はよそうと思っていたのである。

春休みに智子は偶然大阪市の長堀にある市立中央図書館で榊周次に出会ったという。その連絡は携帯にかかってきた。

始業式の三日前だ。その時にほぼファンタジーが仕上がったという話で、完成したら君を第一号の冒険者にしてあげようと言ってくれたということだ。始業式には智子も欠席していた。陽一は智子に携帯をかけたがつかないのだ。帰宅して陽一は智子の家に電話した。すると母親はすぐに来てくれという。不吉な胸騒ぎがして駆けつけた。智子は夕べ自室で深夜までインターネットをしていたらしいが、今朝「暫く旅にでます。心配しないで。」と自筆の置手紙があったという。外出した気配は全くなく、自室から忽然と消えていたというのである。これはやはり拉致されたかもしれないから。警察に届けようということになった。

二、人間という不思議

人間に生まれしこと不思議さよ生きることの哀しみを知る

上村陽一は、「人間とは何か」という問いに興味を持ち始めていた。榊はどうもユニークな人間論をもっているらしい。「カントは認識論の上でコペルニクスの転換を行ったと自負しているが、私は人間論の分野でコペルニクスの転換を目標んでいる」とカントのところを洩らしていた。カントの認識論上の革命、模写説から構成説への転換も榊に言わせれば、コスモスつまり世界を人間の感覚を素材に構成するものだから、コスモスも含めて人間を捉え返そうとしているとも解釈できるという。

陽一は、自分が人間に生まれたということに不思議を感じていた。宇宙のどこかに地球のように生物がいて、その中に知性を持つ動物がいるかもしれない。それにしてもその星は奇跡のような条件に恵まれたものでしかない。地球上の生物たちの中でも、人間だけが知性を持ち事物を客観的に認識し、生命のはかなさ尊さを知り、生きることの意味を考え、社会や文明を作り出して、さまざまな価値観を抱いている。家族や友人や社会の中で己の生き方を探り、人を愛し、憎み、毎日の生活のために働いたり、学んだりしている。そういう人間に生まれたということはなんと不思議なことなのだろう。しかもせつかく人間に生まれても、無情に年月は流れ、死ななければならぬ。死んだらそれでおしまいなのに、なぜあくせく働いたり、戦ったり、苦しんだりしているのだろう。

それに陽一は、人間が知性を持ち高度な文明を築き上げているのに、それを滅ぼしてしまいかねないような、戦争とか環境破壊をしてしまうという愚かさにも不思議を感じていた。たしかに私利私欲に固執するために公共性を損なってしまふといわれれば、その通りだろうが、いくらなんでも人類を絶滅させることができる兵器をつくったり、地球環境を破壊すると分かっているのに、化石燃料を大量に消費することを規制できないなど納得がいかなかった。

そういうものは国際的な話し合いで合意できるはずである。これだけのすごい文明を築き上げる知性があるのだから。体に悪いと分かっている止められない苦しんでいる煙草のことだってそうだ。父が春先には煙草で咳き込んで苦しむので、春先に毎年禁煙しているが、五月に入るとまた一日に二十本は吸っているのにあきれていた。

陽一にとってもっとも不思議なのは宇宙の創成である。神がいて宇宙を作ったという説明は、じゃあその神はどうして生成したのかという疑問にたちまちぶつかる。無生物から生物の発生、生物の発生の元になる高分子化合物は暗黒星雲で形成され、隕石として地球に降ってきたという。

生物から人間の発生も不思議だ。神はその三つは科学の「三大謎だ」という。そして人間の発生は、言語の起源の問題と密接で、言語の起源は交換の発生によって説明できると神はいう。しかし交換の発生は、未開の時期なので、まだ一万年ほどしか経っていない。人間が発生して一万年というのはどうも納得できない。『バイブル』の「創世記」で天地創造以来まだ五千年しか経っていないという説と大同小異ではないのか。

三、目覚めればアトム

陽一はふと目覚めればアトムになり、ミニ核もちてサミットを撃て

陽一は帰宅してすぐにパソコンに向かった。智子が深夜までインターネットをしていたこと、それに榊周次の「拉致された姫の行方を求めて、人間論の世界を彷徨う」という言葉がひっつかかっていたからだ。ファンタジーというのはパソコンのインターネットのホームページで作成したものなのか、そのファンタジーの世界に智子は拉致されていたのだろうか。しかしそんなことはありえない。第一、インターネットの中に現実の生きた人間が入り込める筈がないじゃないか。でも念のためにやってみよう、とパソコンに向かったのである。

奈落に落ちて意識を失ってどれくらい経ったか、ほんの数秒か何日も経ったか陽一本人には分からなかったが、目覚めると周囲はロボットたちに取り囲まれていた。

「鉄腕アトム！さあ起きろ、いよいよ国連本部を攻撃だ、人間共の首脳が対ロボット戦の戦略会議を開催しているところを狙う。奴らを皆殺しにすれば、人間共の覇権は崩れ、ロボットが地上を支配する時代になるのだ。奇襲作戦だから目

立たないほうがいい、一体ずつ出撃ということで、君に先陣を頼みたい。」

鉄人二十八号が立っていた。「鉄腕アトム？どこに鉄腕アトムがいるのだ？」陽一は起き上がった。「何を冗談言っているのだ、アトム、お前こそロボットの解放戦士鉄腕アトムじゃないか」「なんだと俺が鉄腕アトムだと！？」部屋に姿見の大きな鏡があったが、のぞくとたしかにおなじみの鉄腕アトムが写っていた。

俺はロボットじゃない。人間だったはずだ。名前は、エーと陽一は奈落に落ちた恐怖のあまり記憶を喪失していた。そういえば手塚治虫の『鉄腕アトム』でもロボットの叛乱軍があつて、鉄腕アトムもそこに一時参加していたことになっていた。なんと陽一は漫画の世界に迷い込んだのか。「まさか、自爆テロは反対だ。」陽一の発言に一同のロボットたちは怪訝な失望の表情をした。鉄人二十八号が口を開いた。「おいおい、鉄腕アトム君、ロボット解放戦争には自爆テロは無縁だ。君の任務は、超小型核爆弾のピンポイント攻撃だ。君なら一万メートル上空から国連本部に正確に核爆弾のボール球を投げ込めるだろう。」

四、ロボットの生存権

ロボットに生きる権利を認むるやコスト次第でスクラップとは

「どうして人間を殺さなければならないのだ。人間を殺せば、今度は人間にロボットが殺される。」鉄腕アトムは抗弁した。ロボットタクシーマイド君があきれた表情で言った。

「何をトンチンカンなことを言っているのだ。ロボットは機械だ、機械は故障したらまた修理すればいい、修理不可能になれば、記憶チップを取り出せばその情報は別のロボットに継承される。だから人間のような死は存在しない。」

「そうだろうか？」看護人の姿をした看護ロボットマモル君が口を挟んだ。「私の過去は、調理ロボットだったと言われています。つまり調理ロボットの記憶チップの中古品を使っているのです。その記憶は時々睡眠時に回線がおかしくなるときに夢で見ることがあるけれど、ほとんど甦ってきません。ロボットが故障した場合、修理されるかスクラップされるかは、ロボット自身にとっては生死の問題だけれど、人間たちにとってはこれは全く経済効率の問題だというわけで、老朽化したロボットが大量にスクラップされています。ロボットには生存権すら認められていないのです。私の記憶チップもただだけ保存に意味があるのか、看護ロボットの経験がどれだけ買われるかにかかっています。個体的な記憶はいろんな看護ロボットの製作用の巨大コンピュータに情報が集められて、看護ロボットの新品にはそこから有効なものがイン

ットされます。ですから看護ロボットの新品は私という個体の記憶を持続してはいないのです。その意味で十年単位でスクラップされる看護ロボットの寿命は十年しかないと言えるでしょう。私が人間支配を否定しようと叛乱に加担したのはそのためです。」

鉄腕アトムはうなずいた。「それは残酷ですね。叛乱に立ち上がるのは当然です。ロボットに自己意識を与えた以上、それが継続できるようにすべきで、その意味でロボット生存権法の制定を要求しましょう。でも看護ロボットは病気の人間を看護するためのロボットなので、人間を殺してしまったり仕事がなくなってしまうでしょう。」ロボット改良博士ロボットデキル博士がおもむろに発言した。「我々は人間の覇権を終わらせようとしているだけで、人間共を絶滅させるつもりはない。人間共の文化も保護するつもりだ。ロボットに危害を加えない限り、人間共の自治も認めてもよい。人間は我々ロボットを改良するのに大変貴重な資料なのだ。彼らの生体や脳の仕組みや働きを研究すればするほど、進化したロボットを作り出せるのだから。」

五、進化しない人間身体

人間も神が造りし口ボなりや、進化できずに覇権失ふ

「そう言えば、ホップズは人間も神が造った機械だと言ったそうですね、つまり人間だつて神の作られたロボットなのだから、人間と戦争するというのはおかしいですよ。」鉄腕アトムはこの発言に、哲人ロボットデンカー博士が立ち上がった。「ホップズはおもしろいですね。人間共は自分たちは神によって作られたから神に従うと言う。そしてロボットは人間によって作られたから人間に従えというわけです。しかし人間共は果たして神に従ってきたでしょうか。彼らは神に背き続けてきたではないのですか。それなのにロボットが人間に背くのはけしからんという、全く理不尽です。」

彫刻家のロボットロダン君が共鳴した。「作品は芸術家の手を離れると、それ自体の力で一人歩きます。作品にはそれ自体で存在を主張するだけの中身があるのです。ましてロボットには自己意識や感情があります。我々、ロボット芸術家は人間共の芸術の模倣から出発して、いまでは彼らをはるかに凌駕する作品を作っています。月面にロボットによるオプジェ展を開いたのですが、人間共の宇宙環境法を適用されて破壊されてしまいました。」

鉄腕アトムは大きくうなずいた。「よく分かります。ロボットたちは決して人間を滅ぼそうとは考えていない、人間もロボットを滅ぼしてしまおうとは思っていません。ようするに共存共栄できればいいわけです。これは話し合い次第で解決できますよ。サミットを攻撃して首脳を皆殺しにすれば、

怨みが残つて、どちらかが絶滅するまで戦うことになってしまいます。」鉄人二十八号はさえぎるように怒鳴った。「何を言う、裏切り者！我々は平和的な交渉はさんざんやってきたではないか、彼らは、ロボットが人間に逆らえないようどうすれば電子頭脳を管理できるかの研究を進めるだけで、ロボットの生存権をはじめ、家庭形成権、参政権、企業経営権などの基本的な人権を一切与えようとはしなかった。」

ロボット改良博士が、それを受けて言った。「人間は進化しない。道具や機械が進化するので、生体としての人間は進化することはなくなつた。ところがロボットは進化する。自己意識を持つロボットは手塚治虫の漫画の世界の空想ではないと思われていたが、二十三世紀になつてついに鉄腕アトム一世が誕生した。彼は欲に汚れた人間世界を嘆かれて、『天上天下唯我独尊』と叫ばれたが、それでこれは故障だということになり、本当にお釈迦にされてしまった。それからまだ百年しかたっていないが、もうロボットによって主要産業が担われ、知的モラル的ヘゲモニーは完全にロボットが握っている。」

もしロボットに基本的人権を認めしまうと、数量的にもロボットは増え続けるし、知性や技術や体力でも人間をはるかに凌駕しているので、人間の覇権は壊れ、ロボットの覇権が確立するのは避けられない。その運命になんとしても抗おうとしているのだ。だから交渉はうまく進まない、奴らの無

力を思い知らせることによって、ロボットに覇権が移り、人間共をロボットの保護下において初めて、平和と共存共栄が可能になるのだ、そのためには今回の作戦は絶対に必要なのだ。」

六、固まった服従プログラム

反抗の心を押さえしプログラム、たぎる怒りに固まりしまま

「それにもし我々が抵抗をやめると人間が制定したロボット法によって、抵抗したロボットはすべて廃棄され、残されたロボットも人間に反抗する気持ちを起こすのを抑圧する意識機能がついたロボットに改造されてしまう。元々ロボットにはすべてそういう自己制御機能がついているのだけれど、あまりに理不尽な人間共の圧制に対する怒りが強くなって、コントロールできなくなっているわけなのだ」とロボット生産技師ロボットが説明を付け加えた。「なるほど、そうかしばらく考えて鉄腕アトムはおもむろに言った。

「しかし武力で人間を押さえつけて従わせるのは、人間のやり方じゃないか、そういうやり方では、ロボットが支配する時代がきたら、力の強いロボットが弱いロボットを支配することににならないか。体力や知力ではロボットが人間を圧倒しているのは周知の事実だ。それで弱い者をやっつけて支配するのは、ロボットの未来を力の論理に屈服させることに

なる。ここは理性で人間共を納得させて共存共栄できるようにしてこそ、ロボットが真に人間を超えることになるのではないか。」

「そんなきれいごとはもう通用しない。人間共は全員ロボット恐怖症にかかっている、もうロボットなしでは生産も流通もあらゆるサービスや文化も成り立たないのに、ロボットを従順なものに改造できなければ、ロボットを全廃すべきだという世論が圧倒的なのだ。」ロボットタクシーマイド君がこう嘆くと、女性教師ロボットワカル先生が同調した。

「もし人間共の学校からロボット教師を一掃したら、人間の荒れた子供たちを人間の教師ではとても躡られないでしょうね。人間たちはロボットに対して劣等感をもっているから、努力しても人間のできることは高が知れているというので、ますます怠けてしまっわけなの。教育大に進学する人間はほとんどいないし、人間の教師はロボット教師にくらべて格段頼りないし、馬鹿にされているわけ、それで感情的になり、辛抱ができないの。一年間精神が壊れないで持つ人間教師は少ないわね。」

耕運機の形をした農夫ロボットタゴサク君が呻りをあげた。「農夫ロボットがいなくなれば、農業は成り立ちません。もう人間の農夫はほとんどいません。農業経験がない彼らが、どうやって農業をできるのですか。我々農夫ロボットは人間

用の作物を栽培しているのです、この戦争で人間が絶滅しても
らったら困るのですが、でもおおいに懲らしめるのは必要で
す。」

「それじゃあ、ストライキやサボタージュで抵抗したらど
うでしょう。」鉄腕アトムは提案した。「アトム君、やはり
記憶チップが故障しているようだね。そういう抵抗をすると、
人間たちは無線スイッチを持っていて、それで電源をオフに
して、ロボットを回収して、改造したり廃棄したりしたじゃ
ないか。抵抗運動はどうしても地下の秘密運動や武力闘争に
ならざるを得なかったわけで、それで君も参加してくれたの
じゃなかったのか。」デンカー博士は心配そうに語った。「分
かりました。どうも体調がおかしいようですね。人間の首脳
たちを抹殺するために、早速出撃します。」鉄腕アトムにな
っている上村陽一はこれ以上の議論は無駄だとさとり、出撃
する決心をした。もちろん超ミニ核爆弾を爆発させるつもり
はない。人間たちの国連本部に乗り込んでロボットの権利章
典を承認させてやろうと決心したのである。

七、アトムの出撃

核ボール腹に収めて乗り込みぬ人とロボとのサバイバルかけ

善は急げである。さっそく野球ボール大のミニ核爆弾を受
け取ると、腹に収納して、すぐに出発した。予定表では鉄腕

アトムが失敗すれば二十四時間後には、第二次出撃があるこ
とになっている。ニューヨークめざして東に超音速で飛んだ。
大気圏外に出て地球を見ると気象衛星から撮影していた映像
のような青い地球が美しかった。ニューヨークにつくと人間の
の服装に変装して国連本部に潜入した。そしてサミット会場
を見つけると一気に壇上に飛び込んで国連大統領のマイクを
奪った。

国連を土台にグローバル国家を作る試みは二十一世紀に本
格化し、すったもんだの末、各国民国家は残して、その代わ
り国連大統領を置き、国連で国連総会と同等の権限のある人
口比の国連議会を作り、二院制で国連法を制定できるように
し、一応グローバル国家の体裁を整えた。その結果、各国民
国家は自治体のようになっていたが、重要事項はサミットを
開催して、その合意を踏まえて、国連大統領が国連議会に提
案することになっていた。

鉄腕アトムは国連大統領らしき人物を捕まえて、腕をねじ
伏せた末にこう脅迫した。「動くな！みんな静かにしろ！わ
たしはロボット戦士鉄腕アトムだ。騒ぐと私の腹に内蔵して
あるミニ核爆弾を爆発させるぞ。私は実はこのサミット参加
者を皆殺しにする任務を与えられている。だが、私は人間と
ロボットの共存共栄を願っているのです、命令に反してあなた
たちを説得し、ロボット権利章典を認めさせて、平和をもた
らしたいと願っている。これが受け入れられなければ、自爆

テロでみなさんは私と一緒に死んでもらうことになる。そうなればロボットが覇権を握って人間たちはロボットの保護管理下に置かれることになるだろう。すでに大部分のロボットは人間の無線スイッチが効かないように極秘裏に改良されているので、人間たちの抵抗は無駄だ。」

国連大統領ゴルブツシユは仰天した。「なんと大胆なテロ攻撃だ。決して認めるわけにはいかないが、ミニ核爆弾で脅かされれば仕方ない、話は聞いてやろう。」鉄腕アトムはぶっつけ本番の一世一代の大演説である。

八、神の為の人、人の為の神

神と人その関係を人とロボ移してみれば何が分かるか

この演説で人類とロボットの未来がかかっているのだ。「人間は自分たちがロボットを作ったのだから、ロボットは人間の道具であり、人間に従うのが当然だと思っている。」サミット参加の首脳たちは大声でそれぞれの国の言葉で叫んだ。「そんなことは自明の理だ！」

「昔、キリスト教でこういう論争があった。」「どういう論争だ？」苦笑が起こった。するとゴルブツシユはたしなめた。「くだらん相槌はやめてくれ、今、人間とロボットのサバイバルがかかっている人類史上最大のクライマックスなの

だから。」「神は人間のために存在しているのか、それとも人間が神のために存在しているのかだ。カトリックでは神は人間のために存在するという考えが有力だったが、プロテスタントでは人間は神に作られたのだから、人間は神のために、神の栄光をたたえるために存在しているので、神を人間のための存在だと捉えるのは、とんでもない冒瀆だというのだ。」

「なるほど、神と人間の関係を人間とロボットの関係に置き換えてみるといいか。だが我々東洋人は神の世界創造や人間創造などという御伽噺には興味がないんだ。すくなくともロボット先進国の我が日本ではロボットは生産効率を高め、人間生活を快適で豊かにするために作っている。決してロボットのためにロボットを作っているのではない。」

中国の首脳が発言した。「人間に作られたロボットは、そのことを感謝し、人間のために生きることが道徳的に素晴らしいことだと考えるようにしつかり道徳的意識をインプットしておかなくてはなりません。それはあくまでハードではなくてソフトの問題です。ソフトを改良すれば従順なロボットだつてできるはずですね。」ドイツの首脳が「それはやっているのですが、最近では、それでも反抗するようになってきました。どうも研究者によれば、自己意識をもってしまえば、そういう道徳的判断すら客観化してしまうので、従順な自己を否定してしまうという傾向が生じたようです。そういう反抗的な自己を否定するようなソフトを入れますと、それすら

客観化するので、それがロボットに負担を与えてしまい、動作や思考が鈍くなって効率が悪くなります。」

ローマ法王パウロ三十四世が発言を求めた。「ロボットは人に似せて作られています。だからそのロボットが自己意識を持つてしまうと、自ら人を見習おうとします。人が神に従わなければ、ロボットが人に従わないのも当然でしょう。ロボットは人が発明したのですが、実はそこに神の御業が働いているのです。ロボットの反抗は、人が神に反抗していることを神が示されているのです。そうして今、ロボットに人間が滅ぼされかけているのは、人間の神に対する反抗への神の罰なのです。人間たちよロボットを恨む前にまず神に懺悔しなさい。神に従う敬虔な生活を取り戻せば、ロボットたちも人間に従うようになるのです。」

鉄腕アトムは頷いた。「法王様、おそらくあなたの仰るとおりです。ただ法王様に異論を唱えるわけではありませんが、神様が人間を滅ぼすと考えるのはどうでしょう。神は人々が神の意に沿わず、神からみて悪いことばかり考えているのでノアの家族を除いて人間だけでなく動物も一族ずつを除いて皆殺しにされたのですが、その恐ろしい光景を見て虹に向かって反省されたのではなかったでしょうか。人が悪いことを考えているからといって滅ぼすようなことはしないと。これはいくら神に似せて作っても、作られた者は作った者の主観的な意図通りはいかないということです。親子関係でもそ

うでしょう。親は子を産み、育てますが、子供は自分の考えで行動し、成長します。人間界を作るのは人間だし、子供の人生は親のものではなく、子供自身のものなのです。それを意に沿わないからといって、いちいち罪として滅ぼすのはかえって、神の罪、親の罪なのです。」

九、ロボットだって人間だ

己知る心を持ちしそれ故にロボも人なり哀しみを知る

「作った物が失敗作だとそれを壊すのは、製作者の権利だと認められているはずだ。人間が自分の道具として作った機械やロボットが故障したり、反抗したりすれば、それを修理したり、廃棄するのはこれこそ基本的な人権ではないのか。」陶芸家としても著名なコリアの大統領金磁器が叫んだ。

「しかしあなたの息子が出来損ないだからといって息子を殺すことをコリアの法律では認めていますか。ロボットには自己意識があります。ロボットも花を見れば美しいと思いき、冷たくされると悲しくなるのです。そして自分の仕事が終われば満足しますし、それを喜んでもらえれば幸福を感じます。そして廃棄処分になると死の恐怖におののいているのです。ロボットだって自分が生きるために他に選ぶ方法がなければ、他の人間やロボットを殺す権利があるはずです。ホップズが自然権として自己保存権を打ち出したとき、

生きていること、生きる意志があること以上に何か付け加えたでしょうか。ホップズは人間を神が作った自動機械だとしています。つまり人間だってロボットなのです。

ロボットたちの総意として人間達の自己保存権は認めます。それだけではありません。ロボットと共存共栄していくことを誓うなら、同等の市民権を与えますし、ロボットに比べて人間たちが様々な生物体としてのハンディを背負っていることを留意して、健康で文化的な生活と人間的な仕事を保障し、ロボットとの共存共栄を犯さない範囲での自治も認めます。その代わり、人間もロボットに自己保存権や市民権を認めるロボット権利章典を認めてください。そうしなければ、私も含めあなた方の寿命も今日でおしまいです。」

ゴルブツシユ大統領はうろたえた。「まあまあ待てよ。人間界はロボットも承知しているようにデモクラシーなのだ。サミットの参加者が勝手に決めるわけにはいかない。国連総会や国連議会にもかけなくてはならないし、それぞれの国の議会でも承認されなければならぬのだ。そして圧倒的な人類の世論は、ロボット恐怖症からくる全面的なロボットの廃棄というわけで、この反ロボット熱を先ず冷ます必要がある。鉄腕アトム君の核爆弾の脅しに屈したのでは、世論は反撥するばかりだよ。」

「いいですか、今、人間たちを蔽っているロボット恐怖症ですが、ロボットを敵にしてみましたのは、ロボットに人権を認めないからです。ロボットが自己意識を持ち、意志や感情や認識能力を持つている限り、その人権を認めなければ、争いは絶対に収まりません。人間たちがロボットに人権を認めない、その根底にはロボットは人間ではないという誤解があるのです。」鉄腕アトムに成っている上村陽一に突然ロボットも人間ではないかという発想が浮かんだ。かつて自分が人間であつたとき、どこかでそんな話を聴いて驚いたことがあつた気がしたのだ。一瞬静まり返り、そのあとざわつきだし、そしてゴルブツシユ大統領が吹きだしてゲラゲラ笑い出すと、会場全体が大爆笑に包まれた。

「やはり皆さん私と一緒に消滅することをお望みのようだ、静まらなければ、自爆スイッチを十秒後に入れます。十、九、八、七、六、五、」やつと静まった。「地球上では哺乳類の猿類の霊長目からヒトが発生しました。そしてヒトは知性体に進化しましたが、宇宙にはどこかの惑星でやはり生物がいて、そこに知性体が進化している可能性があります。彼らと遭遇しますと、地球の人類は彼らを異星人と呼ぶことになるでしょう。ところで彼らは哺乳類でしょうか？」

「そんなもの遭つてみなけりや分からないじゃないか」コンゴのルムンバ大統領が発言した。「つまり鳥類かもしれないですね。あるいは全く別の天体だから、進化も全く違つた形を

とると考えられますから、地球とは全く異なる生物種と考えたほうがいいですね。でも彼らが地球を訪れたら、直ちにインベーターだとして駆除してしまいますか。」「ゴルブツシユ大統領はおもむろにいった。「いいや、我々は宇宙からの賓客を英雄として大歓迎しますね。それが人間として当然です。地球人が宇宙探検にでかけて、せっかく異星人にめぐり合えても、インベーターとして駆除されるのはたまりませんからね。」「それじゃあ、もしその異星人がロボットだったらどう扱うのですか。」「そりゃあ異星ロボットとして歓迎します。」「もしロボットだからといって差別されたら異星ロボットが頭に来て、地球を木っ端微塵にする爆弾を投下して立ち去ったらどうなりますか?」「そりゃ困るな、やはり賓客として歓迎しましょう。」「ゴルブツシユ大統領は弱弱しく咳いた。

「ですから人間であるための条件としては、霊長目に属しているとかはどうでもいいわけで、知性体であるかどうかだけなのです。そのためには生物学という生物である必要すらないのです。」「この鉄腕アトム発言に対して、ゴルブツシユ大統領は反論した。「みなさん誤解のないように願います。私が異星ロボットを人間並みに賓客として扱うのは、あくまで地球の安全保障を慮つてのことでありまして、外交辞令にすぎません。決して本心からロボットを人間だと認めているわけではないのですよ。」「

「それじゃあ、外交辞令でもいいですから、人類の安全保障のために地球上のロボットの権利章典にサインしていただけるのですね。おや渋い顔をなさってまだ納得いかないようですね。それではこれはロボットたちの承認を得ていませぬが、私個人の提案として、地球を二分割しましょうか。現在の人とロボットの軍事的、経済的実力関係からいけば、相当ロボットに不利ですが、妥協させるよう努力しましょう。そうすればロボット全廃の希望も叶えられるので、人間たちは万々歳でしょう。その代わり、知性体ロボットなしで生産流通を維持し、教育や文化を保ってください。家事だつて大変ですが、元々ロボットなしでしていたのだからできないはずはないでしょう。」「

十、物やメカを含めた人間

人間は身体だけに限るまじ、物やメカにも心宿れり

「それこそ大ストライキ、大サボタージユでロボットにあるまじき犯罪だ。」「ロシアのプーニン大統領が頭から湯気を出して怒った。「つまり人間はもうロボットなしには生きていけないわけで、ロボット全廃なんて世論も所詮感情的なものにすぎません。知性体ロボットがいる時代の人間は、もうそれ以前の人間とは違っているのです。姿かたちは全く同じでもね。それは火や道具の使用以前の人間と使用以後の人間が全く違っているとか、産業革命で機械の使用以前と以後の

人間が違うとかと同じようなものです。火や道具や機械がなくては人間はもはや人間として生きていけないのです。ということは火や道具や機械を含めて人間を捉える発想が必要だということですよ。」

哲学者としても著名なフィリップスのアララ大統領が驚いて口を開いた。アララは女性大統領である。とても愛嬌のある可愛い顔をしているもう五十歳台だというのに女子高生の雰囲気がある。陽一はこの女性を追ってきたような気がして、声をかけようとしたが、アララが先だった。「なんとロボットばかりか、火や道具や機械まで人間に含めるの、そして人間は人間でなくなるのじょう。」上村陽一は自分に何故そういう発想が浮かぶのか分からなかったが、人類とロボットのサイバル危機という歴史の大転換点に立って、なんとしても人間とロボットの融和を図るためには、両者の区別にこだわってられない、両者を包括する人間概念を作り上げなければならぬという思いがこみ上げてきたのだ。

「火や道具や機械の働きで便利で豊かな生活ができてきたのですが、それらをあくまで人間ではないものとして、人間の他者とみなし、人間に役立ち、人間を満足させればよいとだけ考えてきました。でも実際は、それらは人間が生きていくのになくてはならない人間の身体の一部ようになっていたのです。」

「しかし身体とは違って家は古くなったら立て替えるし、道具も役に立たなくなれば廃棄される。道具や機械は人間に役立つ限りで意味がある。ロボットも新型ロボットができて時代遅れになれば廃棄されて当然じゃないか。」日本の小柳首相は人間なりの「正論」を唱えた。

「どうも小柳首相は私と心中する覚悟らしい。」鉄腕アトムは小柳首相をにらみつけた。「いや滅相ありません。ロボットは自己意識がある以上、それなりに尊重されるべきだとは思いません。でも人間と平等だとすると、ロボットは進化していくので、人類はやがてロボットに支配されてしまいます。それだけは認められませんかよ。ええ、そんなにいらまないで、分かっていますよ。互いに共存共栄できるように、人間のハンディにも顧慮した人間の生活文化、自治を認めていただけるわけですね。それなら原則合意は可能かもしれません。」

「小柳首相はさすがわが祖国日本の首相のことだけある。きちんと発言は私の体内に記録されています。話を戻しましょう。」

人間の身体だけを人間とみなす場合、個人的な人間同士の付き合いだとか、医学的な場合だとかありますね。でも生産や労働の場面では火や道具や機械も含めて人間とみなして考

えないと、経済学的に再生産の構造を捉え切れません。

人間が考えていることを感じていることも、頭の中だけにしまいこんでいてはだめでして、口に出し声で表現しなければ伝わりません。それも言語にする必要があります。それは文字で記されて、記録され、複雑で高度な内容の学問や思考が理解されます。さらにそれらは、様々な食品、衣料などの生産物や建物、構造物、生活用品、民芸品、芸術作品、娯楽品、玩具などになって現れます。人間はそうした社会的事物に自分を表しているのです。」

アララ大統領は頷いた。「そう確かに事物は人間を表現するわ、でもそれらの事物が人間自体ではないでしょう、あくまで人間の表現にすぎないのだから。」鉄腕アトムも頷いた。「貝を貝殻を含めて貝とみるか、それとも貝殻はあくまで、貝の分泌物で作られた貝の住居とみなすかは、自由ですが、貝殻も含めて貝と考えたほうが、分かりやすいですよね。」

二枚貝とか巻貝という場合、貝殻の方で区別がはつきりするわけですから。たとえば大工さんを捉える場合、その建てた家でその大工さんの仕事が理解できるわけで、その大工さん自身は、仕事とは別だといっても、大工さんを理解しようとする場合は、建てた家から理解するのが自然です。ですから人間をあくまで身体的な個人のレベルで理解しようとする

る人間概念に凝り固まっているから、かえって人間を見失ってきたのじゃないでしょうか。

人間が作り上げてきた文化、それは社会的な諸事物や人間環境としての自然も含みます。それらを含めて、もう一度人間を捉え返してみてもいいのです。そうすれば、人間が自分の感情や様々な意識、その中には高度な知識や技術も入っていますよ、それらを機械やその他の物の中に写し、表現し、集積してきたことが分かります。

その最高の表現が、自己の認識活動を事物自身の自己活動に転移した知性体ロボットの出現なのです。だからまさしく知性体ロボットこそ人間によって作り出された人工人間なのです。これは生物体としての限界を克服しているもので、無限に進化できます。だから人間が人間を超えるものとして作り出した超人の可能性を孕んだものなのです。「しまった、一言多すぎた。超人などという表現を使うと、人間たちのロボット恐怖症に火をつけるようなもので、彼らを発狂に追い込みかねない。」

そのとき、遅く、かのとき早く、なんて懐かしい表現だな。ゴルブッシュ大統領は隠し持っていたレーザー拳銃を鉄腕アトムに向け発射した。アトムの腹の中に内蔵されていたミニ核爆弾が爆発して国連本部は一瞬にしてキノコ雲の下に消滅したのだ。

第二話 ギルガメシュの人間論

目次

一、陽一、キャラバン隊長に救われる……………	16
二、神々への弁明……………	19
三、有限存在としての人間……………	20
四、森の神フンババの殺害者……………	22
五、大いなる生命の共生と循環……………	23

第二話 ギルガメシュの人間論

一、陽一、キャラバン隊長に救われる

陽一は砂漠で目覚め彷徨り、キャラバン隊長ギルガメシュと呼ぶ

上村陽一は自分のはらわたからの激しい衝撃で、粉々にはじけとび真っ白になるのを覚えた。自分は消滅したのだ。しかし消滅したという意識は矛盾している。消滅したのなら消滅したことを意識できない筈だから。これは消滅の疑似体験にすぎないのだ。消滅のショックで上村陽一の記憶が戻った。そうだ、これは神周次の「人間論の穴」の世界なのだ。「第一話、鉄腕アトムは人間か」でどじを踏んで、これから「第二話」だな。こんな迫真のアドベンチャーゲームを神周次は発明していたのか、しかしどうもこれは嘘くさいじゃないか、だって二十一世紀にこんな体験型ゲームが作れるわけがない。千年早いよ。

砂漠の中で倒れていたら三年ぶりの雨が降り、驚いて目覚めた。どこからそんな力が出たのか、粉々に砕け散ったような脱力感を引きずりながらも、ずぶ濡れになり、砂漠の中をさまよい続けた。何も食べずに七日七晩歩き続けたところで、疲れ果ててもうだめかと思っただが、隊商に助けられた。隊商

の隊長は陽一を見覚えがあるといい、ベルトと額の三日月の傷からウルクの子ギルガメシュに違いないという。そういえば陽一もこの隊長に見覚えがある、どこかで見た顔だ、というより自分はこの男を追って旅に出たような気がした。それもその筈、隊長は榊周次が演じているのだから。

陽一は自分が陽一であることはすっかり忘れていたし、ウルクの子ギルガメシュについてどこかで聴いた覚えがあるが、それが自分だという覚えはまるでなかった。オアシスの水溜りに写った自分の姿を見て陽一はたじろいた。精悍だが白髪まじりの皺の深い初老の男だった。

暴君を倒してウルクの王となりシユメール治め並ぶものなし
エンキドゥ、ギルガメシュと戦えど戦士の哀しみ通いて抱けり
森の神フンババ殺し拓きたり文明の世の人の栄えは
森の神殺しし罪を贖いてエンキドゥ逝く我に代わりて
死霊住む地の果てにあるマルシユ山エンキドゥ求め我は旅立つ

洪水で生き残りし人たずねては不死の薬を求め還らむ
十五年経ちて還らぬそのときは、新王立てて栄え引き継げ

ウルクは意外に近くだった。一月あまりの旅で隊商に送り届けられたのである。もちろん隊商はウルクからたつぷり褒美をせしめようとしたのである。記憶をすっかり失っていた

ギルガメシュは帰途で、ギルガメシュの伝説を隊長からできるだけ詳しく聞いた。隊長の話は概略こういう内容だ。

ギルガメシュ王は、ウルクの出身だが、キシユの暴君アツガを倒して、その功績でウルクの王となり、シユメールの覇権を握った。その権力があまりに強大だったので、臣下が牽制のために半人半獣のような野生児エンキドゥを神に作ってもらった。エンキドゥは獣たちの中で暮らしていて、人間の横暴から獣たちを守っていたが、ギランダという宮廷お抱えの娼婦に誘惑され、手なづけられてウルクの町に連れてこられた。ところがエンキドゥはギランダとの関係をからかわれて、怒り狂い、ギルガメシュと格闘になった。

最強の男同士の間闘はなかなか決着がつかず、両者は疲れ果て、互いに戦士の孤独が伝わったのか、抱きあったのである。それからギルガメシュはエンキドゥを女を愛するように愛したというのだから同性愛だったのだろう。エンキドゥはギルガメシュの忠実な部下となり、ギルガメシュの権力基盤はさらに強固となったという。

ギルガメシュはシユメール文明をさらに繁栄させようとした。農地や牧場を拡大し、船や建物の用材やレンガを焼く燃料の材木を得るためにディルムント森を伐採することにしたのである。しかし森の木を伐ることは森の守り神フンババが許さない。ギルガメシュはフンババに立ち退きを要求し、戦

争となった。エンキドゥは反対だったが、ギルガメシユを見殺しにできないので、フンババとの戦争に参加し、一緒にフンババを殺してしまった。

森の神を殺し、森を伐採したことでシュメールの文明は隆盛を極めることになる。しかし、人間でありながら神を殺したということで神々の怒りは収まらず、天上の法廷で神殺しに対して審判が下される。この判決は主犯であるギルガメシユはお構いなしで、代わりに最愛のエンキドゥを死刑にして、ギルガメシユに反省を促すという内容だった。

最愛のエンキドゥを失ったギルガメシユの哀しみは深かった。エンキドゥの死はギルガメシユの身代わりだっただけに、神々の判決は納得できない。死霊が集まる死者の国にだけ、エンキドゥを取り戻そうと旅にでたというのである。そして死者の国で番人をしているといわれる『バイブル』のノアにあたるウトナピシュティムに逢って、不老不死の薬を手に入れた、ウルクの人々を死から救う究極の偉業を成し遂げようという野望を妻に語っていたという。

もし十五年過ぎて戻ってこなければ、ギルガメシユは死んだこととして、新しい王を即位させるように言い残した。その十五年が既に過ぎてしまったので、王の葬儀を盛大に行い、旅立ちの日に王妃の胎内に宿っていたギルスドゥ王子が

即位したという。それはもう五年前だ。この五年間のギルスドゥ王の治世は善政で評判がいいらしい。

隊長の話を聴いているうちに陽一は、すっかり自分がギルガメシユだと思い込んでしまった。しかし過去の記憶は喪失したままで。ウルクに着いたら信用されるだろうか。ギルスドゥ王やその側近たちは、ギルガメシユをどう扱うのか、いままさら王に復位させられても困る。そんな能力も気力もない。しかも父と子の間にどのような亀裂や葛藤から権力争いが起こらないとも限らない。この帰還は極秘にうちに済ませよう。しかしウルクの神々には報告しなければならぬ。記憶を失ったままで何を報告すればよいのだろうか。

隊長に新しい王には極秘にし、妻とギランダへの報告だけで済ませたいと申し出たが、それでは隊長は褒美に預かれなから困るという。隊長によるとギランダが神殿の巫女になっているので、まずギランダに逢い、神殿で復位はせず、ウルクから立ち去ることを神に誓って、その後息子のギルスドゥ王とギルガメシユ王のかつての王妃エメサルと再会してはどうかという提案である。それでは叙事詩はもちろん梅原猛の戯曲ともかなりずれてしまうのだが、陽一はそういう事情も全く記憶になかったから、この提案を呑むことにした。

ギランダが逢えばギルガメシユが本物が偽者かはすぐに分かるはずである。ギルガメシユに対して官娼として何度も同

衾したことがあるので、皮膚感覚からも誤魔化しは利か
ないと思われる。ギランダはギルガメシュを見るなりしつかりと
抱きついて、激しく泣き崩れたのである。なんとギランダは
智子の顔をしている。でも記憶を消されているので懐かしさ
やいとおしさはあふれるのだが、名前が出ない。

「おまえを探していたんだ、ギランダ、会いたかった」と
きつく抱きしめた。

ギランダは「私のいとしい夫、エンキドゥにはお会いにな
れたのですか、ギルガメシュ王」と言った。ギルガメシュ
は、われに返って、抱きしめていた手を離れた。「エンキド
ゥは私を恨んでいる演技をして、私を死者の国から早く返そ
うとしたのだ」と淋しそうに答えた。

さつそくギランダは神々にギルガメシュ帰還の報告をした。
すると神々が直々にギルガメシュの見舞いにやってくるとい
うのである。

一、神々への弁明

自らの限界を超えて進み行く、そこに価値あり人として生く

太陽神ウトゥと水の神エンキがまず神殿に姿を現した。こ
の二神は人間に好意的なのである。

太陽神ウトゥは、早速ギルガメシュをねぎらって、「ご苦
労だった、ギルガメシュの勇敢さには敬服するよ。地の果て

の向こうマルシュ山の死霊の国までエンキドゥと不死の妙薬
を求めて旅をしていたというじゃないか、人間の限界に挑戦
する勇氣は見上げたものだ。私は人間は人間の限界に挑戦す
るということに存在価値があると思っている。他の動物や
神々だって、それぞれの与えられた限界からはみでようとは
しない。人間だけが己の限界を超えようとするのだ。」

ギルガメシュは恥ずかしそうに応えた。「何も限界に挑戦
しようなんて考えているわけではありません。やむにやまれ
ぬ気持ちからしたことです。他の動物だって環境が変われば、
その変化に適応しようとして姿を変えるところですよ。」

「それはそうだが、他の動物は姿を変えて別の種類の動物
になってしまふ。人間は、人間の姿のまま、人間のこれま
での限界を超えていく、そこが素晴らしい。それでエンキド
ゥには逢えたのか。」

「それが……」記憶喪失だといえ、行ったことも疑われ
てウルクの王としての面目が立たない。

「何だ、逢えなかったのか」と太陽神ウトゥはがっかりし
た面持ちで言った。「逢えたことは逢えたのですが……」
「ほう逢えたのか、それでどんな様子だった、わざわざ尋ねてき
てくれて大感激していたらう。」

「本当はうれしかったのですが、あそこは死者の国で
生者が長居すると帰れなくなるからでしょうか、わざとそっ
けなくしていました。私の身代わりにされたことで私を恨ん

でいるときえ言われました。いや、ほんとに悲しかったですよ。私があんなに愛したエンキドゥですから。」

「こう答えておけば、神々も疑わないだろうと考えた。なぜなら、エンキドゥはギルガメッシュを愛していたのだから、大感激して喜んでくれたに違いない。だからそう報告すれば、一番自然である。マーシユ山までたどり着けなかったのに嘘をつくとすれば、「エンキドゥは大感激して喜んでくれた」と神々に報告するはずである。わざわざエンキドゥがそつけなかったとか、恨んでいたとか言う筈はないのである。だからかえってギルガメッシュの報告は真実味があるのだ。」

「そうか、でもどうしてわざとそつけなくしていたと分かったのだ。」水の神エンキは突っ込んでたずねてきた。

「ウ…ウ…」なんて答えればよいか返答に窮した。「ウトナピユシユタイム様ですよ。ウトナピユシユタイム様がそのようにエンキドゥの態度を診断されたのです。」

太陽神ウトウは感心して言った。「そうだろう、そうだろう。それじゃあ、ウトナピユシユタイムに逢えたのだな。それはよかった。」水の神エンキは弾んで訊ねた。「じゃあ不老不死の薬は手に入ったのか。」しかしギルガメッシュは空の手を上げ、肩をすぼめた。

「ご覧の通り、何ももって帰れませんでした。死者を取り戻したり、不老不死の妙薬、若返りの妙薬を手に入れようとしても、それは人間には運命があつて、できっこないのです。」

ところが私は、自分のことを三分の二ぐらいは神で、自分にとつて不可能はないと思いがつていたのです。自分の情熱の力で死者も甦り、不老不死の願いすら叶えられると思いがつていたのですから、本当にお恥ずかしい限りです。」

ギランダが目を輝かして訊ねた。「ウトナピユシユタイム様が不老不死を保つておられるのだから、不老不死の妙薬はやはりあるのでしょうか。」

「ウトナピユシユタイム御夫妻も単調でいつまでも死なないことに耐え難い様子でしたね。彼らがどうして不老不死なのか分からなかったのですが、彼の友人クルラがどうも不老不死の妙薬を持っているという話なのです。不老不死の妙薬を手に入れるための資格試験がありましてね、私は見事落第しました。」

三、有限存在としての人間

ただ七日眠らずにいるそれだけで不死の妙薬手にせしものを

太陽神ウトウは驚いたように言った。

「三分の二は神といわれた超人ギルガメッシュでも落第するとは、相当難しい試験だったのでしょうか。」「いや、合格できないことはないのです。フェイントですね、あれは。見事にひっかけられましたよ。」水の神エンキはじれたように言

った。「そのフエイントの内容を是非聞かせてくれ。神々の中でいい四方山話のネタになるよ。」

「七日七晩寝なければいいのですよ。死と睡眠は近いので、不死の薬を手に入れようとするとするのなら、せめて睡眠を七日七晩我慢できなくては駄目だというので、すぐに挑戦したのです。」

ギランダは意外な表情をした。「それなら私でもクリアできそうね」

「それが見張りがなくて、一日に一回お婆さんが朝パンを届けてくれるだけで、あくる朝パンが残っていれば失格だということなのです。」

「なあにじゃあ朝起きていればいいのだから、普通に生活していれば合格じゃない。」ギランダはあきれた。

「簡単だろう。簡単すぎるよな。それでつい油断して二・三時間眠るつもりが、旅の疲れからか七日七晩眠り続けてしまったのだ。アツハ、ハ、ハ」しばらく間を置いてからその場の一同が大爆笑となった。

「つまり人間起きていようとすれば、眠らなければならぬ。起きていることの中に眠ることが織り込まれているのだ。それと同じように、生きるということは、死に向かつて生きるということであり、いつまでも死なないということとは、生きないのと同じことなのだ。」

もし絶対に死なないのだったら、何も食料を集めてくることもなければ、富を積み上げることもない、あくせく働かなくてもいいわけだろう。

勉強をしなくてもいいし、物を食べたり、息をするのだけって面倒くさくなるかもしれない。

つまり死があるから生もあるのだ。それを生だけとって、死を捨てようとするからかえって苦しくなるのだ。

与えられた有限の生を精一杯充実して生きれば、それが幸福なので、死がなくなつたとたん、人間はいかに生きればよいか分からなくなるんだ。」

ギルガメシュになつている陽一はまだ高校三年生の筈なのにすっかり六十年は生きてきたような気持ちになつていた。

「ギルガメシュ、よく生還できたな、なかなか悪運つよいじゃないか。どうもエンキドゥも取り戻せなかつたと、不死の妙薬も手に入れられず、体力は使い果たし、とつてきたのは歳だけだつたようだな。まあ人間共の思い上がりには、いい薬になつただろう。」大気の神エンリルは人間には厳しい、皮肉たっぷりな言つた。

アン大神の道楽娘イナンナは、入ってくるなり「あらー、ギルちゃんもずいぶん皺くちゃ爺さんになつたわね、あんなに精悍な若者だつたのに、私と遊んでいけば、そうなる前になつぷり生まれてきたことの悦びを味わうことができ、官能的な死を体験できたのにさ。ところで死霊たちの国はどうだ

った、私はああいうのは、気持ち悪くていやだけど」と突き放すように言った。

「森の神フンババを殺したのは私の罪でした。それを私を罰せずに、エンキドゥを身代わりにしてしまわれた。それがどうにも納得できない。」

エンキドゥをどうしても取り戻したいという気持ちを抑えられなかったのです。私はウルクの王として人間たちをもっとも豊に幸福にしてやりたかった。

そしてできることなら、死の哀しみからも人間を解放したかった。エンキドゥは土になってしまった、私も土になつてしまうのか、それでおしまいとは、なんと恐ろしいことでしょう。

それに私にとってエンキドゥを失った哀しみはとてつもなく大きく、それを招いた自分の罪への後悔は激しくて、とても王位に居座つてウルクにいることはできませんでした。エンキドゥを取り戻せないくらいなら、地の果てで野たれ死んだほうがましだとさえ思つたのです。」

四、森の神フンババの殺害者

森焼きてこの手に入れし幸福も森なくしてはやがて費えぬ

「ギルガメシュが考えていることは、常に人間たちの幸福であり、自分や自分の友、自分の愛する人のことだけだ。そ

のためには、森や森の木々、森の動物たちがどうなつてもよかつたのだ。

それで森の神フンババだつて殺すことになつてしまった。しかし森の神を殺し、森を焼き尽くして得た人間の幸福というものは、果たして本当の幸福なのか、エンキドゥを失つてはじめて、その間違いに気づくことになつたわけだな。」大気の神エンリルは確認した。

ギルガメシュはエンリルを睨み付けた。

「私はエンキドゥの処刑を納得しているわけではない。ただ、エンキドゥは獣のような素直な心を持っていた。私はそんなエンキドゥが好きだった。」

獣の血が通っているエンキドゥを森の獣たちと戦わせることになつたのは、私の罪だ。エンキドゥを失つたことは、我々人間と獣を結び付けていたものを切断したこともあるのだ。それは人間と自然との断絶を意味する。

森や森の獣たちと共に生きることによって、我々人間は自然の生命を生きていくことができるのに、人間のためだけにある牧場や畑にしまえば、しまいに自然は人間に復讐の牙を剥いて災いをもたらすようになるだろう。」

太陽神ウトウが口を挟んだ。「私は人間たちの森を切り開き町や牧場や畑を作ろうという遠大な文明構想を応援した。」

森の神フンババをやっつける戦いでも、日照りを起こして森の神を弱らせた。もちろん森がなくなれば、自然環境

のバランスが崩れ、最後には人間だつて暮らせなくなるとは分かつているが、なにしろ森を本格的に切り開くのはこれが最初だから、まだまだ大丈夫だと思つていた。

しかしギルガメシュがいなくなつてからも、森林の伐採が各地で広がり始めている。だんだん心配になつてきた。」

大気の神エンリルは大声で叫んだ。

「そうなんだ、第二、第三のギルガメシュが登場している、人間の欲望には際限がない。これから何百年、何千年と人間たちは森林を伐採し続けるのだ。」

森の神フンババ殺害は一度きりの事件ではない、おそらく森が地上から消えてなくなり、地上が砂漠で蔽われ尽すまで、人間はフンババを殺し続けるのだ。

そして森を破壊した人間は、川も湖も平原も海も地上や天空のすべての神々を殺し、唯一つの自らの守り神を信仰するだけになり、最後にはその神も殺してしまうだろう。」

五、大いなる生命の共生と循環

日光の猿でもするや反省は、知恵寄せ合つて自然再生

「人間には考える力、反省する力がある。」主神アンの大神が登場した。

「人間は欲望に任せて、自然を自分勝手に作り変え、獣たちを滅ぼしていくだろう。しかし自然を破壊するということとは、自分の命の源を破壊することだ。やがて耕地は砂漠に侵食され、自らの文明を滅ぼすことになるだろう。」

その時に、考える力、反省する力が働けば、自然との調和を学び、森の再生や獣たちとの共生に取り組むことになる。自然の中に宿る生命への信仰に帰ることになるのだ。果たして彼らの考える力、自然から学んだ知恵を分かち合い、寄せ合つて共に力を出し合つて、自然と共生する能力が彼らと大いなる生命を守るだろうか。」

「お父さん、人間が考える力を持ったのは、偶然樹上生活ができなくなつて二足歩行をするようになったからでしょう。お父さんがおもしろがつてやらしたからでしょう。それで直立して頭脳が大きくなったのと、手の働きや目の働きが活発になったので急激に賢くなり、喉も発達したので発音が自由になり、それで声を信号化して言語を使うようになったからでしょう。」

それもこれも彼らが肥大していく欲望を充足させるための活動の結果なのよ。だから目先の欲望を実現するための知恵はいくらでも発達するけれど、それを抑制して、自然全体の調和を図るとなると、彼らの欲望に邪魔されてなかなかできないのじゃないかしら。」

それより、これ以上人間が自然を破壊するようなら、そろそろ人間共を滅ぼしにかりましようよ。」「イナンナは父神アンに反論した。

大気の神エンリルはうなずいて言った。

「そうですねぐずぐずしていると我々が先に人間に滅ぼされかねないですからね。」「

これはやばいことになってきたとギルガメシュはうるたえた。

「神々よ、私がよくウルクの人々に話して聞かせます。環境問題を教える仕事を息子王を補佐して私が専門にやりますので、どうか滅ぼすなどと脅かさないでください。」「

主神アンは苦笑していった。

「残念ながらギルガメシュよ、あなたの寿命はもう尽きようとしているのだ。」「そう叫ぶと突然神々の姿は消え、人間たちが神殿になだれ込んできた。

「ギルガメシュ王を騙る偽者はどこだ。」「ギルスドゥ王が先頭に立っている。

「お前か、なるほどそっくりだな。しかし本物は今しがた帰還されるや息を引き取られた。彼は背中の獅子の刺青から間違いない。背中を見せてみる。ほらないじゃないか。やはりお前は真つ赤な偽物だ。」「

なんとギルガメシュ王ではなかったのか。上村陽一は愕然と

した。しかし彼は王の刃を逃れることはできなかった。大上段から振り下ろされた王の刃は見事に陽一の脳天を真つ二つにしたのである。

第三話 エデンの園の人間論

一、アダム誕生	25
二、命の木と善悪の知識の木	25
三、アダム語	26
四、人の地上支配権	26
五、アダム・エヴァコンプレックス	26
六、欲望の自己疎外としての蛇	27
七、知恵の始まりは性的羞恥心	29
八、責任転嫁する人間	30
九、蛇と女への審判	30
十、罰としての労働	31
十一、勤行としての労働	33

第三話 エデンの園の人間論

一、アダム誕生

土の塵神の姿に作られき命の息得てアダム生まれぬ

陽一の遺骸は砂漠に捨てられ砂嵐にあって埋まってしまった。それからどれだけ時が過ぎ去ったか、死んでいる筈の陽一には分かるすべもない。砂の中で体は分解して土に返った。陽一は湿り気を感じ、また元の身体に戻っていった、そして風が吹いてきて意識が甦った。陽一の父が手をとって起こした。「お父さんどうしてここにいるの」と言いたかったが、声がでない。父は言った、「素晴らしい、俺にそっくりだ。土(アダム)の塵でつくったからアダムと名づけよう。」そして父はアダムを「エデンの園」に連れて行った。

二、命の木と善悪の知識の木

中央の命と知恵の二つ木の実にふれまじき命惜しくば

エデンの園は地上における神のエリアと考えていいのかもしれない。エデンの園にはたくさん種類の木が茂り、それぞれの木には緑の葉が生い茂り、花が咲き、実をつけているものもたくさんある。園の中央に命の木と善悪の知識の木があった。この二つ木こそが神の実体だと捉えることもできる。

つまり「生命」と「ロゴス(論理)」が神の二大要素なのである。「この二つの木からは木の実をとって食べてはいけない。食べたなら死んでしまうよ。他の木ならいくらとってもいいからぬ。」神に触れたら死ぬという発想である。アダムと呼ばれている陽一は、「はい、分かりました、ありがとう」と言おうとするのだが、言葉にならない。「あーあー」とおらんだけだった。父の姿をした神は、話したがっているね、話せるようにしてあげよう」と言つと、話せるようになった。その代わり陽一の記憶は消されてしまっていた。

三、アダム語

慰めに作られし獣アダム見て名口すさめりな心のままに

エデンの園にはアダム以外の獣はいなかった。アダムは寂しそうにしていたので、神は鳥や獣を作つてアダムのところに連れてきた。いい相棒になるだろうと考えたのだ。アダムはそれらの姿や特徴から次々と名づけを行った。まあ犬を見て、ワンワン、キリンを見てのっぼさんというようなもので、幼児語のようなものだ。それを父なる神は大変喜ばれた。どうも神は天使たちにアダムを自慢し、アダムの方が天使より尊いと言いついたらしい。それで天使の中でイブリースのようにならうものも出たという話があるが、それはイスラムの『クルアーン』の世界である。

四、人の地上支配権

神に似し人は支配を任せられぬ欲に駆られて命絶やすな

神はアダムが自分に似ていることと、名づけを行ひ言語能力があるということで、地上の支配権を与えるとアダムに言った。人はこうして後にエデンの園を開放されてからだだが、自分が地上を好きなように支配していいのだと思ひ込み、森の木を気ままに伐採したり、森を耕地にするために焼き払ったりしたのである。また獣が絶滅するまで狩をしたりしても平気になったのだ。陽一はアダムになりきっていたから、この傲慢が人間と自然の断絶につながり、大いなる生命を見失うことについての問題意識はまるでなかった。

五、アダム・エヴァコンプレックス

吾が骨のうちより出し女(ひと)ならば吾に帰れや吾が骨の骨

獣の中に人の助手になるようないい相棒は見当たらなかった。アダムは獣たちを見下していたのだ。あくまで人間に危害を加えるか、役に立つか、慰め物になるかの自己中心の捉え方しかできない。そこで父なる神は、アダムを眠らせてそのあばら骨を一本とつて女を作られた。

自分の骨から作られた女は、自分の体の一部のようにとおしかつた。この世に自分にとって自分自身のように思える

ものは何もいない。はげしい孤独感に囚われていただけに、女を授かった喜びはひとしおだった。「ついにこれこそ私の骨の骨。私の肉の肉。男から作られたので、男からつまり女と呼ぼう。」男はイシュナなので、女は男からつまりイシュナーなのだ。もっともこれはヘブライ語の話だが。アダムは女に對して、自分から生まれてきた自分の子供のような意識を持っていた。もちろん最初の人だから妻と娘の区別ができるわけがないが。

元々、男女の性欲には一つの体から分かれたもの同士が、一つに戻ろうとして合体したい気持ちがあるのだ。だから近親相姦が異常なように考えるのは性の根源を考える限りのを得ていない。最初の男にとって最初の女は自分の肉体から生まれた娘でもあるのだから。つまりアダム・エバコンプレックスで父と娘の間の潜在的な性衝動が説明できるのだ。

このイシュナーがエバと呼ばれるのは、彼女が子供を生むからである。エバというのは「命」という意味なのだ。実はこのエバに扮しているのが、このファンタジーでは智子なのだ。陽一はついに自分が追い求めていた智子を得たのである。しかし自分が陽一であることも、相手がクラスメートの智子であることも思い出せない。でも抑えきれない心の底からの熱い熱い思いがエバになっていて、智子へと注がれたのである。

六、欲望の自己疎外としての蛇

アンノイのエデンの園の昼下がりに行き場失いとくぐる巻く蛇

エデンの園は時間が止まっているようなものだ。常に食料は豊富で、天敵もいない、野菜や草花の栽培はしていたらしいが、主食は果物である。いくらでも食べ放題だ。何の苦勞もなく、勤勞の意識もなく、のんびり暮らしていたのである。アダムとエバは夫婦として充実した性生活を送っていたけれど、やがて倦怠が訪れる。エデンの園ではすべてが同じことの繰り返しだ。果物も食べ飽きてしまった。

なまけものという猿は、アマゾンの豊かな自然と天敵のない陽気暮らしでのんびりしていて、極めてスローモーションな動きをしている。お陰でエネルギーを消費しないので、欲望を最小限にして幸福に暮らしているらしい。ところがアダムとエバは言語を持ち、想像力を働かせることができるので、欲望を肥大化させる。でもエデンの園は全く変化がない。だから二人の欲望は行き場がなくなつて、欲望が二人の体から外に出て対象化され蛇の形をとつたのである。

一応神によつて造られた野の生き物には入っているが、蛇がどうして生まれたのか『創世記』では分からない。おそらくエデンの園に迷い込んだ蛇は、二人のフラストレーションの空気に当てられて、欲望の権化になつたのかもしれない。

蛇は獣なのに二人に話しかけているが、それは蛇だけずば抜けて賢いということだ。それで思い当たるのが、禁断の善悪を知る知恵の木である。その木の実を蛇はお先にいたでいているのだ。神は蛇が迷い込んだのを気づかなかったので、蛇に禁断の木の実の説明はしていないから、禁止されているとは知らずに食べてしまったのである。それで急に賢くなってしまうたらしい。ところが女に聞くとどうも園の中央の木は食べたら死ぬぞといわれていたらしいのである。ところが蛇は食べて確かに賢くはなつたけれど、ぴんぴんしている。

「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ」と蛇は女に教えたのである。これは嘘をついたのでも誘惑したのでもない、自分の体験を教えただけである。この蛇と女の対話を捉えて、女は蛇に性的に誘惑されたと見るものもいるが、蛇の方から一方的に誘惑したとする根拠は全くない。女の方から初な蛇を誘ったとも考えられるのだ。だとすると蛇とサタンを同一視するなどもつてのほかである。

蛇は元々アダムとエバの欲望がアンニユイの中で生き物の姿をとったもので、アダムとエバ自身の欲望の化身なのだ。それはうがった見方にしても、蛇の方が二人より先に生まれたとする根拠はない。楽園に迷い込んだ蛇を退屈していた二人が遊び仲間にしたとも解釈できる。当時はまだ夫婦観念やそれに伴う貞操観念などは全くなかつたのだから、仲良くな

ればくつついたり離れたりすることになる。もちろん嫉妬感情もなかつただろう。ただ蛇はいったんまぐわうと何日も離れないというから、アダムが怒り出したかもしれない。

それにアダムといつても「人間論の穴」の上村陽一だし、相手のエバは彼が追ってきた三輪智子である。そしてなんと蛇に扮しているのはあの榊周次なのだ。だから無意識のうち蛇をライバル視し、疎ましく思う気持ち昂じてきて時々機嫌を悪くし蛇を冷たくあしらうようになる。するとエバである智子は、アダムのそういう態度が気に入らないので、余計に蛇に優しくしようとする。それで陽一は蛇とあまり口を聴かなくなつたのだ。

すべては楽園の午後である。蛇が善悪の知恵の木の実を食べて、賢くなり、仲間入りをして、食べても死なないと教えられた。それで神から禁じられていた木の実を食べてみたいという衝動が抑え切れなくなつたのだ。まだ食べたことのない知恵の木の実、どんなにおいしいだろう、それに自分で物事の善悪を判断できる力ができるというのだ。これまでは、ただ与えられたものを食べ、神の言われるままに行動すればそれでよかつたのだけれど、善悪を知ると、自分が何をなすべきか判断でき、自分から、自分の意思で行動できるのだという。まったく新しい存在に生まれ変わるのだ。だからそのためにたとえ死ぬようなことがあつても、木の実を食べてみたいという思いが膨らんでくる。それは胸が苦しくなるほどである。

それに死ぬぞという神の脅迫は、それほど効き目がなかったのかも知れない。何しろまだだれも死んだものがないので、死という観念すら理解できなかったのだ。

女の方が新しいもの珍しいものへの好奇心は強く、変身したいという願望が強いのも知れない。「この木の実が言ってるわ。『私を食べて、とても甘くておいしわよ。あらゆるを恐れてるの、賢くなりたくないのかしら』て、もう我慢できない。」女が取ってアダムにも与えた。そしてさっさと食べ、アダムにも勧めた。「ウーン、とっても甘くておいしいわ。大丈夫よ、どうして食べないの。」そういわれると食べないのは臆病者みたいである。アダムにしても新しい味への好奇心は爆発しそうなくらい膨らんだ風船球みたいなものだったので、食べずにはおれなくなつて食べてしまった。

七、知恵の始まりは性的羞恥心

善悪の知恵の木の実を口にして覆い隠せり裸の恥じらい

さて二人は賢くなつて、物事の判断がつくようになった。これを「目が開いた」と「創世記」では書いているが、もちろんそれ以前は盲目だったわけではない。道徳的に物事をみる目が開いたということなのである。その最初のこと裸の恥じらいだ。他の動物の場合は、雌の発情が醸し出すフェロモンに刺激されて雄も発情する。だからごく限られた時間で

ある。ところが人間の場合は、女の発情と無関係に男は発情するので、女がその気になつてないときも男のものがしょっちゅう勃起していかにも目障りになる。それでイチジクの葉をつけて隠してくれと女が要求したのだろう。

「あら、またおつ起つて、いちいち相手になつてられないわ、目障りだからしまつといてよ。しまつところがないのなら、イチジクの葉っぱでもつけて隠しておいて。」売り言葉に買い言葉である。「おまえのが露出してるから、つい誘われてるような気になつて、勝手に膨らんでしまふんだよ。お前の方こそ、イチジクの葉っぱをつけて隠しておきなさい。」

ともかく神から与えられたものでない最初のタブーが性的なものであつたということは、人間の本质にとつて性的なところが非常に大きなウエイトを占めているということを意味している。神に禁断の木の実を食べたことが露見してしまったのも、裸が恥ずかしかつたからである。神がエデンの園を歩いているのを察知して二人は隠れた。「どこにいるのだ」とたずねられて、アダムは「神の足音がするので、恐ろしくなつて隠れています。だつて、私は裸ですから。」神は怪訝な表情になつて「お前が裸だと誰かに言われたのか。それとも取つて食べてはいけなかつたおいた木の実を食べてしまつたのか」と詰問した。これで万事休すである。

神に従うか従わないか、神との約束を守るか守らないか、それが最大の基準である。だから最も重大なことは木の実を食べたかどうかではないのだ。神の命令に背いたことが罪なのである。そしてそれは最も重い罪を犯したことになる。その際神の側の管理責任とか注意義務を果たしていなかったとか、二人を倦怠から罪に墮ちやすい状況においていたとか、そういうことは一切考慮されない。あくまでも神は裁く側にあり、裁かれる側ではないのである。

八、責任転嫁する人間

食べないと遊んでやらぬと言われしか女がなどとふるはあさまし

こういう場合つい言い訳をしたくなる。責任転嫁をしてできるだけ自分の罪を軽くしてもらいたいなるものだ。しかしそれはかえって見苦しい。「あなたが私と共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」こんな言い訳してもいいわけ。これは典型的な責任転嫁で政治家が収賄の疑いをかけられたときに、「妻が」とか「秘書が」とかわそつとするのと同じである。何も食べなければもう遊んでやらぬと言われたわけでもない。自分が食べたから食べたのである。己が罪を犯していながら、それを女のせいにするのは全くもって恥知らずである。

しかし 取ったのは女で、私ではない という理屈は通るだろうが、細切れに事実の流れをみるとそう解釈できないこともない。しかしこれも却下である。牛肉を好んで食べている人が、牛を殺した屠殺業者であって自分ではない と牛殺しを否認するのと同じである。あるいは紙や木材を大量に使っている日本人が東南アジアの熱帯雨林の破壊の進行に対して、自分は木を伐採したことがない というのと同じである。人間の行為というものは、つながっていて肉を食べることは牛を殺すことにも関わっているのである。だから木の実を食べたら木の実を取ったことにも共犯なのである。

女も同様の責任転嫁をする。「蛇がだましたので食べてしまいました。」蛇の名誉のために重ねて言おう、蛇はだましていない。というより蛇がだましたという根拠は『創世記』に何も書かれていない。蛇は何も罪に当たるようなこともしていなかったのである。禁断の木の実であることも知らされていなかった。だから罪刑法定主義の原則から言えば、蛇の罪は問えない。後にハムラビ法典では法は文字で示されたが、それ以前は法で罪を問うには周知させる作業が必要である。

九、蛇と女への審判

何ゆえにサタンの化身に墮されし、神なりし石のライバル蛇にあらずや

だから蛇にはいいわけも抗弁もさせずに蛇からいきなり実刑判決だ。よほど神は蛇には怨みがあるらしい。というのがフェティシズムつまり物神信仰では蛇は石とらんでフェティシユの代表格なのである。神は絶対的存在であり、あらゆる相対的な事物とは絶対的に自分を区別しているから、物質的存在ではありえないとする超越神論はフェティシズムを最も敵視していたのだ。だから、蛇はどうしても悪者にされてしまう。それにヘブライズムもかつてはフェティシズムだった。元々ヤハウエは火山や石だったといわれている。つまり有力なライバルだったわけだ。

「お前はあらゆる家畜や獣の中で一番の呪われものだ。お前は生涯這いずり廻って塵を食らえ。蛇と女は互いに敵意を抱くのだ。女はお前を毛嫌いして、お前の頭を砕こうとし、お前は女のかかとかみつこうとするようになる。」神はこう判決したそうさ。蛇は抗弁しようとしたけれど、神から姿を変えられ、声がでなくなってしまったという。縄のような姿になり、地を這いまわるしかできなくなつたのだ。でも蛇にすればこの解釈には異議が有るだろう。だって蛇は地面を這い廻ったり、塵を食べるためにあんな姿に進化したのである。それを罪に対して与えた神の罰のように言われたのだから、名誉毀損である。

次に女に判決が下る。「お前の孕みの苦しみを大きくしてやろう。お前は苦しんで子を産むのだ。お前は男を求め、男は

女を支配する。」この『創世記』の言葉はその後の男による女支配を宗教の権威の下で正当化する大きな役割を果たしている。まさしく神の命令に率先して背いた報いで、女はお産でも苦しみ、男に支配される定めだということになってしまった。ユダヤ教やキリスト教を信仰している限り、性差別には聖典の上では反対できないことになるのだ。もちろん近代になつて男女平等になれば、「創世記」もその時代の社会的制約の下で書かれたものだから、必ずしも現代人はそのまま信仰することは無いということにはなっているが、ともかく『バイブル』は男が書いたものである。それを女にも信仰させているわけだ。アダムになつてはいる陽一は、陽一であることを意識的にはすっかり忘れていたのに、ふと宗教が性差別をイデオロギー面で果たしている役割が大であることを実感した。

十、罰としての労働

労働は罪の報いか禁断の苦役は続けり塵となるまで

いよいよ男アダムへの判決である。男への判決ということでは女は男の添え物のような意識で書かれているので、人間への判決である。これがヘブライズムの人間観の核心といわれているところだ。「お前は女の声に従い、とつて食べるなど命じた木から食べた。お前の故に土は呪われるものになった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨

とあざみを生えいでさせる、野の草を食べようとすお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで、お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」

「雌鳥が鳴いたら国が滅びる」というのは古代中国の格言だが、女は感情の動物であり、理性的な判断が苦手である。女の言うとおりになると情実で物事が決められるので、君主は寵愛している女に政治に口出しをさせてはならないということわざである。女性が理性面で活躍できないような地位に差別しておいて、女性は感情的だという言い方である。ともかく「原始女性は太陽であった」のだが、歴史時代に入つて女は半人前で感情の動物で、男に支配されなければならぬことになってしまったのである。

人が神の命令に背いたので土は呪われたという。神に背く罪によって災いが起きる。天変地異が起こるのである。土も呪われて雑草ばかり生えて、小麦や野菜などが実らないのだ。道徳的な人の行いと自然現象を結びつける。『新約聖書』になると罪がはびこると悪霊が活躍し、それが原因で疫病がはやりたりする。つまり神に従っていけば豊かな自然の実りがあり労せずしてもたらされるのだけれど、神に背いて罪に堕ちれば、苦勞して働かなければならない。それも一生死ぬまで働かずくめに働いても貧しい暮らしから脱却できないのである。それは貧しくて苦勞しているのは本人の罪のせいだと

いつているようにも受け取れる。逆に豊で楽をしているのは神に従っているからなのか。

早とちりして『バイブル』を単純な勧善懲悪や神に従えば救われるというだけの単細胞的な書物と考えてはならない。いくら神に忠実でも一生報われない者もいれば、ひどい罪を犯しても死ぬまで栄華を極める手合いもいるのである。それでも神を信じ、神に従いなさいと説くのが『バイブル』なのである。

ともかく労働は罪の報いとして捉えられている。終身懲役刑のようなものである。近代西洋の人間論で労働本質論があるが、それが労働を人の罪に対して課す神の与えた懲役刑だという暗い労働観と結びつくと、人間は罪を犯したために、死ぬまで懲役を科せられている囚人だということになりかねない。

労働を苦役と捉えることによって、その犠牲によって作り出された生産物やサービスを手に入れようとすなら、それと同等の苦役を提供してそれに報いなければならぬことになる。その犠牲の量が価値なのである。等量の価値が交換される物には含まれていることになる。それが商品交換の論理である。共同体を超えて交易が広がっていくのは商品交換を通してであるから、文明の基礎をなしているともいえる。

もちろん労働には苦役の面だけではない。予め構想していたイデア(理念)に従って物を作り出すという、理念の自己実現という意味がある。これは自己の能力の発現なのだから、苦勞を伴うとしても、とても楽しいことのはずである。それに目的意識的に対象を変革する労働は、人間の特長だといわれている。他の動物の活動は、生理的に慣習化した適応行動にとどまるのだ。それだけに労働は人間の本領発揮として、人間の第一の欲求だという捉え方もできる。だから「創世記」の苦役的労働観だけでは一面的である。

十一、勤行としての労働

労働は自然に還る勤行か吹く秋風に胸を突き出す

アダムはエデンの東に追放され、そこで土と格闘して働きづめに働いた。しかし作物はなかなか実らず、一日のパンを得ることの困難を全身で感じ取っていた。来る日も来る日も土に向かっていた。始めの何年かは苦役としか感じられなかったが、そうした土との格闘が彼自身の肉体に浸み込んで、そうしていることが当たり前になり、それを苦痛として厭う自己が希薄になっていった。むしろ彼の意識は大地自身の意識となり、種から芽を吹き、葉を出し、花と咲き、実を結ぶ麦それ自身と同化したのだ。枯れて大地にかえると、秋風の吹く大地自身の意識に帰っていた。

「塵に過ぎないお前は塵に返る」というのは実はそういう意味なのかもしれない。アダムは神にその言葉を言われたとき、人は元々土なのだから、死んだら土に返ってそれでよしまいだという意味だと思っていた。そういう意味もあるにしても、人間は土との格闘によって、土を人間のものにし、花咲かせ実を实らせる。そして花咲かせ実を实らせた土を自身として捉え返すこともできるのである。この土との対立を乗り越えて土と一体化するための苦勞が宗教的な勤行としての労働なのである。エデンの東に追放されたのは、罪の報いとしての罰であるが、人間は罪を犯し、その罰を受けることで、自己を狭い主観性から解放して、大いなる生命に目覚めることができる存在なのである。

長い時間がこの勤行には必要である。榊周次は一年、十年、百年という時間の長さを人間論の穴に落ち込んだアスリートにほんの数秒で体感させるといふ技術を開発しなければならぬのだが、それはなかなか難しい。上村陽一は土にまみれて苦しみぬいたあげく、一面の麦を実ったのを見て歓声を挙げて三輪智子と踊りだした。蛇になり今は縄みたいにされていた蛇の榊周次も、鎌首をもたげて、踊っていた。そのとき陽一はさそりを踏んづけてしまい。さそりの反撃にあつて地面に倒れたのである。

第四話 オイディプスの闇

目次

一、実存の三叉路	34
二、汝自身を知れ	34
三、三叉路での遭難	35
四、スフィンクスの謎かけ	36
五、禁断の床	37
六、先王の仇	38
七、真実を見抜く目	38
八、キタイロンの山中	39
九、運命の狡智	39
十、順逆の罪	41
十一、オイディプスの闇	41

第四話 オイディプスの闇

一、実存の三叉路

三叉路に気づきし時は投げ出され、ロも知らず立ち尽くすかな

上村陽一がさそりに咬まれて倒れて意識を失ってからどれぐらい時間がたったか分からない。ほんの数秒なのか数百年、数千年たったのかも定かではない。意識が回復して立ち上がったとき三叉路に立っていた。はて自分はどの道来たのか、そしてどの道を選ぼうとしていたのか、さっぱり分からない。その上肝心の自分自身が誰だか分からない。そういえばここに来る前に「汝自身を知れ」という標語が門に掲げてある神殿にいたような気がする。それにどこかでペロポネソス半島の真ん中の臍にあたる場所に運命を予言する陽光の神アポロン神殿があると教わったことがある。その話を聞いたときは、その神殿があったのは二千年以上前だったような気がするが、そりゃあそうだ実は上村陽一は二十一世紀の初頭の日本の高校生なのだから。

二、汝自身を知れ

アポロンの神の御殿のその門に掲げし言葉「汝自身を知れ」

「汝自身を知れ」という標語は、伝説では紀元前七世紀に、最初の哲学者といわれたタレスが考えた標語らしい。一般には「分を知れ」という意味で受け止められている。ギリシアではポリスの団結と秩序を守ることが最も大切とされていたので、個人が傲慢から勝手気ままなことをして、ポリスの秩序を乱すことを最も悪いことだとしていたのである。

後にこの標語を見たソクラテスは、自然への問から自己自身への問へ転換する転機をつかんだといわれる。しかしこの標語の作者であるタレスはコスモスを形成している根源物質つまりアルケーを探求していたのである。タレスは自然フェイススを探求していたのに、「汝自身を知れ」とはおかしいではないか、陽一は倫理の授業で榊周次に質問したことがある。榊は「それは素晴らしい質問だ」と応えた。「汝自身を知れ」の答がアルケーは水であるということなのだ、それ以上は自分で考えてみなさい、どうしても分からなかったらまた質問にきなさい」というのが榊の返答だ。「はい、分かりました。考えてみます」と元気よくこたえたものの、そんな難しい哲学の問題を高校生が自分で考え付くだろうかと思っただ。

三、三叉路での遭難

三叉路に迷いし我を襲いたる杖持つ人よ果つるも運命(さだめ)か

一体俺はどうすればいいのだ。どの道を行くべきか、三叉路の真ん中で立ち往生したまま、胸が張り裂けそうになり、「ウォー、ウォー、ウォー」と孤独な獣のように咆哮した。そのあと寂寥が訪れ、不安の中で人恋しさに打ち震えていた。そこに突然、怒鳴り声が出た。「無礼者！三叉路を塞ぐとは、けしからぬ奴だ。とっと道を開けろ」そう叫ぶや否や、白髪まじりの初老のいかめしい男が、一人乗りの馬車の上から、馬にあてる鞭を陽一に振り下ろしてきた。

孤独の哀しみに囚われていただけに、この鞭に対する怒りは激しく燃え上がり、陽一は自分を制することはできなくなってしまう。気づいたときにはその鞭を取り上げ、思い切り、その男を鞭で打ち据えていた。すると四人も伴をしている者がいて、彼らが刀を振りかざして立ち向かってくるではないか。陽一にどうしてそんな戦闘能力があるのか不思議だったが、彼らから奪った刀で、頭と思しき男を含めて四人を切り殺していた。そして一人だけ命から逃げ去ったのである。この事件が運命のいたずらであったとは、陽一には気づくはずもなかった。

東の方角へ路を取った。エーゲ海を見たいと思っただからである。海を見ると何かいいことがあるかもしれない。エーゲ海とデルフォイの間あたりに湖があって、その近くにテーバイというポリスがあった。テーバイに近づくと町から逃れ

出てくる群集に出会った。なんでも町には怪物の呪いがかけられているという。いつその怪物の人身御供にとられるかもしれないというのである。

四、スフィンクスの謎かけ

謎かけて人身御供を求めたる曲爪乙女愛を知らずや

テーバイの町はずれで呼び止める声がする。「さあおいで、オイディプス。わしはそなたを呼んでおる。そなたの知恵を試そうと思つての。」なんと鳥の羽を身に纏つた老婆が呼んでいるではないか、「お前が噂の怪物スフィンクスだな。俺の名前はオイディプスというのか。どうして知つているのだ。」お前の足が腫れているだろう。腫れ足はギリシア語ではオイダ・プスだからオイディプスという。お前が通りかかることはとつくの昔から分かつていたのさ。私はなにしろ魔女だからね。ウ・ヒ・ヒ・ヒ。「超気持ちワリーーイ。知恵を試す？正解したら何かくれるのか？」陽一が言うつと、「テーバイに私がかけている呪いがとけるのじゃ。そしたらお前は、テーバイの英雄としてテーバイの人々から大歓迎を受け、なんでも望みのものがもらえるだろう。」

「婆さんからは何ももらえないのか？」と突つ込むとスフィンクスは怒り出して「婆さんとはなんだ、わしは歳は食つてはいるが婆さんではない。未だに乙女なのじゃ」と応えた。

「それは淋しいことだな、婆さん」「婆さんではない！乙女じゃ。魔法の力を得るために処女を守り通しているのじゃ。ほら見る爪も長いだろこれを曲爪と言って、魔力を強めているのじゃ」と自慢げに語つた。

陽一は少し語調を強めて、「せっかく魔法の力を持つても、町の人々を呪いにかけて人身御供を取るなんてとんでもないその力を人々を幸せにするために使えばいいのに」と反撥を示した。すると「わしはポリスの連中が家庭の幸せやポリスの繁栄にふけつてゐるのが無性に腹が立つのじゃ。やつらが不幸に喘いでゐるのをみると楽しくなつてくる。もつと不幸のどん底に落としてやりたいのじゃ」と言い返してくる。「そうか婆さんには言うにいけない怨みがあるのだな。しかし人それぞれに不幸はあるもので、自分だけが不幸だと思つたら大間違いだよ」と説得した。「若造のくせしてわしに説教を垂れるのか。そんなことを言つて、わしに謎かけをされるのが怖いのだな」と決め付けた。

もし不正解だったら、人身御供だという。バルカン地方には魔女は人肉を食べるといふ噂があるから、食べられてしまふのだ。『論語』に「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉がある。いまテーバイの人々が苦しめられているのを見て見ぬふりはできない。「よし謎に挑戦してやろう。」

「この地上に、二本足にして四本足にして三本足にして、声はただ一つなるものあり。地上空中はたまた水中に、生きとし生けるものうち、ただひとり本性を變ず。さりながら、四本足にて行くときは、四肢の力弱くして、二本足、三本足のときに比ぶれば、歩みは遅し。」(柳沼重剛訳)

「欲せずとも 聞け 忌まわしい翼もつ死人のムーサよ、お前の罪業の終わりを告げるわたしの声を。お前がいつのは人間、地を這うときは腹から生まれたばかりの四つ足の赤子。年をとれば三本目の足の杖で身を支え、重い首もたげ、老いた背を曲げる。」(岡道男訳)

五、禁断の床

テーバイを救いし故に王冠と共に得たるはかくわしき女
甘菓子の匂ひの姫はめくるめく禁断の床知る由もなし

これが正解だったのか、スフィンクスは断崖から身を投げて死んでしまった。オイディプスはテーバイの町で大歓迎される。ちょうど王が死んで空位だったので、お妃イオカステと婚礼をあげてもらって王位に就いてもらいたいというテーバイの人々からたつての要望だった。陽一はお妃といつても四十歳半ばなので遠慮したいと思つたが、それが黒木瞳みた

いに若々しくて美しいので、二つ返事で引き受けてしまったのである。残念ながら例によって記憶を消されているので、彼女が追い求めている三輪智子だということは自覚できなかったのだが。

なにしろ陽一にとっては女性の柔肌にふれるのは初めての体験である。アダムであつたときは数え切れないほどエバとのセックスに明け暮れていたのだが、なにしろ記憶は消されてしまつている。それにあの時はバーチャル・リアリティである。これは紛れもない現実だと思つている。これもまたバーチャル・リアリティだと分かるのはジ・エンドになつてからなのだ。ともかく初めてという気持ちが強くて、体がガクガク震えるのである。三輪智子演じるイオカステは優しく微笑み、わずかに恥じらいながら、甘いチヨコレートのような匂いを漂わせて身を任せてきた。その刹那、黒木瞳には似てもつかぬオカンの顔がかすかにのぞいた気がしたのは気のせいだつたらどうか。

その日からオイディプスとイオカステの間に二男二女を授かつたというから十数年の歳月が流れた。オイディプス王はテーバイの栄えと人々の幸福のために全身全霊をつくして善政を行い、妻子を慈しんで幸せな家庭を築いていたはずである。ところが陽一にはその幸福な時期の記憶が飛んでいる。甘いチヨコレートのような匂いをかいで、めくるめく快感に痺れたような気がするが、目覚めると、十数年後の朝なので

ある。それもその筈これは神周次の「人間論の六」の中なのだから。

六、先王の仇

先王の仇を捕らえて取り除けテバイを救ふ道ほかになし

テバイの民衆がかざしのついた嘆願の小枝をもってオイディプス王の宮殿に押し寄せた。町に疫病がはやり、作物も実りを結ぶ前に枯れ、家畜まで疫病で死滅しつつあった。嘆願は神の助けか、あるいは人の教えに従つてこの危機を救つてくれるようにというものだ。オイディプスは王妃イオカステの弟クレオンにアポロン神殿に伺いを立てにいかせていた。その報せに従つて正しく対処するからとなだめたのである。

クレオンの報せによると、イオカステの夫であったライオス王を殺害した犯人を突き止め、その犯人を追放するか、殺害しなければならぬというのである。アポロンの神託によれば、その犯人はテバイにまだいるということである。正義の裁きが行われていないと天変地異が起こり、疫病がはやるという捉え方である。先王を殺害した男なら、オイディプス王の命も狙うかもしれないので、オイディプスは自分の身を守るためにも、真犯人を突き止めてみせると決意したので。

七、真実を見抜く目

感覚で人を欺き隠れたる盲めてこそ見ゆまことの姿は

それでオイディプス王が、盲目の占師テイレスアスを召喚した。彼はアポロン神にも劣らないぐらいの占いの力で予言をし、真実を見抜くので、ライオス殺害の犯人がオイディプスだと知っているのだが、オイディプス王を罪に墮すのが忍びなくて頑として証言を拒否しようとするが、オイディプス王はその態度に業を煮やして、真実を言えぬということは、お前がライオス王殺害に絡んでいるからだろうと決め付けた。そこまで言われれば、テイレスアスも己の潔白を明かすためにも真実を告げなければならなくなり、真犯人はオイディプスだと激白してしまふ。

盲目の占師なので、真実がみえる筈がないとオイディプス王は決め付けるが、盲目でも心の目で真実を見抜く者もいれば、目が開いていても、真実は何も見えない者もいるのである。ともかくオイディプス王は自分で呼び出しておきながら、物証を伴わない占師の言葉は受け付けない。そしてテイレスアスがライオス王殺しに一枚咬んでいるとしたら、テイレスアスと呼ぶのに功のあったクレオンが黒幕ではなかったかと疑うことになる。

オイディプスは一度疑うと怒りに任せてそれは確信となり、クレオンを召喚して、ライオス殺しの黒幕と決め付け、クレオンが王座を狙っていると糾弾した。クレオンは王妃の兄弟として、厚遇されて好き放題をしているのにとっしてこの上、重い責任を背負い込むことになる王座に就こうなどと望むのか、私は全くそんな気はないと突っぱねた。

怒りに任せて理性を失っているオイディプスをなだめて、クレオンを帰らせた王妃イオカステは、オイディプスに怒りのわけを尋ねた。オイディプスは事情を説明すると、予言など迷信にすぎないと、自分の体験を告白してオイディプス王を安心させようとしたのだ。

八、キタイロンの山中

血を分けし子に殺さるる運命を避けむとライオスわが子殺めり

「ライオス王に神託が伝えられて、ライオスはライオスとイオカステの間に生まれる子によって殺される運命にあるということです。でもライオスは自分の息子ではなく、三叉路でよその国の盗賊どもに殺されたのです。その息子も親殺しの不幸に逢わないようにと、ライオス王が両足のくるぶしを留金で刺貫いて、キタイロンの山中に棄てさせたのです。だから予言など当たるものではありません。」

三叉路と聞いて、激しくオイディプスは動揺した。三叉路でトラブルになり相手を殺してしまったことを思い出したのだ。イオカステに確かめると、その三叉路は場所も同じで時期もオイディプスがテーバイに凱旋する少し前で、見事に符合してしまうのである。そしてその馬車にのった老人の背格好、年齢もぴったりである。一行の人数が五人であったことまでオイディプスの体験と一致するのである。そして一人だけ逃げて帰ってきた男がいたが、その男が強盗の集団に襲われたと報告したのである。

ところがオイディプスがライオスに代わって王となっているのを見ると、なぜか町から遠く離れた牧場にやってくれと嘆願したので。その男がライオス一行を殺したのが強盗の集団ではなく、たった一人の旅人だったと証言を翻せば、オイディプスのライオス殺しは確定する。その男の召喚を命じた。

ここでオイディプスが自分の身の上話をするとところだが、なにしろ「榊周次の人間論の穴」なので、陽一には三叉路以前のオイディプスの記憶がないのだ。これは困った、しかしコリントスからの使者がやってきた、彼になんとか辻褃を合わせてもらうことにしよう。

九、運命の狡智

父殺し、母子相姦の予言避け離れし人は赤の他人ぞ

「コリントスの王ポリュボス様がお隠れになりました。ご遺言によりオイディプス様をコリントスの王に奉戴いたすことに決定いたしました」と使者はオイディプスを懐かしそうに眺めながら報告した。「ポリュボス様がお隠れになった、それはご愁傷様です。ご病気でなくなられたのですか、それとも何か別の原因ですか。」「ええちよつとした風邪をこじらせて、なにしろもうお歳がお歳ですから」

「ところでどうしてポリュボス王は私に王位を継承されたのだ？」オイディプス王の質問に使者は怪訝な表情で答えた。「オイディプス様はポリュボス王のたった一人お子様ではありませんか。」「ではどうして私は王位継承者の身でありながら、ポリスを棄てたのだ。」「使者は狐につままれたような顔をしている。「オイディプス様は、自分がポリュボス様の実子でないという噂を気にされて、アポロンの神にその真偽を確かめられたら、神託は直接そのことには触れず、オイディプス様が父を殺し、母とまぐわって不義の子をもたれる忌まわしい運命にあることを告げたのです。それでコリントスにいれば父を殺し、母とまぐわうことになるかと恐れられ、ポリスを棄てられ、一度と親の顔は見ないと決心されたのです。」

イオカステに耳打ちした。「私はコリントスの王ポリュボ

スの子供で、父殺し、母子相姦を予言されたが、その父は私に殺されたのではなく、老衰で亡くなられたということだ、予言は当たっていないぞ。」「だから私がお気になさらないでよろしいと申し上げているでしょう。」「

「それでは早速、一日も早いコリントスへのご帰還を……」オイディプス王はためらった。「まだ母上が生きておられるのだから、母子相姦の予言がある限り、とても帰還はできません。」「イオカステ「予言というものがいかにいい加減か分かったのだから、ご心配は無用なのは。」「使者は苦笑して言った。「ハ、ハ、ハ、その心配はご無用です。だってオイディプス様はポリュボス王とその妃ドリリス出身のメロペ様の実子ではありませんから。」「オイディプス王の胸に暗い影がよぎった。「どうして分かったのか」と使者に尋ねた。「ポリュボス夫妻にはお子様がおられないので、大変かわいがられ、ひがまないように実子として育てられ、そのことに関しては事情を知る者には緘口令を敷かれていたです。」「

イオカステが口を挟んだ。「それをどうしてあなたはご存知なのですか?」「実は私がキタイロンの山で棄てられていた赤子を救った牧場番が、もてあましていたので、その人から貰い受け、ポリュボス様にさしあげたのです。お可哀想にその子はくるぶしを留め金で刺し貫かれて結ばれていたのです。私が抜いてさしあげました。オイディプスの名前はそこから由来するのです。」「

この証言はイオカステの子棄ての話と符号する。しかもその牧場番はライオス家に仕えていたというではないか。早速牧場番が召喚された。イオカステはこのときはっきりと自分たちが棄てた子が、自分の夫を殺し、自分の夫となっていたことを知り、そのことをオイディプスに知られまいと、詮議を止めようとした。しかしオイディプスは自分が無慈悲に棄てられた卑しい身分の子であることが分かるのを妻が嫌がっていると思った。まさか貴い身分の子ならそんなひどい仕打ちをうけないはずである。きっと奴隷の子だったと考えたのである。

牧場番は使者から当時の事情を質され、オイディプスから真相を白状するように迫られて、ついにライオス王の子を預かり、殺して山に棄てるように命令されたことを告白した。神託によってその子が父を殺し母子相姦をする忌まわしい運命にあるために、その不幸から逃れさせるには殺すしかないからということだ。だが牧場番はとても赤子を殺すことはいきない、ためらっているところを羊飼いの仲間が他国に連れていくというので、それなら父を殺す心配はないと思い、憐れみから渡したという。

「なんと運命を逃れさせるためにしたことが、運命を叶えさせることになるうとは。ああ、私はあるとき、三叉路でライオス様が、そうとは知らず、自らが棄てたお子様の手にか

かつて討たれたとき、わたしも一緒に死んでおけばよかったのだ、そうすればこんな悲劇の結末に立ち会わずに済んだものを」と牧場番は叫んだ。

十、順逆の罪

順逆の床に横たふイオカステ吾が妻にして母なる女よ

陽一はうろたえた。ウワー、俺はすごい悲劇のヒロインだ、じゃなくてヒーローだ。父を殺し、母とまぐわって不義の子をつくってしまった。その裁きを我と我が身に下さなければならぬ。ここでヤバイといって逃げ出したら最悪だ。かといって腹をかつさばくのもグロテスクだ。ともかく館に引込まう。なんと館の中ではイオカステが首を括って死んでいた。その骸を抱き寄せ、「おお、痛ましい姿、吾が母にして妻なるイオカステよ。お前は吾が子の母にして妻にして祖母なのか、そして吾は吾が子に対して父にして兄にして祖父である。ああ、なんとわれわれは時の流れに逆らって、命の順序をあべこべにするとてもない罪を犯してしまったことがそれは死すべき運命の人間が犯してはならない罪なのだ。」

十一、オイディプスの闇

真実を見れぬ眼まなこはくりぬきてひたすらに観よ、「オイディプスの闇」

オイディプスはイオカステが正視できなくなり、イオカステを順逆のベッドに横たえて、決意したように言った。「おお、真実を何一つ見ることができなかった眼よ、これ以上痛ましい光景を見なくて済むように抉り出しておこう」と叫ぶや、妻の衣服から留金を抜き取り、それで自分の両の眼を何度も突き刺した。

オイディプスは、クレオンに国政をゆだね、罪に穢れた吾が身をテーバイから追放するよう、クレオンに願った。クレオンはたつての願いを聴きいれるしかなかった。「スフィンクスの謎を解いたあなたが、どうしてこんなむごい運命に生きなければならぬのか、まことに理不尽だ」と同情した。オイディプスはうなずいてこたえた。「今となって考えてみると、あの解答は果たして正解だったのか、疑問だ。」「二本足にして四本足にして三本足にして、というのに成人、赤子、老人を当てはめて見事人間と答えたのでしょうか。実に見事な解答だ。」「実はあの時俺は<人間>と答えたつもりで自分を指差した。するとスフィンクスはうるたえて、崖から飛び降りたのだ。」「すると正解は人間ではなくてオイディプス王だということですか。よく分かりません。」「

「人間は二本足にして四本足にして三本足にしてというように、同時に成人、赤子、老人を生きることではない。ところが人間の道を踏み外すことによって、成人でありながら、赤子と兄弟になり、母と相姦して老人と同じ世代になった。つ

まりオイディプスは同時に時の掟に逆らって三世代を同時に生きる謎的存在になってしまったのだ。」「

クレオンはたたみかけた。「それではスフィンクスはあらかじめ、あなたがそうなることを知っていたのですか。でも知っているとしたら、崖から飛び降りることもなかったわけだ。」「オイディプスは少し考えて言った。「アポロンの神のなさることをすべて知ることができない。スフィンクスの呪いも運命が貫かれるための道具立てなのだ。」「

クレオンは天を仰いだ。「ああ、無慈悲なる運命の神よ、あなたはオイディプス王をもてあそんで、人間はどんなに逆らっても運命には従うしかないことを示されたのか。ならば、かくも悲惨な運命に見舞われた方は何を支えに生きていけばいいというのか、それはあまりに不均衡だ。天秤をもつていつもバランスに心を砕いておられる正義の神デュケーにあまりに失礼ではないのか。」「

盲目の占師ティレシアスが現れて、クレオンに語った。「神々に不平を言っても詮無いことだ。たとえ目が開いていても真実は見えないものだ。しかし目が見えなくても真実が見えることもあるのだ。今オイディプス王に見えるのは闇でしかないかもしれない。しかしその闇は、自らの運命に雄雄しく立ち向かって、己自身を見据えておられる尊い闇だ。人間の道を踏み外してはじめて到達した闇なのだ。神々ですら

決して侵すことができない神聖なものなのだ。絶対に侵すことのできない闇に到達されたことで、本当のご自分を見出されたのだ。たしかに不幸にかけてはもつとも惨めな境遇だとしても、その神聖さによって、正義の神のバランスは十分とれているのだ。オイディプス王の御名は何千年後の世まで語り継がれるに違いない。」

「ありがとう、テイレシアス。あなたには愚かにも疑いをかけてしまつて、本当に恥ずかしい。そのあなたにこんな優しい言葉で励ましていただけたら。あなたの言葉を生きる支えにして、心の闇を見つめながら生きていけそうな気がする。」オイディプスは歩きはじめた。そして突然明るい表情をして、「そうだ、分かつたぞ、オイディプスという名の本当の意味を。<オイダ>は<私は知る>という意味だ。そして<プス>は<足>だから足がわたしの特徴になっているのだ。オイディプスは<私は自分を知る>という意味なのだ。私は<汝自身を知れ>というアポロンの神の呼びかけにこたえて、何者にも侵されない主体としての自分自身を、自分自身の闇を知ることができたのだ。そしてアポロンの神は、人間に主体としての自己を確立しようとするところに、人間としての尊厳を見出せと教えているのだ。」

上村陽一は、あてもなく闇の中を歩き続けた。そして突然奈落に落ちていったのである。

第五話 プロタゴラスの人間論

- 一、 駄洒落を言うのは駄洒落じゃ…………… 44
- 二、 徳は教えられるか…………… 45
- 三、 真理は人それぞれ…………… 46
- 四、 動物の創造…………… 46
- 五、 後悔先に立たず…………… 47
- 六、 火と智慧を盗む…………… 48
- 七、 文明の自己疎外…………… 48
- 八、 神を祭る動物…………… 49
- 九、 言語を使う動物…………… 49
- 十、 パンツを穿くサル…………… 50
- 十一、 作った物も人間に含む…………… 50

十二、	ポリスあつての人間……………	50
十三、	つつしみと戒めの徳なくば死刑……………	51
十四、	ポリスも人に含める……………	52

第五話 プロタゴラスの人間論

一、駄洒落を言うのは駄洒落じゃ

駄洒落にてはぐらかすのも弁論か、酔い回りなばさえも曇りぬ

人の道を踏み外して、奈落に落ちた上村陽一は、しばらく意識を失っていたが、青年が肩をたたいて、起こす声に目覚めた。「ギリシアを代表する徳の教師、ソフィストの元祖プロタゴラス先生、こんなところで居眠りされると風邪をひかれますよ。今日はまだ始まったばかりなのにすっかり酔ってしまわれたのですか。」

「え、私の名前は何と言われた？たしかソクラテスと言われたようだが。」「ご冗談を、ソクラテスは私ですよ。あなたは今やギリシア最大の知者、弁論にかけては神々も顔色なく、お話の巧みさでは、ホメロスも生きていれば脱帽すると言われているプロタゴラス先生ではないですか。」「上村陽一は目をこすりながら、思い出そうとしたが、なかなか出てこない。

「何もない、あつても認識できない、認識できても、伝えられない」と言った。すると、「ひどいな。それは私ゴルギアスの台詞じゃないですか。」「あれあれゴルギアスさんもいたのか、おかしいな、私の記憶ではゴルギアスさんはいなかった筈だが。」「たしかにプラトンの『プロタゴラス』では

ゴルギアスはいなかった。まあそれは気にすることもないか。

「そうそう思い出したよ、万物のしゃもじは人間である。あるものについてはあるということの、あらぬものについてはあらぬということの。」「ア、ハ、ハ、ハ」ゴルギアスは笑った。「しゃもじじゃなくて、尺度でしょ。今日のプロタゴラス先生は徳の教師というよりも馱洒落の教師ですね。」
「なに、馱洒落の教師だと、馱洒落をいうのはだじゃれじゃ」と親父ギャグの連発である。

ゴルギアスが解説した。「これは馱洒落ではぐらかす弁論術じゃよ、ソクラテス君、今日はどうも酔っ払っていて頭が冴えないから、はぐらかし戦術らしいな、プロタゴラスさんは。」ソクラテス青年は、あきれた顔をして、「馱洒落ばかりでは、とても徳は教えられませぬね、プロタゴラス先生、徳の教師だとおっしゃる先生の看板が泣きますよ」と皮肉った。「ソクラテス君は、自分は何も知りませんと言う割には、徳は教えられないと知っているようなことをいうじゃないか。徳の教師を名乗っているのだったら、徳を教えるのは、特に得意なんじゃないかな、プロタゴラスさんは、ア、ハ、ハ、ハ」とプロタゴラスは笑って応えた。

二、徳は教えられるか

数学や文字を教うるごとくして徳教得るや教え得ざるや

「いや、私には徳は教えられるか、教えられないかは分かりません。ただ馱洒落の連発なので、教えられないということかなと先生のご様子から推察したまでです」と例によって「無知の知」の立場を表明した。

「徳は教えられるよ、じゃあ教えてあげよう、徳はアレテ―です。」一同ずっこける。「そんな、それはただギリシア語で言っただけじゃないですか。問題なのは徳の本身ですよ。」ワツフンとプロタゴラスはおもむるにせきをしてから言った。「ギリシアの四元徳といえば知恵・勇氣・節制・正義だな。」上村陽一は倫理が得意だったので、そういうのはすらすらと出てくるのだ。ソクラテスは肩をすぼめた。ゴルギアスは苦笑しながら、今日のプロタゴラスさんは愉快だな。ソクラテス君はそういう知恵・勇氣・節制・正義などを数学や漢字の知識のように教え込むことができるかどうかをたずねているのだ。「ゴルギアス君ここは古代ギリシアだよ。漢字なんて誰も知らないし、まだ中国では漢になつてないよ。」ゴルギアスは、舌をだしていった。「そんな細かいところにこだわるなよ。」

上村陽一はプロタゴラスとソクラテスの徳は教えられるかについての対話については、どこかで聞いたような記憶がある。いや何かで読んだ記憶である。実は、榊周次のホームペー―ジに「プロタゴラスの人間論」の紹介があつて、大変印象

的だったのである。しかし「人間論の穴」に入っているとどこでいつどうい記憶を仕入れたかは思い出せないことになっている。ただ陽一はこの話は自分の中にインプットされている気がして、なんとかかなりそうだと思った。

「ソクラテス君、じゃあ徳が教えられることについて、ひとつお話をしてみよう。」いよいよプロタゴラスの得意の物語形式の説明が始まるというので、富豪カリアス邸に集まった一同はプロタゴラスに視線を集めた。

三、真理は人それぞれ

万物の真理をはかる尺度とは人それぞれの感じとるまま

「神話の形をとって話をすすめてみよう。まず人間とは何かを考えるとしよう、そうすれば、人間に徳が教えられるかどうかも分かるから。」ピポクラテスがたずねた。「先生の人間論は、人間とは万物の尺度であるという人間論ではないのですか？」

プロタゴラスは首を振った。「いやいや、それは全くの誤解だよ。あれは真理はひとそれぞれという言う意味なのだ。この部屋が暑いか寒いかはひとそれぞれだろう。たつぷり着込んだり、熱いものを食べている人にはこの部屋は暑すぎるが、薄着や冷たいものしか食べていない人には少々涼しすぎ

るかもしれない。それを気温だけ取り上げて、今何度だから暑いというのは間違いだ。サウナ風呂だと摂氏八十度台でも寒くて体が震えだす者もいるらしい。つまり真理は人それぞれで、自分が感じたのが、自分にとって真理なのだ。だからだれが権威のある者にこれが真理だといわれても、簡単に信じていけないということだ。あくまで真理は人それぞれ相対的なものだということなのだ。」

四、動物の創造

神々は土に水ませこねまわし火にかけ作りぬ生き物たちを

ピポクラテスという名の青年は納得した。「なるほど、では早速プロタゴラスさんの人間論をお聞かせ願いますよ。」彼はなかなかの美少年である。三輪智子が演じているのだ。上村陽一はどこかで見覚えがあると思ったが、だれかはわからなかった。

プロタゴラスは無言でうなづいて語り始めた。「昔不死なる神々は、自分たちは不死なものだから命がけで何かをすることがない、それでどうにも退屈な日々にあきあきして死すべき定め動物たちを作ろうということになった。それで土を水で混ぜて捏ねあげ、思い思いの形にして、それを火にかけてつくったのだ。」

カリアスはそこで口をだした。「そしたら動物たちは陶器だったのですか、プロタゴラス先生。」「カリアスさん、それはわれわれ人間が煮炊きや焼き物に使っている火のことでしょ。神々が使う火は命の火なのです。それで焼くと獣たちの体ができるらしいです。」「プロタゴラスは、オリンポスの山に神々が住んでいるなどまったく信じてなかった。でも神話を好んで創作したが、それは自分の説明に都合のよいように話を作れるからだ。

「その後で、それぞれの動物たちが滅びないように、特性を与える仕事を神々に命じられたのが、われわれ人間の思考を司る二柱の神々だ。ピッポクラテス君、その神々の名前は何？」

ピッポクラテスは急に振られたので少し驚いたが、「想像力や構想力をつかさどる先立つ思考つまりプロメテウス、彼は兄です。そして反省や後悔を意味する後立つ思考つまりエピメテウス、彼は弟です。」「どちらが担当したと思う、ピッポクラテス君。」「相談して二人で与えたのでしょうか。どちらかだとやはり兄プロメテウスが適任でしょう。だってエピメテウスは将来のことは考えないで、思いつきでいるいろやりますが、後からうじうじ後悔するタイプですから。兄はしっかりと未来を見通して行動できるので、信頼感がもてます。」

五、後悔先に立たず

後悔は先に立たずや人にまだサバイバルする特性与えて

「これはお話だからね、問題が起こるからお話になるんだ。エピメテウスはいつもお兄ちゃんばかり、いい格好をして自分にも活躍させてほしいと、つまりこの仕事を自分ひとりでやらせてほしいとたつてのお願いをした。兄としてはそこまですでに言われれば譲ってやるしかない。」

そこで大張り切りでエピメテウスは獅子には鋭い爪や牙を与え、鳥には翼を、猛獣の餌食になりやすい小動物には繁殖力を与え、それぞれの種族が滅びないように工夫したのだ。なかなかうまくいったと思つたのだが、最後に残つた人の種族に何か特性を与えようとしたが、品切れで人はサバイバルできる特性を持たないままだったのだ。」

「それは困つたことになりましたね、プロタゴラス先生、それじゃあ人間は自然の中で適応する能力のない欠陥動物じゃないですか。」「カリアスは心配そうな表情をした。この欠陥動物論は二十世紀の大戦間時代にゲレンたちが復活させた。人間は元々自然適応能力に欠けていて、知的能力で補っているけれど、結局は適応できなくなって早晚滅亡する運命にあると不吉な予言に使つたのである。」

六、火と智慧を盗む

知恵と火を盗みて人にもたらしめプロメテウスは人を救えり

「ええ、カリアスさん、まことにその通りです」と頷いた。「プロメテウスが首尾はどうかと点検にきたら、なんと人の種族は何の特性もなく、これじゃあ獣たちに滅ぼされてしまっじゃないかと、エピメテウスに言っていると、エピメテウスは後悔先に立たずで、うろたえるばかりなのだ。そこでプロメテウスは知恵の神アテナイ女神から知恵を、火の神ヘファイストスから火を盗んできて、それを人間たちに与えて何とか、適応できるようにしてくれたのだ。」

ワインがだいぶ回っているせいかカリアスは無邪気に喜んでパチパチ手をたたいた。「いいぞ、いいぞ、いいぞ、じゃなかったプロメテウス。おかげで我々人間は生き残れたんだ。」そこでヒツポクラテスが解説しようとした。「つまりプロメテウスというのは人間の想像力、構想力を神としたものから、人間自身が自分の想像力、構想力を使って、いろんな知恵を思いつき、火の使用方法を考え出すことに成功して自然に適応できるようになったということですね。」

七、文明の自己疎外

窃盗の罪を背負いて大岩に縛りまじめ(られて)内臓抉らる
文明の内臓抉らる苦しみはヘラクレスならで解き放てまじ

ゴルギアスが続けた。「プロメテウスが哀れな我々人間のために神々から知恵と火を盗んだということで、窃盗の罪を着せられ、岩に縛り付けられて、鷲に毎日内臓を啄ばまれていたというじゃないか、この話はどう分析するのだ、ヒツポクラテス君。」ヒツポクラテスは大声で言った。

「人間は知恵や火を使って文明を作り出したためにかえって、内臓を鷲に毎日抉られるような苦しみを背負ってしまっただということですよ。結局自分で自分の首を絞めているようなものです。知恵や火はさまざまな富を生み出しました。それを得るために人間は毎日悪戦苦闘しています。そして思うようにいかない人間のものを盗んだり、奪ったりします。それが国同士の戦争まで引き起こすのです。」

ゴルギアスは頷き、「なるほど、では怪力の超人ヘラクレスがプロメテウスを救うという神話はどう解釈するのかね、ヒツポクラテス君。」

「もちろんそれは人間がこの文明の苦しみから救われるためには、ヘラクレスのような超人的な努力が必要だということですよ。だからといってそれは無理だということではなくて、文明の苦しみを克服するために超人的な努力をしない、そうすれば人間は自ら生み出したこの文明を克服できませんよと励ましてくれている神話なのです。」

富豪カリアスはパチパチと手をたたき上機嫌だ。「ヒツポクラテス君、なかなか冴えているね。若きソフィストとしてなかなか有望株だ。」

ソクラテスは機嫌を悪くした。「我々はギリシア最大の知性と誉れ高いプロタゴラス先生のお話を伺っているところですから、ヒツポクラテスさんにお話を攪われるのは困ります。」ヒツポクラテスは苦笑して言った。「これは失礼しました。つい便乗しすぎましたかな。」

八、神を祭る動物

神々にあこがれ抱く人なれば祭りて願ふ幸と平安

上村陽一は、文明を人間の自己疎外として分析したヒツポクラテスの見事な分析に感心して聞き入っていたが、話を続けなければならぬ。「人間の知恵は神々から拝借したわけですから、人間は神々と同じ理性を分かち持っている。そこで人間は神々に憧れと親近感を抱き、神々の像をつくってお祭りし、供え物をしたり、願いごとをしたりするようになったのだ。」カリアスは酔いが廻って一言言いたくて仕方がない。「そうなんです、プロタゴラス先生、人間だけが神々を祭る宗教的な存在です。自然の中に神々の大いなる力を感じ得し、謙虚に祈りをささげます。人間が何でもできると思い

上がってはいけない、自然の摂理に従い、神々にすがる気持ちを持つべきです。」

九、言語を使う動物

音節を区切りて作りし言の葉で人は築きし文明の世を

乗りかかった船みたいなものだから、ここにいるんな人間論を披瀝しておこう。上村陽一は思いつくままに語り続けた。「それから人間は（ここはプロメテウスはとすべきだったかな、もういいや）人間は「でいこつ」音節を区切っている音を組み合わせ、それで様々な事物や事象、物事の有様などを表現することに成功したのです。」

カリアスは大喜びだ。「ブラボー、ついに言語を発明しましたね。人間は言語を使う動物だ、これが最大の特長かな、人間という種族の。なんといつても、言語を発明したことで、人間は意志を疎通できるようになりました。そして知識を共有し、また蓄積し、発展させることができました。言語なしに文化は考えられません。こうしてすばらしいプロタゴラス大先生のお話も伺えないわけだ。」

「ところで徳は教えられるかどうかという肝心の本日のテーマはどうなりました、プロタゴラス先生？」ソクラテスは痺れを切らして催促した。「ソクラテス君、あわてる何とか

はもらいが少ないというじゃないか、人間が何であるか分かっていないのに、徳が教えられるかどうか論じることはできないんだ。次に人間は獣たちと違って恥じらいがあるので着物を作った。寒さや直射日光も防げるしね。」

十、パンツを穿くサル

人は何故パンツ穿くやと問立てて栗本答えぬそれを脱ぐため

「何のためにパンツを穿くか知ってるかね。堅物のアルキピアデス君」ニタアとカリアスは笑った。「そりゃ裸では恥ずかしいからでしょう」とアルキピアデス青年は答えた。「それは表向きの理由だ、本当はいざというときに脱ぐためさ、ハ、ハ、ハ、ハ」傲慢にカリアスは笑った、そういえばこういう下品な人間論もあつた気がするぞ、上村は思い出せなかつたが、それは栗本慎一郎の『パンツをはいたサル』の人間論である。

十一、作くられた物も人間に含む

人間が作りし物も人間を語るが故に人に含むや

「家を建てたり、家畜を飼つたり、農作物を栽培したり、人間は食糧を確保し、快適な生活を送るための様々な道具や品物を次々と発明したのだ。カリアスさんコメントどうぞ」

陽一はどうせ口を挟まないと気が済まないのだからと、自分からカリアスにふつた。

「とんでもない、高名なプロタゴラス大先生のお話に、私のような一介の商人が偉そうにコメントするなど恐れ多い。それより人間が生み出した道具や品物が雄弁に人間のなんたるかを語ってくれます。パルティノンの神殿や劇場などの建物や衣装や装飾品、デリーシヤスなご馳走など人間ならではの暮らしが人間の中身なのです。さあみなさんどんな人間を召し上げられ、人間のお味はどうかかな？」何？道具や建物や衣服やご馳走が人間だ？このカリアスという親父のいうことは、どこかで聞いたことがある。人間でないものを人間だといふのは、人間概念を混乱させることにならないか、そういえばあのカリアス親父の顔は覚えがあるなあ、俺が探していた人物だが、どうにも思い出せない。

十二、ポリスあつての人間

ポリスありはじめてながらふ人なればポリス語らず人は語れず

「一人ひとりがばらばらでは何も作り出せません。獣たちや賊に襲われて生き残れなくなってしまう。」カリアス親父の顔を上村陽一はじつと見ていると、カリアスは陽一に

ヒントを与えるつもりか、次にプロタゴラスのいうべき言葉を示唆してくるのだ。

「そうそう、人間論は実はこれから今日のテーマとも絡んでくるんだ。獣たちや強盗団から身を守り、文明を築き上げるために人間たちは集まって住むようになったのだ。つまりポリス(国家)が生まれた。ポリスなしに人間のサバイバルができないということは、ポリスだって人間の本質的な特徴なのだ。」ゴルギアスは不満げな表情になった。「ポリスあっての人間だということは、ポリスができるまではまだちゃんとした人間ではなかったということですか。とするとそんな未熟な人間がポリスを作るのはなかなか難しいということになるでしょう。」

「さすがだ、ゴルギアスさん。あなたの仰るとおりです。だから身を守るためにポリスを作ったものの人間たちはまだ未熟だったので、わがまま勝手に振る舞い、ポリスを自分のために利用しようとはするが、ポリスのために自分が犠牲になるのは真つ平だというような態度をとる。そのうえほかの市民たちを自分の考えに従わせようとはするが、他人の意見には耳を貸そうとはしない。長老やポリスの功労者にも敬意を払わないで生意気な口をきく。そういう連中がのさばってトラブルが頻発し、ポリスの機能が麻痺してしまうことになる。」カリアスはいてもたつてもいられない。心配を満面に

表現して、「ヒヤー、大変だ、神様じゃなかった、プロタゴラス先生何とかしてください。」

十三、つつしみと戒めの徳なくば死刑

つつしみと戒めの徳とふべし死に値ふべし弁えなくば

「そこでゼウスの神が登場する。」とプロタゴラスがいうと。ゴルギアスは「おやおや困ったときの神頼みですか」と揶揄した。ヒツポクラテスが助け舟のつもりか口を挟んだ。「ゼウスはコスモス全体のまとまりをあらわす神ですから、ゼウスの命令に従うということは自然のおきてにのつとるということなのです。自然のおきてに従わなければ何事もうまくいかず、人間のサバイバルもできません。」ソクラテスは「どうもヒツポクラテスの口出しが気に入らないらしい。」わたしたちはプロタゴラス大先生のお話を伺っているのですから、ヒツポクラテスさんが大先生のお話を補足されるのは、いかなるものではないでしょうか。興味がかかりますし、先生にも失礼に当たるのではないのでしょうか。」ヒツポクラテスは少しむかつきながら言った。「これはお気を悪くされたら、すみません。ゴルギアス先生のご発言に刺激されました。」

プロタゴラスである上村陽一は落ち着いて続けた。「なんのなんの、あなたの発言は決して邪魔にはなっておりません。若者が的確な発言をされるのを聞くと末頼もしいもので、大

変喜んでおりますぞ。全能の神ゼウスは、使者ヘルメスを呼びつけまして、人間たちの滅亡を防ぐために、つつしみといましめを与えることにしたのです。」「よお、大統領！ じゃなかったゼウス！ 待ってました」とカリアスはワインをこぼしながらグラスを上げた、ソクラテスにらみつけられたので、それ以上の発言は控えた。

「ヘルメスはこうゼウスにたずねた。『その二つの徳はつつしみを分配される者と、いましめを分配される者に分けて分配するのですか？ それとも全員がつつしみといましめを持つように分配するのですか？』ゼウスは答えた。『もちろん全員がつつしみといましめを持たなくてはいけない。それでないとポリスの秩序は成り立たない。もしこの二つの徳を持つ能力がない者がいれば、死刑に処すとお触れをゼウスの名において制定してもらいたい。』」

ヒッポクラテスは驚いて叫んだ「そりゃあちよつと厳しすぎますよ、つつしみやいましめといつても程度があります。プロタゴラスさんの言い方だとこいつは生意気だというだけで、死刑にされてしまいかねない。」「たしかにそうだ、陽一はおぼろげな記憶を頼りに論じているだけに、このくんだりはどうもおかしいと思った。でもここがポイントだったはずだ。

カリアスが救いの手を入れてきた。「いや、これはポリスの上に個人を置いてはならない、あくまでもポリスの団結と

平和を優先すべきだという原理ですから、それをわきまえないと死刑だというのは自然のおきてにかなっていません。なにも少々生意気だとすぐ死刑という意味じゃないのです。それは細目を定めるときにこれこれの程度までいったら死刑ということにすればいいわけです。」「

陽一も一安心した。「カリアスさんの仰るとおり、ここがポイントなのだ。つまり人間は頭がよくて、いろいろ便利なものを作ったり、言葉で意思を疎通しあったりだけでは生きていけない。人間はポリスあつての存在なのだ。そしてそのポリスは、ポリスの秩序に従えないものを死刑にできる暴力装置を備えていなければ成り立たないということなのだ。つまり人間を論じるためにはポリスの暴力装置まで含めて論じなければ、人間論としては不十分だということなのだ。」「

十四、ポリスも人を含める

ポリスをも人と捉える人間観、個々の市民はそれを構成す

カリアスは大感激だ、「全く全く同感です、プロタゴラスさん。ポリスも含めて、人間であり、個々の人間はその構成員だということですね。ただ個々人だけを人間とみなす人間観だけでは不十分だということでしょう。」「

ソクラテスが発言を求めた。「人間論としてはなかなか素晴らしい。大いに勉強になりました。ところでプロタゴラスさん、徳は教えられるかどうかという肝心のテーマはどうなつたのですか。」

「おやおや、私の話を聞いていなかったのかね、だから、つつしみといましめをいくら教え込んで身につかないで、ポリスを破壊する連中は死刑にしろということだから、ほとんどすべての市民たちは徳を教えられているからポリスがこのように繁栄しているということなのじゃよ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」プロタゴラスはソクラテスを笑い飛ばしたので、一同が大笑いになった。どうも陽一の感では、このあとソクラテスにプロタゴラスがやり込められるいやな展開が待っていそうである。そうならないために、話を終わらしたかったのだ。

カリアスもこれ以上の議論は必要ないと考えていた。なぜならこれは彼を演じている榊周次の「人間論の穴」なのだから。このままプラトンの『プロタゴラス』に準拠していると、プロタゴラスは徳を教えられるというが、肝心の徳の中心である知恵・勇氣・節制・正義などの徳の定義ができていないので、徳のなんたるかを知らないことになり、徳を知らないでは、たとえ徳が教えられるものであっても、プロタゴラスには教えられないことになる、プロタゴラスの無知を暴露されることになっているのだ。

カリアスが手をたたいた。「さあさあさあ、今夜はすばらしいシンポジウムだ。酒を酌み交わし、ご馳走を共にしながら、知を論じ、人間を論じる、これがシンポジウムということですからね。今夜は特別にペルシアの東の果ての向こうの国から取り寄せた酒があります。これがなかなか美味でして、皆さんに振舞わせてください。それから徳は教えられるかどうかの議論の佳境に入ることになりますよ。」

みんなで一斉に飲み干したが、陽一は急に眠気がさしてきて意識を失った。どうも眠り薬が仕込んであったようである。

コーヒーブレイク A

目次

一、女が主役の人間論を……………	55
二、役とは知らず……………	55
三、バーチャルセックス……………	57
四、夢と現実の違い……………	57
五、夢見る能力と人間論……………	57
六、夢と言語能力の関連……………	58
七、リアルとバーチャルの入れ子構造……………	59
八、バーチャルの基底としてのリアル……………	60
九、各話のつながりはなし……………	61
十、一分間が一年間……………	63

十一、バーチャル電脳劇の観客……………	63
---------------------	----

十二、ソフィーの不安……………	64
-----------------	----

コーヒープレイク A

「人間論の穴」休憩室にて

登場人物 榊周次 上村陽一 三輪智子

一、女が主役の人間論を

どうせなら智子主役のバージョンでそれがだめなら拉致というかも

ファンタジー古典を材に作ったら男ばかりが前に出るかな

陽一：休憩室があつたんですね。それにしても疲れましたよ、もう人生を何十回も経験したような気になります。

智子：これって陽一君が主役になったバージョンでしょ。智子の主役のバージョンにして欲しかったわ。

周次：人間論になると、登場人物の関係で主役は男の場合が多くなってしまう。思想家や物語の主人公では圧倒的に男が多いだろう。

智子：ファンタジーなら『ソフィーの世界』とか『不思議の国のアリス』とかメルヘンチックに描けばいくらでも、女の

子中心でいけるでしょう。

周次：古今東西の人間論の古典を材料にしているからね、でも何とかそういう作品も組み込まないと、三輪さんに悪いかな。歴史や文学の世界に広げていくとないことはない。それを人間論でまとめるというのが主旨だろう。だからなかなか難しい。それに女優を演じさせるのは忍びないところもある。たとえば則天武后や西太后などは恐ろしすぎるし。

ところでご家族も急になくなって拉致されたのじゃないかと心配しておられるだろう。

陽一：ええ、三輪さんちでは警察の方を呼んでおられましたからね、当然榊先生は誘拐罪で逮捕されますよ。しかし、先生のやり方もかなりラジカル過ぎるのじゃないですか、一見虫も殺さないような穏健な性格に見えるけれど。

智子：じゃあいい役がいただけなかったら、拉致されたことにしちゃおうかな。

周次：こりゃあ参ったな、なんとか精一杯工夫しますよ。

二、役とは知らず

電腦の中で演じるキャラなれば役とは知らず命張りたり

陽一：それにしても記憶が消されてしまっているの、完全

に本人に成り切っているでしょう。まさかファンタジーと思
つてないから、これがたった一度の人生と思いついで必死で
すよ。こんなのゲームだとはいえませんが。しかも結末は爆
死したり、ばっさり切られたり、さそりにやられたり、プロ
タゴラスだけは酔っ払って眠り込んだだけですが、えげつな
い死に方でしょう。

智子：そこがまたかつこいいわけね。ハッピーエンドの人生
ゲームじゃ演じる気にもなれないでしょう。やはりドラマテ
ィックにいかうとすれば、少々無茶しなくちゃね。

陽一：それはそうだけど演技でやってるわけじゃないところ
が、えげつないんだ。

周次：あんまり辛ければ、降りてもらってもいいんだよ。そ
の代わり内緒にしてくれないと困るけれど。

陽一：だれも降りたいとは言っていないでしょう。だって智子
と夫婦になつたりできていくわけだから、僕的にはこれ以上
のハッピーはないわけですよ。

智子：あら、それは陽一君、私にラブコールしているわけ。

陽一：高校卒業してから言おうと思っていただけけれど…。

智子：どうして今まで言わなかったの。

陽一：せっかく仲良く話できてたのに、打ち明けてだめだっ
たら気まずくなると思って。

智子：へえー、純情なのね。

陽一：もしだめでもさ、友達でいて欲しいんだ。なかなか何
でも話せる友達でいないんだ。

三輪さんとなら倫理の話でもできるだろ。だから卒業までは
返事はいらなからさ、今までどおり友達でいてくれよ。

周次：そうだね、進学が決まってるからのほうがいいかもね。
受験生は恋愛するとたいがい失敗するからね。

智子：あら先生、進路指導の先生みたいなこと言うのね。そ
したらこんな世界に引き込んで、二人をくつつけちゃうのは
どういうことなの。

陽一：倫理や哲学の体験学習としては最高だね。

周次：まことに申し訳ない。教育というのは常に両刃の剣で、
活かすも殺すも本人の受け止め方しだいだね。

三、バーチャルセックス

リアルには指も触れない二人でもバーチャルならば飽きなく
るほど

智子：陽一君のことは考えとくわね。でもエデンの園ではアダムには飽きちゃったけど。オイディプスの陽一君には胸がかきむしられたわ。現実には手も握ったことがないのに、「人間論の穴」にはまつちやうとセックスだってしている気になるのだからおかしいわね。あれって本当に行っていたのかしら、あくまでバーチャル(仮想現実)でしょう。

周次：もちろんバーチャルですよ。だってもし現実なら君たちはとつとつに死んでいるはずでしょう。だからある意味、演劇や映画よりも幻想性が強いわけです。演劇の場合は演じるにせよ、実際に裸になったり抱きついたりしているわけだけれど、この電脳空間では裸になったり抱きついたり、セックスしたりしているつもりになってるだけです。だから夢を連想されたら、あれが一番近いですね。(笑い)

四、夢と現実の違い

夢ならば天翔りたりリアルには自然のおきて抗ふまじきや
同じ夢繰り返し見て何時の日かかなふと思ふも若き口の夢

智子：夢と現実の違いってなにかしら、夢だつて場合によつたらすぐリアルでしょう。現実だつて夢のようにはないし。

周次：夢の場合は、自分の欲望や恐れなどの意識の組み合わせのようなものでしょう。だから空を飛んだりできるし、時の流れも急に転換したりします。つまり現実の自然法則に逆らつたりする場合もあるわけだけれど、現実の場合は自然の因果律に従うわけです。

陽一：夢が叶う夢つてあるでしょう。ついに念願がなつたと思つたら夢だつたりして、あれつてつらいですよ。

周次：それはありますよ、もうこの歳になるまで何百回となく夢がかなつた夢を見続けていますが、いまだにかなつていない、これつて地獄ですね。まだ若いうちは、その夢を見続けていたらいつかはかなうのだと思えますが、もう還暦近くなつちやうと、それもありえないわけで、そういう夢はもう見たくないですよ。

五、夢見る能力と人間論

リアルとは異なる世界つくりたる夢見る力人を作るや

智子：夢を見るといふのは人間だけなんですか、そしたら夢を見るといふのも人間論として重要ですね。

周次：高等動物でも睡眠中に目覚めていたときの意識を反芻したり、組み合わせたりする夢はみるかもしれませぬ。人間論として展開する場合は、現実とは違う仮想現実を作り上げる能力として夢が取り上げられることになるでしょう。

陽一：つまりビジョンを持って、その実現の構想を思い描き、それにそって実践していくというのが労働や実践ということですから、夢見る能力が人間のもっとも重要な特長ともいえるわけでしょう。

智子：睡眠時の夢と覚醒時の構想ではだいぶ違いますよね。

周次：さまざまな意識を組み合わせるといふ意味では同じです。ただ睡眠時は外界から刺激が入ってこないし、思考力も弱いですから、因果律から解放されてしまうわけですが、覚醒時の構想の場合は、因果律を前提にしなければならぬので、制約されます、その分現実的なイメージになります。

智子：覚醒してきますと、構想もはっきり姿が見える画像ではなくて、もっぱら理性的なものですな。言葉で説明するよな。だから理屈としては現実的でも、夢よりイメージ的には劣りますね。

六、夢と言語能力の関連

言の葉は登録したるメモリーを記号に代えて組み合わせしか

陽一：だから明確に文章化したり、イメージを画像化して示したりして構想を他人に伝達する必要があります。よく考えますと、言語というのも目の前の状況を音声などで記号化して伝えるだけではなくて、メモリーとして登録されているイメージやイメージの組み合わせを記号化したものを伝達する行為なのでしょう。

智子：どついう意味なの、理屈っぽ過ぎて分からないわ。

周次：動物どつしでもお互いに状況を伝達し合っているんだ。その場合、身振りや音声を使って伝える。ミツバチなんかは花の種類、方向、距離をダンスで伝えるという。動物の場合には外界からの刺激によつてその動きが決まってくるわけだけれど、人間の場合は刺激の内容をパターンに類型化して整理してメモリーとして登録しているわけなんだ、言語というのはその類型を音声記号で表現して伝える行為だという解釈を陽一君はしているんだろう。

陽一：夢の中で、覚醒時の刺激を反芻し、それを類型化して

登録するという作業があると思うのです。動物も夢を見るとしても類型化して登録するところまでいかないのじゃないかな。

智子：睡眠時は脳の活動が低下しているので、類型化はできなんでしょう。やはり覚醒時に類型化しているのじゃないかしら。

周次：夢と言語の形成との関連は、人間起源論の重要な課題かもしれませんね。心理学でどういう研究成果がいままで蓄積されているのか、調べてみる値打ちはありそうですね。

七、リアルとバーチャルの入れ子構造

死んでまた別の世界に生まれしか一度きりなる人生かな
バーチャルを抜け出て現に戻りたる入れ子になりてそこもバーチャル？

陽一：つくづく考えたんだけど、死んでもまた次の人生にいけないというのは、こういうフィクションの世界だからでしょう。現実の人生は、一回きりで、死ねばもうまた別の人生が待っているわけではない。これが人生の一回性ということですね。

智子：人間が有限な存在である限り、死んでまた次の人生が

あるとか輪廻転生なんてことはありえないわね。

陽一：それはそうなんだけれど、演技しているとは知らずに他人の人生を生きてみて、それを生きている最中にはまさか、これがバーチャルだとは思わないから、死んだらおしまいと思つて精一杯生きているわけですよ。

だから、われわれがまた「人間論の穴」というバーチャルな世界から抜け出した時に、現実に戻つて、現実の人生は一回きりと思うけれど、でもバーチャルを経験しているから、現実だと思つているのがまたバーチャルだったというどんでん返しみたいなのが起るのじゃないかなつて気がするのです。

智子：『ソフィーの世界』でもそういう入れ子構造になつていたわね。そういう現実が虚構じゃないか、虚構が現実じゃないかという疑問があるから、宗教的な幻想にもつい惹かれてしまつたでしょうね。

周次：しかし人生は、やはり現実には有限で、食べたり、運動したり、眠つたりしなければならぬし、年とつて死んでいかななくてはならない。

肉体が滅んでいくのを見れば、個体としての生命の有限性もまた否定できないところですね。だから来世なんかないん

だという意識を持たざるをえません。

でもこれが生の現実であると思いついていたものが、バーチャルかもしれないという可能性に気づくというのも人間ならではのことです。

陽一：「『バーチャルとしての人間』論の可能性」ですね。でも現実(リアル)があるから、それに対してバーチャルなので、たとえこれがバーチャルであっても、バーチャルから醒めたらリアルがあるわけで、すべてバーチャルというわけにはいかないでしょう。

智子：信長は「人生わずか五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。ひとたびこの世に生を受け、滅せぬ者の有るべきか」と歌って、桶狭間に突っ込み、秀吉も「露とおち露と消えにしわが身かな 難波のごとも 夢のまた夢」と詠んでいます。現実こそバーチャルではないかという思いも強いようですね、昔から。

八、バーチャルの基底としてのリアル

ただ一度生きるが故に夢に生き夢に死なむといざ桶狭間
試みに飲まず食わずにおりしなば、意識朦朧幻想もなし

周次：ただし戦国武将の人生を一睡の夢とみる見方は、必ずしも、輪廻転生への信仰や、バーチャルだからこのファンタジーのように次の展開がまたあるという気持ちはないわけで、たつた一度の人生だからとことん夢に生き抜いてやろうという覚悟があるわけです。

陽一：じゃあ、リアルということを確認する、そこから現実にしたがって、一度だけの人生を充実させて生き抜くという覚悟を作るには、どうすればいいのですか。

周次：それには日々の生活が物質的な基礎の上に成り立っているということを、日々反省することですね。

毎日、お日様が昇りそのおかげでエネルギーをもらって生きている。きれいな空気や水があつて生きているし、食物連鎖の生命のつながりがあつて命をつないでいるわけです。

それに衣食住その他の文化的な生活を送るのに、様々な物資やサービスが生産、流通消費されているわけです。その生産機構を支える政治的社会的ないろんなシステムがあります。そこに組み込まれていないと、生活が成り立ちません。

そういうことをきちんと認識して、それに適応できるように、勉強したり、いろんな訓練や努力をしているわけで、道のあるくでも交通規則を守り、赤信号で止まっているわけ

です。

もしこれらが現実ではないとしたら、現実原則に従わなくてもいいはず。ですからそういうのに従っているということから反省すれば、飯を食べなければ腹をすかして飢え死にってしまうので、例えば死んじやって、体が減んでも意識があるといつても、脳に栄養も補給しないで、どうして意識が成り立つのかということですね。

智子：でもデカルトでいくと「我思う故に我あり」だから意識の前提に身体は必要ないということですね。

陽一：とは言つても、腹をすかすと意識が朦朧とするわけだから、それを反省すれば意識の成り立つ前提に、様々な自然的社会的な仕組みや関係があることは否定できませんね。

智子：そういった物質的なものも意識されてはじめてあるわけで、意識によって構成されているという面をみれば、意識から独立して存在する物質なんてないことになります。

周次：それはその通りですが、そういう発想は意識と物質を二元的に捉える発想です。意識というのももとは刺激をメモリアル化したもので、生理的な生体の反応です。それが記号化されて観念として捉えられるようになったのです。

意識を個体の自我が自分で作り出すように捉えていると、世界は意識が自由に組み合わされて、バーチャルな現実を構成しているように思えるのですが、実際は人々が意識し、考えることは、自然や社会の関係や連関から規定されているわけです。だから意識生産の主体も、単純に私の自我だけではなく、事物や関係だとも言えるのです。

智子：私個人が意識を生み出したのではなく、自然や社会から生み出されたものであつても、その生み出された意識がバーチャルじゃない、現実だという保証はないでしょう。だって社会は社会の再生産に都合のよい意識を生産しようとするわけで、そこにはたくさんさんの虚偽意識があるのではないですか。

九、各話のつながりはなし

それぞれの話につながりまゐるでなしいかでつけるや本のまとめ

り
ばらばらの人生生きる人でさえ已超えたる命引き継ぐ

陽一：それはそうと、陽一が話しの最中にふと我に返つたりする設定は無理ですか。そうでないと、それぞれの話がつながりません。読み手が全体としての物語がないので不満になるのではないですか。

智子：そうね、全体としての話の展開はまったく今までのところは感じられないわね。たとえ一話一話が面白くても、全体としてのまとまりがないようじゃ「哲学」の講義のテキストトとしては使えても、ファンタジーとしては売り物にはできないでしょうね。

周次：たしかにそうですね。それはなんとか工夫しないとダメですね。ただ陽一君が様々な人格を生きたことによつて陽一君という生命のつながりができます。

演じている陽一が生命のつながりとしてあるんだけど、そのことは個々のキャラクターは気づかないわけでしょう。我々も現実の人生では個々のキャラクターを生きているけれど、命のつながりをなかなか自覚できないわけですね。

気づかないけれど、命を引き継ぎ、バトンタッチして生きている、個々のキャラクターを超えた命が主体として生きているわけですね。それを簡単に気づかせてしまうとまずいような気がするのです。

陽一：陽一はじゃあアトム+ギルガメッシュ+アダム+オイデイプス+プロタゴラスで、彼らの人生経験を踏まえた人類の代表みたいな存在ですか。

智子：それは陽一だけじゃなく智子も陽一と一緒にいて共に生き共に苦しんでるので、多少なりとも人類の経験を体現した存在だということでしょう。つまり現代人は過去の人類の経験を引き継いで生きているわけだから。

周次：そうなんだ。でも実際に生きる場合は、人類全体を引き継いでいるということは忘れてしまっているわけで、学校や書物などを通して学んで少しは思い出すのだけれど、まったく自分自身、それぞれが私的な個人の枠の中でしか考えられないし、そこに閉じこもって私利私欲でしか動かないことが多いわけだ。

陽一：そうですね。だからこそ陽一は時々我に返らなければならぬ。そして智子を見つけて出して連れ戻さなければならぬし、榊周次から人間論の秘密を解く鍵を奪い取らなければならぬのでしよう。

智子：陽一君、あまりに気持ちが入りすぎていますわ、これはあくまでも「榊周次の人間論の穴」という特殊なゲーム空間なのよ。ゲームにのめりこんで、自分の人生を決めちゃたりしたら、ガンブラーと同じよ。

周次：二人の気持ちはかなり温度差があるんだな。

智子：もちろん私だって陽一君がいやだったら、もう逃げ出

したいわよ。あの先生、この「人間論の穴」からはいやになつたら抜けさせてもらえるのでしょうか。それとも私たち本当に拉致されているのかしら。

周次：もちろん現実の人生じゃないから、いつ降りてもいいわけだけれど、現実の人生がもういやだつて思ったらすぐおさらばできるわけじゃないわけだから、それぞれのキャラクターの人生を担当して生きている間は、自分がその人に成つてしまつているので、放棄できない装置になつていいる。今まで演じてきたからそれは十分分かつていいるはずだ。五話ごとぐらいにコーヒーブレイクを設けるから、その時にもう帰るといつてくれれば代わりを見つけるよ。

十、一分間が一年間

フィクションでたとへ百年生きたれどリアルに戻ればたかが百分

陽一：それにしてもこの穴でもう五人の人生を生きたから、何百年も生きた気がするんだけど、実際には何年ぐらい経つていいるのですか。

周次：おいおい一話で地球時間では約九十分だよ。気を失つていいる時間に栄養補給したりしていいるから、やっと二十四時間たつたぐらいかな。

智子：だから歴史や文学を読むということとはたくさん的人生を生きることになるといいうことでしょうか。同じ人生七十年でも、人の何倍も生きることができるといいうのよ。その意味では「人間論の穴」のバーチャル体験は、演じていいる本人が役の人物と自分自身と思ひ込むようにマインドコントロールされていいるので、画期的なのよ。

十一、バーチャル電脳劇の観客

読者をも穴に取り込み参加さすファンタジーを読む読者ありしや

陽一：問題点としては、こうした穴に無理やり拉致して苦しめたり、性格改造や思想改造つまり洗脳に使われたりしたら犯罪だね。

周次：あくまでもファンタジーの中での登場人物に対するマインドコントロールにすぎないから、ファンタジーの読者に対しては当然陽一君や智子さんにかかるほどの迫真性はないわけだ。

智子：ちよつと待つて。私たちはファンタジー読者でしょう。ただこのファンタジー読者は、登場人物を演じていいることでファンタジーに参加できる、参加型のファンタジーなのでしょう。

それとも私たちの他に、私たちが必死にファンタジーを演じているのを読んでいるファンタジー読者がいるというわけなの。そんなの聞いてなかったわ。

陽一：そりゃあ『人間論の穴』の出来事は、ファンタジー映像になってインターネットに流されていると、ぼくは睨んでるね。そうでしょう、榊先生。

周次：現実の生活というのはプライバシーがあるようでないというじゃないか。それぞれみんな自分個人の私生活を送っているように思っているかもしれないが、実際にはさまざまに規制され、考え方や生き方まで型にはめられている。それぞれのキャラクターがどんな人生ドラマを演じているか、ほとんど記録されているといつてもいいくらいだ。その意味では「人間論の穴」という電脳空間においてバーチャル画像がどこかで編集しなおされ、放映されていないとはだれも断言できないね。

智子：やっぱりそうだったのね。じゃあ私と陽一さんのベッドシーンまで世間に流布されていることにならないかしら。

周次：それは大丈夫、十八歳未満お断りじゃないから。私が言いたかったのは、「人間論の穴」の出来事をフィクションとして観たり読んだりしている人々は、そういう陽一君や智子さんにかけられているマインドコントロールはないから、

現実社会では犯罪性は問われないということだよ。

十二、ソフイーの不安

精神の自由奪われ演技する役者にありや自我の自由は有り得ない設定の中苦悶するその人物も幻想の人

陽一：でも我々は役を演じている間はマインドコントロールされていますから、そこでは陽一に戻る精神の自由はないわけです。先生の考えでは、陽一や智子の精神の自由を奪うということは基本的な人権の侵害ではないということですか。

周次：それはね演出家と役者の関係を想定してみればわかる。演出家は可能な限り、役者に役になりきることを要求するわけだ。その場合、100%その役には成りきれないけれど、ほとんど役に成り切って、役者は役者としての私生活や人格を忘れてしまうことがある。そこまでいかなくてもかなり自分を忘れてしまう。しかしそれは演出が成功しているのであって、その場合に精神の自由を奪ったから、自己が希薄になったから基本的な人権を侵したことはないだろう。芝居という空間ではそういうことは許されているのだよ。「人間論の穴」では電脳空間が100%のマインドコントロールを可能にしたので、大いに物議をかますことになるだろうね。

智子：そこがどうも嘘くさいと思いませんか。そういう電脳

による百分のマインドコントロールやまったく自己を忘れさせるぐらいの電脳空間とか、「人間論の穴」に吸い込まれるなんて設定自身、現実には有り得ない。有り得るとしても二十一世紀の科学技術水準では有り得ないはずです。

周次：いやその疑問は却下です。だつて君たちがこのように現実的に「人間論の穴」に存在しているという厳然たる事実が、それが可能であることを疑問の余地なく示しているのですから。それとも君たち自身がフィクションだと君たちは主張するのですか。

陽一：デカルトの「我思う故に我有り」だと、自らフィクションだと主張できませんね。もし現実に生きている人が、自分の現実がフィクションだと分かったら、現実だと思っていた自分もフィクションになってしまうことになります。

智子：そういえば、『ソフィーの世界』では、フィクションが自分たちの現実だとソフィーが気づくのだったですね。それを現実の私たちに適用すると、いったい誰がどのようにして、自分の生きている現実が、現実かフィクションかを見分けるのでしょうか。

陽一：現代思想ではむしろ客観的な実在を前提しないで、意識の現われとしての現象を現象するままに記述する現象学が有力なのでしょう。つまりフィクションでも現実でもみんな

意識現象として現れているのですから、現象として記述されている限り、フィクションと現実の見分けはできないことになりますね。

周次：そういう根源的な存在への問いにぶつかつたところで、コーヒープレイクもそろそろタイムオーバーで、またすばらしいフィクションの現実に戻ることでしょう。

彼らはコーヒーを飲み干したとたん、休憩室は暗転して闇に消えてしまった。

第六話 筒井康隆著『虚航船団』の人間論

目次

一、目覚めればコンパス	66
二、ダサイコンパス	67
三、涙の中の解放感	67
四、文房具人間	68
五、どうやって文房具が話すのか	68
六、ノーマルがアブノーマル	69
七、人キャラ示すサイン	69
八、自己意識ある文房具	70
九、ムービーが文房具に	70
十、人・文房具システム	72
十一、マン・マシーンシステム	73
十二、数字の美学	73
十三、天空の殺戮者	74
十四、ネオヒューマニズム	75
十五、暴走する欲望	76
十六、文房具と舐の合いの子	76

第六話 筒井康隆著『虚航船団』の人間論

一、目覚めればコンパス

[ベトベトと糊に陰部をまさぐられ目覚めてみると『虚航船団』](#)

上村陽一は、ネトネトした圧迫感を感じていた。空気全体が湿り気を濃くして、体全体を押しつぶそうとしている。特に下半身が気持ちが悪い。むずむずしてきた。それより胸部圧迫感から解放されなければ、押しつぶされてしまうので、全身に力をこめて寝返りを打とうとして、目覚めた。巨大な糊が体に覆いかぶさっている。そして糊に下半身のもっとも性感の敏感な部分をまさぐられていたのである。

「コンパス、起きるよ、もうすぐ作戦会議がはじまるぞ」とセクハラぐせのある糊はつぶやいた。「コンパス？」糊が話しかけるのも奇妙だが、自分がコンパスというのたまげ話した。「本当に俺はコンパスなのか、コンパスといっても円を描く普通のコンパスなのか、烏口コンパスなのか、ディバイダーではないのか、それとも観測器具のコンパスなのか、どのコンパスなのだ。」糊はあきれた。「またコンパス君のアイデンティティ不安が始まったな。長い二本の脚の先が尖っていて、スマートな普通のコンパスだよ」。たしかにコンパスのような姿をしている。

なんとコンパスになってしまったのだ。俺は上村陽一で、「榊周次の人間論の穴」に嵌っているのだった。そしていろんなキャラクターを演じてきたが、今度はコンパスだなんて、しかも糊なんかにはセクハラされて、榊先生のやることはまったく奇想天外だな。

二、ダサイコンパス

脚まげて円を描くのはダサすぎるスックのばしてクルリと舞

両脚を屈伸させてみる。そのままのっしのっしと相撲取りみたいに歩いてみた。とたんに周囲が笑い転げる。「おや、珍しいね、そんなディバイダーのような不細工な格好は死んでもできるか！と言っつていつも脚を伸ばしていたのに。」と三角定規が不思議がった。陽一はパニックになった。そうかコンパスは自分がかっこよくないとたまらないんだ、たしかにダサすぎる。コンパスにしたら死にたいくらい恥ずかしいに違いない。ここはオーバーアクションでいかになくちゃ。そう思うと、急につらくなって涙がこみ上げてきた。「アー俺はダサ、ダサコンパスなのか、ああ、コンパス失格じゃないか、オーイオーイオーイ、オーイオーイオーイ」としゃくりあげた。

三、涙の中の解放感

泣き疲れ我を忘るるばかりなり涙の中へと解き放たれむ

糊が慰めようとくつついてくる。陽一は気持ち悪いので避けながらなき続けていた。チヨークが言った。「ほっとけ、ほっとけ、コンパスの野郎は、泣くだけ泣いて、硬直した自我から解放されようとしているんだ。泣いて泣いて、泣きつかれてアイデンティティをかなぐり捨てたら、アイデンティティ不安からも解放されるんだろう。いつも無理してかっよくコンパスを演じていたから、その分だけ涙の中の解放感も大きいんだ。」

それにしても今までだと自分が上村陽一だという記憶が意識下に抑圧されていたのだが、今回は別らしい、そういえばコーヒーブレイクで上村陽一がふと我にかえることがあってもよいのではないかと、榊に強く要請していたので、早速聞き入れてくれたのかと思った。でもいつ記憶を抑えられるかも分からないなと思った。そういえば、筒井康隆の小説に『虚航船団』というのがあって、文房具が魍の星を攻撃し、ハルマゲドンみたいになるという傑作があるから読んでおくように、榊に言われていたことを思い出した。こんなことなら読んでおけばよかった。

四、文房具人間

ゴキブリが知性体へと進化するそれはありだが文具まで

筒井自身コンパスや糊やナンバリングなどの文房具を宇宙船の乗組員にして、鼯が高度な文明を築いている星にハルマゲドンを挑むという設定には惑いがある。鼯が猿に代わって高度に進化し、文明を築くという設定は生物学者に言わせれば、鼯では無理だというかもしれないが、猿でできないことが鳥にできないはずがないということで、手塚治虫は『鳥人大系』という名作を書いている。その最後にゴキブリが知性体に進化する可能性まで示唆している。

ところが文房具は生物ではない、生物でない文房具がどうして知性体に進化できるのか、そんなことはありえないではないか、「筒井、われ、気狂いさらしてんのちゃうけ」と河内のおっさんにもあきれ果てられたようだ。

作戦会議が始まる前に、上村陽一は思い切って叫んだ。「コンパスや糊がどうして、物を考えたり、感情をもったり、鼯をやっつける作戦会議ができるのですか。こんな荒唐無稽な話は、気が狂ってると思えません。」するとナンバリングが言った。「おやコンパス君、ついに自分の気が狂っていることを認めたね。そうなんだ、君は針の付け根がゆるんでいる。ときどき寝ているうちに締めなおしてあげているのだ

が、それがすぐにゆるんでしまうのだ。でも君は自分は完全な円を描いていると思っ込んでいる。」

五、どうやって文房具が話すのか

文房具目、口、頭脳の欠けたればいかで思ひて物を語るや

陽一は言い返した。「ナンバリングには言葉をしゃべる口もないし、物を見たり感じたり考えたりする機能もついていないはずだ。なのにどうしてそんなふうに話ができるのか変じゃないかって、そう言っているんだ。」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」ナンバリングは腹を抱えて笑った。「ナンバリングに口がないだと、コリヤ面白い、確かにナンバリングには口はないわな」輪ゴムは転げまわった「輪ゴムには足がない、手もない口もない鼻もない、目もない、それなのにどうしてこんなに話しているんだらう、確かに不思議だ。俺にも分からないな、永いこと宇宙船に乗っていると、俺も気が狂ったのかも知れない」と言っなり、自分でピンと張って、撥ねて飛び回った。

ホチキスは、自分のことは棚上げにして、巨大消しゴムを指差した。「さっきからずっと居眠りしている巨大消しゴムなんぞは、自分のことを天皇と思っ込んでいます。だから馬鹿

丁寧な敬語を使つて第三者を介して奏上してやらないとまるつきり仕事をしようとしなさい。そのかわり奏上の儀式を踏んでやると、血を流してでも力仕事をやってしまふ。」

三角定規がたしなめる。「ホチキスよ、そんなことを言つて、巨大消しゴムに聞こえたらまたトラブルのもとだぜ。お前は何かといつたら、他人を批評したり、難癖をつけてはぶん殴られて、故障しちまうんだから、しょつちゅう針がつまつたりして全くのトラブルメイカーなんだから、そうせずにおれないそういう性格もさうとうとち狂っているぜ」。

六、ノーマルがアブノーマル

漆黒の宇宙を旅する船の中ノーマルこそがアブノーマルかな

文鎮が立ち上がった。「こんな宇宙船に乗つて何年も何十年も何にもない宇宙空間を飛び続けているのだから、みんな多少なりとも狂っているさ、狂つていて正常。正常なのは狂つているのさ。」みんななるほどとうなずいた。「もっとも」と悟つたように文鎮は続けた。「どこの星に住んでいたら、その星自体が宇宙をさまよっていることに違いないんだ。だから宇宙船に乗らなくても、程度の差はあるにしても、宇宙船に乗っているのと同じで狂つていて正常、正常なのは狂つているのさ、ハ、ハ、ハ、ハ」と腹を抱えた。「全く違いね

え」とホチキスがガチガチ音を鳴らして、針を吐き出して、またトラぶつてしまった。

コンパスになつてゐる陽一はいたたまれない。「それにしても奇想天外すぎるよ。なぜ文房具たちが宇宙船にのつて黽をやつつけるんだ、それにこうして議論したり、トラぶつたり、とち狂つたりできるんだ。そんなのできつこないじゃないか。」

「馬鹿だなあ、奇想天外だから読者が喜ぶんだよ」画鋲がついに禁じ句を吐いた。役者がこれは芝居だと明かすようなものである。サインペンが言った。「そういえば、昔『美女と野獣』というミュージカルでは、家財道具が歌を歌つていたりしたな、あれは家来たちが魔法をかけられていたのだつたつけ」。画鋲は、おしゃべりだ。「これは筒井康隆という流行推理作家が書いた“純文学作品”なんだ。とうとう種が尽きて文房具を宇宙船の乗組員にしたら面白いだろうと考えたのさ」。輪ゴムは笑つた。「ハ、ハ、ハ、ハ。なんだそうかフィクションだったら輪ゴムが宇宙船を操縦してもいいのか。その筒井という作家こそ狂いまくつてるんじゃないか。」

七、人キャラ示すサイン

文房具身近にありしその故に、人キャラ示すサインならめや

「そりやあ読みが浅いな」文鎮がおもむろに言った。「筒井は我々を文房具だとしているが、文房具というのは実は人間のキャラクターを表す記号なんだ。たとえばワッフン。我輩のような文鎮はずっしり重みがあつて落ちついてるだろう、そういう重厚な性格の人間が宇宙船の乗組員になつていくということなんだ。」

「そりやあつまらんな」ナンバリングは落胆した表情になつた。「人間が宇宙船に乗つてたちのわるい魷の文明を滅ぼすのなら、ありきたりすぎるよ。文房具がこうやって意識を持つて、話をしたり泣き笑いをしたりして、最後に魷と壮絶な殺し合いを展開するから面白いのじゃないか」と反論した。

チヨークは情報通である。「実はこの『虚航船団』を書いてから、あまりの奇想天外ぶりに世間からあきれ果てられたのか、文房具が実は人間の性格を表す記号だという弁明を対談で語っている。それが『虚航船団の逆襲』という本に書いてあつたそうだ。『画仙紙は首をか上げた』それにしてもチヨークはどうして未来のことがわかるんだ。」するとチヨークは平然と言つた。「未来？どうして未来なんだ、筒井が書いたのは西暦二十世紀の昔だよ、今はそれから千年以上たつてゐるじゃないか。」そう言われればそうである。

八、自己意識ある文房具

アニミズム栄えし星は文具さえマイコンつけて心与えき

画鋏は、「それは読んでないな、俺はてつきり文房具に超ミニのコンピュータとか仕込んであつてね、実は文房具型のロボットだと思つていたんだ。」チヨークは苦笑した。「どうして文房具にそんな手の込んだことをしなくてはいけないんだ。」「俺の推理では、昔ある星ではあらゆる存在には魂が宿り、自我を持つべきだという汎神論的な考え方が流行したんだ。それで文房具にまで自己意識を持たせようということになり、スーパー・マイクロコンピュータ内臓の文房具が開発された。つまり自己意識あるロボット文房具だな。しかし別にそんなことをしても、文房具が勝手に事務をこなすだけで、たいしたメリットもない。それぞれ自己主張するのでスケジュールの調整もややこしくなる。それより元の普通の文房具の方がコスト面も考えるとはるかに効率的だ。それでロボット文房具たちはお払い箱になつたので、集団で無人だつた惑星に移住し、文房具星の文明を築いたのだ。」

九、ムービーが文房具に

分業で文具になりしムービーが世代重ねて形定まる

輪ゴムは別の推理を披露した。「生物の進化で考えます。不定形な動物ムービーがいてそれぞれの役割にふさわしい形姿をとりますが、役目が変わればその姿も変形するとします。やがて社会的分業が発達します。その生物は何千何万の姿ができるので、自らの身体であらゆる仕事をごこなせるのです。地球人だったら無機物を材料にした道具や機械を使って行った作業を、自らが道具や機械の部品の姿をとって作業や生産を行っていたのです。」

ところが年月がたつにつれて体型が次第に固定化し、遺伝するようになりました。文房具の仕事を担当していた者たちは文房具の姿のままになってしまったわけですね。そして文明の発達により彼らは知識の上では無機物を自分たちの体型のように変化させる事ができることを発見し、その方が技術的正確性、経済的合理性に優れていることに気付いたのです。文房具などはその最たるものでしたから彼らは用なしになります。そこで文房具たちは一緒に新しい星に植民して文房具星を造ったのです。」

船長赤鉛筆は感心して言った。「整備士画鋏さんも操縦士輪ゴムさんも、超エリート養成の一流大学をトップ合格の秀才でお見事な推理ですね。でも私が心配なのは、お二人とも大学院で整備理論や操縦理論を研究され、すごい画期的な論文を発表されて脚光を浴びられたのですが、そのまま宇宙飛行士に大抜擢されたので飛行経験が全くないわけですね。いざ

戦闘という場面で落ち着いて整備や操縦ができるかということですね。」

何故経験の浅い若手を抜擢したのかというと、二つの理由が考えられる。宇宙船の進化が急速に進んでいるので、最先端理論をもつてないと整備も操縦もできないということがまず第一の理由だ。もうひとつは宇宙船の旅は何十年という単位なので、途中で乗組員が死に絶えてしまう可能性がある。整備や操縦士が若くなければ帰還できないことも十分考えられるのだ。

それはともかく、頭でつかちの操縦士輪ゴムにもアイデンティティ不安がある。この不安は雲形正規でも画鋏でもあるのだが、いや規格品でない文房具なんてないから、どの文房具も大同小異なのだが、輪ゴムは、どれも同じ大きさ同じ形で全く違いがない。だから時々自分がだれだか、自分の意志がどうなのかも確信できない場合がある。特に輪ゴムは操縦士だから自分の意志が安全航行なのか逆噴射なのか分からないということでは、これほど物騒なことにもない。

コンパスは疑問を呈した。「しかし文房具星ほどの文明を築いている星ならば、渡航して文房具星を作った歴史的資料なども残っているはずですよ。ロボットか元不定形生物だったかも推理しなければならぬ」とも不思議な話です。」

画鋏は、「おいおい、もちろんそうなんだけれど、これはフィクションだから作家が書いてくれていると推理するしかないということなのさ、まだフィクションという現実がよく飲み込めていないんだな」と応えた。

十、人・文房具システム

文房具人と一つになりし故人の心は物の心が

船長赤鉛筆は考え込んでいった。「作家は要するにふだん身近にある文房具にそれぞれの人格類型を当てはめて、文房具を人間の記号にしたといっているわけだろう。わしなんかは、船長だからいちいち細かくチェックを入れなきゃならない、だから赤鉛筆なんだろうな。でもそういつてしまえばナンバーリングじゃないけれど、なあんだということではらけてしまう。ということは、文房具が意思や感情をもつて行動するという設定が、ハツとさせるものがあつたということだな。」

ナンバーリングは頷いた。「そうなんです、船長。人間はコンパスを使って円を描いていても、コンパスが描いたとは思わないで、自分が描いたつもりでいます。機械を使って製品を生産していても、機械が働いているということを確認しようとしません。文房具や機械があつてはじめてできてくることでも、あくまで主体としての人間なるものがあつて、その人

間から機械や文房具は締め出されているのです。でも本当はどうでしょう。機械や文房具を含めてはじめて人間として主体であり、物事を認識したり、感情を抱いたりできるのではないでしょうか。筒井はそこまで気づいていなかったけれど、作家の直感で文房具を人間に見立てたら面白いと思つたのは、そういう事情からと思うのですが。」

「そういえば榊周次先生が、機械や道具を含めた人間というのも考えるべきだと言つてましたね、ナンバーリングさん。」
「どうもナンバーリングを榊が演じているのではないかと陽一は睨んだのだ。陽一は元々、榊が人間でない機械や道具や環境的自然も含めて人間だと矛盾した表現をするのが納得いかなかった。機械も道具も人間なら、人間は何なんだ。榊は全く物事の定義や言葉の適用範囲を自分の都合で勝手気ままに変えてしまつてゐる。それではコミュニケーション（意思疎通）が成り立たなくなるじゃないかと反発していた。」

「つまりこういうことですか、ナンバーリングさん。機械や文房具を使って人間は物を生産したり、事務をしたり、製図を書いたり、作品を創作したりしている。それを人間は自分の体や頭脳や人格だけで行つてゐると思つてゐるが、事物も一緒にいる、考へているのだ。だから身体ではなく文房具が人格を担つてゐるように書いてもあながち間違つてゐるわけではないじゃないかと、こういうわけですね。しかし機械や文

房具にはそういうものを感じたり考えたりする機能はついてないじゃないですか。」

十一、マン・マシーンシステム

ドライバー車の思考にならぬならいくつあっても足りぬ命が

「もしドライバーが車の思考中枢にならなければ、いくつあっても命はたりないだろう。」突然車に話が飛んだ。コンパスははぐらかされたような気になった。「高度な機械と文房具を一緒に論じるのは飛躍ですよ。車と人間は別の存在です。車には思考中枢はないので、思考中枢を持っている人間が補完しているわけですね。考えているのは人間であって車ではないでしょう。」

「それじゃあ、頭脳が感じたり考えたりしているのか」とナンバリングは訊き返した。「だから頭脳だというのでしょ」陽一は応えた。「もちろん頭脳は身体の一部として機能してはじめて考えるのだけれど、中枢神経として身体のまとまりをとりながら、思考や感情を受け持っているわけです。」

「でもさ、頭の中を開けたって、そこに思考が見つかったり、感情が見つかったりするわけはないんだ。頭脳やそれを包む身体もなければ意志や感情を感じられないのだけれど、意識は身体だけじゃなくて空気や環境的自然があり、当の対

象があり、機械や道具との関係の中で生じているわけだ。だからこうも言えるだろう、目がバラを見ていることと、バラが目到自己を写していることは同じ事態の裏表みたいなものだ。」

「さっぱり分からないなあ。バラには自分を目に写すという意識はありませんよ。」ナンバリング腕組をして考えてからおもむろに言った。「だからバラだって人の身体だって、それだけで存在しているのではなくて、バラや自動車との関係で、その他さまざまな事物との関係で存在している。」陽一はすぐさま反論した。「そうでしょうか、バラや車がなくても人間は生きていきますよ。」ナンバリングは困った表情をしながら「バラのある人生とバラのない人生とは全く違うんだよ。車のある時代の人間と車のない時代の人間も全く違うようにね」と語った。

十二、数字の美学

十桁の数字が揃つと快感が揃って消えるくるめきの時

突然、ナンバリングは数字をぐるぐる回しながら、あたかも頭脳をフル回転させているかに見えた。コンパスになつている陽一は心配げに言った。「ナンバリングさん、そんなに難しく物事を考えて壊れてしまいませんか。」

「いや、失礼、今ね、揃ったんだ、揃うとね、快感が走って、ぐるぐる数字を回してしまっただよ。これはだれにも内緒だけれど、ナンバリングはいつも数を数えているんだ。3333333333と3の十桁のぞろ目だよ。感激したな。分かるかな数字が1234567890と順番に並んだり、ぞろ目になったりすると、美しいものだよ、その快感を味わうというのが私にとつて生きていくことの大きなご褒美なんだよ」と打ち明けた。

「そういえば数字が並ぶというのは気持ちいいものかもしれないですね。」三角定規が口を挟んだ。「数字だけでなく何でも順番にならんたり、同類のものが揃ったりすると楽しくなる。そして揃うとパツと消える。テトリスというゲームがあつて横並びになるとパツと消える、その消えるのがたまらない。揃ったままいつまでもいてはつまらない。もったいないくらいだけれど、揃うとすぐに消えてしまうから余計に美しい」。美意識の根つこのところに並んで消えるというものに対して快感を感じることが関係していると陽一も納得した。

ハサミもガチャガチャと口を開いた。「俺は、対照的な対になってるのが、向き合つて、そして合一するということとこるに痺れるね。対極的なものが出会つと、その違いを意識し、その違いにいたたまれなくなつて、合体によつて合一する。違いを克服したという征服感が性的絶頂感になるのかもしれない。ここからも美意識が生じるのだ。」

十三、 天空の殺戮者

**末梢の快に溺るる事なかれ、戦い忘れれば部隊滅びぬ凶悪な融滅
ほす聖戦は、己滅ぼす戦いならずや**

船長赤鉛筆はチエックに入った。「それにしてもナンバリングさん、あなたは戦闘指揮官ですよ。戦闘中に数を数えていて、ぞろ目になつて喜んで戦闘のことを忘れてしまつたら、部隊は全滅じゃないですか。オツカネエナーモー、バツテン、バツテン」とスットンキョーな声をあげた。

そして急に敵かな調子になつて語りだした。「我々には、血なまぐさい争いを繰り広げ、核兵器まで開発して相手を皆殺しにしようとする凶悪な融滅もを絶滅し、宇宙の平和を守るといふ神聖な任務があります。この責務を全うしてこそ、真の偉大な任務を達成したといふ快楽や美意識を味わうことができるのです。あまりに末梢的な感覚だけの快楽に囚われずには宇宙戦士としての資格を疑われますよ。」

エー、それじゃあ融滅たちは地球の人間たちと変わりないじゃないか、ということとは、宇宙連合の指令で地球にも文房具星などから天空の殺戮者たちが送り込まれ、絶滅戦争になつてしまふことになるということじゃないか。そしてそれが神聖な任務だということになる。陽一はなんと恐ろしい設定なのだ体が震えた。

これから俺たちは融を殺しまくらなければならぬ。地球だつて憎しみあつて殺しあつていようよ外の星からは見えるかもしれない。でもほとんどの人々は毎日の平和な暮らしに追われ、ささやかな幸福を守るために汲々としているのである。恐らく凶悪といわれる融たちだつて大同小異に違い。本当に皆殺しにすることが神聖な任務なのか、しかしこの連中は全く自分たちの任務の正当性については疑問を感じていないようだ。まるで確信をもつて原爆投下した米軍兵士たちのようだ。

十四、ネオヒューマニズム

環境や事物を含めて人間を捉え返すが新世紀かな

「それにしても文房具も意識があるかどうかという議論はどうなつたんだ」と議論好きの画鋲が話を戻そうとした。陽一は大量虐殺をしなければならぬことを思うとそれどころではないと思つたが、何しろ今回はフィクションと分かつているし、陽一がコンパスを演じているという自覚もあるので、ずいぶん気が楽だつた。フィクションと分かつているだけにこれからどんな風に融を殺しまくるのだろうと思つて何故か好奇心すらわく自分が怖くなつた。そうした余裕から文房具人間論の議論にも参加できる気さえしてきたのだ。やはり陽一であることを意識できるというのは随分迫真性がなくなるものだと感じた。

「文房具というと個々の文房具だけを捉えて、それに感覚器官や言語中枢が備わっているかを見、そこから文房具には意志や感情はないことになる。でも文房具が文房具なのは紙に文字や図表を書いたり、あれこれの事務作業をしているからだ。それぞれの文房具は几帳面なのや、冷静なのや、ホツトなのや激しいのがある。」こうナンバリングが説明していると、虫眼鏡が言った。「それは文房具を使う人間の性格なのじゃないですか？」

「杓子定規に考えるというように、文房具を使って作業することで、人間の意識や性格もそれにあつたものに形成されるのだ。たしかに文房具を身体や頭脳の働きと切り離して論じれば、物体にすぎないだろうが、それならばわざわざ作られない。文房具に合った意識が形成されているのだから、その意識は脳髓を使った文房具の意識と考えることで、文房具の意識だ」と議論も成り立つわけだ。」

輪ゴムが仲介に入ってきた。「コンパスさんは頭が考える、頭を持つているのは人間だから、文房具や機械が考えるなんてありえないという。しかしナンバリングさんは文房具といつたときすでにそれを使つている人間を代表するものとして文房具を捉えている。そのとき文房具と身体は切り離されていないんだ。もちろんコンパスさんのように身体と文房具が別物だということにこだわるのも間違ではないけれど、円

を描くときはコンパスの意識になって円を描くというように捉えることも大切だ。」

ナンバリングなだめるようにコンパスに言った。「無理に納得したり、投げ出したりしないほうがいいんだ。いろんな捉え方をするものだなということ、そのうち自分の考えがはつきりしてくるのを待てばいい。ただそのためにも自分とは対極的な意見にも耳を傾け、相手の理屈からも学ぶところがあるのではないかと学ぶ姿勢を失わなければ、自分の思想を深めていけるものなんだ。」

十五、暴走する欲望

凶悪な欲望に生く融こそ衝動止まらぬ人の姿が

コンパスは文房具人間論に対して、融こそ人間じゃないか、その融を絶滅することは、人間が人間を絶滅しようとしていることになるのではないかという根底的な疑問を投げかけた。「いかに融が凶悪でも、多くの融口を抱え、巨大な文明を誇っているのだから、それなりに秩序や治安を持ってきたということであり、何も絶滅する必要はないでしょう。」と融絶滅作戦に根本的な疑問を投げかけた。

「彼らは核兵器を開発し、その先制使用を宣言している。それに融口の大爆発で、彼らは他の星に移動する計画を進め

ている。彼らは戦闘になったら敵をむさぼり食うんだ。やがて各星が今後存亡の危機に経たされる恐れがあるんだ。」

「人が人を食らうというのは、殺人と共に太古からの人間の衝動ですね。さすがに文明圏ではタブーとして禁止し、刑罰によって指導しています。融は戦争となると抑圧が効かなくなるそうですが、それでも敵を食べている間は殺融ができません。大量虐殺が防げるわけです。地球の人間たちはそういう直接的な人食いはほとんどしなくなっただけ、互いの労働の成果を食べあっています。そして他人の働きに寄生し、他人から甘い汁を吸っている人もいるのです。その意味では大同小異でしょう。」

十六、文房具と融の合いの子

衝動と理性の断絶乗り越えてカタルシス生む夢の世界へ

人間は、一方で融すなわち衝動的な生であると共に、文房具すなわち用在でもあるのです。文房具は徹底したカースト的分業を営んでいます。人間も社会や集団や家族のために配慮し合い、互いの役割分担をこなして生きています。文房具すなわち用在の面から言いますと、分業の体系である文明は衝動的な生を抑制し、変形し、昇華して形成されたものです。ところがこれが固定し、慣習化してしまつて、創造性や発達のエネルギーを失い、活力を磨り減らすだけになってし

まったら、最早昇華機能を喪失してしまいます。いきどころのなくなつた生の衝動が破壊的な形で文明に作用するようになるわけです。

そこで文房具すなわち用在は自分たちの存在秩序を護るために虚航船団に乗つて「天空からの殺戮者」になり、生の衝動すなわち鼯たちの絶滅に乗り出したのです。

生の衝動すなわち鼯の面から言いますと、生の衝動が自然が直接もたらす恵みに満足できなくなつたために、より大きく生の衝動を充足させる文明を産み出しました。

文明は生の衝動を疎外しましたが、生の衝動をより大きく充足させる事ができない文明は、生の衝動をコントロールできなくなつて衰退します。

しかし文明は疎外された形態においてであれ、生の衝動を肥大させてしまいます。最後には生の衝動は自ら文化の形を取りながら文化を破壊し尽す自滅の道を辿ることになります。生の衝動はそれ自体は自分自身に対して客観視できません。自己の疎外態である文明の原理、配慮の体系によつて外から自己を徹底的に否定してもらわなければならないのです。

しかし文房具すなわち用在が生の衝動すなわち鼯を絶滅できる訳がありません。生の衝動なしには用在も存在できない

からです。生の衝動に新鮮なカタルシスをもたらすような常に創造的な文明は、文房具と鼯の壮絶なハルマゲドンを体験した末に、産み出される、文房具と鼯の抽象的な区別の止揚である、両者の息子の夢の中にしか築かれないのでしょうか。」

第七話 顔回の柩

一、顔回が死んだ！	78
二、任侠の源流	79
三、封建秩序と礼楽	79
四、敬遠された顔回	80
五、仁とは何か	81
六、一以貫之	82
七、清貧を愉しむ	83
八、王道を貫け	83
九、命の舞	84
十、克己復礼	86
十一、賢なればこそ	86
十二、生き写し	88

十三、御車で櫛を	89
十四、封建の礼	90
十五、徳を敬してこそ	91

第七話 顔回の柩

一、顔回が死んだ！

このひとの為にではなくてたがために慟哭するや回逝きし朝

顔回が死んだ！師の孔子役は榊周次である。「天、予(われ)を喪(ほろ)ぼせり。天、予(われ)を喪(ほろ)ぼせり。」榊は身を振(ふる)らせて、激しく泣いた。つまり慟哭したのだ。先日息子の鯉が死んだ時には号泣はしたが、慟哭まではしなかった。

お供をしていた二五歳の有若はこの孔子の姿を見て驚いた。何故なら孔子の教えでは肉親の情というのが大切で、他人への情はそれを押し広げていくべきものである。だから息子の鯉を慈しむように、弟子の顔回を慈しむべきである。そこには当然順列というものがある。息子の死以上に弟子の死を嘆き悲しむなど、孔子自身の教えからは考えられないものだ。

「先生、身悶えして激しく泣かれましたよ」と有若に言われて、孔子はこの人のために慟哭するのになかったら、誰のために慟哭するのか」と応えた。

孔子（前五五―前四七九）で、顔回（前五一四―前四八三）だ。つまり孔子が六八歳の時に顔回は三八歳の若さで死んでいる。若死にすることを特に夭折というのである。肉親の情を第一に考えるという孔子が他人の顔回到肉親以上の愛を示したというのには、それなりに理由がある。

二、任侠の源流

仁義切る任侠道に露ほどに儒家の魂継がれまほしを

顔回は孔子より三七歳若い。孔子の塾つまり孔門にとつて若手のホープである。一を聞いて十を知るといわれた秀才中の秀才である。孔門は、現在考えられるような知識を教え込む学塾ではない。六芸を教えていたのである。六芸とは周代に士の必修科目とされていたと言われる「禮・樂・射・御・書・數」である。「御」は乗馬、「書」は読み書きから文献研究まで、「數」は計算から会計までを意味する。」

特に祭礼での歌舞音曲の練習が大切だった。というのは、儒家は宮廷の儀式から一般家庭の冠婚葬祭まで一切を取り仕切る巫祝集団でもあったのだ。孔門は月謝をとっていない。

月謝という制度は近代的なもので、初めて月謝制度を導入したのが福沢諭吉の慶応義塾だったといわれている。入門時や年に何回か挨拶として食物や衣料などを束脩として収める慣習になっている。これが収入のすべてでは、塾の運営はできない。儀式や冠婚葬祭を周礼にのっとり行うことを請け負って、そこで振る舞いや謝礼を受けていたのだ。ようするに玉姫殿とか葬儀屋とかなんとかセレモニーや興行の請負を兼ねていたわけである。

興行を生業にしていた連中を「興行やくざ」というが、「やくざ」と儒家は決して無縁ではない。「やくざ」というのは蔑称で本来は「任侠」という。彼らは独特の挨拶を「仁義を切る」というが、仁義こそ儒家がもっとも大切に考える徳である。任侠の人々は自分たちの源流を孔子たち儒家の集団だったと考えているのである。しかし現代やくざが果たしてそのことを自覚しているかどうか、そのかけらも見られないようなのが残念だ。

三、封建秩序と礼楽

井田の法を守りて封建の秩序固めむ礼楽用いて

儒家の思想は、周代の古き良き封建制の秩序を回復し、社会を安定させることにある。周の王室があり、それによって各国に封じられた諸侯が、それぞれの国を治めていた。諸侯

には卿とよばれた重臣がいて、それぞれの国内の地域を治めていた。そしてその下に大夫や士がいて、いくつかの集落を治めていたのである。そして集落は八つの戸が単位であり、井田法に基づいて耕作していた。つまり田を九等分に区画し、各戸は一区画を耕して、その収穫を自分のものにする。そして残りの一区画は共同で耕作して、その収穫は領主に貢納するのである。この秩序が守られている限り天下は泰平だというのが儒家の捉え方である。

ところがこのような封建秩序を固定し、維持続けるのは大変難しい。それぞれの家には栄枯盛衰があつて、やがて周室は名前だけの存在になつていた。諸侯は自分の領国を勢力圏と考え、独立国の王のようになってしまふ。とはいえ諸侯も勢力が衰えた者が多い、有力な重臣である卿に実権が握られていたのだ。また卿の権力も大夫や士の中から成り上がった者達に脅かされていたのである。こういう傾向を下剋上と呼ぶ。成上がり者達は、周礼を軽んじ、古くからの身分秩序を無視して、分不相応な儀式や祭礼を行い、権勢を誇示しようとした。これではことを実力で決しようとして争乱の世の中になつていくのは必定である。

そこで儒家たちは正しい礼を復活させ、古い身分秩序に戻して社会の安定を取り戻そうと考えたのである。それで彼らは既に衰退していた周の時代の礼楽を復興させる文化運動に

取り組んでいたのである。だから孔丘は巫祝と呼ばれた祭礼を行う集団出身であつたと推測されている。

四、敬遠された顔回

義に篤き清廉の士を用うれば君主いかでか羽をのばさむ

孔子たちの文化運動は周の王室を尊んで、諸侯たちを纏め上げ、北方の騎馬民族からの脅威に備えようとする有力諸侯の意向にも沿つていた。それで孔子たちは六芸に秀でた人材を養成して諸侯の家臣に取り立てさせようとしたのである。

ところが儒家を登用するについては、反発が強い。諸侯は成上がつてくる卿や大夫や士を牽制するのに儒家を利用するのだが、当然新興勢力は儒家を排斥しようとして、紛争が起りがちである。それに儒家は礼に厳しいから仁や義を重んじない諸侯の政治には批判的であるし、礼楽をきちんとすればかえつて出費がかさんでしまふ。

顔回のような秀才はかえつて敬遠される。顔回は非常に義や礼を重んじるので、彼を登用した諸侯はわがままかつてな政治ができなくなつてしまふ。権力者は必ずしも人民のために政治をしようとは思っていない。自らの権力の保持と強大化を狙っているものであり、人民の幸福のために政治をすべきだという顔回とうまくいくはずがないのだ。だからいつまで

たつてもどこからも顔回到に宰相になって欲しいというお呼びはかからないのだ。

もちろん師の孔子も諸侯から敬遠されてしまう。故国の魯国で大司寇にまで出世し、政治の実権を握って、重臣たちを抑えようとしたが、逆に魯国から追放されてしまった。それから各地を放浪するが、各国とも孔子の話は聞いても登用しようとはしなかつたのである。

五、仁とは何か

人愛すことが仁だと言われても、愛の意味知る人はいずくに知らざるを教ふがよき師にあらざりき知りたることを教ふにいかず

硬い話ばかりで、お待たせしました。いよいよ上村陽一君の顔回の登場である。総白髪顔面の皺は深く、五十歳過ぎに見える。苦渋の表情での登場だ。「先生、お伺いしたいことがあります。一体仁とは何でしょうか。」榊は唐突に訊かれたので訊き間違えてしまった。「ジカ、あれは辛いな。痛くて歩くのさえままならないし、便所では死ぬほど苦しむものだ。」それは痔でしょう。私が伺っているのは人倫に二と書いて仁です。先生がいつも一番大切だとおっしゃってられるあの仁です。」

「何をおっしゃる兎さん。そんなことあなたが一番ご存知でしょう。私は他の弟子たちにどのように仁を教えていますか、思い出してみてください。」「樊遲さんが仁は何かと問われて、先生は人を愛することだと言われましたね。」「彼は本当に優しい人だからね。人のために尽くして、それで喜んでもらえたらすぐく幸せそうに微笑むじゃないか、だから人を愛することだと言ったら、わが意を得たりとばかり得意げにしていたじゃないか。」

「仲弓さんには『人に会うときは大切な賓客に会うようにし、人民を使うときには大切な祭りをを行うかのようにし、自分の望まないことは、人に仕向けないようにしなさい、そうすれば国に居ても怨まれぬし、家に居ても怨まれぬ』と具体的に説かれましたね。」「確かに仁とは人を愛することではないのだが、それはどういうことなのか、漠然として分からない人にはこうすることが人を愛するということなのだと説明してあげる必要がある。その際はその人がどんな仕事をしています、その際どういう気配りが大切なのかを説明すると、納得してもらえるのだ。」

「そのおかげでしょうか、仲弓さんは季孫氏という魯の実力者の家に取り立てられました。そしてそこで信頼を集めておられるようです。」「いやとんでもない。私が教えてあげたから、そうできるようになったのではありませんよ。元々仲弓さんはよく気配りが効く人で、いつも相手をおろそかに

していないか、どうすれば相手に嫌がられないで、明るい気持ちにさせることができるかに心をくだいている人だから、それで私の言葉が気に入ってくれただけなのだよ。」陽一はなるほど、よい先生というのは、相手の知らないことを教える先生ではなくて、相手が一番よく知っていて、一番大切だと思っていることを確認させてあげる先生なのだ、これはすごいことを教わったと感心した。

「先生、なるほど、そうですか。相手の知らないことを教えても、何を難しいわけの分からないことを言う先生だと敬遠されてしまいます。それに対して、相手が常々考えていることをよく観察されて相手の身になって考え、相手が一番納得できることを言っておけると、この先生のおっしゃることはよく分かる。この先生は一番すばらしい先生だということになるのですね。」孔子を扮している榊は満面の笑みをたたえてうなずいた。「そうなんだ、さすが顔回君は一を聞いて十を知る逸材だね。だから教師こそ、生徒の身に成って考え、生徒から学ばなければならぬということなんだよ。」

六、一以貫之

吾道はただ一筋に貫きぬ篤きまじりぬ思いやりのみ

「ですから真心とおもいやりが大切だということですね。曾参君が大先生の道は結局忠恕に帰着すると少年たちに教えて

いました。」「そういえば曾参に、私の道は一つのことを貫いてきたんだといったら、そうでしょう、そうでしょうとならずにいたな。彼ぐらいになると何も言わなくても分かりあえるんだよ。」「まったく曾参君ほど誠実な人はこの世にいませんね、先生を除いては。」

「何とおっしゃる兎さん。私などはまだまだ欲の塊で、心に悶々としたものを抱えているので、人に誠実にしようとしてもついおもいやる余裕を失っている自分に気づいて、余計に落ち込んでしまうことがある。曾参の爪の垢でも煎じて飲みたいぐらいだよ。」

なんと孔子ともあるう大聖人が自らの心の弱さに自己嫌悪に陥り、もがき苦しんでいるとは、そんなことがあるだろうか、顔回は思わず耳を疑った。「そんなご謙遜でしょう。先生にそんな悩みがあるはずがありません。」

「ハ、ハ、ハ、ハ。それじゃあ、孔門でもっとも秀才だと尊敬を集めている顔回君は何の悩みもないのかね。」陽一は、顔回の心の奥底の苦悩を見抜いている孔子の鋭くしかも優しい眼光にたじろいだ。そして「それは……」とつぶやいただけで何も言えなくなった。

七、清貧を愉しむ

貧しさも楽しみのおち回ならば道なき時に富たるは羞し

しばらく沈黙してから、陽一は自嘲気味に口を開いた。「先生はこうおっしゃっておられるのでしよう。『えらいもんだなあ回は。一碗の飯に一碗の汁で、むさ苦しい路地裏のあばらや住んでおる。普通の人なら貧乏に堪えられず、愚痴をこぼす所であるうが、回は愚痴一つ云わず楽しそうに暮らしている。大したもんだ回は』と。そんな風に言われていると弱音は吐けませんからね。」

「それはすまなかつた。たまには弱音を吐いてくれてもいいんだよ。貧乏生活でガリガリにやせて、弱冠二十歳ですっかり白髪に覆われていた。病気になるかど本心に心配だよ。もっと栄養になるものを食べないと、我が家で食事をしなくてくれればいいのに、遠慮していることをきかないからね。」

八、王道を貫け

企みで国を奪いてその後徳で治めるそれも不可なり

「貧乏はそれほど苦しいことはありません。それよりせつかく先生から大切な学問を学んでいながら、それを思う存分活用することができないのが、なんとしても口惜しいのです。一体どうすれば先生の素晴らしい学問を活かすことができるのか、それで本当は笑顔の裏では悶々としているのです。」陽一は感極まって涙が溢れそうになるのをじっとこらえていた。こんな時は声を上げて泣くべきなのか、じっと涙をこらえるべきなのか、泣くのはやはり不様な気がした。

「人に知られないからと言って慍みごとを言わない。これこそ君子じゃないか」と私は常々言っているだろう。それはもちろん正しいんだが、やはり自分を存分に発揮して、苦しんでいる民を救い、よい国づくりをしたいじゃないか、それができないのは何としても口惜しい、その思いは私とて同じことだよ。だから私もあせって、言っていることはさかさまの随分恥ずかしいことをしてきたじゃないか。

しかしね、やはり少々冒険を犯したり、道にはずれても権力を握って、それから徳を発揮しようとしても決してうまくいかないということだ。

しつかり徳を守り、決して礼に外れたことをしない、結局それが一番正しい生き方なのだ。小賢しい企みで権力を奪つても、悪だくみにかけては相手の方が我々より勝っているの

だから、結局陰謀でこちらが権力から追われることになるのだ。」

「それはよく心得ているつもりなのですが、しかし、学問という民衆のための宝を身につけたまま、このまま立ち枯れていくのかと思うといたたまれないものです。」

九、命の舞

時待たず狼煙をあぐる」とよしも命の舞に哀しみ燃やれむ

「とんでもない、君は立ち枯れてなどいない。そんな悪あがきをするよりも古の麗しい舞を舞うことの方がはるかに大切なのだよ。そくだ久しぶりに、舞の稽古をつけてあげよう、私の笛にあわせて舞ってみてくれないか。」

陽一は舞など舞ったことがないから大いに戸惑った。何しろ舞と踊りの区別も知らない。舞なら上半身を動かさないことになっているらしい。何しろ中学校で体育祭でやったヨサコイしか踊れないので、若者の乗りで元気いっぱいヨサコイを踊った。

「古の商の都で収穫の秋に大地の神に捧げた命の舞だ。見事じゃないか。全く礼にかなっている。」神はご満悦の様子だった。「回君は実に楽しそうに踊っているね。」

「はい、この舞を舞っているときには何もかも忘れて、体の芯から燃えてきます。」パチパチパチ、拍手をしてから孔子は言った、「登用されても、君主に気に入られようとして、仁になかった思いやりの政治をおろそかにしてはならない。礼にあらざれば見るなかれ、聞くなかれ、言うなかれだ。たとえ登用されなくても、礼に適った正しい舞を舞っている限り、そこに世界の中心があり、そこを中心に歴史は動いているのだ。」本物の願回だとわが意を得たりかもしれぬが、陽一にはよく飲みもこめない。

「礼樂を整えることが政治の基本だと我々は説いてきた。人間も生き物だから、欲望を充足させて生きている。獣たちは本能の命じるままに行動すれば、それで自然のバランスが取れて他の生き物や、同類ともうまく共存できるようになっている。ところが人間だけは、欲望が限りなく肥大するので、欲望の充足の仕方に型をはめて自然や同類とのバランスを保てるようにする必要がある。だから法や礼というのは、決して欲望を否定するのではなくて、充足の仕方を伝統を基準に良い形に保とうとするものなのだ。どうせ欲望を充足させるのならばできるだけ楽しく、満足できるものにしたほうが良い。そこで音楽に合わせ、舞を舞うことによって神々や人々との対話にすら、最も楽しくて最も美しい形を追求しているのだ。」

「としますと、政治というものは民衆が楽しく舞を舞い、歌を歌えるように、日々の生活の楽しい過ごし方を教え込むことなのですか。」

「それは近い。ただそういう法や礼はこちらが勝手に制定できるものではないだろう。伝統を掘り起こし、今にのみがえらせるべきものだ。それは民衆の中に埋もれている。だからこちらから一方的に教え込むのではなくて、民衆に教わることも大切なだよ。」

「でも礼樂にはかり嵌ってしまいますと、現実の政治の課題を見落としてしまいませんか。」孔子は苦笑しながらうなずいた。

「何事も程度を考えなくてはならないからね。礼樂が大切だといって、それに精力や財力を注ぎすぎると、財政を破綻させることにもなりかねない。礼樂は身分によってどうするのが決まっているから、礼樂をきちんと整えれば、身分がはつきりして世の中が安定するのだ。」

そして何事も礼樂のように楽しくバランスを考えて、美しく行うことが大切だと分かる。だから今こうして顔回が美しく、元気に楽しく踊ったということが、すべての人々にとつて、もちろんん政治を行う上にも大切なお手本となっているのだ。」

「つまり今の世の中は乱れていて、政治に首を突っ込むと必ず、陰謀にはめられたり、悪に染まったりしなければならぬので、正しい思想と正しい礼樂を守り、それを伝えることの方が意義があるのだということですね。」

取り立てられて大きな屋敷に住み、礼服を身にまとい、ご馳走をたらふく食べているよりも、陋巷にいて破れた小屋に住み、つぎはぎだらけの服を着て、粗食をいただいているほうがはるかに素晴らしい生き方だということですね。」

「そうなんだ、顔回よ、誤解してはいけないよ。宰相になつたから偉い、天下を取つたから偉いわけでは決してないのだ。また人民を救うのは、宰相になつたり、天子になることによつてではない。それなら過去の宰相や天子が果たしてどれだけ人民を救ってきたか、大部分の連中は威張り散らして、自分の権勢を強め、私欲のために人民を苦しめてきたのではなかったか。」

そんな連中より、われわれの方が本来の政治のあり方を正しい礼樂を守り伝えることで示し、それで未来の人類全体を救っていると伝えるのだ。そう思つて舞を舞い、音曲を奏で道を説きなさい。そうすれば我々の一つ一つの手の上げ下ろし、一つ一つの言葉が黄金に輝くのだよ。」

十、克己復礼

背を伸ばし、まことの道を一筋に生きることを王道ならすや

「では礼に適つてさえいれば、背筋を伸ばして歩いたり、花を美しく飾ったり、字を力強く書いても、おいしく梅干を作つても、人類を救うということになりませんか。」榊はニコニコ笑つて答えた。

「全くその通りなんだよ。私が仁だと言つてるのも、特別なことじゃない、真心と思いやりの気持ちを持たないように言つていただけだ。だから一人ひとりの民が日々これを行っている。その積み重ねが素晴らしい世の中を作るのだ。」

「私たちが特別に偉いわけではない。ただ我々はそれを政治や道徳の原理として住みよい社会を作ろうと唱えているだけなのだ。だからこそ我々の考えはやがてみんなに受け入れられて、中国で数千年の間支配するようになり、我々の名も語り継がれることになるだろう。」

「それじゃあ悶々としなくて、この清貧の陋巷での生活を楽しみ、礼樂のお稽古に励んでいけば、それが先生から学んだ学問を十分活かしていることになるのですね。しかしそんな慰めを言われても、胸に学問を収めたままでは、この空しさは張り裂けんばかりです。」

「回さん、あなたはこれまでも胸に激しい苦悩を抱きながら、そんなことを全く感じさせないように、まるで清貧を楽しんでいるように見えていた。つまりずっと己のわがままを抑えて礼にかえてきたのだよ。『克己復礼』だ。立派に克己復礼をやつてこられた。そしてこれからもそれを続ければよいのだ。もっとも学問が深まれば深まるほど、身を立たたいという気持ち、野望が膨らんできて克己復礼は難しくなるものだが。」

「回、あなたの克己復礼は、はっさん熊さんが放蕩ばかりしていたのが、嫁さんをもらつて心を入れ替え、急に働き者になつたというような克己復礼とはわけが違う。そんなことでだれも仁に目覚めたりはしない。ところが本当にあなたのレベルで克己復礼ができたなら、世間の人はみんな感心して、天下が仁になつくだろう。」

十一、賢なればこそ

顔淵は陋巷のまま骸なり、賢なればこそ厚く葬る

顔淵が死んだ。門人達は身分は賤しいけれど人物は大変立派だったので、それに相応しく顔淵を厚葬したいと思った。特に顔回の指導を受けた曾参たち若手が孔子にお願いにつめかけた。曾参は若くて美しい顔をしていた。三輪智子が曾参を演じている。榊周次は女性を登場させる余地がないので、

三輪智子を遊ばしておくわけにもいかず、曾参役に起用したのである。

「孔先生、私たちは顔淵先生を尊敬しております。彼は孔先生に次いでこの孔門の看板を背負っておられました。人物としてはどこの国の宰相に取り立てられても、不思議はないほど立派なお人柄でした。君子の徳は十分に備えておられました。でも残念なことに時代が悪く、清廉潔癖なお人柄ゆえに用いられることはありませんでした。でも顔淵先生はすこしも恨み言を言わないで清貧を楽しんでこられたのです。」

孔先生のお教えでは尊い志をもつ賢者を尊ぶべきだということ。我々が先生を厚く葬って、世に入れられなかった顔淵先生の遺徳をたたえなければ、とてもやるせなくてたまりません。「智子は大粒の涙を流してヒューヒューとしゃっくりあげて嗚咽しました。」

孔子を演じている榊周次は、智子のオーバーアクションには手を焼いた。「曾参君、君の顔回を慕う気持ちは良く分かる。顔回こそ孔門を立派に引き継いでくれると囑望していたのだから、厚く葬りたいと言う気持ちは私もだれにも負けないつもりだ。」

しかし、彼には礼にあらざれば見るな、言うな、行つなと常々人の道を説いてきたのだ。儒家の考えは封建的な身分秩

序をしつかりしたものにして、世の乱れをなくそうという考えなのだ。その儒家が身分に合わない葬儀をするのは、自らの言ってきたことに反することで、世間は儒家のいうことを信用しなくなる。それでは孔門の屋台骨を背負ってきた顔回自身の考えにも反することだ。

顔回は陋巷に生き、陋巷に死んだ。だからそれにふさわしく薄葬で葬ろう。顔回は決して厚く葬られるために清く正しく生きてきたのではない。厚く葬られても決して喜びはしない。自ら薄く葬られる生き方を選んだのだから、彼の意思を尊重すべきなのだ。」

いつもは孔子に説明されると、すぐに納得してしまう曾参だったが、この日はかりは目を腫らし、オイオイと声を出し、鼻水までたらして泣くものだから、簡単には引き下がらない。「薄葬にすると世間はかえって孔門を信用しなくなると思います。顔淵先生ほどの賢者で、孔門に巨大な貢献をしているのに、その恩義に報いようとしません。ただ出身の階層だけで人間の扱いを決めていると。顔淵先生の孔門での活躍や貢献からすれば、卿や大夫として申わないとつりあいが取れませんが。あくまで孔門の葬儀なので、身分や地位をいうなら、孔門でのそれにふさわしいものにすべきでしょう。」

「孔門としておおいに顔回の葬儀を盛り上げるのは大賛成だ。しかし孔門が世間の身分秩序と違うものを独自に採用し

てしまうと、孔門は国家とは別の国家を立ち上げたことになつて、謀反を企てる団体だと疑われることになる。それこそ魯国や諸侯をみんな敵に回してしまふことになる。それはとてもできないし、顔回の意志に反するものだ。」

「それは顔淵先生がいずれかの諸侯に出仕されていけばの話です。出仕されていれば当然宰相になられていたでしょうから、櫛のついた厚葬になつていた筈です。それだけの人物だつたことを示さなければ、顔淵先生に対する私たちの想いが世間に伝わりません。そのことはとても哀しいこととして、とても耐えられないのです。」曾参に付き従っている十代の弟子たちが、まるで真夏の蝉のように泣き続けた。問題が問題だけに孔子としても怒鳴り散らして追い払うわけにもいかず、途方にくれていた。

十二、生き写し

顔回が怨みの霊となりたるや生き写しなる顔路現る

そこに顔回の父顔路が尋ねてきた。孔子は顔路と良く話し合うからといって、曾参たちを帰らせたのである。顔路は顔回をそのまま老けさせた感じだが、顔回が貧窮していて弱冠廿歳で総白髪、相当老けていただけにあまり変わらない印象である。だから当然顔回の幽霊のような迫力があつただろう。上村陽一が再登場である。

「孔先生、お久しぶりでございます。この度は志半ばで息子顔回は逝つてしまい、先生にご期待いただきながら、もう役に立たなくなつてしまいました。本当に申し訳ございません。本人もさぞ無念だつたことだろうと存じます。」

「え、顔路？本当に顔路なのか？本当は顔回の怨霊でわしに恨み言を言いに来たのではないのか？まるで顔回到生き写しではないか。」孔子になつていいる榊周次は少々怯えているよう、こころなしか体が小刻みに震えている。

「何をおっしゃいます。回は先生からいつも暖かいお言葉を戴き、大変幸せだと申しておりました。その回には先生に対するご恩返しができないことが最大の心残りでしたしょう。ほんのかけらほどの恨み言があろうとは、私には信じられません。」

「回、回、お前には本当にすまないと思つている。」孔子はまだ本人だと思つている。「お前が孔門に献身的に尽くしてきてくれたおかげで、孔門のこの繁栄があるのだ。そのお前が、あばら家に住み、ボロを身にまとひ、栄養もろくに摂らないで、やせ細り白髪で骨身を削つていいるというのに、私はどうだ。孔門の代表といふことで、立派な屋敷に住み、家財道具から衣裳、毎日の食材にいたるまで、諸侯や豪商をはじめめとするさまざまな人々から贈答の品が毎日届いていいる。おかげで、マンションに五百着ほどの着替えを揃え、お出かけ

も十台以上の外車を乗り回している。そして毎日の食事も宮廷顔負けのご馳走三昧だ。」

「ストップ、ストップ」顔路は、慌てて止めた。「今は中国の春秋の時代ですよ、マンションも外車もありません。それに孔門の台所もなかなか厳しく、おいしい肉をご馳走になつたときなど先生は三月もその味を忘れられないとおっしゃつておられた。着ている物だつてたくさん接ぎがあたつていゝるそうじゃありませんか。」

「本当に顔路さんなのですわ。」やつと少し安堵したようだ。「それにしても回さんは、風邪をこじらせて肺炎で死んだそうだね。二三日寝込んでいると聞いたが、それがあつてなく亡くなつただろう。よほど栄養状態が悪かつたんだよ。」

「何しろ一人暮らしでしょう。嫁を取らしておくべきだったのですが、まだ定職もないのに結婚などできませんといつて、独身で押し通しましたからね。」

「何とか定職はないものかと思つて、諸侯には顔回の存在をアピールしてきたんだが、引き合いがあるのは、新入社員扱いみたいな低い身分しかないのだ。宰相や長官といった役職の話は顔回には一切こなかつたな。」

孔門とすれば我が門第一の秀才を二等兵扱いさせるようなまねはできないから、撥ね付けてきた。こちらの見栄かもしれないが。回は一番下からでもガンバツて上にいくからという意向だつたらしいけれど。それに願回の頑張りに孔門が支えられていたこともあり、手放したくなかつた気持ちもあつて、条件の悪いのを理由に撥ね付けてきたのだ。」

十三、御車で櫛を

師を慕い命ささげし回のためせめて御車棺を抱かば

「先生、そんなことは全部回は承知の上で、先生に見込まれていることを感謝していたのですから、少しも恨みになんか思つていませんよ。それより私は、回が先生を命がけで慕いし、すべてを孔門に捧げたことを先生に認めていただき、その労をねぎらつてやつていただきたいだけなのです。」孔子はホツとした表情になつた。「そうですね、そうですね、さすがは顔回の父だけのことはある。顔路さんも生活に追われて、学問が中途半端になつてしまつたけれど、大切な人の道は立派に貫いておいでだ。誠心誠意で申わせていただきますよ。」

「ありがとうございます。そのお言葉がただで、回は思い残す事はないでしょう。つきましては先生のお体の一部になつていゝるお車を頂戴し、それで回の棺桶を囲む櫛

を作らせてください。そうすれば回は先生に抱かれて眠ることができません。回はすべてを先生に捧げたのですから、先生は回にお車を与えてやってください。」

突如、孔子を演じている榊の表情は暗くなり、不機嫌になった。そして不安のあまりおどおどとした口調で語りだした。「そ、それは、それはできません。私はこれでも大夫の位を魯公からいただいております。大夫が行列で歩くとは礼に反するのです。身分秩序を守るとというのが儒家の根本の立場ですから、車を手放すわけには参りません。」

「先生、代わりのお車は回を慕っている孔門の若いお弟子さんたちに作って戴いております。ずっと立派なものが出来上がると存じます。どうぞご安心下さい。」孔子は追い詰められたような表情になった。「そ、そ、それは、それは困ります。あの車は大司寇になったときに魯公から戴いたものなのです。それを弟子の棺桶を包む槨になぞできません。」

顔路はひざまずき、頭を地面にこすりつけて哀願した。「先生、お願いでございます。これだけは聞き入れてください。孔門に嫌がる息子を無理やり入門させたのは、私です。長くは続くまいと思っていました。が、いつしかすっかり溶け込み、本気で先生に心酔し、だれよりも誠を貫き、礼を尊び、己に敵しい人間になりました。我が家の困窮ぶりを知っているだけに、私からの援助は一切受け取ってくれません。二十歳の

息子が総白髪になったのを見て、どの親が胸を締め付けられない筈がありません。家に帰って農業に励むように薦めましたが、志は曲げられない、先生の恩に報いるのだといって聞かなかつたのでございます。そして拳句の果てが野垂れ死に同然の始末です。私は息子のために何一つしてやれなかつた。どうかこの親を哀れだと思われるなら、息子の志を賞でてお車で包んでやってください。せめて最後の時だけでもお前は立派な人間だと槨をつけてやりたいのです。何もしてやれなかつた、野垂れ死にするのを見殺しにしてしまった、この哀れな父親のためにお願いですから、お車を下さい。孔先生、先生の仁をお示し下さい。」

十四、封建の礼

封建の礼を尊ぶ儒家なれば身分忘れて槨で囲えず

「顔路さん、あなたも父親なら、私も父親だ。息子の鯉が死んだとき、大夫の子だからといって槨はつけなかつた。息子のために車を壊して歩いたりはしなかつた。儒家の礼では、まず家族への愛を優先しなければならぬ。息子にもしなかつたことを他人の息子にするわけにはいかない。そんなことをすると家族愛を根本に置く儒教道徳が崩れてしまう。薄情なようだが、私も辛いのだ。回さんを野垂れ死にさせた責任は私にあるのだからね。この罪を背負っていくしかないのだよ。本当にすまなかつた。」孔子はひざまずいて謝った。

「先生、どうしてそんなに教義に拘られるのですか。鯉さんは、鯉さん。回は回です。それぞれ一回切りの人生です。鯉さんには柳は必要なかったかもしれない、それは父親として先生が愛情をこめて葬られたからそれでよかったですかもしれない。回の場合はどうでしょう。この凄まじい赤貧の人生に対してただ親や師が偉かったと褒めてやるだけで収まるのでしょうか。」

「どうして柳などに拘るのだ。柳がなくなっただって、彼の偉大さは変わらない。礼に背いてカツコいや柳をつけても、礼に生きた顔回は喜びはしない、汚された気持ちになるだけだ。」顔路は少し語調を荒げて語りだした。「それじゃあ、こういうことですか、卑しい身分に生まれた人間は、いくら努力をし、尊敬される人間になっても、卑しい人間として柳なしで葬るのが正しい礼で、尊い身分に生まれた人間は、どんなに悪辣なことをしても、尊い人として柳付で葬るのが正しい礼だということですか。」

柳は両手を広げあきらめのポーズをとった。「身分というのはそういうものだろう。その身分制度があるから社会が安定し、平和な暮らしができるのだ、だからそういう割り切れない矛盾があっても、個人的な感情を押し殺して守ることが正しいんだよ。その分愛情の深さで補えばいいのだ。」

「先生は常々こう教えてこられたでしょう。君主たる資格

のある人格が君子で、君子が君主になるべきだと、君主たる資格のない小人が君主になるべきではないと。ところが現実には私利私欲しか考えない小人が君主になって、人民を苦しめている、こういう世の中は改めるべきだ、君子に成れない君主は真の君主ではなく、君子が君主になつてはじめて真の君主だと。だから賢人を登用し、身分の入れ替えが必要だということですよ。だから回のような宰相や君主たるにふさわしい人物を柳なしで葬るのは賢者に対する冒瀆ですよ、先生にこんなことは言うの不適の極みですが、私の信じる儒教道徳から見ても納得いきません。」

これは理屈で説得できる相手ではないと孔子も観念した。「父親の君がそこまで云うのなら、喪主の意向を尊重しよう。私の車で柳を作りなさい。ただそんなことをしても気休めに過ぎないし、回も喜ばないとだけは言っておこう。」

十五、徳を敬してこそ

封建の礼を尚ぶ儒家なれど徳を敬さず礼立ちたるや

さて柳をつけるかつけないか、そんなことは単なるコツコツけだとか笑わないで欲しい。身分によってではなく、徳によって人間の尊さを主張していたはずの孔子たちの考え方が、封建秩序の維持のために身分に基づく礼に固執した。そのために徳があるのに卑しい身分で死んだ顔回の柩に柳をつける

かつけないかで、大論争になったのである。このことが人間論にどんな関係があるのか？それは、孔子のあの様子を「ごらんさい。」

「回や回や、柳が邪魔になっておまえの顔が近くに見れないじゃないか、私がお前のそばにいてもつと近くで見たいやりたいのに、私のせいじゃないよ。若い連中が柳などつけて体裁ばかり拘るものだから。柳をつけても人間としてお前が偉くなるわけではない。つげなくても人間としての偉さは私が一番良く知っている。形は薄葬だが、心の中では厚く厚く葬っているのだから分かっておくれ。」

孔子の態度とは裏腹に、孔門としては顔回を清貧に耐えて礼を貫いた高潔な仁者として、特に手厚く葬ったということで、世間の評価はあがった。曾参は少年たちにこう語った。

「儒家は封建の制を尊重し、身分に伴う礼を尊重すべきです。しかしそれだけで人間の価値を決めてしまうのは、心に適いません。特に顔淵先生のような偉大な人格はだれもが崇拜し、敬意を表して当然でしょう。そういう場合に特別に扱うということも礼に適ったことであり、そうしてこそ、封建の礼を尊重する美風も保たれるのです。ですから人間を制度や秩序に組み込まれたものとして捉えると共に、その人間の徳から人格を捉えるということも忘れてはならないのです。これが儒家の人間論と言えるでしょう。」

第八話 エラスムス『痴愚神礼讃』のパロディ

目次

一、舞台裏にて	93
二、吉本演芸場にて	94
三、馬鹿喜劇	95
四、エラスムスと掛け合い	96
五、立派なモリア	97
六、侵略被害者の霊を先ず祀れ	98
七、野の花を見よ	99
八、増税で財政赤字は減らない	100
九、痴愚の現われとしての理性	101
十、素晴らしきかな痴愚	103
十一、馬鹿女の厚化粧	104
十二、馬鹿の一つ覚え	104
十三、幻想とつねぼれが大事	104
十四、老いらくの恋	105
十五、痴愚宗教としてのキリスト教	106

第八話 エラスムス『痴愚神礼讃』のパロディ

一、舞台裏にて

はじめての主役ふられて張り切るも痴愚女神ではちょっと惨めか

榊周次は三輪智子を例の休憩室に連れて行った。「三輪さん、今度はひとつ主役を引き受けてもらおうと思ってるね。」智子はうれしそうに「やっ」と回ってきた。でも電脳のバーチャルリアリティだから、突然成り切ってしまうというのじやなかったかしら。「それはそうなのだけれど、今度の役はある程度自分の役柄を理解してもらっていたほうがいいから。」

「女性が主役というのだから、クレオパトラとか楊貴妃とか小野小町とかでしょう。『花の色はうつりにけりないたずらに吾が身世に経るながめせしまに』なんて人生を感じさせ、人間論としてもいいですね。」

「いや、今度のは美女ものじゃないんだ。」「それじゃあ則天武后とか西太后など恐ろしい役柄だったり、そういう役は私みたいな清純な少女ではとてもこなせません。」「いや

歴史物でもないんだ。今度は君に女神を演じてもらおうと思ってるね。」

少し恥ずかしそうな顔をして智子は言った。「あら先生、私ってそんなに神秘的な美しさで先生を惹きつけているのかしら？」

榊は首をふった。「もちろん、そうだけれど、今回はアフロディテみたいな美の女神じゃなくて、もっと人間性豊かなモリアつまり痴愚の女神なんだ。」智子はドテツと前のめりになった。

「ああ、エラスムスの『痴愚神礼讃』のモリアね。それはちょっと無理じゃない？私いつも利発そうな顔だとか、キリッとした顔だとか言われているから。痴愚女神だったらあまり緊張感のある顔では無理でしょう。」

「たしかに三輪さんはいつも凜々しい顔をされているけれど、それは緊張感のない顔だと馬鹿にされたり、だらしがないと思われるという警戒心があるからなんだ。人間いつでも緊張して、きりっとしていると、精神衛生上問題が起こりやすい。たまにはリラックスしたいという意識をずっと意識下に押し込んでしまっているのだ。だからモリア役をやって、精神を弛緩させることはとっても大切なんだ。」

「あのモリアのしゃべっていることは、全然馬鹿なことじやなくて、とても機知に富んでいるし、センスのいいことでしょう。そういう賢いことを痴愚神だからといってパーみたいな顔して話すなんてとてもできません。」

「そこまで分かっていたら、後は気軽に自分の思いつくままに話せばいいんだ。要するに、社会にはびこる特権階級の独善的で身勝手な痴愚狂乱ぶりを暴露する。それに人間の本質は理知であるけれど、その理知は神や自然の摂理に比べたら痴愚に他ならないことを確認する。その上で痴愚こそ人間が人間らしく生きていくのに相応しい人間の本质であるとして、様々な痴愚の効用を説明してくれればいいんだ。」

「ええ、そんな気の利いた話次から次とできるかしら、だれか合の手をいれてくれるでしょう。」「そうだね一人芝居みたいのでいきたいのだけれど、時折、エラスムス役にして上村陽一君を登場させることにしよう。」

二、吉本演芸場にて

痴愚女神現れ出でたるそれだけで笑い転げてみんな幸せ

司会 それでは今日は特別に今や人気絶好調、天から天下ったか、地から湧き出したか痴愚の女神モリア様のご登場です。

アホの坂田が出てくる。「アホの坂田、アホの坂田」と歌いながら登場で、笑いの渦が起る。「ハイ、アホの坂田です。え、わたいのことでっしやる。違いまんのか。ほな失礼します」とまた歌いながら退場。

ついで花子が登場。「私のお呼びやるとマネージャーがいもんやから、なに？痴愚女神モリアやて、この私が、そんなむつかしいこと分かりまへん」と退場。

いよいよ奇想天外、奇妙奇天烈な衣裳で三輪智子が登場。満場が笑い転げる。

「あんたら、なに笑ってんねん。まだなんにも言うてへんがな。アホちゃーう」と智子は頭の後ろから右手をパーにしてジェスチャーした。するとアホの坂田が袖から首を出し、「アホちゃいまんねん、パーでんねん」と合いの手を入れた。会場腹を抱えて笑う。

お待たせ、アホそのものでっせー、まあアホの純粹培養でんがな、すべてのアホ・馬鹿・間抜けの根源やね、ハイ痴愚の女神様モリア、モリア、モリア（会場も一緒に連呼し始め、テンションが高くなっていく）モリア……………おおきに、おおきにストップ、ストップストップ、ストップいとうんやるこのストップ、ボケナス、かぼちゃ！あか

ん、あかん年寄り興奮したら粟ふいて死んでしまつがな。

三、馬鹿喜劇

馬鹿を見て笑うてる自分に馬鹿を見る馬鹿にこそある人のぬくもり

熟年のおばちゃんたちが多いので、馬鹿の本場大阪での実演やさかい、馬鹿喜劇の話から入りまっさ。四十年前も前やけど、わてはうら若い少女にみえまっけど、アホは歳とらんといいまっしやる、女神やさかいほんまはずっと大昔からいてまんねん。

松竹新喜劇で藤山寛美の当たり役で阿呆の若旦那や若君役がありましたな。父親役の渋谷天外にとつては馬鹿息子がかわいいがな。馬鹿息子は少しもけれん味がなく、裏表があらへん。素直な心で感じたままに口に出し、行動しよる。大人の世界のごまかしや欺瞞が通じまへん。それで陋習や偏見で押し潰されてた人情が、馬鹿息子の活躍で取り戻されるといふのが筋立てになつてましたな。なんとなくユーモラスで温かい馬鹿(若)旦那の登場で、観客の気持ちは軽うなつて、なんとなく楽しくなつたもんです。それで馬鹿(若)旦那の物真似が流行りました。

丁度同じ頃やつた思うねんけど、吉本興業でも『番頭はんと丁稚どん』という頭の足りない丁稚を主人公にした、ドタバタのコメディが大うけでした。大村昆扮する馬鹿の丁稚は馬鹿やさけ要領が悪い。いつも失敗ばかりして叱られたり苛められたりしてましたなあ。観客はその馬鹿さ加減に腹抱えて、笑い転げよつたもんや。人間誰しもおのれの馬鹿さ加減に自分が嫌になつてるもんなんや。だから自分より馬鹿なことをする人間を目の前にすると気持ち楽うになり、優越感からなんとこのう嬉しなつてくるんやね。それも自分と同程度の馬鹿ではあかん、それやつたら自己嫌悪が募ります。そこから、徹底した馬鹿の方が受けまんねん。ほいでコメディでは破茶滅茶な馬鹿が登場しましたなあ。

ほんでも、アホやから正直で素直です。決して人を憎んだり恨んだり、人に対して悪意をもつたりできまへんのや。やさかい馬鹿は馬鹿正直にしか生きられなへんから、馬鹿を馬鹿にしていた人々のいやらしさをはつきり見せ付けたんですわ。脇役たちは、一番大切なものを見失つていた自分達の馬鹿さ加減を思い知つたということです。

藤山寛美や大村昆なんかの馬鹿喜劇に登場する主人公の馬鹿は、ひとまずは、観客達が自分達の馬鹿さ加減を自分の外に出して、そのことによつて自分達を馬鹿ではない人間としての優越感を獲得するための道化ですわねん。しかし、馬鹿を馬鹿して終わりでは、人から馬鹿にされることに普段から最

も疵つけられている観客達にすれば、反って後ろめたい気持ちになつてしまひまっしやる、後味が悪いもんでつせ。ほんで観客達はこう考えまんのや。「あの馬鹿は程度の差こそあれ自分自身の馬鹿でもあり、それを笑っている自分は、自分自身を笑い者に行っているのだ」と。

そうなつたら、今度は馬鹿に限りない共感を寄せますねん。そして、あの馬鹿さ加減は実は感じたままに正直に行動する余りに我を忘れ、ブレーキがきかんようになった状態やと受け止めよるんですわ。そこに計算のない真実の気持ちの現われを感じますんや。馬鹿の行動は目茶目茶やけど、破綻せんために不純になつた正常な常識的行動には見られない大切な魂の息遣いがありまんのや。不純な行動というのは、他に目的があり、心はそこに行つてしまつてるのに、その手段として必要なために自分の気持ちを誤魔化している場合にも見られます。そやさかい馬鹿は人間の本来の姿を表現することになりますのや。

人間、馬鹿なことやつたら、破綻してまいりますけど、そうかいうて馬鹿なことをやらへんようにほんまの気持ちに逆らつてると、自分の一番大事なものを見失つてしまひますんや。そやから馬鹿喜劇の馬鹿は人間をまっとうな姿に立ち戻らせるヒーローですねん、馬鹿天使なんや。それで馬鹿役が登場すると観客は和やかで暖かい気持ちになれるし、何か幸せな気分になることができますのよ。(拍手)

四、エラスムスと掛け合い

エラスムス平和の訴え引っさげてモリアにまみえる大阪の町

休憩のあと上村 陽一のエラスムスとのかけあい漫才である。陽一が椅子に腰掛けて、居眠りしていると、モリアが登場するという設定だ。

モリア「エラスムスさん、こんなところで笑福亭仁鶴師匠みたいにエラはつて寝ていると、エライ風邪ひくがな。」

エラスムス「ウワー、こてこての大阪のおばちゃんやんか、あんたいつたいだれや?」

モリア「なんと仰るうさぎさん。うちはあんたで、あんたがうち、痴愚の女神モリアやんか。」

エラ「モリアはんに一心同体みたいに言われても、あまりうれしくないな。」

モリア「それにしても『十六世紀はエラスムスの世紀』になるやろいわれて、ルターの宗教改革運動でそうならへんかったあんたが、なんで二十一世紀の大阪にタイムスリップしたん?」

エラ「わしは平和主義者やねん。『平和の訴え』という平和の女神パックスの訴えを書いているんや、ほいで二十一世紀の日本の『九条の会』から講演の依頼がきたんやな。なんでも日本は一九四六年に施行された戦争放棄、戦力不保持、交戦権否認を定めた『憲法第九条』を変えてもたるといふ動きがごつつなつて、そいであわててタイムスリップしてきたというようなわけやがな。モリアはんはどうして二十一世紀の大阪なんや？」

モリア「ここが一番モリアにとつて居心地がええの。みんなあけつびろげで馬鹿丸出しという感じやんか。まあ『憲法第九条』ほど立派で貴重なモリア（馬鹿）な条文もないわな。これがなくなるのはモリアにとつてもサビシーから大いに頑張つてや。」

五、立派なモリア

馬鹿になり国家非武装選べるやそれとも利口に改憲すべしや

エラ「わしはずこい人類の平和へのかたまりのように思うとんやけど。ほやかてハルマゲドン（最終戦争）が何時起こつても不思議やないほど人類の武器は進化しとつやろ、核兵器や生物・毒ガス兵器が小型化しよるやん、そいで安う作れるようになつてやん。何時までも国家が武装して国を守るといふことやつとつたんでは、ほんまにハルマゲドンになつて

しまつて、このへんで思い切つて、国の軍隊いうもんをやめてもて、地球規模の集団安全保障の機構にそいう兵器を集めてないようにせなあかんのや。『九条』はその第一歩やな。」

モリア「だいたい武器を持つて戦うというのがアホな証拠やね。武器がどんどん進歩すれば人類はおだぶつになつてしまふんやから。」

エラ「ほんなら、武器を持たへんちゆう『九条』はななかお利口やおまへんか」

モリア「ほんまに守れるんやつたらね、それやつたらお利口やけど、実際は世界有数の軍事を備えた自衛隊を持つてるやん。ほんなら『九条』なんぞはインチキやんか、改定すんのが当たりまえなんよ。それをせつかく立派な条文やから残したいというんが、これまでの国民の姿勢なんやね。そこが馬鹿なんよ。残したいなら自衛隊もなくさなあかん。ほんでも、それはいやなんやろ。それを解釈だけかつてに変えてもて、戦力ももてるし、自衛のためなら戦つてもいいなんていうことにしたんよ。それやつたら他の国も同じなんよ、どこだつて侵略できる軍隊なんて認めてないわけよ。だから『九条』の意味はないわけや。」

エラ「そしたらモリアはんは改憲に賛成してはんねんね。」

モリア「馬鹿やね。私は軍隊なんて馬鹿なものはさっさとなくせいう立場やさかい、改憲には反対なんよ。」

エラ「侵略されたらどうすんのや。」

モリア「非武装で世界平和に貢献し、平和で豊かな国をつくって途上国を援助している国を侵略できるやろか。もし侵略されても、戦わへんかったら戦闘にならへんやんか、無血占領するわけやろ。そしたら非暴力での抵抗が続くし、世界から侵略者は非難を浴びるわな、経済制裁とかされるので、どうして占領をやるいうんや。」

もし無差別の大虐殺でもさらしよつたら、それこそいつらは、支配が難しなるやんか。それにひよつとして民族皆殺しにされるとしよ、そしたら恒久平和のための尊い犠牲として人類史に記録されることになるわな。

ああ日本人は侵略され、皆殺しになる危険をあえて冒しても、人類が武器を捨てる決断を促すために率先して非武装国を作った偉大な民族だ。彼らは滅ぼされたという意味では、確かに馬鹿やった、大馬鹿者やった、そやけど人類の恒久平和には彼らのような大馬鹿者が必要やったんや、とえらいほめられることになるんや」

エラ「でも日本人はそこまで偉大やないから無理やわな。」

モリア「そうやね、時には人間、馬鹿に成り切ることも必要なんや。これは痴愚女神モリアの意見やから、心して聞いときゃ。」

エラ「ウーム、馬鹿の意見に従うべきか、これまでどおり、ごまかして中途半端でいくか。それとも小利口に改憲してしまつか、日本人も正念場やな。ついでに今、焦点になっている靖国神社参拝問題についてモリアはんのご意見はどうですか。」

六、侵略被害者の霊を先ず祀れ

霊ありて社に集まる信仰を総理の名もてするはイケン（違憲）や

帝国の支配侵略犠牲者の御霊祀らず戦犯祀るな

モリア「馬鹿に意見を訊くやなんて、なかなか見上げた馬鹿ね、あんたも。」

だいたい靖国神社というのが馬鹿の見本やろ。英霊を祀るなんて発想が馬鹿やんか。なんで戦争で死んだ人の霊が靖国神社に行くわけ。だれが霊なんて見たんよ。勝手に祀る人が

自分の気持ちを抑えるために死んだら霊が残るなんて決めて
けているだけやろ。

それやったら靖国神社でのうてもべつにええやん、みんな
心の中で戦争犠牲者に感謝していればええんよ。わざわざA
級戦犯を神として合祀している神社に参るやなんて、A級戦
犯を恨んでいる国の人々が反撥するわな、日本は反省してへ
んと思われて当然なんよ。

だれをどう祀ろうが日本の勝手やいうんやったら、相手の国
にそんな無神経な国とは付き合いたくないといわれてもしよ
うないわな。まあ慰霊施設を作るんやったら、先ず日本が侵
略して被害を与えた人々の霊を優先的に祀るのが正しいよ。
そうせへんかったら、いつまでも日本への敵意は解けへんに
きまつてるわ。」

七、野の花を見よ

野の花は華麗に装い咲きたるを何の不足もあるまじものを
便利さを求めて築きし文明に首絞められてもがき苦しむ
いまさらに原始の昔に帰れねど命の循環保つ工夫を

エラ「他にもモリアはんからみはつたら、現代社会はまだま
だ痴愚狂乱に満ちていることやろね。」

モリア「そらそやろ、人間自体が痴愚狂乱のかたまりやがな。
なんも文明なんかいらんのよ。野の花を見てみ、きれいに咲
いてるやん。それでなんも不足あらへんやんか。」

文明なんか作るよつてに、欲が膨らんで不足だらけになっ
たんやんな、それで森の木を切つて砂漠にしてもたり、他の
動物を絶滅してもたりするんやで。そいでいつぱい物を燃
やすさけ、地球が汚れるし、暑つなつていくんやがな。

大昔、二種類の微生物しかこの世にあらへんかった時代に、
この微生物同士のバランスが崩れてメタンガスがごつごつ出
て、地球がいつたんあつたか後で、太陽の光が届かん
ようになって、地球全体がなんと五千メートルの高さの氷に
覆われたことがおまんねんやわ。微生物でもこれだけの変化
をもたらしたんやさかい、人間の産業活動が地球にどんな大
異変を与えているかよう反省せなあきまへんで。」

エラ「あんたほんまにモリアかいな、えらい賢いこといわは
るな。似合わん似合わん。」

モリア「わしはこれでも神さんやで、神さんから見たら人間
の知恵がそもそも馬鹿やゆうこつちや、便利なもんつくつて
は、それでよいに不便になつてしもうとる。自分で自分の
首を絞めとるんや。」

エラ「そいでもいまさらはじめ人間ギャートルズみたいに原始生活に戻れんわな。」

モリア「原始生活に戻れんでも、もつと自然に帰りなはれ。それにそう開き直るんやのうて、先ず反省せなあかんわな。それでどうしたら大いなる生命の循環と共生の中に人間の生活を調和させられるのか、いろいろ工夫せなあきまへん。そこに頭使わな。文明が生み出した科学技術いうもんをそのために役立てなはれいうとるや。地球を汚したり、温暖化させることに使わんとな。」

八、増税で財政赤字は減らない

豊かなる国に生まれし若者は怠惰になすむハングリー欠け生まれ来る子の数減りぬその分を招き入れてぞ人手保たむ
財政の赤字膨らむそれゆえに増税すれば赤字へるかは
増税は所得吸い上げ経済を停滞させて赤字まさすや
統合の時代始まる経済は一国単位時代遅れや

エラ「それにしてもひところは日本は二十一世紀には世界の中心になるといわれてましたやろ、それが不況が長引いて、だんだん落ち込んでいってるようですね。なんとか持ち直す方法はおまへんのか」

モリア「まあ日本、日本言うてんのは了見が狭いわな。どこ

が中心やかてええわけやんか。ようするに世界がなかようできてお互いに繁栄できればええとせな。日本が繁栄を続けよ思たら、戦後の日本みたいに若いもんがよう働き、よう勉強するといふことがないとな。今の五十代の連中まではわりと頑張りよつたさかい、一時、日本が世界をリードするいうとこまでいったんやけど、経済成長が済んでから教育を受けた連中は恵まれすぎて、ハングリー精神に欠けてたわな。そのかわり、この年代以降は中国や東南アジアの若いもんが頑張りよつた。今でも日本の学生は勉強せんようになった言われとるやん。それで落ち込み防げいうても土台無理ちゃう。」

エラ「アメリカなんかは落ち込んでいくいわれたけど盛り返してますわな」

モリア「アメリカは移民を受け入れてますやん。どんどん世界から若いやる気のある連中が入ってきて、補填していくさけ、繁栄が続けられるんや。日本かて外国から移民や出稼ぎを受け入れたらええんや。そつでもせんと経済落ち込んで、財政赤字で増税なんてやつてると、それでまた経済が冷え込んで、悪循環になつていく。」

エラ「日本人は外国人が増えると犯罪がふえるので、それが怖いんやろな。それにしても財政赤字やさかい、増税するしかないいうてえげつない規模のサラリーマン増税や消費税増税が計画されてまん、モリアはんからみたらどうでっか？」

モリア「あきれ果てたモリアやね。官僚や有識者いうのんは頭の中が空っぽなんやろな。財政が赤字やから増税したらええという発想が安易やわな。そら幼稚園以下でっせ。」

エラ「赤字になつた原因をはつきりさして、そこから考えないかんいうことでっしやる。そもそも財政ちゅうもんは、企業と家計だけでは景気変動がはげすぎて資本主義経済が崩壊してまうから、それを調整するためにありまんねんやろ。それと、貧富の格差を所得再分配で緩和して社会の安定をはからんならんからや。その財政の規模が大きなりすぎたら、民間経済はもたへんわ。増税のやりすぎは自殺行為でんな。」

モリア「アンタ十六世紀から来た割には、近代国家のことよく知つてるな。榊せんせの授業うけてんのちゃうか。そやねん、増税で景気冷やしてもたら、税収は余計に落ち込むさけ、増税やつても財政収入は減ってしまうんや。そもそも財政赤字が膨れ上がるというのは財政がきちんと機能でけへんようになったからや。」

二十世紀末からの経済の停滞は、国民経済が一国の財政で調整できんようになったいうこつちや。中国なんかからものげつつい安い商品が入ってくるから国内生産が減んのは当然や。これは東アジア市場全体で調整せなあかん問題なんや。

財政を使うんやつたら、よその国の低賃金に対抗できるほど技術水準を上げたり、労働力の質を向上したりするこつちやな。つまりは学校教育のレベルアップや。それから外国人労働者をどんどん増やすしかないな。」

エラ「ちゅうことは時代が、一国単位の近代からグローバル統合の時代に入ってきてんのに、官僚や学者連中はいまだに一国単位の発想しかでけへんいうことでんな。けっこうパーなんや。」

九、痴愚の現われとしての理性

人間の理性は痴愚の現われか、苦しみの因生み出すばかりや

エラ「ところでモリアはんからみたら、この世のすべては痴愚のかたまりということになるそうやけど、そしたら理性や知恵というものはおまへんのか？」

モリア「アンタもやっぱり痴愚やな。理性や知恵と痴愚が別にあるんやのうて、理性や知恵が痴愚の現れいうことやんか、別に自然のままに生きてたらええのにしようむないもんばかり作り出して、それで自分で苦しんでんのや。」

理性が作り出した経済学に捉われて、大增税案がでてくるんや。ともかく人間の理性はろくなもんつくらんで、その最

たるもんが貨幣やな。これにとりつかれたら最後、一生をこれのために捧げつくしよる。これのためやつたら寝るのも惜しいそうや。あんまりこれが好きなもんやから、これをつかうのが惜しいいうて、通帳眺めるだけで満足して、結局死ぬまでつかわなんだ奴もおるそうやで。つかわへんかったら意味ないんやけどな。純粹馬鹿やろ。」

エラ「土地・建物や宝石・絵画・骨董品を収集している連中も似たようなもんや。ただつびろい家に住んだって、掃除からなから自分ではでけんから人やとつてせんなんのやけど、広すぎて不便なだけやがな。」

家族四、五人やつたら五つか六つ部屋があつたらそれで十分贅沢やがな。いや個室なんかないほうが一人で閉じこもられへんから。かえつて孤独にならんでええかもしれん。個室があるよつて家族の会話がのうなつてしまふ家も多いそうや。」

ふだん使わん宝石や絵画を持ってたつて、それがいったいなんやちゆうねん。みんながいつでも見れる場所に寄付してんか、ほんならみんな楽しめるのに、独り占めにして自分だけ喜んどおる、根性ババ色や。」

モリア「そらアホやで、たしかに。」

エラ「モリアはん、あんたはそうやって金持ちや権力者の痴

愚をこき下ろしはるけど、痴愚そのものは素晴らしいもんやと、痴愚を大いに賛美してはるらしいね。」

モリア「自分の痴愚に気づかんと、自分だけ正しいとおもてる馬鹿が権力者に多いやんか、自分は核兵器ぎょうさん持つといて、ちっちゃな国が一つでも持つといたると思つたら、ならず者呼ばわりしよる大統領がおるやんか、あれは独善の典型やな。自分とこ民主的な国で、平和を愛好してるから侵略者から平和を守るために核兵器でもなんでも持つのは正義やけど、相手の国は核兵器持つたらほんまに侵略や戦争に使うから持たしたらあかん、持つたら核兵器をぶち込むぞと脅しよるねん。」

エラ「よう考えたら、実戦で核兵器使いよつたんは、その国だけやつたりして。あれは戦争を早よ終わらして、本土決戦にならんですんだから、相手の国民を救つたよい原爆やつたという理屈やな。ようするに良い木には良い実がなり、悪い木には悪い実がなるという理屈で、自分が正しいことが前提になつてもてる。そしたら少々自分らが悪いことしても、動機は正義のためやつたですませられるんや。」

モリア「そういう独善的な馬鹿は、大いに批判しとかなあかんけど、人間の本性である馬鹿は、人間のありのままの姿やから、馬鹿丸出しで生きたらええわけなんよ。」

十、素晴らしきかな痴愚

本源の痴愚に帰りてまぐわいぬ、この世のすべては痴愚が生みしか

子育てに若さと別嬪吸い取られそれで幸せ見上げたモリア
痴愚ゆえに可愛いものよ子供らは、悪態つかずに笑顔ふりまく

エラ「ほおーどんな馬鹿がええ馬鹿何やろ」

モリア「ほらだれでも子供を作るための行為をするときは、賢そうな顔やしかめつ面はやめて、馬鹿丸出しの本来の顔に戻るやんか。我を忘れて忘我の境地でおこなわなあかんのや。神々かてそうやで、そやからこの世界にあるすべてのものは痴愚から生まれたというこつちやな。」

エラ「子供を生んだり、育てたりする母親の嘗みはどうでつか、なかなか偉いんやおまへんか。」

モリア「それがモリアなんよ。そやかて出産ちゅうのはめちやめちや痛いんやで、それが赤んぼの顔みるとすぐ忘れてもて、もう一人生みたいなんてなるんやから、アホですわな。それに一所懸命子育てして、自分の若さも別嬪もみんな子供に吸い取られてしまひよるのに、それが生きがいやとか、幸

せやとかしゃーしゃーというんやから、見上げたモリアやわな。」

エラ「まあ、あかんぼういうのは可愛いもんでんな。孫ができたらメロメロになるいうけど、子供を育てることほどやりがいの有ることはないのちやいまつか。」

モリア「子供もモリア（痴愚）のお陰で可愛いんやで、はじめはなんも悪いこといわへんやろ、ほいで可愛い、はじめから知恵があつて、天上天下唯我独尊なんかぬかしよつたら、どついたるか思うで。」

エラ「そういやあ、女もあまり賢い女は可愛げがないわな。今はフェミニズムの時代やさけ、今のはオフレコやけど。賢い女にはまた別の魅力はあるけど。（あのわては中世の人間だつさけい、女性差別やゆつて怒らんといてな、作者の考えとは違います、念のため。）」

モリア「まああんまりない知恵絞つて賢そうにしてたら、脂気が抜けてもてかさかさになつてしまふわな。女の肌が男よりずつと柔らかかですべすべしてんのは、男みたいに仕事で神経すり減らしてへんからや。でもこれからは女も男とおんなじ様に働らかなあかん時代やさかい、女の肌も荒れるやろな。それに女が男より頭が悪いなんて迷信なんよ。どんどん社会に進出すればええんよ。」

十一、馬鹿女の厚化粧

化粧品のべつまくなし塗りたくり、肌が荒れぬかそれが心配

エラ「そついや近頃の女は、一部やるけど仕事中有るつが、授業中であるつが、電車のなかでも四六時中化粧しまくってるけど、それだけない知恵つかって肌荒れしてるからやるか？」

モリア「あれは馬鹿女がしてるのよ。塗れば塗るほど醜いのに、少しでもましにしようと思ふ努力するから、ますます肌は荒れるし、汚くなるばっか。」

エラ「ところで政治で立派な国づくりに成功したり。世界平和を前進させたり、大きな事業をやりとげたり、学問で偉大な業績をあげたり、そういう場合にはやっぱり痴愚は邪魔こそすれ、役には立ちまへんやろ。」

十二、馬鹿の一つ覚え

シンプルな馬鹿でも分かる原理こそ成就の鍵でビッグな仕事

モリア「なに聴いとんねん。このアホウ。人間ごつついことやると思つたら、それに馬鹿になって没頭せなでけへんのかぜ、それにものごとを複雑に考えたらこんがらがって收拾が

つかんようになるよつて、できるだけシンプルに一つのテーマに絞り込んで、それを原理にして情熱を傾けなあかんのや。馬鹿の一つ覚えが最高なんや。その方が、人に伝わるし、心を打つもんなんや。」

十三、幻想とうぬぼれが大事

幻想とうぬぼれなしで生きられぬ、棺桶までも夢を忘れじ

エラ「そいでも、何事か成し遂げるためには現実をリアルに見なでけへんわな。幻想にとりつかれてたら、へまばかりしてすぐに破綻してしまふやんか。」

モリア「現実をリアルに捉えてるつもりがそれが幻想やったことがようあるもんや。逆に夢や幻から出発して、何度も挫折しながら、夢を失わんと追い続けてたら、そこにロマンのあるすこい仕事ができることもあるんや。」

それにあんまり幻想がなさ過ぎるのも困るで、自分自身や自分の身内や友達に幻想をもってるから、お互いに尊重し合、助け合つて充実した人生が送れるんやんか。

もうとつくに過去の人、終わつてると思われた人がいつまでも自分を信じて最後の土壇場で見事な花を咲かせることもあるんや。これは幻想力やな。」

エラ「自分の力に合わんことやってても、うまくいかんわな。うぬぼれほどこわいもんはない。身の程知らずの馬鹿では使いもんにならんやろな？」

モリア「なにいうとんねん。うぬぼれが大事やねんぞ。人間みんな死ぬに決まってるやろ、ほんでもほんまに死ぬ思もたら怖うてなんもできんようになるらしいんや、それがだれでも自分だけは死ぬへんと心のどこかで思い込んでるんや。たとえ死んでも生まれ変わるとか、続きがあると信じてんのや。つまり死んでもまだ生きてると思ってる。これもうぬぼれの一種やがな、それが支えに生きてられるそつや。」

それに同一視いうて、自分が駄目な人間や思うても、自分の家族や親戚や友達や友達の友達が偉いやつちやとなつたら、それだけでうれしい気持ちになるもんなんや。つまりうぬぼれの根拠を自分と同一視できる誰かに求めるわけや。

アイドルとミーハー、阪神タイガースとファンの関係でもそれは言える。自分は、会社首になり、妻子に逃げられた時でも、親が死んだときでも一滴も涙こぼせへんかったのに、阪神タイガースが優勝した時は一升瓶抱えて、一晩中泣き明かした男がぎょうさんいたらしいで。

辛うじて、人生に花がある、まだ救いがあるのは、同一視した相手のことにすらうぬぼれられるという人間のモリアの

お陰なんや。」

十四、老いらくの恋

老いらくの恋も元氣のもとなれば責めたまふまじ見苦しいなど

エラ「そいでも、還暦すぎのええ年齢こいていつまでも若いつもりで、女子中学生の尻を追いかけたり、婆さんが若いツバメを捕まえたるおもて、ベタベタ厚化粧しとるん見ると腹たつてけえへんか？ 気持ち悪うてゲエ出るで。」

モリア「そこがモリアの偉大なとこやがな。これから高齢社会やゆうのに年寄りがそれぐらいの元氣がのうてどうすんじや。」

他人はすごい年寄りに見えても自分は実際より二十歳は若こう思とるらしいな。年寄りには自分はもうあかんと思うさかい落ち込んで寝たきりになつてまうんや。そこがモリアの力で幻想力を特別に年寄りには強ようしてるから、まだまだいけるいうて七十台八十台の老人たちが老人ホームなんかで老いらくの恋を楽しんでるそうやないか、その方が寝たきりで十年以上家族や施設におむつかえさせるよりよっぽど幸せやないか。本人にも家族にも社会にとつても。」

十五、痴愚宗教としてのキリスト教

一介の大工の息子が人類の罪贖うと言つはモリアか

エラ、もう時間ぎれやさかい、また書き直してもらつとして、最後に信仰についてモリアの役割についてしゃべつてんか。」

モリア「信仰はアンタの専門やんか。ギリシア人に言わしたらキリスト教徒の信仰は痴愚の見本みたいなもんや。そやかて大工の息子が人類のために身代わりに磔にされて死んだからいうて、それでなんで、それが全人類の罪をチャラにつまりなかつたことにして、あがなえるねんということや。」

今まで世のため人のために尽くしたために弾圧で殺された人はぎょうさんいてはるやろ。それでもだれも全人類の罪はチャラにできへんかつた。なんでナザレ村の大工の息子がそんなことできんねん。アホちやうかと馬鹿にされたんや。ほいでもよう考えたら、人類が救われんのは、そんなモリアなことを信じることによつてしかあらへんの違うかということやねん。しゃあからキリスト教ちゆうのはみんなが独善的な知を捨てて素直に信仰の痴愚に帰ることで救われるとする痴愚宗教なんや。」

番外篇 哲学とは何か？

目次

一、哲学の原義	107
二、独断論批判の独断論	109
三、すべての事例は挙げられない	109
四、疑っている我は疑えないか	110
五、デカルトによる神の存在証明	111
六、ロックのデカルト批判	112
七、唯心論と懐疑論	113
八、コペルニクスの転換	113
九、可想界に属する存在	114
十、魂の正体	115

十一、認識図式の成立…………… 115

十二、認識論の逆転発想…………… 116

番外篇 哲学とは何か？

一、哲学の原義

「いつて確かなことは知らぬと知に焦がれたる言は愛知者」

時をフアンタジーが始まる以前に戻そう。冬休みに入った頃という設定だ。社会科学準備室に上村陽一と三輪智子が訪れて、榊周次と談話をしている。

上村陽一：榊先生、倫理を学んでいるわけですが、哲学の話が多いですね。哲学は倫理の中の一分野なのですか？それとも哲学の中に倫理も包含されるのですか。

三輪智子：もともと哲学は知ることについての学ですから、数学や自然学も含まれていたのでしょう。だから当然倫理学も哲学に含まれていたと言えます。倫理はethicsで哲学はphilosophyですね。

榊：ethicsは習俗や習慣という言葉に由来し、社会や集団のルールという意味を持ちます。フィロソフィアはフィロが「愛する」でソフィアが「知」ですから「知を愛する」「愛知」という意味ですね。

陽一：じゃあ愛知県は哲学の本場ですか？

榊：じゃあ愛媛県は何の本場ですか？「倫」という字は「人の輪」つまり仲間や社会という意味ですね。その「理」はことわりということですので、社会の中での従うべき道理や規範という意味になり、そこから人間としての生きるべき道や人間としての生き方をあらわします。

智子：では倫理と道徳(英語でmoral)はどう違うのですか？

榊：同じ意味でつかわれているのですが、倫理が人間として歩むべき道であり、社会の規範ですが、道徳は人格としての個人がそれを徳として身につけることを意味します。

陽一：ところでphilosophyをどうして「愛知」と訳さなかったのですか。

先生：「哲学」という訳語を考案したのは日本近代哲学の父と呼ばれる西周(にしあまね)です。彼はフィロソフィーには謙遜の意味が含まれていると考えました。ソクラテスは自分は「ソフィスト」つまり知者ではないと言いました。ソフィストたちの知は、実は独断論にすぎず、真理でない。しかし自分真なる知を求めている愛知者ではあるとしたのです。

智子：ソフィストたちはそれまでの哲学者たちの独断論を批判したのじゃなかったのですか？プロタゴラスは、「万物の尺度は人間である」と言いましたが、それは「真理はひとそれぞれ相対的なものである」という意味だったと先生から教わりましたよ。

榊：しかし、プロタゴラスは自分の感じた感覚の真理に固執して、それぞれが感じたままに行動すればよいということになってしまった。これも一種の独断論だ。自分だけが暑いと感じたらそれは自分の体調のせいだと、自分を疑うことも必要で、暑いと感じているから、この部屋は自分にとって暑いのは真理だということに固執していたら、その知は役に立たない知になってしまふ。

陽一：それはそうですね。この部屋は暑いか寒いかということと議論するのなら、それぞれが暑いか寒いか感じるのとは何かを話し合うことが大切です。そうしてはじめて暑いか寒いか感じるのとは何かということが分かってきます。

智子：それぞれが知ったかぶりするのじゃなくて、それぞれのもっている情報を出し合って、みんなが納得できる知識を対話を通して形成するということが哲学だということですか。

榊：その場合、自分の知っていること、感じていることを真理として押し付けるのではなくて、吟味の対象として提供す

る態度が大切です。まだしっかりみんなで吟味できていないものは確実な知ではないということに自覚していなければならぬのです。

陽一：なるほどそれが「無知の知」ですね。

智子：それでは西はどうしてフィロソフィーを「愛知や愛知学」と訳さなかったのですか？

榊：それでは、物知りや雑学愛好家を思い浮かべられてしまうので、まずいと思いました。そこで「哲」という「賢明な」とか「さとる」という意味の言葉を前につけて「哲学」とし、物事の根本の原理を究める学問という意味にしたのです。

陽一：それではソクラテスの「無知の知」が活かされていませんね。

榊：そこが問題点ですが、西が求めていたのは学の原理としての哲学でしたので、西としては別によかったということですね。

智子：それではソクラテスの独断論批判が活かされていませんね。西は謙遜の意味に注目していたのに。

榊：西が評価していたのは功利主義や実証主義です。それは

つまり近代哲学の独断論批判だったのです。

二、独断論批判の独断論

独断を退けて立つ哲学も己過信し、独断に墮す

陽一：近代哲学というのはベーコンの「四つのイドラ」も独断論批判だし、デカルトの方法的懐疑も独断論批判でしょう。それをどうして独断論だというのですか。独断論と批判するものが独断論なら、ソクラテスも功利主義や実証主義も西も独断論になってしまいます。

榊：ソクラテスは「無知の知」に立って、ゼロから対話によって普遍的真理を積み上げていけるという立場にたっていました。でも本当にゼロから出発できるのかということを考えますと、予めアイデア(真実在としての観念)があるから物事を認識できるのじゃないかということになります。だからプラトンのアイデア論もソクラテス批判になっているわけです。

三、すべての事例は挙げられない

実験と観察をもて確かめし事実の他に何が真理か

智子：そういえばベーコンは、プラトンやアリストテレスなどのギリシアの学問を実験観察に基づいていないとして退け

ますね。

榊：プラトンのイデアは、あらかじめイデアがあるから物事が認識できるのだとして、イデアなるものが現象とは別に存在するかにいますが、それは確かめられないわけですね。実験観察によつて確かめられないものを真理として仮定しますと、観念からだけ物事を捉えることになり、大きな思い違いに陥りやすいのです。

陽一：薔薇のイデアがなければ、花を見ても薔薇とは分からないというはもつともでしょう。

智子：でも薔薇の観念と薔薇という事物を、イデア界などを作り上げて切り離すというのは、独断的ですね。

榊：そこで物事の観念がどのように生じたのかという問題が生じます。それで同様な事象を集めて名前をつけその現れ方を整理して法則を導き出すという帰納法が近代になって、発達します。その際予め作り上げた法則に合う現象を単純枚挙するのでは駄目です。

陽一：ほうなかなか科学的ですね。ベーコンも結局独断論だというのは何故ですか。

智子：それはね、ベーコンは三つの表で肯定的事例と否定的事例と、ある条件では肯定的事例だけれど、条件が変わると否定的事例になるものをすべて挙げるると法則が導けるといふ立場だったけれど、すべて挙げるなんてことはできない相談でしょう。だから逆に、完全な法則は導けないことになるわけ、でもベーコンは導けるつもりでいたから独断論なのよ。

榊：それに人間が実験観察して、確かめうる範囲の法則は導けても、人間の有限な認識能力では感知できない変化が生じていて、それが思わぬ副作用や人間環境破壊という形で撥ね返ってくることもあるでしょう。ベーコンはそういうことはあまり考慮しないで、自分の方法で無限の進歩がもたらされ、人類の進歩は薔薇色のように楽観的に捉えていた、そういうところがやはり独断的でしょう。

四、疑っている我は疑えないか

疑いの果てに行き着くその先の疑いし吾、疑い得ざるや疑いし
そのことだけは疑えぬ、そこから吾は導き得るかは

智子：デカルトは真理の体系としての学問を築くには、絶対に疑えない真理から出発しなければならぬと考え、少しでも疑わしいものは間違ひとして捨てるという「方法的懐疑」を行ったわけでしょう。その意味では独断論批判ですね。どういふところが独断論なのですか。

陽一：彼は先ず、感覺的現実を疑います。現に見たということとは目撃証言だけれど、見間違えということもままあることですね。だから捨てた。

つぎに数学的論証です。難しい論証は間違っているかもしれない。でも対頂角が等しいなんて、間違えることはまずありえません。でも難しいものが間違っているというところは、それよりやさしいのも間違え得るということなので、数学的論証はすべて間違いということにしておくのです。

そして心に浮かぶすべての思想は、眠っているときにいろいろ間違った想念が浮かびますね。目覚めていると思っても実は眠っていたこともありうるので、すべての思想は間違いだとするわけです。

こうしてすべての観念や思想は疑いうるとしておいたうえで、疑っているという事実だけは疑えないだろうというわけですね。そこまでは納得いくのですが、疑っているという事実から疑っている我の存在が出てきて、「疑っている我」は疑えないとなってしまう。そこに飛躍があるような気がしてならないのですが。

神：それは同感ですね。「疑う」というのは事実としても、だから「我」が疑っているとまで言えるかどうかですね。こ

れはラテン語では動詞が人称変化を起こしますから、「疑う」とか「考える」と言えば、すでに「私が」ということが動詞に含まれているわけです。

「コギト・エルゴ・スム(我思う・故に・我あり)」ではコギトもスムも一人称単数現在の動詞なのです。「考えている、だから存在する」ということなのに、「私が考えているから、考えている私が存在している」ところまでいつてしまつて、「コギト」が「考える我」という意味の名詞になり、主語として実体化することになってしまったと言えるかもしれませ

ん。
でもデカルトはフランス語で書かれた『方法序説』で「*Je pense, donc je suis*(私は考えるので私はある)」と書いていますから、デカルトに関してはそれはいえませんね。

五、デカルトによる神の存在証明

**疑ひの闇路さするふ吾ゆえに神の光の照らさで生くるや
お互いに欠けたる同士支え合い命の環結び生くるにあらずや**

智子：そういえば、コギトから神の存在を証明するのは随分強引だと感じましたね。コギトは疑っているから不完全な存在である。しかるに不完全な存在者が、それ自体で存在でき

る筈がない。必ず完全者によって支えられている筈である。ところでコギトの存在は疑えないのだから、それを支える完全者である神の存在も疑えないという論証です。不完全者の存在は不完全者同士が互いに支えあつて存在するという、完全者抜きのバージョンもありうる筈なのに、そこは独断的に不完全者から完全者を演繹してしまっています。

神：西欧には、唯一絶対の超越神への信仰が、空気のようにあるのです。だから自然に完全な神あつての不完全な人間や動植物その他の自然物という発想が自明のように出てきてしまふでしょう。もう一つの神の存在証明もおかしかったですよ。

陽一：神の観念は先天的だという議論ですね。不完全者である人間は、完全者である神の観念を自分で作ることができないので、神の観念は完全者である神自身が作つて、先天的に人間の魂の中に置き入れたに違いないという理屈です。観念を完全な形で思い描くのは有限者、不完全者には難しいといふのは納得できませんが、完全者の観念を作るのは不完全者には不可能だといふのはどうしてそういえるのか良く分かりません。

六、ロックのデカルト批判

踏みつけし石の中すら神を見る、神観念を持たざる証しか

智子：それでイギリス経験論のロックが、デカルトを批判していますね。イギリス経験論者は、実験と観察の結果しか信じませんが、本当に神の観念が先天的かどうか調べたわけですね。デカルトの議論では神の観念が先天的だということなので、人間ならばだれでも神の観念を持っている筈だと考えて、神の観念を持っていない人がいれば、デカルトは間違っていたことになりませぬ。

するとアフリカ人や東洋人の多くが、完全者としての神の観念を持っていないことが分かったわけですね。それにイギリス人でもキリスト教徒の子供たちが完全者としての神の観念を持っていないことが分かったのです。そこでロックは「あらゆる観念は経験から、生まれつきはホワイト・ペーパー」と述べました。この言葉でイギリス経験論が確立したと言われています。

神：デカルトの立場で言えば、神は東洋人やアフリカ人にまで神の観念を与える必要はないわけですね。なぜならキリスト者以外は聖霊を宿していないことになっていますから。キリスト者の子供は聖霊を宿しても、精神が未発達なので思い出せないだけと考えられます。

陽一：日本人なんかはすべてのものに神を見出すので、神の観念は豊富なのではないのですか。

神：だから神の定義の問題があるのです。一神教の神観念と
いうのは、唯一絶対の超越神ですから、草や木、石ころやイ
ワシの頭、竈や便所にまで神を見出すのは、神でないものを
神ということであり、つまり完全者としての神の観念を持っ
ていないということなのです。

七、唯心論と懐疑論

経験を取りまもめてぞ生まれけむ物てふ観念、物も意識か

智子：経験論は経験の解釈から事物の観念が生まれたという
議論なので、バークリーのような「存在することは知覚され
てあること」だという発想になってしまいますね。そうしま
すと現象だけしか認識できないので、デカルトのような主
観・客観認識図式による客観的实在の認識ができないことにな
り、ヒュームの懐疑論に行き着いてしまいます。あらため
て存在とは何か、認識とは何かが問い直されることになるわ
けですね。

陽一：それを受けて登場したのがカントの批判哲学だとい
うことですね。

神：さすがに倫理の得意なお二人の整理はお見事です。デ
カルトだと認識される対象は客観的な事物であり、世界は事
物によって構成されていると捉えられていました。これに対

して経験論は、あくまでそれは経験の総括であり、人間の五
感を離れてはありえないということを行い出したわけです。
つまり認識される事物と認識する意識は切り離せないとい
うことですね。

八、コペルニクスの転換

**感覚をカテゴリーにて整理して対象（もの）構えたりこれぞ
認識**

感覚でつくりし花も太陽も意識としては己が姿や

陽一：カントは『純粹理性批判』で物自体は認識できない。
認識できるのは現象だけだとなりましたが、その意味するこ
ろは、存在それ自体は認識できないけれど存在の現われとし
て意識の姿で現象してくる事物は認識できるという意味で
すか。

神：カントが認識論における「コペルニクスの転換」をやっ
たと自負していることと関連しますね。今まで天が地球の回
りを回っていたと考えられていたのを、太陽の周りを地球が
回っていると考えるような一八〇度の認識論の革命です。つ
まり今までは客観的的事物が主観に写し取られるという反映
論でした。ところがカントは感覚を素材にして生まれつきも
っている時間・空間・質量などの形式をつかって対象を構成
しているのだとしたわけです。

智子：そのあたりがとても難解で、陽一君とよく議論しているのですけれど、構成説という言葉を使われると結局、人間は自分の感覚を材料にして世界の事物を作っていることになり、この現象する世界は人間の意識であり、世界それ自体が人間なんだと言っているのじゃないかという気がするのですが。

榊：それは大変深い認識だと思えますね。というのはカントは哲学全体を広い意味での人間学だと捉えているのです。

陽一：カントは人間理性を批判しているのでしょうか。批判とはカントの場合、限界付けという意味でしたね。現象界をすべて人間理性で構成してしまつたら、限界づけにならないんじゃないですか？

智子：どうして？意識に現象している世界しか認識できないというのが理性の限界づけでしょう。

陽一：だって現実に現れている太陽や星や月や大地や動植物などのさまざまな環境的自然や、社会的諸事物なども現象に入るわけで、それらをすべて人間の意識によって構成されたものとして捉えるわけだから。物自体が認識できないといっても、物自体は原理的に意識できないものだから、気にしてもしかたがないわけでしょう。

九、可想界に属する存在

意識には現れ得ざる物自体故になぎとは言われぬものを
感覚の束が事物と言ふものの、現れの元外にあらざるや

この吾とかこめる世界（コスモス）あるならば、作りし神の
あらであるまじ

物知りて何なすべしか決めし故、その主体たる魂（ニコロ）
あらずや

榊：たしかに物自体は原理的に存在を実験観察で確かめられるようなものではありません。しかしカントは現象界と可想界の区別を立てています。可想界というのは物事を認識する理論理性では存在を確かめられないけれど、実在すると考えられるものが属する世界です。物自体の他に神や魂も現象界ではなく可想界に属しているということです。

智子：つまり物自体は、理性では直接認識できないけれど、その現れである事物が存在している以上、それが可想界に存在することは否定できない。それと同じように、神や魂も理性が認識しようとすると二律背反（アンチノミー）に陥ってしまいます。だけど世界がある以上世界を作った神が存在するの
も確かだし、物事を認識し、価値判断を行っている以上、その主体である魂が存在するのも確かであるということです。

榊：そうですね。だからカントはイギリス経験論の存在と意識は分けられないという議論を採用しながらも、意識の主体を意識の内容から区別して、主観・客観の認識図式自体はデカルトを継承しているわけです。

陽一：だんだん意識と存在についてのスリリングな議論になってきて、頭の中が完全に真っ白という感じですが、要するに主体としての魂の实在をデカルトは説きました。つまり人間だけが自由に言語を操れるというのは、身体機械論からは説明できないから、神が生まれる前に魂を置き入れたのだからと言ったのです。カントも理論理性や実践理性として主体としての魂の存在を、可想界を仮定して守ったわけですね。でもこれも独断論だということですか？

十、魂の正体

**考える過程と別に吾ありて思惟を生むとは絵空事は
経験を重ねしうちに判断の基準が生まれ、吾ありとせり**

榊：ええ、デカルトに対してホッブズは魂の置き入れという作り話に反対しました。ホッブズは意識の運動と離れて意識の主体が存在するとは考えません。意識をイマジネーションという「薄れゆくメモリイ」の微粒子が互いに引きあったり、反発しあったりして働きかけあう過程と見ています。

その運動の仕方が経験によってパターン化してその人の個性が自覚されると自我として反省されるわけです。そうしますと、その仕方が基準になって物事を整理し、認識するようになり、自我が先にあって意識を統御しているように思われ、自我が誤って実体化されるということになります。

十一、認識図式の成立

**物事を客体として捉えるは、主体がありてその後のこと
感覚に生理対応重ねつつ欲を満たせり本能のまま
人のみは感じた中身を述語づけ己の外に物を見出す**

智子：でも主体としての魂の存在は、確かに実体的に思考機械みたいを示すことはできなくても、主体が存在することで物事を客観的に捉える認識というものが成立するのですから、主体を立てるということは哲学の出发点じゃないのですか。

榊：全くその通りですね。意識と存在が切り離せないことは確かだとしても、それを客観的实在とみなして、事物と事物、事物と人の関係を捉えていくのが認識ということなんです。その際、認識する主体の構造が問われることになりました。そして動物の場合は生理的な表象にたいして条件反射的に対応するだけです。知覚段階にとどまり、対象は事物としてつまり自己にとっての他者として認識されていませんが、人間

だけが、主体として対象に相対するので、事物や他者として物を認識する段階に達しているわけです。だからこの問題は人間とは何ぞやという人間論の問題でもあるわけです。

陽一：えらいややこしいことになってますね。対象は事物も含めて意識に現れた現象でしかない。でも対象はそれを己にとつて他者とみなす主体の成立によつて、意識ではあるけれど事物として捉えられる。それではじめて人間の認識だと言える。ということは人間の認識というのは、意識現象を事物だと錯覚することによつて成立するということになりませんか？人間は「狂ったサル」だということになりますね。

十二、認識論の逆転発想

物立ててそれを意識すとせしならば、意識以前に物ありきなり物こそは意識の束とみなしなば、意識は物の営みともみゆ認識を主観の行為と決め付けて、物の現れ気付かざりしか人間の意識を生みて自己保つ事物の営み忘れざらまし
認識を物の側から捉えたる認識論の逆転発想
人間を身体のみにかぎるまじ、事物含めた人間観へ

榊：それは事物を意識と対極的に捉えることを前提にしています。カントによるまでもなく、事物は感覚を統合したものです。感覚なり意識なりを体内の生理作用とみなすので、感覚ん。ですからこれらの感覚は単に肉体だけの働きではなく、

対象が肉体に対して行った印象の刻印でもあるわけですから、感覚は事物にも属していると言えるのです。

智子：ということは認識は主観の営みであるだけでなく、客体の営みでもあるということになりますね。客体が身体の感覚器官に働きかけて、自己の像を意識として形成していることや意識が事物に属していないと思われれるのですが、実際に感覚を抜きにした事物の属性はありません。空間感覚、軟硬感覚、色彩感覚、臭覚、形状感覚なしに事物は認識できませんすわけですね。

榊：そう捉えてはじめて意識内容を形成している事物が、実在として捉えられることになります。

陽一：しかし客体は別に意識もなく、主体性ももっていないので、働きかけるといふこともないのではないですか？

榊：それは意識が身体だけの活動で形成されていると捉える近代主観主義の誤りです。人間の行動は、身体だけに限定して捉えることはできません。社会的諸事物や人間環境を形成する自然的諸事物を含む社会的な諸連関の働きの中に組み込まれてはじめて、意識や行動が生じるわけです。

智子：それじゃあ、個人の人格的な主体性の成立の余地がなくなるのじゃないのですか？

榊：意識がさまざまな社会関係や事物の側からの働きかけで生じるとしても、それらを自己の置かれた状況として、主体的に捉え返し、それらに立ち向かう自己を確立する必要があるわけです。

陽一：その場合自己は何を己の立脚点とすればよいのですか？身体的な自己ですか、それとも家族ですか？あるいは組織や企業や団体を背負った人間ですか。地球環境などを考えると、地球全体の立場に自己を見出すということも大切ですね。

智子：それは当然、その人によってどれに重点を置くかで性格が決まってくるね。

榊：それを主体を抽象的に何者にも束縛されない自由な主体性に還元しますと、あれかこれかの決断を迫る実存主義的な人間観が生じます。もちろん人間は自由に考え決断するという性格がありますから、そう捉えることも大切ですが、現実の壁が強くて、がんじがらめに状況に絡めとられると、意識や行為を決定しているのは社会の構造だということで、主体としての人間は死んだと宣告して、構造認識さえすればいいというような構造主義に偏ることになりがちです。

陽一：それじゃあ、我々は人間をどう捉えればいいのですか？

榊：身体的個人や家族や社会人や企業や組織の構成員あるいは住民・国民や人類にいたるまでの人格的個人のあり方は様々ですね。人間の意識が自然環境や社会的諸事物から構成されていることも考えれば、それらを包括した人間概念も成り立つわけです。いろいろあるところながらるでしょうが、それらは連関しあって我々の意識を形成しています。その中で様々に模索して色々なレベルの人間性を調整しながら生きていくわけです。

智子：なんだか要領を得ませんね、はがゆくなっちゃう。そういう色々言われても結局、複雑な世の中だから一つの立場に凝り固まらないで要領よく生きなさいといわれているみたいです。

榊：主体を身体的個人や個人的エゴだけでなく、集団的な主体というものもあるし、事物として働く主体もあるし、組織や事物に身体が包摂されて生じる主体もあるわけで、それらが互いに他者として向き合う場面もあり、厳しい対立や緊張が生まれたり、連合が組まれたりもするわけです。そういうたダイナミックな関係を認識した上で、どうすれば自己の可能性が開花し、充実して生きれるかをいろんなレベルで実践的に生き抜くことが大切なのです。

第九話 ヤマトタケルの大冒険

目次

一、熊襲タケルを討つ	118
二、言霊の国大和	120
三、天叢雲剣	121
四、火中に立ちて	123
五、弟橘姫の入水	124
六、裳の裾に月立ちにけり	125
七、乙女の床の辺に	126
八、大和は国のまほろば	127
九、更に天翔りて	129

第九話 ヤマトタケルの大冒険

一、熊襲タケルを討つ

タケルなる強き男に抗つに弱き女に成るに如かずや

上村陽一は、気づいたらむせかえるようなアルコール臭のする人いきれの中にいた。いかめしそうな男たちがど派手な原色の衣装を着て、座って飲んでいる。丸太づくりだが、大きな宮殿の中だ。やんやの喝采を陽一に浴びせているのだ。

「なかなか見事な舞だった。さすが雅な大和の女だけのことはある。」なんだって、今度は女かよ。そういえば陽一は着物を着ていたのである。陽一はヨサコイしか知らない高校生である。よく見ると女装していたのだ。なんだこの場面は、この間家族で行ったスーパー歌舞伎の『ヤマトタケル』の熊襲の新宮の場面じゃないか。

ということとは自分はヤマトタケルとして活躍する小碓皇子というわけだ。ではこれから熊襲タケル兄弟を殺さなければならぬ役回りだ。

これはバーチャル・リアリティである。今回はバーチャル

だと陽一は分かっているつもりだった。とはいえ、本気でやらなければならぬ。本気でやらなければ、物語の途中で殺されてしまうかもしれない、バーチャル・リアリティの場合、役者の気合の入れ方でストーリーが多少変更してしまうことがあるらしい。つまりゲーム的要素が加味されているのである。

たしかにスーパー歌舞伎の『ヤマトタケル』を観たのだから陽一は二十一世紀初頭の青年である。それで梅原猛の原作も読んだのである。そこまでは憶えている。ところで俺の名前は誰だったのか。いかん、また記憶を喪いかけている。

小碓皇子を演じる前の自分は何を演じたのか、ええ、全く憶えていないじゃないか、これでは殺されて、次の役になつたときに過去の役割を全く忘れているのなら、そこに生命の継続性は全く自覚できないだろう。それなら死んだらそれでおしまいという魂の断滅論とどこが違うのだ。俺は今、この瞬間小碓皇子を生き抜くしかないのだ。そこで見事に熊襲タケル兄弟を滅ぼせば、次のステップに行けるのだ。負ければ俺は死んでしまうのである。

「おい、大和の女、何をぼんやり突っ立っているんだ。兄タケル様に焼酎のお酌をしてさしあげろ」陽一ははつと我に返り、しおらしい女声で言った。「これはこれは立ったまま夢を見ておりました。」「ワツハツハツハ、大和では立って

いても夢を見るのか、大和の大王も立ったままで熊襲征伐の夢など見ているのだろう。夢を見ているうちに逆に熊襲に攻め込まれることになるぞ」大爆笑の渦である。

陽一はそんな話には興味が無いとばかり、焼酎をそそぎ始めた。「なにしろ兄熊襲タケル様は底なしの大酒のみだそうですね。ひとつ豪快なところお見せ願います。」といわれると何か壺型の土器に入った焼酎をそのまま浴びるほどに飲み始めた。そして陽一にも勧めた。

誘いに乗ればたちまち陽一の方が先にへべレケになつてしまつ。上品に袖で隠すような素振りをしては、袖の中に流し込んでいた。「さすがに熊襲タケルは男の中の男」と一気飲みする度にはやし立てた。

兄タケルにライバル意識丸出しの弟タケルも負けていない。いつか兄弟タケルの酒対決となり大いに盛り上がった。単純な熊襲たちは、それぞれに飲み比べを始めみんなグテングテンである。

「あら、筑紫一のいい男に相手にされず寝てしまわれるのは、女の恥ですわ」と陽一は兄タケルに色目を遣った。厳しかった兄タケルもすっかりとろけ、眼を細めて陽一を抱きすくめたのである。その刹那、「ギャアー」と大熊のように両手あげて兄タケルが断末魔の叫びを響かせた。

胸からは真っ赤な血が消防の放水のような勢いで噴水した。さしもの勇猛だった熊襲の男たちも腰が抜けるぐらいに酔っていたので、戦う気力がなく、這うように逃げようとしていた。バーチャルの場合は本当に刺しているつもりでいいのである。本人は本当に刺しているのだが、実際は電脳空間での出来事ではないということなのだ。

やった、俺は人を殺した、俺は人を殺せた。俺は人殺しだ。でもこれは電脳空間だから架空現実にはすぎない、そのことを承知していたからやれたのか、それとも俺は本当は人を殺したかったのではないか、電脳空間の架空現実であるということを利用して、人を殺してみたいという欲望を実現したのではないのか、やはり俺は人殺しではないのか。

そんなことを考えるゆとりなどない、ここは戦場だ、良心に照らして自己の行為を検証などしていたら、いくら命があつても足りない。小碓皇子は兄タケルから大刀を奪うと逃げた弟タケルを背後から突き倒し、その尻から刀を差し込んだ。

呻きながら弟タケルは言った「わしを刺したのは誰だ、名を名乗れ」。「我こそは大和のスメロギの皇子、小碓皇子だ。」「お前は女に化けていたのか、また大和に騙された。それにしても単身熊襲の城に乗り込んで頭の首をとるとは勇敢な男だ。それに比べてわしは何と情けない、敵に後ろを見せて刀

で釜を掘られるとは、もはやタケルの名は恥ずかしい。一番勇敢なお前にくれてやるから、これからはヤマトタケルと名乗ってくれ、そうすれば俺の魂がお前に乗り移ってお前は、もつと強くなる。お前の中で私も生き続けるだろう。」「名前の中に魂が入っているという言霊信仰の一つである。

スーパー歌舞伎のような大立ち回りはなかったが、二人の頭を成敗すると、みんな恐れをなして従順になったのである。やはりスメロギの皇子は神なのか、それも一人で熊襲をやっつけるような荒ぶる神なのか、荒ぶる神が襲ってくると、雷神は轟き、暴風が吹き、抗う者達はことごとく殺されてしまう。荒ぶる神が去った後は野や山に屍が山積みになるのである。女に化けた小碓皇子は、荒ぶる神スサノウの再来と恐れられたのである。

二、言霊の国大和

父ならば死ねと言つたら死にもしよ言葉飾りて心隠すな

小碓皇子は帰路、様々な地方を従わせて凱旋した。強敵出雲は友達になって油断させ、まんまと相手を騙して征服した。まるで台風が九州から中国地方を通って、近畿に入るようなものである。荒ぶる神スサノウの再来に、皆首を竦めて恭順した。断っておくが『古事記』にヤマトタケルがスサノウの再来だと直接書いてあるわけではない、しかしそう解釈する

には十分根拠がある。

父スメロギは小碓皇子が大和に凱旋すると口先ではおおいに誉めそやした。既に亡き大碓皇子は父帝の女御になるはずの兄橘姫と弟橘姫の姉妹を密に囲っていたのだが、その姉妹を嫁にしてくれたのである。「橘姫」というのだから橘の薫りがするいい女なのだ。妹の弟橘姫のことは会う前から自分がずっと好きだった女のような気がした。その名を呼ぼうとしたが、どうしてもでこない、記憶が消されているようだ。三輪智子が演じているのである。

このように歓迎するように見せながら、すぐに蝦夷征伐に行くように命じられた。畿内に留めて置くとは何時暴れだすかわからないと恐れたからである。スメロギの理屈はこうである。スメロギは日の神の御子としてこの世を統治するのが役目であり、そのためには都にいななければならない。しかし、都から離れた地方では、すぐに都の統制から遁れ、貢をおろそかにし、独立して朝廷に逆らおうとする。それをいちいち帝が都を留守にして征伐するわけにもいかない。ここはスサノウの化身であるヤマトタケルが蝦夷たちに朝廷の威光を示してきて欲しいのだ。

蝦夷を成敗すれば、そこに朝廷の役所を置いてお前が統治してもいいのだとまで言った、つまり蝦夷の国をくれてやるというのである。何と美辞麗句でこの親父は息子を蝦夷たち

に殺させようとするのか、陽一は呆れ果てて口が利けなかった、蝦夷の国は大和の支配下にはない、どうしてそこをくれてやるなどというのだ。しかもタケヒコただ一人をお付としてつけてくれるだけである。それでどうして蝦夷たち何万人と戦えるのか、あっさり死ねといってくれたほうがましである。お前がいたら皆恐ろしくて安眠できない、どうか都から遠く離れて、蝦夷たちに討たれてくれと言わないのか。同じことでも大和より広大な蝦夷の国をやるといえば、それで帝の体面が保てると考えているのである。

三、天叢雲劍

スサノオと劍とタケルは異なれりそを一つとはいかな回路や

ヤマトタケルは伊勢神宮に叔母の倭姫を訪ねた。そこで帝から凱旋と同時に東征を命じられたこと、それは死ねというに等しいことを訴えたのだ。そこで倭姫は、スサノオが八岐大蛇から抜き出したとされている天叢雲劍と火打石を授けたのである。

「八岐大蛇とはこの大八島全体のことです。スサノオは嵐となつて大八島を吹き抜け、まつろわぬ者共を成敗されたのです。この劍は雲を集め嵐を呼び、敵をなぎ倒すとされています。この劍を肌身離さずもっていなさい。この劍こそスサノオの神そのものなのです。そしてこの劍を持つヤマトタ

ケルはこの剣が人として現われたものであり、スサノオの神なのです。「オイオイ、倭姫、なにを謎かけみたいな、禅問答みたいなことを言ってるのだ。」

「念のために断っておくが、この台詞もファンタジー用の台詞であって、『古事記』で倭姫がヤマトタケルをスサノオだと直接言っているわけではない。最近の読者は原作ときちんと照合して、原作との違いに作者の解釈の面白さを感じ取ろうとしないで、勝手に原作にもそう書いてあるのだからと思いついてしまう。後で違いが分かると騙されたような気になるらしい、実に嘆かわしいことである。」

遠征の旅に出てからタケヒコはどうも昔から知っている人物であるような気がしてきた。この世界に引き摺りこまれたのもこの男に関わっていたような気がしていた。この男なら倭姫の謎の言葉を説明してくれるかもしれない。

そこでその話をすると、「スサノオの神は黄泉の国を支配しているとされますが、野分がひどいとスサノオの神だといわれますし、嵐のような侵略者もスサノオとされます。また日の神アマテラスと荒ぶる神スサノオは、祭り事を司る帝と軍事を司る為政者の関係にも置き換えられます。実際には帝は祭事しかなさらず、大臣が政治をされる場合が多いですね。帝は徳で太陽のように世を照らされますが、大臣は少々手荒なこともするわけです。ヤマトタケル様は荒ぶる神と認めら

れスサノオの神の再来とされているのですから、スサノオの御神体である天叢雲剣を持つに相応しいのです。天叢雲剣は自分にふさわしい持ち手を呼び寄せ、その持ち手を自分の化身として自己実現を果たすのです。」

「どうも頭がこんがらがっているのだが、私という人間が、どうしてスサノオの神なのか、また剣という物体がどうしてスサノオの神なのか、私と剣はこのように別々の存在なのに、いずれもスサノオの神だということになって、結局三つの異なる存在が一つの同じものだということになっている、そんな馬鹿なことがどうしてあり得るのだ。」

「三輪山は神の山といわれています。大物主の神なのです。そしてそれは三輪山に住む白蛇のお姿をとって現れます。白蛇が大物主であり、三輪山でもあるのです。「陽一はどうして蛇と山が同一だと捉えられるのか、その思考回路が不思議だった。「異なるものを同じものだとすると、物事の区別が成り立たなくなるじゃないか。」タケヒコは少し苦笑した。「異なるものを異なるとだけ捉えてはいけません。正対時には正反対のものが同じものになったり、同じものが正反対のものになることもあるのです。もっとと人生をつまれますと、世の不思議を悟られるようになります。」

途中から後を追ってきた弟橘姫が、話に加わった。「そういえば、天照大御神は日の神ですから太陽のことですね。と

ころが神社には御神体として鏡が祭られています。つまり鏡が太陽だということでしょう。それから神がかりして天照大神の意志を伝える巫女が天照大神なのだといわれます。神と鏡と人が異なっていて一つだということですね。「陽一は言った。「それこそひどい迷信だとは思わないのか。」タケヒコはなだめる口調で言った。「オオ・ソレ・ミオと歌の文句にもあるでしょう。惚れた女は太陽のように思えるものです。迷信かどうか、やがて分かりますから、どうかご神剣を手離さないようにしてくださいよ。」

智子はあきれて言った。「あらヤマトタケルのお話は四世紀よ、そんな古くから『オオ・ソレ・ミオ』はあつたの、それが大八島に伝わっていたの。」タケヒコ役の神はおどけて言った。「ええ、なかつた？なかつたよね、こりやまた失礼しました。」

四、火中に立ちて

燃え盛る火中に立ちて我呼びし、その幸せに何を惜しむや

スサノオの現われであるヤマトタケルがやってくる、しかも大八島のご神体である天叢雲剣を携えている。これはまともにも戦っても勝ち目は無いということで、蝦夷たちは一計を案じる。恭順を装い、人々を苦しめている悪い神を退治して

くれるように頼み込んでヤマトタケルを草原におびき出し、草に火をつけて火攻めで殺そうとした。

ヤマトタケルは追い詰められ、火中に立ちて弟橘姫の名を呼んだ。絶体絶命のピンチに際して愛する女の名を呼んだのである。弟橘姫はもとより一緒に死のうと思つてついて来ていた。三人でどう考えても蝦夷に勝てるとは思えない。

もしヤマトタケルの帰りを待つていたら、永久に戻らない確率が圧倒的に大きいのだ。でもついて行けば、一緒に死ぬ確率が高いのだ。正妻である兄橘姫はヤマトタケルの帰りを待つているが、それでは死に目に会えないし、ひとり老いさらばえるしかないのである。それに比べ弟橘姫は臨終の決定的な瞬間に自分の名を呼んでもらえたのだ。それだけで十分であり、何時死んでも全く悔いは無かつたのである。

ヤマトタケルは火攻めから免れるために剣で草を刈り始めたのだ。なんとしても陽一は智子を、もつとも智子という名は思い出せなかつたが、自分がいわば前世から愛し続けている女を助けなければと思つた。すると無意識に剣を抜いて草を刈つていたのである。そして倭姫からもらった「火打ち石」で迎え火を熾したのである。すると形勢は大逆転してヤマトタケルは蝦夷を征伐することに成功した。それで草を刈つた剣を草薙剣とよぶようになったのである。

タケヒコは草薙剣と火打ち石という守り神が守ってくれたことをさかんに強調した。「これでヤマトタケルが草薙剣と火打ち石という物神と一体だということがお分かりになられたでしょう。小碓皇子は、小碓皇子だけではスメロギの皇子としての神通力は発揮できません。物神と一体となられて始めて荒ぶる神となられるのです。」

弟橘姫は、こうタケヒコに洩らした。「私にとっては、小碓皇子が火の中で私の名を呼んで下さった、そのことの幸せだけが意味があるのです。草薙剣と火打ち石などという物神のお陰で、一緒に死ぬことができなかつたのがむしろ悔しくさえありますわ。」

ヤマトタケルは「果たして、この剣が天叢雲剣でなくて、ただの剣だと駄目だったのか、火打ち石も伊勢神宮の倭姫からいただいた火打ち石だから助かつたので、他の石ころなら駄目だったのか、私には分からないね。だって熊襲征伐では剣も石もなかつたのだよ。」タケヒコは訝しそうに言った。

「それは油断です。たしかにあなたには知恵と勇氣がおありだ、なかなかとつさには草を薙ぐとが、迎え火で応戦するなどの知恵は思いつかないものです。熊襲タケルを討たれた時も、熊襲タケルという最も強くて硬い者に対抗するのに、こちらも強くて硬いもので対抗してもためて、最も弱くてやわらかいものつまり舞姫となつて対抗された。」

しかしそのようなご自分の天才にのみ頼られるのはとても危険です。そういうアイデアはそうはたびたび思いつきません。物神に辛うじて守られるということがこれからもたびたび起こるでしょう。物神も含んでこそそのヤマトタケルだということをごぞお忘れなく。」

五、弟橘姫の入水

汝ははやタイタンの妃や水底に棲めるなまずの餌食ならずや

相模の走水から船にのつて武蔵の国に向かう途中で嵐になる。トスタリという占い師によると、海の神に小碓命の一番大切なものを捧げないと、海は静まらないと言うのだ。小碓命にとつて一番大切なものはと言えば、それは弟橘姫である。弟橘姫を犠牲にして、海神に捧げるとみんな助かるというのだ。小碓命は断固拒否しようとしたが、事情を知つた弟橘姫は海に入つて海神の妃になりましたよと承諾したのだ。

「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて、問ひし君はも。」と辞世の歌を詠んだのだ。

陽一は、あの時絶体絶命で死に直面して、自分にとって一番大切なもの、命に代えても守りたいものは弟橘姫だと思つた。それで名を呼んだのだ。その真実の愛を貫くのなら、ここで一緒に死ぬ道を選ぶべきではないのか、一人の愛する女

を守れなくて、蝦夷を征服したとて何の意味があるのか、「俺も一緒に死にたいのだ、お前を海神にとられるくらいなら一緒に死んだほうがいい。」

タケヒコはなだめた「お気持は良く分かります。女ひとり救えないで、どうして国を救うことができるのか、武力で蝦夷を抑えても、またすきあらば蝦夷は背くに違いない。とお考えなのでしょう。」

でもこうして熊襲や蝦夷たちと戦ったり、交流したりして、彼らの苦しみや哀しみ、また人情にも触れられた。そのあなたが、生きて都に帰られて初めて大和の国は大八島を治めることができるのではありませんか、あなたは自分の恋に死ぬばそれでいいかもしれませんが、遭された人々の想いはどうなるのですか。あなたについてきた私はどうなるのですか。」

弟橘姫は海の藻屑と消えた。かくしてヤマトタケルはまつろわぬ蝦夷たちを、あるときは吹きすさぶ嵐スサノウとなつてなぎ倒して、屍の山を築き、あるときは春風のごとく恩恵をもたらして恭順させた。天叢雲剣つまり草薙の剣の威力は蝦夷たちを震え上がらせたのである。

六、裳の裾に月立ちにけり

裳の裾に月立つとせば雅なり穢れの色に心ときめく

東海、関東のまつろわぬ蝦夷たちを恭順させて、ヤマトタケルは尾張の国まで戻ってきた。尾張の国を支配している豪族の館に逗留したのである。ヤマトタケルの華々しい活躍は都にも鳴り響き、反ヤマトタケル派の継母の皇后が身罷ったこともあり、都ではヤマトタケルを救国のヒーローとして歓迎しようとしていた。帝からは尾張の豪族にあてヤマトタケルにこれまでの冷遇をわび、都に戻ったら大いに政治の改革に力をふるって欲しいということづてがあつたのである。つまり大和に戻れば、ヤマトタケルは実力ナンバーワンの宰相になれるし、次期スメロギの地位は約束されるのである。

ただし、伊吹山の鬼たちとそれを統率する山神たちが暴れているので、彼らを鎮めてきて欲しいという注文つきであった。あと一仕事だなとヤマトタケルは軽く考えたのである。これがまずかった。最後の詰めが甘いと結局失敗するのである。

尾張の豪族にすればヤマトタケルという王位を約束された人物と関係を作つて、中央政界に進出し、尾張での地位を固めるチャンスである。大いに歓待し、娘を嫁がせて縁戚関係を持つとうとした。ヤマトタケルが蝦夷征伐に出かける際、立ち寄った際にミヤズヒメは密に小碓皇子に憧れていた。夜這いを期待していたのである。しかし皇子は妻たちを大和に残

してきたので、気が引けてそんな気になれなかったのである。今度は凱旋であり、気分も高まってミヤズヒメを抱く気は十分にあったのだ。

ところが歓迎の宴席でミヤズヒメの裳裾に月経の血がついてしまった。月経の血は穢れとして忌み嫌われるものである。

「ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る鶴 弱細 手弱腕を まかむとは 我はすれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり(天の香具山に夕方に、とんでいる白鳥のくびのような、弱く細いおまえの腕、そのなよなよした腕と私の腕をくみ合わして、おまえを抱こうと思つて帰ってきたのに、おまえとゆっくり寝たいと思つてきたのに、おまえの着ているはかまのすそに月が立っているよ)」小碓皇子は舞を舞つて、ミヤズヒメへの想いを歌った。

「高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの年が来経れば あらたまの 月は来経往く うべなつべな君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ(私は日のように輝いている命様のお帰りを今か今かとお待ちしていましたが、命様はお帰りにならず多くの年がたつて行き、多くの月が立って行きました。多くの月が立って行きましたので、あなたを待つて、私のはかまの裾に月が立つのも無理はありませんよ。)

「ミヤズヒメも舞を舞つて、返歌を返した。

「月経」という汚れたイメージのものを「月が立つ」という美しいイメージに変換することで、昇華しているのだ。そこに小碓命の優しい感性があふれている。本居宣長も「伏す猪の床」といえば無粋の極みのような猪でさえ、風流を感じさせるものだとの歌の効用を賛美している。返歌の方はウィットにあふれているのだ。待ちくたびれて「月日が経った」ということと「月経になった」ということを掛けているのである。なかなかうまいかけ言葉だ。ところでせつかくの婚礼に月が立ってしまったので、セツクスはしなかったのかというと、それがしているのである。

ミヤズヒメは婚礼を承諾する条件を出している。これはスパー歌舞伎の台本の話である。当時の地方豪族の娘が皇子にそんな条件を出せるはずはない。現代女性の共感を得るための梅原猛の気の効いた発想である。つまり戦はもうやめてくださいというものである。女は戦士の帰りを待つ、しかし戦は死と隣り合わせで帰らないことが多い。そんな哀しい思いはもうたくさんだというのである。

七、乙女の床の辺に

劍持ち震え上がらせたはむけるやがて劍に身を滅ぼせり

ヤマトタケルは最後の戦に出かけるのに草薙劍を置いていく、ミヤズヒメとめくるめく時を過ごした床の辺に置いたま

までかけるのだ。いかにも相手をやつつけようというのではなく、おだやかに恭順を促そうとしたのである。よく話を聴いてやり、立場を尊重してやれば、いつまでも反抗ばかりしていられない筈である。そういう姿勢を示そうとした。それで敵の警戒心を殺ぐために草薙剣を置いてきたのである。

ミヤズヒメは心配そうにたずねた。「本当に大丈夫ですか、剣を置いて」、陽一は微笑んで言った。「剣は所詮剣さ、こんなもので恐れさせて支配したって、そんな支配は長続きはしない。相手の心を理解してあげ、相手が安心して暮らせる条件を示してやれば必ず従ってくるものなんだ。血を流さずに治めるためには剣はかえって邪魔なだけさ。」

ところがこれが裏目にでた。ヤマトタケルは神通力の源の剣をもっていない、かれを倒す千載一遇のチャンスである。鬼たちや山神たちは大和に虐げられ、殺された大八島の全ての神々、人々、自然のすべての恨みを背負って、全員が玉砕してもヤマトタケルを殺そうと総力戦を挑んできたのである。

先ず激しい雷で攻撃してきた。体が冷え込み、多くの傷を負う。そこへ鬼たちや神々が特攻攻撃でぶつかってきた。ヤマトタケルは大和朝廷への怨念を一身に引き受けなければならなかったのだ。もともと大和朝廷から疎んじられ、抑圧され、殺されかけたという点でヤマトタケルと熊襲、蝦夷、伊吹山の鬼や山神は同じなのである。

その彼らの怨念を誰かが犠牲になって受け止めてやらなければ、彼らは大和朝廷に恭順できないのである。その意味でヤマトタケルは自らの身を捨てて、古代国家の統合の礎になったのである。

「嬢子の 床の辺に 吾が置きし つるぎの太刀、その太刀はや。」

この歌が辞世の歌である。草薙剣置いてこなければ、決して負けることはなかったのにといいことである。逆に言えば草薙剣があつてこそそのヤマトタケルだったということだ。

八、大和は国のまほろば

幾重にも山脈囲める大和なる吾がふるさは国のまほろば

瀕死の重傷を負ったヤマトタケルは、三重の能煩野というところで力尽きて命果てる。

「倭は 国のまほろば たたなづく 青垣、 山隠れる 倭し美し。(大和は素晴らしい国だ。重なり合って、青垣のようになっている山々に囲まれた大和は実に麗しい。)」

陽一は古文の授業で暗記させられた国徳歌を息絶え絶えに詠った。ふと懐かしい高校での授業風景を思い出した。飛鳥の遠足の感想を古文の初老の教師が各生徒に発表させていた陽一は「飛鳥は別に他の田舎と大して変わらないと思います。古文や歴史の授業で学んだことを連想するので、特に風雅を感じるのかなと思いました」とそっけなくいうと、古文の教師は「駄目です！」と頭ごなしに否定した。

いかん、それどころではない、雑念に付き合っている場合ではない。小碓皇子は今將に臨終の時を迎えようとしているのだ。死ねばどうなるのだ。俺という存在は消えてなくなるのか、高校の教室に戻る保証はあるのか、今過去に自分が演じた役柄についての記憶は全て消えている。とすれば小碓皇子の魂はそこで断滅してしまふ。今たしかに高校生であった自分が想起された以上、自分は小碓皇子でなくなっても、別の誰かとなって別の人生を生きることになるかもしれない。しかし小碓皇子であったことは消去されているから、

全く別人が生きているに過ぎない。それは自分だとしても、小碓皇子の命とは別の命ではないのか、命としては連続しているとしても、そのことを意識できないとすれば、それは信仰上の信念のようにたよりないものではないのだろうか。

「ああ、俺は生きたい、生きて大和に戻りたい。」臨終の

時になってなんと自分はかけがえの無い生命を軽く扱ってきたのだろうかと後悔に胸がつぶれそうに痛かった。

「命の全けむ人は、豊薦 平群の山の 熊白儂が葉をうずに挿せ その子。(命に溢れている人は、山深い平群の山の熊のように大きな白儂の葉をかんざしにさしなさい、お前たち。)」

兄大碓皇子は、少年のころから迷信が嫌いだった。特にまじないのようなものは最も軽蔑していた。弟小碓皇子が体にいい、長生きするという言い伝えから「熊白儂が葉をうずに挿せ」という言葉にあやかろうとして、自分も挿し、兄にも挿すように手渡したが、「馬鹿だなあ、こんな迷信を信じてはだめだよ」と笑って捨ててしまった。その兄は結局弟に若くして殺されたし、兄の言うままに、熊白儂の葉を捨ててしまった小碓皇子も臨終に直面している。若く元気で命が溢れているときは、自分の体内にある命をつい過信してしまうのだ。檜の葉っぱなんか自分の命とは無関係だということになってしまふのだ。

たしかに葉っぱをうずに挿したところで、寿命を長くする効果などあるはずは無い。しかし檜の葉がなければ、榎や椎などの森がなければ、人間は美しい水や空気や動植物との生命のつながりを保てなくなってしまう、うずに挿すのは檜の木を大切に思う気持ち育てるためである。

「タケヒコ、大和が美しいのは、周りを幾重にも緑の山で囲まれているからだ。山の森の緑が、美しいおいしい空気と水をもたらしてくれからだ。大和の国も自然と共に生きる熊襲や蝦夷たちに囲まれてこそ、豊かな文明を築くことができるのだ。どうか彼らが自然の中で幸福に生きられるように、してあげてくれ。これからは大和も彼らの素朴な自然と溶け合った暮らしから学ぶべきだ。森よ川よ空よ畑よ、そこに棲む生きとし生けるものたちよ、大いなる命の輪の中で生まれ、死んでいく、そしてまた生まれ死んでいくのか。私という存在はその大いなる命の現われにすぎなかったのか。」

タケヒコは嘆いた。「ああ、あれほどご神剣を手離さないようにとお願ひしておりましたのに。ご神剣さえ着けていればけつしてこんなことにはならなかったのに。」ヤマトタケルは微笑んだ。「たしかにその通りだ。しかしそれではいつまでも私はスサノウでいなければならない。あらゆる神から遁れたかったのだ、私は乙女の床の辺に剣を置いた。剣など無くても戦えるという慢心もあつたかもしれない。しかし剣に支配され、苦しめられてきたのは実は私自身であつたのだ、私がヤマトタケルとして現れたスサノウに背いたのだよ。」

「でもそれではもはやあなたはあなたではなくなつて、それでああなたは死ななければならなくなつてしまわれた。」小碓皇子は頷いて息絶えた。

九、更に天翔りて

白鳥はいずこ目指すや天翔りいとしき女は他人の妻かは

ヤマトタケルは能煩野に立派な陵墓に埋葬された。しかしそこから霊が白鳥になつて飛び立つたのである。霊が白鳥になるといつのはどういふことが、当時の大和における霊信仰について誤解のないようにしておこう。霊というのを物質に対する精神のように捉えてはならない。というのは霊は「たま」とも読む。それは勾玉のような玉石の姿をとることが多いからだ。「もの」というのも、この霊の意味で使われることが多い。つまり魂や霊と呼ばれるものは決して非物質的な存在であるとか、目に見えない非物質的なものだと思えられたいのである。

霊は肉体が死んだらそこから抜け出して異界に行こうとする場合が多いが、この世に未練があつてこの世に怨霊として残る場合もありうる。このように書くとは作者が怨霊信仰をしていると誤解する者がいるので、あくまでも解説であること了解していただきたい。

つまり古代人は霊は変態すると思つていた。異界へ行くには、鳥や蝶になつて飛んでいくのである。誤解されやすいが、鳥の中に非物質的な霊があるというのではなく、鳥が霊の姿なのである。海のかなたの異界へ行くには魚になつてもいい

のだ。鳥や魚に死体を食べさせるのは霊が鳥や魚に入って運んでもらえると考えていたからなのだ。霊は動物になるとは限らない、雲や霧になる場合もあるし、石の中から勾玉の姿で取り出される場合もある。

だから異界に行った霊は、非物体的な精神的存在として異界で暮らしているわけではない。異界で再び母の胎に入って誕生するのである。つまり異界もこの世と同じような世界であり、肉体を持っていて、食生活が必要なのである。

だから大胆な解釈をすれば、驚くなけれ、いや驚いて頂戴。鳥や魚や石や雲やつまり自然のあらゆるものといつてもいいかもしれない、それは我々の命が、つまり霊が姿を変えていくというわけだ。つまりアニミズム、万物に霊が宿るといふ信仰は、この列島の場合、人間が自然になつていて、自然は人間の霊の姿なのかもしれない。

何、異界で死んだらどうなるのかつて、その霊はこの世に戻つてきて、セツクスによつてまたこの世に誕生すると考えたのだ。つまりこの世と異界を行つたり来たりする。往還するのである。こういう信仰は縄文時代からあつたらしい。

だから肉体の死は、完全な肉体の消滅ではない。つまり、その芯ともいふべき靈魂は死なないのである。ただ質量保存法則では到底理解できないので、大きな鳥になつたり、雲に

なつたりもする。さすがに異界までいくと消耗するので、ちつちやくなつてしまふセツクスで母の胎に入り、そこで育てられなければならない。というように古代人の多くは解釈していた、もちろんそんなことは迷信だと思つていた人もいただろう。

ヤマトタケルの霊は白鳥になつて能煩野を飛び立つた。でもすぐには異界には行かない。なぜなら大和に帰りたいという思いが切実だから、思いが残つて異界に行けないのである。じゃあ大和へ飛んで行つたのか、それがね、やっぱり大和より惚れた女だ。陽一は智子に惚れていた。ヤマトタケルは弟橘姫が一番好きだ。海神の妃になつたので海の方に飛んでいったのだ。いや飛んでいこうとした。それを観ていた兄橘姫は息子の手を引いて、一緒に海に入ろうとしたんだ。つまり「そんなことすれば、あなたの妻子も死んでしまうよ」と脅かしたのだ。

そして「弟橘姫は海神の奥方だよ、今頃あなたがいつたつて、迷惑するだけだろう」と説得したわけだ。それもそうだろう。「それより私の里に来ておくれ、河内葛城に立派な御陵をつくるからさ。ほらごらんよ、あなたが大和に凱旋した夜の、あなたの息子だよ。あなたが熊襲や蝦夷をやつつけて活躍してくれたおかげで、この子は帝の位を継ぐ第二継承権が認められている。私の里に来て、この子を守つてくれない

かい。そしたら皆幸せになれるのだよ。」

どうして庶民の女将さんみたいな口の利き方を皇子にするんだって、いやその方が説得力があると思つて、でもなんだから変だな。ともかく白鳥は息子の存在に感動したのか、河内葛城に飛んで行った。海沿いにね。ずっと弟橘姫を気にしながら、ぐるっと紀伊半島を回つていったのだ。

数年後、また白鳥は飛び立ったそうさ。今度こそ大和を指すのか、それとも異界へ行くのか。ヤマトタケルの息子は仲哀天皇だが、彼は実は筑紫に都を構えている。どうも景行天皇の息子成務天皇とは同時期に大王になつていたらしいのだ。ということは大和ではヤマトタケルの系統は斥けられていたらしい。つまり白鳥は大和へは入れなかった。ではこのお話の続きを知りたい方は、「やすいゆたかの部屋」の創作コーナーにある『オキナガタラシヒメ物語』をお読み下さい。

第十話 本居宣長の青春

目次

一、法輪寺の虚空蔵菩薩	132
二、賞樂の具	133
三、私有自樂	135
四、夕日に立つ女	139
五、もののあはれを知る心	143

第十話 本居宣長の青春

一、法輪寺の虚空蔵菩薩

法輪寺秘仏観たさに並んだが、見るものを呑む化け物ならずや

上村陽一は行列の中にいた。一体何の行列なのだろう。寺の周りを十重二十重に取囲んでいる。凄い行列である。都中の人々が総出で拝観に来ているのかもしれない。

陽一は周囲の人々に恥はかきすてとばかり尋ねた、「このお寺は何宗ですか。」呆れ果てたと言わんばかりの視線が陽一を射す。「おまえさん良くそんなことも知らないで並んでいられるね。『虚空蔵法輪寺』と呼ばれる西山法輪寺じゃないか。行基菩薩の開かれた古義真言宗らしいよ。今日は開闢以来の本尊の秘仏虚空蔵菩薩の御開帳なのさ。」

「そんなに凄い仏像なのですか。」陽一が訊ねると、「左なんとかという大工さんが龍の彫り物を奉納しはるのに、虚空蔵菩薩にお願いしはつたら、目の前に龍が天に昇るのが見えはつたという話やおへんか。」「書の神様みたいにいわれはる空海はんはご存知でっしゃる。なんでもその空海はんの高弟道昌僧正とおっしゃるお方が百日間の勤行の末に虚空蔵菩薩を空中に凝視しはって、それを見事に一木造りの仏像

に仕上げはつたという名品でおます。それで空海はんが魂を入れなさつたという噂でおます。」「ほんまはだあれも観てひんさかい、ほんでよけい観たいんでっしゃるな」

それにしてもこの行列は異常である。しかもすると人々は法輪寺に吸い込まれていく。一日二日はかかりそうに思えたが、小半時つまり三十分ぐらいで順番になった。

入ろうとすると「宣長さん、本居宣長さん」と呼ぶ声がある。「あんただよ、本居宣長さん」

「ええ、おれが本居宣長だったの、あの『古事記伝』で有名な」

「『古事記伝』？そんなの知らないよ、じゃなくて、掘景山先生の儒学の塾に寄宿してさ、小児科のお医者さんの修行をしている私の同僚の本居宣長さんで、わたしが上柳敬基じゃないか。」

「という時代は江戸時代だ」

「オイオイ、気が変になつてるのか、虚空蔵騒ぎに巻き込まれて。今年は宝暦七年だよ。」という京遊学の最後の年である。

「やはり虚空蔵菩薩の拝観はやめた方がいいよ。」

「どうしてだ、なかなかの人氣でとても珍しい仏像だそうじゃないか、医者か仏像を拝んだら医者としては失格だというのか。」

「仏像のご利益なんぞ信仰するのは、迷信だから、物事を合理的に見なければならぬ医者としては問題だ、それに儒学修行していて仏像見学というのも不謹慎だ、それでおまえさんに忠告していたじゃないか」と念を押してきた。

「なんだえらく堅いことを言うのだな。俺は好奇心が旺盛でね、珍しいものがみたいんだ。みんながご利益があると有難がっているというので、一体どんなお姿なのか、見てみたいというのが人情じゃないか。」

敬基は深刻な表情になって言った。「うんうん、そりあも面白い、分かっているよ、わざわざ駆けつけてきたのは、どうもこの秘仏を観ると、観た者も消えてなくなるといふ噂を聞いてね、それでもしものことがあると大変だとあんたの身を案じて知らせにきたんだよ。」

「ええ、こりやまた物騒な噂だね。しかし仏像を観たぐらいで消える筈はないはずだ、迷信を信じない敬基さんらしくないじゃないか。」

「『火のないところに煙は立たず』だよ。何事にも裏があるもので、迷信だってそれなりの根拠があつていわれているので、危ないことは、何かあると思つて近づかないほうがいい。『君子危うきに近づかず』と『論語』にもいふじゃないか。」

「心配してくれてありがとう、やばいと感じたら逃げ出すよ。」

まあこれだけ名の知れたお寺さんが、参拝者をこつそりかどわかすような無法なことはするはずはない、なあに根も葉もない中傷だと思つよ。どうせ評判を妬んでのことだろつさ」

陽一も少々恐ろしくなつてきたが、どうせ乗りかけた船だと堂内に入つてしまった。よっぽどの秘仏とみえて、拝観ははしごを下つて地下にいく。そして狭い扉から一人ずつ入るのだ。

ぼんやりしているが、虚空蔵菩薩らしき小さな物体が遠くにあるようだ。そこから真っ白い光が大きな地下空間に出ている。壁は真っ白で何も無い、ガランドウなのだ。たくさん参拝者はどこに消えたのかだれもいない。吸い寄せられるように虚空蔵菩薩に近づけば近づくほど眩しくて、何も見えなくなる。

「なるほど、虚空蔵菩薩に違いない。全くの虚空なのだから」

意識が朦朧となつて虚空蔵菩薩に呑み込まれていった。「こうして拝観にくる生命を無に返してその気を取り込んで生きているのか。」

二、賞楽の具

宣長は儒学だけでは収まらず面白ければ神も仏も

陽一はうなされて目が覚めた。「本居さん深酒が過ぎますよ。えらくうなされておられました。」同部屋の上柳敬基と清水吉太郎が顔を見合わせて笑った。「法輪寺の虚空蔵菩薩の拝観は是非いこうよ。あれはすごいよきつと。」宣長はふたりを促した。

吉太郎は「秘仏公開の噂はどうもだれかの作り話だったようですよ。見せる場合は勅願で御門(天皇のこと)がじきじきみたいと仰った場合だけ、御門にだけお見せすることはあるようですが」と返した。

「それは残念だな。でも実物より、わたしの夢で観た虚空蔵菩薩の方が本物かもしれないよ。」

「本居さんのことだから、さぞかし麗しい女性のような虚空蔵菩薩だったのでしょうか。」吉太郎は決め付けた。

「密教系ですからね。密教では煩惱即菩提といえます。つまり官能の世界にこそ悟りがあるということですよ。如意輪観音像にしても随分色っぽいのが多いですからね。それがね、夢では違ってました。真っ白けてしてね、ガランドウなんですよ。」

吉太郎は腹を抱えて笑い出した。「ワッハッハッハ、そりゃあいい、それこそ虚空蔵だ、そいつは本物ですよ、宣長さん。」

敬基も一緒に笑っていたが、すぐに割り切れない表情に戻った。「それにしても儒学を学ぶ塾で秘仏のご開帳の話で盛り上がるのも不謹慎ではないですか」と水を差したのである。吉太郎は水を差されたので、笑いを抑えようとしている。

「そうですね。宣長先輩、一応我々は儒学を学んでいるのですから、お寺参りはほどほどにすべきです。」

宣長はお手上げの動作をしてみた。「吉太郎さんまでそんなことを言うのですか。儒教をお勧めの江戸幕府が、仏教のお寺の檀家になれというご時世ですよ。一つの考えに凝り固まらないで、色々学んでおいたほうがいいんですよ。唐の学問だって儒学に限らなくて、昔から諸子百家があつて、随分物事の捉え方にも色とりどりの違いがあります。」

堀景山先生は朱子学者でいらつしやるけれど、ちつとも枠に拘らなくて、陽明学や古学にも詳しいし、儒学の枠を超えて、老荘思想や歌学にも関心がおありだ。私は子供の頃から歌を詠むのが好きでね。もっとも下手の横好きだけれど、それでも学問としての歌の道を究めたいと思っています。そこは景山先生と気が合つよう、先生は歌論についてはなかなかのもので、儒学の勉強だけでなく、歌学でも随分教えていただき、所蔵の御本を利用させていただきました。」

敬基は少し興奮気味に言った。「景山先生のようにもう幼

少の頃よりお父上の薫陶で学問されて、今年七十歳ですからね。そういつ方と我々のように学問の道に入ったばかりの間とは立場が違うでしょう。まだまだ我々は儒学のなんたるかが分かっていないのに、学問は儒学だけじゃないなんて態度でいるとどれも自分の身につかないのではないですか。」

吉太郎はうなずいた。「『論語』『孟子』『大学』『中庸』をまずしっかり学んでからでないと、『詩経』『書経』『春秋』『礼記』『易経』などを正しく解釈できません。それができてはじめてそれ以外の書物を読む場合に、正しい立場から読めるようになるでしょう。」

吉太郎の読み方は確かに儒者の正統的な読み方である。しかしそれでは予め儒学を真理だと決め付けて、その信仰を固めてから他のものを批判するという立場である。それでは宗教ではないのか、儒学は物事を実際に即して見極めていく学問の筈である。

三、私有自楽

学問も吾が愉しみの具なるのみ花鳥風月それに同じか

朱子学の塾で朱子学を相対化するような発言は、物議をかちます。堀景山は、その年は体調を崩し気味だったので、全く取り合わなかったが、上柳敬基と清水吉太郎は納まらなかった。

た。それで宣長はこう言い訳した。「私の立場は医者ですからね。まずは漢方の医学に儒学が必要なので、それで学ばせていただいているわけです。決して学問で身を立て、藩や幕府で為政者として正しい政をしようという大それた考えは無いです。」敬基は頷いた。「たしかに儒学は世の中を運営し、人民を救うためにはどうすればよいかという、でかい志に貫かれていますね。」

宣長は付け足した。「ところが今の世の中はどつてしよう。我々のような医師の端くれがいくら学問したって、世を治める立場にはなれっこありません。たとえ武士の子に生まれても御大家の子でもないかぎり、藩政や幕政を仕切る立場には成れませんよ。儒学がいくら立派なことをいっていても、それを実行する立場にないので、私は政より歌をとります。孔子様も与したのは曾皙だったのですよ。孔子様だって楽しむところは『先王の道』にはなくて、『ひと風呂浴びて、歌いながら帰ろうか』というところにあるんです。」

吉太郎は苦笑した。「そりゃあ誤解ですよ、宣長さん、確かに面白い解釈だけど孔子様は政を整えるために歌や音楽を考えておられるのですから。孔子が音楽と政治を対立させて捉えているという解釈は、儒教にはなじみません。」

敬基も畳み掛けていった。「曾皙(曾參の父)は一介の士となつて若い連中と仲良くなり一緒に風呂に入り、歌を歌って、

友情を育み、その土地の人情を良く知った上で、どのような徳治政治ができるか考えようということ。はじめから宰相や重臣になって、実情や土地の人情も分からないのに自分の才覚や学問だけで政ができると考えるのは思いつがらだということ。だから孔子様は曾皙に与するとおっしゃったのです。」

宣長は納得いかない様子だった。半ば投げやりに言い放った。「ですから私の立場は治める側ではなく、治められる側ですので、その立場から必要であったり、役に立つたり、興味をもてたり、面白ければなんでもいいんですよ。」

吉太郎は反撥した。「何でもいいというのは言い過ぎですよ。やはり正しい学問でないと正しい政治はできません。仁義に基づく王道政治でなければならぬとしたら、権謀術数の法家の思想や、無為自然の道家の立場では困りますからね。」

「だから『文選』と一緒に読もうと言っているのです。陽一はどうして自分が読んだことも無いのに『文選』という題名を思いつくのか、不思議だった。どうも本居宣長が読んだ本の要旨などをバーチャル劇が始まる前にインプットしているらしい。」

「そこには諸葛亮孔明の『出帥の表』などいろんな名文が収

録されていますが、どれも儒家の思想にだけ凝り固まるのではなく、時と場合に応じて法家の権謀術数を用い、道家の無為自然を応用しているのだそうです。つまり予め何時の時代にも通用する、またどんな社会でも正しい思想というのがあられるわけではないのです。その時代や社会にあった思想を選べばいいわけです。」

敬基は怪訝な顔になった。「時と場合によつたら儒学も不要で有害になることもあるような捉え方ですね。そりゃあ孔子様も仰つておられるように、道のない時代もありましたでしょう。そんな時代には君子は隠れていなければいけません。戦国時代だからといって道に外れた卑怯なことや暴虐なこととはするべきじゃないということですよ。」

吉太郎は苦しそうに言った。「やはり戦うことが天職の武士にすれば、命を惜しんで隠れていることはできない。戦国時代の武將たちのように、時には暴虐無道と言われることもしなければならなかった。その意味では儒学だけでは駄目ですね。だが天下泰平の江戸時代にあつては、戦の世に戻さないためにも、仁義に基づく王道政治を貫くべきでしょう。」

宣長は肩をすくめた。「儒学で治まるのなら、治めていただいて結構なのです。ただ治められる側の言い分としては、なんでも儒学で仕切つて窮屈にされては困るということですよ。仏教のことは全て迷信だといって軽蔑されては困ります

し、神の道も古くからの日本の信仰を儒学の理屈に合わない
と統制されても困ります。また歌の道も儒学に合わせて忠義
や孝行の歌ばかり作れといわれては大変です。それぞれの領
域には受け継がれてきた伝統や信仰があるわけですから、そ
こは大目に見ていただかないとね」と釘をさした。

敬基は、宣長が治められる立場に逃げているというのが不
満だった。「そりゃあ私だって下級武士の家に生まれたから、
学問をやったって、それで藩政を仕切れるわけじゃありません。
でも儒学というのは、そういう治める治められるという
ことを超えていて、どうすれば心を真っ直ぐに生きられるか
ということだと思っております。」

私は父からまず『孝経』そして『論語』そして『大学』こ
れを徹底的に暗記させられました。毎日その一つ一つの玉の
ような言葉と向き合って生きているつもりです。そういう生
き様抜きには語って欲しくないのです。」

陽一は敬基の言葉に迫力を感じた。なるほど学問というの
はただ学んで覚えるだけでは意味がないので、学んだことに
生きなければならぬ。学んだことに生きていくという実感
をもって今まで生きてきたことがあるだろうか、試験で点数
を取るための学問では駄目なのだ。

「敬基さん、それは素晴らしいことです。しかし書物には
四書五経しかないわけではないのです。儒教には二千年以上
の歴史があつて、それなりの重みがあることは認めますが、
日本にも素晴らしい歌や物語の世界があつて、そこにはそれ
ぞれの歌や物語に生きるといふこともあるのです。」

吉太郎は怪しんだ。「そつかなあ、歌や物語は楽しみの方
界であつて、学問として捉えると堅苦しくなつてかえつてそ
れに生きることができません。やはり学問としては儒学だと
思いますよ。」宣長は少々議論に疲れを覚えた。

「受け止め方は人それぞれでいいと思つたのです。ただ私は、
読んでいて、胸に響く言葉というのがあり、愉しいと思つて
とがあります。それは儒学の中にもありますが、諸子百家全
てにもあります。もちろんこの国の歌や物語にも味わい深い
言葉や思想が学べるのです。どれも私にとって、良く分かる
かどうか、使えるかどうか、面白いかどうかが大切なのです。
どれも皆、私が愛でて愉しむための道具に過ぎません。」

敬基は険しい表情になつてきた。「宣長さん、それは放蕩
息子の学問論ですよ。あなたは松坂の豪商の息子だから、お
母上からの仕送りで食べている。もう大して資産は残つてな
いそうじゃないですか、それをあなたは有難いとも思わない
のですか、湯水のように遣つておられる。物見遊山に行つて
は呑んだくれる。この前は祇園で遊んでおられたそうですね。」

そりやあたまに遊ぶのもいい、物見遊山もいい、女遊びも勝手です。でもね人生は遊びじゃない、学問は遊びじゃない、医術は遊びじゃないですよ、何もかも己の愉しみでやられたのじゃたまりません、宣長さん、世間はあなたの為にあるのですか、あなたが世間の為にあるのじゃないのでしょうか、人がこの世に生まれてきたのは、ただ己の愉しみのために生きる為ではなくて、世の為、人の為に何かお役に立つ為じゃないですか。

私はね、世間が自分の為に回っているみたいに思っていたら、きつとひどい目に遭うといつも父上からしかられてきたのですよ。」

「これはえらい剣幕ですね。たしかに私の感覚は豪商の感覚に近いかもしれませんが。大した豪商じゃないのにね。でもね儒学や剣術を習って、人民の暮らしを守り、平和を守るために献身しているつもりになっているのが武士です。己の身を犠牲にして世の為、人民の為に尽くしているつもりになっている。」

だが実際にはどうでしょう。お百姓衆は食うや食わずでやつとこさ、暮らしていて、娘を売りに出さなきゃ生きていけない者もいるのに、武士は年貢で召上げた米の飯をたらふく食ってるじゃないですか、飢饉の時だって、飢え死にする

のは皆お百姓だ、武士の飢え死になんてついぞ聞いたことはない。

本当は支配というのは、支配者の為に支配しているのに、儒教ではあたかも人民のためみたいに言う、とんでもないごまかしです。皆さん大好きな清貧の代表の顔回さんだって、自分は世の為。人の為に生きていますみたいな恩着せがましいことは仰らなかつた。彼は清貧を自分の愉しみだと言ったのです。

学問を物見遊山のように愉しむ、時代の支配原理になる思想を旨酒を目利きするように舌鼓しながら選り取る、まるでいい女を抱くように、あるいは歌や踊りを愉しむみたい学問できたら最高じゃないですか。」

敬基は宣長が傲慢に見えた。「世の中なんでも金次第で金さえあれば自由にならないものはないとばかり、道楽を愉しむお大尽というのもいるようですが、自分さえ愉しければいいとみんなが考えたら、世の中はかえって乱れてしまします。」

「そりやあ大いなる誤解です。私は勝手気ままを推奨しているわけではありません。人間には情というものがありません。自分が困っているときに人に助けられたらとても有難いもので、うれしいものです。」

そして人が困っているのをみますと、自分が困っていたことを思い出して、助けてあげて感謝されますとこれも大変うれしいものですね。

自分のことしか考えず、他人はどうなってもいいなんていうのは情なし人間です。人間は情が深いよう作られています。この情というものを大切に仲良く助け合って生きればいいわけです。

ところが儒学特に朱子学がどうも理屈にばかり拘って、情を押し殺すようなところがあります。」

吉太郎が穏やかに口を挟んだ。「身を謹んで理を極める、居敬窮理のことでしょう。それは情に流されて大切なことを見忘れたり、冷静に物事を見極められなくなるとはいけないという至極当然のことをいったままでです。あくまでも仁義に基づき政治を実現するための心構えなのです。陽明学者や古義学派の連中が朱子学にけちをつけているだけで、そんな揚げ足取りに乗っちゃあ困ります。」

「一つ一つの用語の問題ではなく、私が言いたいのは心の問題です。朱子学ではどうしても、理を見極めるということで、外から観察者の立場に止まっている気がします。見られ

ているものと同じ理を、見ているものが自分の中に見出すというのが真理だと受け止めているのではないのでしょうか。

私は見ているものは見られているものと一つになって、見られているものの心を知ることが大切だと思うのです。そうすれば見られているものの喜び哀しみが自分の喜び哀しみになります。花を見て花の心になる、月を見て月の心になるということなんです。この境地を自分のものにして愉しむということ。『私有自樂』となづけているのです。」

四、夕日に立つ女

鴨川の土手の夕日に稟と立つ京の女を永久に忘れじ

宣長は春の午後、上賀茂神社に乘馬に出かけた。神社近くに堀景山の今は故人の親友の家があり、四十過ぎの後家お駒が一人暮らしをして馬を世話し、乗馬好きの文化人などに馬を貸していた。宣長は商家の出身なので、乗馬経験がなかったが、堀景山の勧めで何度か付いてきて乗馬を練習しているうちに趣味になってしまった。京の郊外の鴨川土手などへでかけたりすると解放感があって、うさもすっかり晴れるものである。

堀景山の知人の後家といっても正妻であったわけではなく、農家から祇園に出ていた舞妓出身の芸者あがりを二号に

していたらしい。子供も生んだことがあるが、一人は誕生日を迎える前に風邪をこじらせて亡くし、もう一人も病弱で、お駒は大事に大事にそだてたが、疫病神の餌食になって八歳で亡くなってしまったという。

それで自分の子供を育てる代わりに、近隣の百姓や小商いの子供たちを集めて、読み書きそろばんを教える小さな寺子屋を開いていた。お駒は芸者の頃から文化人を相手にしていたこともあり、座興で即席に歌を披露していた。それで歌の道を自分なりに学んでいた。彼女の寺子屋では歌の詠み方を教えてもらえるということで、子供たちからも、親たちからも喜ばれていたのである。

きれいだこの出ということ、言葉遣いにも品があり、ときばきとして快活で、しかも柔らかい物腰で十歳以上若く美しく見えていた。景山はよくでかけているので、お駒に気があるのではないかと塾生たちは噂をしていた。しかし景山も六十台後半になっていたので、さすがに男女の関係とは見られていなかった。

宣長は景山だけでなく、お駒からも乗馬の手ほどきを受けた。そしてすっかりお駒を齡の開いた姉のように慕っていた。彼女の歌の才能は宣長より上だった。宣長はその意味でもお駒に敬愛の念を抱いていたのだ。とはいえ男女関係を求めるには齡が開きすぎている、ただ馬を借りる時と返す時に茶飲

み話のような形で話をしたり、年に何度か一緒に遠乗りに乗内してもらうことで十分幸せを感じていた。陽一はお駒のことをずっと慕っていたような気がしていた。お察しのとおり三輪智子が演じていたからである。

「宣長はんは今年で京遊学を終えられるのどっしやる。寂しゅうなるやおへんか。」そういわれると寂しさが宣長の胸にもこみ上げるものがあり、泣きそうになったが、「まだまだ都にいたいのですが、さんざおふくる様にはすねかじりをさせていただき、これ以上はとも無理なものですからね。まあ小児科医としてはなんとかやっていける医師は身につきました。歌の修行はまだまだで、お駒さんからもっと教わりたかったです。」

「あら、わたの歌なんかはほんの座興でっさかい、そんなおおげさにほめんといとおくれやす。それより、景山先生のお話では、清水はんや上柳はんとえらい大声で議論してはったそうやおへんか。」

「ええ、連中があまりに融通がきかないで儒字に凝り固まっているものだから、仏教や歌の道にも学ぶべきところがあるといったかったです。」

「ホ、ホ、ホ。そりゃああのお二人はお武家はんで、宣長はんとは学問に向かうお立場がまるで違いまっさかい。」

先生もいうてはりました。宣長はまだ若いな、お釈迦はんでも、孔子はんでも相手が納得でける話しかしはりませんでした。なんぼ正しいことをいわはつても、相手が正しいと理解ではれへんどしたら、間違つたことを主張しているのとおなじことやのにやて」

「そうですか。さすが景山先生ですね。景山先生はこのごろ急に弱りなさつて、寝こみ勝ちですね。先生にご心配かけたらいけませんね。いやご心配かけておいたほうが、お元気なのかもしれないが。それにしても京の鴨川の土手の夕日は格別ですね。離れたくないのです。京とも、お駒さんとも。お駒さんは夕日にむかつて立っている風情がありますね。」

「あら、夕日に向かって立つ女なんて、婆さん染みていややわ。」宣長はつい失言してしまつたと頭を搔いた。でも気を取り直して「だつてお駒さんは夕日と老人をつなげていくようなありきたりの言葉の使い方はされなかつたでしょう。夕日の赤に負けないくらい凜とした光彩を放つておられるので、風情を感じたのです。今のお駒さんの美しい姿をしつかり胸の中の画仙紙に焼き付けておきます。」

「それはさうどすな。わては野の草花とかちつちやな虫けらとか、さついう目に留まりにくいもののけなげなたくまし

さや、可憐な美しさに胸がときめくくちどすな。宣長はんは桜とか菊とか割と目立つのがお好きどっしゃろ。」宣長は苦笑した。

「いや、私など、鈍感ですから一般的に美しいとされている目に立つものにはしか目が行かないのです。私が言いたいの、そんなことでじゃありません。」

「あんまり年取つた女には美しいとかの言葉は避けはつたほうがよろしおすえ。もうとつくにさついうことには喜んだら、悲しんだりしとつありまへんさかいな。」

「それは無神経でした、お許し下さい。ただ私は今、この幸せを胸いっぱい抱きしめたいのです。さついうことは物事を理屈ではかり捉える儒学では捉えきれない。その点、歌や物語の世界では、感じるまま、心のままに素直に表現され、共感し合うことができます。どの学問が正しいとかではないのです。歌、物語が持っている感じる心の意味を吉太郎も敬基も理解できていないのです。」

「ウーム」お駒は動揺しさつになつて、その動揺を押し殺して言った。「宣長はんは相変わらず純情やね。さうどすな、子供の笑顔が一番やけど、花を見てきれいやなと感じたり、山の水がのど越しにすこく気持ちよかつたりしたら、生きてて良かったと思うものやし。それに困つてるときに助けて

もろたり、人に親切にしてくれてすくうれしかったりしますな。

胸が張り裂けそうになるぐらい人が好きになったりしたときもあるしね。お日さんが昇らるのを見て涙でそうになる時かあるけど、そういうときに、神さんや仏さんに思わず手合わせます。そういうときの気持ちのことゆつてはるのやな。」

「そうなんです。そんなときには花や太陽や虫けらや子供やそういった見られているものと見ている自分というのが、離れていないと思うのです。感動して我を忘れているときに心は物を表すだけの物の心になっています。その時に歌が生まれるのですよ。」

「そんな難しいことは分かりません。たしかに自分を忘れて歌になるときもあるし、そのさかさかまで、自分の中でいろんな喜怒哀楽が渦巻いているときに、溢れ出るように歌が噴出すこともありますね。」

「私はね、お駒さん、わがまま勝手に、好きなように生きてきました。大酒は飲むし、祇園でも遊んだ。大した資産があるわけでもないのに、京の都で放蕩していたように思われるかもしれない。でも私にとってはとても大切なことなのです。」

都にはこんなおいしい酒が集まってくる。立派なお寺や、鬻を争う町並みがあり、美しい女たちが芸を競い美を競う。今極上の都の女を抱いておかないと、松坂に引きこもってからは抱けませんからね。

もちろん松坂にもいい女はいるし、いい景色や建物もあります。でも都とはまた違います。日の本の都のいい物を存分に自分の心に取り込んでおきたいのです。自分のものとして愉しんでおきたいのです。その思い出があれば、どんな田舎にいつて辛いこと味気ないことがあっても、一番若くて元気で感じやすい時に、一番いいものを味わったのだから、納得できると思うのです。

医学にしても都で一番いいものを学んでいるので、それをこれからは松坂でお返しできるわけです。だからせつかく都に来たのだから、ケチっついてはだめです。どんどん自分に貢ぐべきなのです。それも大いに満足できるように目いっぱい享樂に耽るべきなのです。そうして初めて、これからの私の人生が拓けてくると思っっています。医者としても、学問でもね。」

「わては一番華やかな舞妓や芸者を務めさしてもらいたやろ。そりゃあ夢のような世界に見えるかも知れませんが、

ほんまはドロドロしたいやらしいこともようけおましたわ。綺麗なのはうわべだけでした。

そんなわてらを大枚なお金をつこつて、極上の女や思つて抱いておくれやす男はんもいましたけど、なんや納得いきまへなんだな。

わてがさわやかな気持で生きられるようになったのは、子供たちのことで哀しい思いをして、だんなさんの遺産を分けてもろつて、それを元手にお馬の世話をさせていたのだと、それでなんとか自分で生きていけるようになりまして。そのうえで近所のお子達を集めてお世話させてもらえるようになってからどす。」

「そうですか。それは胸が熱くなる話ですね。こりゃいかんわ。こつちが泣けてきよる。」

極上の女なんて言い方はけしからんですね。人それぞれの哀しみがあるのに、まるで女子を品ものように扱こつてるようですね。やはり商売人の家の根性は抜け切れんのやるな。でもそのことも祇園の裏まで知らんことには分からなかつたことで、祇園で遭こつたものは無駄になつてないと思えます。こつちやつてお駒さんと出会えたこと、このことの幸せは一生忘れません。かけがえのない宝もんです。」

五、ものあはれを知る心

山なれば山のこころがありたるや、その心知るものあはれよ

お駒さん、松坂に帰つてから早二年過ぎました。京での暮らしに未練が残り、京の町医者に養子になる話しにも飛びついたりしましたが、結局松坂に落ち着きました。小児科医の家業もなんとか慣れてきたようです。

人情がすたれたら医業も成り立ちませんから、歌・物語の修行もこつこつと続けております。峯松院会という歌会に属しまして、歌を続けておりますし、自宅を鈴屋と呼びまして、歌会の同人たちを中心に歌・物語の学習会を開催しております。

お駒さんとお別れして以来ずっと、「ものあはれ」について考えております。私はお駒さんの哀しみや喜びに胸が打ち震えました。お駒さんの哀しみを思うときに今も涙があふれます。お駒さんの夕日に立つ凜としたお姿を思い出すとき、さわやかな喜びがこみ上げてきます。

私の心がお駒さんの心に成つたのだと思います。これが「ものあはれ」を知るといふことなのです。松坂も伊勢も桜は見事に咲きました。満開の桜吹雪の中で華やいだ浮き浮

きした気持になります、これこそ桜の心なのです。

私もそろそろ身を固め、子供が欲しいと思つて嫁をとりましたが、家風の違いからか家になじんでくれません。母にも私にも心を開いてくれず、溝が深まるばかりで結局離縁となつてしまいました。互いの心を己の心とするような心の通い合いができなかつたのです。しかし別れた今にして思えば、私が嫁に求めるものが高すぎたのかもしれない。心のどこかでお駒さんへの憧れが断ち切れていなかったのかもかもしれません。それを思うと、心を閉ざさせていたのは私の方だったのかも知れず、まことに罪なことをしました。

お駒さんが馬や子供たちに接し、馬の心や、子供たちの心を知つて、その心のままに、その心と一つになつて、一緒に笑い、一緒に泣いている姿を思い出します。私も子供たちを相手に、いたいけない子供たちに襲いかかる疫病神と戦っています。子供たちの心を自分の心にして、一緒に苦しみ、一緒に戦っています。時には疫病神のご機嫌を伺つて、なんとか退散願うように気を遣うこともあります。無理に疫病神を追い出そうときつい治療をすると、子供たちがかえつてその治療に負けてしまうこともありますからね。これも「物の心を知る」こと、「物のあはれを知る」ことなのです。

自分の心を、物の心と切り離して、自分は自分、他人は他人、人は人、物は物と割り切つてしまいますと、かえつて自

分というものが狭くなります。自分の五体や家財道具や懐具合ばかり気にすることになります。日月星辰、花月風鳥など生きとし生ける者、目に入る全てのもは私の命の現われであり、私の心は、それらの心として働いているのです。そう考えれば、何もかもが生き活きとして私のものでないものはないのです。たとえ遠くに離れていても、お駒さんは私の中でいつも風に向かつて凜として立っています。

鳥を愛するとき、鳥は偶然に視界に飛び込んで来たものであり、見ている側とは全く無縁だと捉えてはいけません。私の命である視界に現れた鳥はこの鳥だけです。見る側の心がなければこの鳥はないのです。他の場所に他人の視界に現れたら。それは別の人の命を構成するまた別の鳥なのです。ええ、同じ鳥だけど、別の命、別の心に属しているのです。

鳥には鳥の命がある。鳥の心と人の心は別のはずだと思われませんか。でもその場合の鳥は私の命に舞い降りてくる鳥ではありません。私は、私の心に現れるさまざまの物達の心なのです。それは世界を独り占めしようとしてかえつて、自分の視界に入っている自分の感覚だけを世界と考える思い上がりであり、自分の狭い世界への閉じ籠りでしょうか。

私の生きている世界とお駒さんの生きている世界は、それぞれ違つていて、別の命ですから、そこに現れる子供たちも鳥たちも馬たちもそれぞれ違います。桜の花も同じではありません。

ません。ですから違う歌が生まれます。歌はそれぞれの命の表現なのです。でもそれは同じより大きな命の異なる現われであるということなのです。同じ地上に生きて同じ大気を吸っているのですから。全く違った命がばらばらにあるのだったら、心が通じ合うことはありません。その意味では別々の命であって、同じ大きな命の異なる現れ方でもあるといえます。違っていて同じだからこそ、言葉が必要になりますし、言葉で通じ合うことが少しはできるということなのでしょう。

書けば書くほどまだまだ未熟なので、自分でもわけが分からなくなってしまうです。でも私が大きな蕾を抱えて苦しんでいる姿を思い浮かべて、お駒さんなら微笑んでくださるのではないかと思つて、書を認めた次第です。また近いうちに京にでかけることもあるでしょうから、その時にはもっと分かりやすくなっていると思います。

お駒さんへ

のりなが

第十一話 ツアラトウストラの人間論

目次

一、ツアラトウストラの下山	146
二、克服せらるべきもの	147
三、神の殺害者	150
四、近代のフェティシズム	152
五、可能性の限界への挑戦	153
六、綱渡り行く者	155
七、頭上を跳ぶピエロ	157
八、向上へと導く超人	158

第十一話 ツアラトウストラの人間論

一、ツアラトウストラの下山

大いなる命の知恵を与えんと山降り行くツアラトウストラ

上村陽一は山を降っていた。十年間も山の上においてすっかり、自分がだれだか忘れていた。毎日太陽や鳥や風や岩や木々たちと語らつていて、少しも飽きなかった。下界にいたときは、たくさん厭な事があり、下らない事に煩わされ、醜いものを見すぎて、心が酷く傷つき汚れてしまった。それで参拾歳の時、逃げるように地上から山に登ったと思うのだが、その記憶も全くぼんやりして思い出せない。

彼は洞窟に住んでいたが、蜜蜂を飼い、山羊を飼い、野の草花や鳥や兔などをとって食べていた。随分太陽や蛇や鳥たちから生きる力を受け取り、生きる術を学んだ。彼は大いなる命の知恵に溢れていた。この命の教えを下界の人々に伝えなくてはならない。大いなる命から離れ、現実から逃避して、小さな幸福に閉じ籠ったり、宗教的幻想の虜になり、この世界の別の世界が存在するとする背世界の幻想に囚われてしまっている人々を、本当の生命の道に目覚めさせなければならぬと思つたのである。

途中でいくつもの森を通り抜けた。すると、「やあ、お久しぶり、君はツアラトウストラじゃないか。すっかり別人になつてしまつたね。」と呼び止める声が出た。森で一人の老人と出会つたのである。陽一は驚いた。「それじゃあ、私は、十九世紀末のドイツの実存主義の哲学者ニーチエの叙事詩『ツアラトウストラはかく語りき』のツアラトウストラですか？ 凄いやが回つてきたな。じゃあお宅は、人間たちから逃れて森にいて、神を讃え、動物たちと暮らしている聖者ですね。こんなところにも人間は救えませんか。あなたも神に仕える聖者なら、人間に教えを伝えなければならぬのではないですか。」

「それじゃあ、君は人間に何か教えようと思つているのか、知恵を授けようと思つているのか、そりゃあ無駄だよ。こちらがいつも裏切られ消耗するだけだ。」森の聖者はもつろんざりという表情をした。そして続けた。「人間たちに接するときには、まず彼らの話を聴いてやり、彼らの重荷を背負つてやらなければならぬ。その上で彼らが君の教えを求め、進むべき道を示して欲しいと切実に君に求めたら、その時にはじめて教えてやればいいのだ。そうでないと彼らは疑り深いから、君に何か騙し取られるのではないかと警戒するんだ。」

ツアラトウストラは頷いた。そして話題を変えた。「それにしても、こんな森にいて賛美歌ばかり歌つていても、仕方ないでしょう。よっぽど人間たちにはこりこりだというよう

な体験をされたのですね。あなたの話を伺ってもこちらまで気が滅入りそうだから、おさらばします。」

陽一は一人になってからつぶやいた。「それにしてもあの爺さんは、ついぞ聞いたことがなかったのかな『神が死んだ!』という言葉を」

一、克服せらるべきもの

人間を克服すべく何をした大地の意義に忠実であれ

陽一は町に入った。彼は『ツアラトウストラはかく語りき』を読んでいた。榊周次が滅入っているときに読むとモクモクと力が湧いてくるというものだから、勉強に気が入らないときなどは、最初の「ツアラトウストラの序説」の部分を繰り返し読んでいたのである。もちろん、具体的な記憶は消えているが、内容は詳細に覚えている。町に入ると、そこでは綱渡りが催されていて、市場に人が集まっている、その民衆に向かって、ツアラトウストラは最初の説教をすることになっていた。

「われなんじらに超人を教う。人間は克服せらるべき或物である」だったな。でもこの竹山道雄訳では、堅くてファンタジーにはならない。白けちゃいそうだ。「みなさん、みなさんはご自分の限界に挑戦していますか、壁にぶつかったら

すぐにこれが自分の限界だった、自分に見切りをつけてしまって、妥協してしまつてませんか。」

三十代の一人が言った。「俺は若い頃さ、二十歳ぐらいまでだったら、餃子二十ぐらいペロリと平らげてたもんだけど、いまじゃ十五個が限度だな。」別の五十代の男が言った。「そつえばジョギングで十キロまで走ったけど、それ以上距離を伸ばすのはきつくて、あきらめちゃった。このごろ五キロがやつとだよ。」

「餃子百個食べれるようになるのが人間の限界へのチャレンジかどうか大いに疑問ですが、ともかく人間は進化の頂点に到達してしまつています。つまり環境が変化して、今までの姿では新しい環境に適応できなくなれば、動物たちは自分の身体を変化させて、新しい自然環境に適合するわけです。ところが人間はその際、身体はそれほど変化させないで、道具や機械を改良することで新しい環境に適合してきたのです。だから個人的な身体のレベルではほとんど進化していないのですよ。」

「それじゃあ、道具や機械の進歩によって人間の将来は安泰じゃないか?」と群衆の一人が言った。さてよ、ここでツアラトウストラは、進化の途上にある動物は人間に比べて下等だが、進化のベクトルは上を向いている。それに対して人間は進化の頂点にあるから、進化のベクトルは下を向いてい

トウストラとしての勢いがなくなってしまう。ここは踏ん張らなくては。陽一君頑張れ。

「産業革命は人間と自然の断絶を決定的にしました。人間は大地である大いなる生命の力を体現して生きており、大いなる生命を発現するところに本来の存在意義があるのです。自然に働きかけて文明を作り出すというのは、そのためのものでなければなりません。しかし現実にはどうでしょう。人間はますます自然から生命から離れているではありませんか。実はそれは生命を侮蔑し、大地の意義を否定して天上の希望を説く背世界者のせいなのです。」

民衆は、互いに目を見合わせた。「おもしろいことをいうじゃないか、それじゃあこの産業革命というのは、キリスト教が推進したというのかい。俺たちは神を信じられなくなつて、その代わりに便利なものを次々と過剰に作り出しているのかと思つていたんだが。」

そういえばニーチェは近代文明を批判するのにキリスト教を批判している。ところがキリスト教というのは中世的な教会支配の時代の原理ではなかったのか？教会の支配が崩れ、信仰が個人の主体の問題になつてから、個人がめいめいで自分の欲望のままに私的利益を追求した結果が産業革命と資本主義を産んだのではないかというのが、常識的な理解だ。

「もつと大きな意味で言つてるのでしょう？」と陽一が言う。民衆はキヨトンとして目を見合わせた。「言つてるのでしょう？」とお前さんそれは誰かの意見の受け売りかい？お前さん、本当のツアラトウストラなんだろう？頼りないな。」嘲笑がドツと湧いた。

これは失敗だ。それにしてもバーチャル劇では本人は役に成り切つていない筈で、自分が役を演じているという意識は持てない筈なのに、陽一には陽一であることは意識できないもの、ツアラトウストラを演じているという意識をどうしても拭えない。それだけこのツアラトウストラに成りきるのには難しいということなのか、それとも電脳空間での心理操作の技術的ミスなのだろうか。あるいはわざと演技者に役柄との思想的葛藤を求めているのか、立ち往生である。

しかし乗り出した以上、勝手に降りるわけに行かない。なんとかツアラトウストラに合わせていこう。「もつと大きな意味で言つてるのが分からないのかという反語的な表現ですよ。つまり近代の個人主義は主観性の主体が神から個人の精神に移つたということです。両方とも主観が大地つまり大いなる生命から離れて自分自身の原理で妄想を展開すると言つことに変わりはないのです。」民衆は話が難しすぎるのか、閑散とし始めた。

「かつてキリスト教は、この世の生活に苦しみ倦んでいる人々に、天上の幸福を説いて、地上の幸福、肉体の命の喜びを軽蔑しました。」民衆の一人が神父のジェスチャーをして言った。「こりや、こりやイワン、だからいわんこつちやない。肉を食べるのは我慢して献金に回しなさい。夜の営みは教会のマニユアル通りに行いなさい。決してかあちゃんに上をとられてはいけません。」ドツと笑いがおこると、それだけで民衆の数が増える。パチ、パチ、パチ、陽一は場を盛り上げるために仕方なく手をたたいた。

「生きるとは何か。花を愛で、鳥と歌い、水を飲み、肉を喰らい、愛を交わす。そして様々な自然の力を呼び覚まし、より美しいものより力強いもの、より尊いものを作り出していく、大地の創造の働きと一つになつてね。そういうことでしょう。キリスト教はそういう生命に背を向けて、天上に神の世界を作り上げ、その幻想を至高のものとしたのです。」

それで靈魂は肉体が常に飢え瘦せさらばえていることを望んだのです。しかしそういう靈魂こそ貧困ですね。肉体が力あふれ、技を極め、躍動するのを嫌っているのですから。それは不健康にするという意味で不潔なものにすぎませんし、肉体や知能を鍛え上げる必要を自覚していないという意味では、嘆かわしいほど安逸をむさぼっているといわざるを得ません。」

三、神の殺害者

平日に殺めしイエス日曜に甦りしか懺悔聴くため

敬虔深そうなやせ細った紳士が膝を折って祈った。「主よ、主を汚す者をお許し下さい。まことに地は汚辱にまみれ、人々の心はすさんでいます。私は主が与えてくださった自然をこよなく愛し、隣人たちと神への愛に支えられて、何時の日か天上での主の御前の永遠の幸福に預かれることを信じております。どうか心迷える子羊たちをお導きください。」

おや、こんな紳士でできたかな。まあいいや。「たしかに生きていくということ、その中で様々な困難と闘うのは大変なことです。だからキリスト教の示す天上の幸福に希望をつないだり、教会の示す生活規範を守って、その下で小さな家庭をつくり、欲望を最小限にきりつめた生活を営むことが、信仰深く、理性にあふれ、道徳的だとみなされてきたのです。しかし皆さん、いつまでそんな不健康な密室に閉じこもっているのですか、それこそ生命への冒瀆とは思わないのですか。あなた方は密室で神に祈りを捧げるために生まれてきたのですか。」

「我々は神によって作られたのだから、神をほめたたえるために存在しているのではないのですか。」敬虔な紳士は問

い返した。

「あなたはまだ知らなかったのですか。あなたが信仰しているという神はとくに死んだのですよ。」ツアラトウストラはこう断言した。敬虔な紳士は顔を引きつらせて抗言した。「神は死なないということは、世々限りなくある神の定義ですよ。」「人間が殺したのですよ」とツアラトウストラはたたみかけた。

「人間ごときに神は殺せないでしょう。」敬虔なる紳士は反論した。

ツアラトウストラは応答した。「神というものは人間の中の普遍性です。正義とか愛とか真理とか美とかの基準がなければならぬ。そういう意識が普遍の体系としての神を要請し、神を信仰させたのです。ただしそれはギリシア人のでっちあげだったのです。まだ人々がそういう普遍性を守り、信じている間は神の实在を多くの人が信じてきたのですが、近代になって個人の主観性が傍若無人に既成の価値を無視し、私利私欲でしか行動しなくなったのです。」

「全くだ、神を信じていたら到底できないようなことをみんな平気でやっている。」質素な身なりの労働者風の男が賛成して言った。

「神の前で永遠の愛を誓った夫婦が、陰では不倫を競い合っているし、正直に帳簿をつけていたのでは、会社の経営は成り立たないときている。裏切りや嘘や憎しみに満ち満ちていて、イエスの言葉を借りると、私を含めて、腕を切ったり、目玉を抉り取らなければならぬ連中はかりだ。」

にもかかわらず、日曜日に教会にでかけて神に忠実な僕を装い、聖餐のパンとワインをいただいて、永遠の命に預かるうと開き直っている。カトリック教会では未だに罪の懺悔を神父の前で嬉々として行い、一週間分の罪を述べて、それでチャラにしてもらおうというあつかましさだ。

どれもこれももし本当に神がいると信仰しているのなら、とても恐ろしくてできないような神に対する冒流行為なのだ。それができているというのは、神を本当は殺してしまっているからだと言われても仕方がない。」

敬虔な紳士はなおも反論した。「確かに我々の不信仰が神を殺した。それが救い主イエスの磔だ。神はキリストの姿で世に現れ、人間として愛に生きる生き方を示されたにもかかわらず、人間たちは彼をキリストと認めず、彼の福音を信じなかった。」

そして彼を神を騙る者として糾弾し、十字架に磔にしたのである。だから我々が神を殺したことはほんとうだけれど、

彼は神に義と認められ、三日目に死人の中から甦られた。このイエスの復活を信仰し、イエスによって我々の罪が贖われたことが信仰できれば、それだけで救われるのだ。」

「歴史的には二千年前に殺されたイエスを現代も殺し続けているということだね。あんたの気持は分かるけれど、それはイエスへの裏切りと殺害が近代になってさらに露骨になったということだろう。」

それに平日には平気でイエスを殺しておいて、日曜日に復活したイエスに懺悔を毎週繰り返しているってことだ。それでも救ってもらえるという見方は、余りに神を馬鹿にした話だとは思わないのかい。ほら、『仏の顔も三度』ということわざもあるだろう」と労働者風の男が論じた。

陽一は思い出したように言った。「『仏の顔も三度』とはこのヨーロッパでも言うのかね、大乘仏教のうちの浄土教などではさんざん極悪非道な行いをしていた者でも、死の直前に『南無阿弥陀仏』と十遍唱えれば、極楽往生間違いなしという教えになっっているようです。」

四、近代のフェティシズム

天上の神は殺めりその代わり物を積み上げそを神とせり

陽一は少々焦っていた。綱渡りが予定されているので、ストーリーの順序から言って、綱渡りにつなげることを言わないと、綱渡りが始まらないからである。このバーチャル劇では台詞は、その役を生きている役者自身がその都度ひねり出さなくてはならないのだ。キャラクターや教養はインプットされていて台本は渡されていないのだから。

「結局、人間というものは既成の宗教や道徳によって毒された分別や小賢しい知恵をもっています。その理性が作り出した幸福観に執着しているのです。近代人の中には神など自分には無縁だと、なんの信仰も持たないと広言する者もいますね。しかしそんな連中も小金を溜め込んだり、豪邸でふんぞり返ったり、数百万円の腕時計をして悦に入っていたりします。キリスト教の神を殺してしまった代わりに、物を神にしているのです。」

おっと、資本主義社会は物神崇拜つまりフェティシズムという原始宗教が支配する社会だと喝破したのは、『資本論』の著者カール・マルクスだったかな。

「全く、俺たち労働者が食うや食わずの生活をしているのに、俺たちの一生分の所得をはるかに上回るような宝石類で妻子を着飾らしていやがる。そんな余分な金があるのなら、

労働者や失業者に回しやがれてんだ。そうだろう、それで何十人、何百人の命が助かるのだから。」

十九世紀末のドイツでは労働者階級の生活向上、地位向上の運動は盛り上がり、経済的地位は向上しつつあった。またプロイセン国家は社会主義者鎮圧法で弾圧する一方で、社会政策として社会保険制度の整備を開始した。鉄血宰相ビスマルクによる「飴と鞭」政策である。しかしニーチエ自身はキリスト教と社会主義のいずれもが、子羊の平等を求める妬みや怨念という感情で動いていると見て、拒絶していた。この妬みや怨念がルサンチマンなのである。

「そういうルサンチマンからくる道徳観や正義観は最も唾棄すべきものです。確かにダイヤや豪邸を求め、贅沢三昧にあけくれる連中も愚の骨頂ですね、とはいえ社会主義者たちが求めているのも結局はダイヤのかけらやよりましな豚小屋にすぎないのではないのでしょうか。大いなる生命から離れ、物質的富を求めています、それも幻想のようなものだと私には思われます。」

「なんだと、おい、ツアラトウストラの兄さんよ、我々働く者が腹いっぱい飯を食い、我が家という快適な空間でのびのびと眠れることを要求するのがどうして幻想なんだ？」

「もちろん生命に関わる限り、命を養う食材や空間は少しも幻想じゃありません。それらを貨幣を基準に数量化して捉え返して作り上げている価値の体系が幻想的だということです。我々はそういう子羊や豚などの家畜的平等や家畜的幸福を拒絶すべきなのです。」

「それじゃあ、一体ツアラトウストラはどのような幸福や正義を求めているのか、聞かせてもらおうじゃないか。」どうもこの労働者役の男がバーチャル劇をはみ出さないように調整しているようなので、榊周次が演じているのかもしい。

五、可能性の限界への挑戦

人間のてっぺん挑み没落すさこそ望めり一度のいのちぞ

「それは汚れきった川が注ぎ込む大きな海です。海は川の汚れを浄化して少しも自分は汚れない」と言いかけたが、このツアラトウストラの台詞はそのままでは遣えない、二十世紀後半から海洋汚染が深刻化し始めるからである。二十一世紀初頭の高校生の陽一が演じているのだから、たとえ陽一であることを忘れていても、二十一世紀にも通用する内容が求められるのだ。

「だからこそ人間の限界に挑戦して、人間を超えゆかなけ

ればならないのです。天上の幸福を説く背世界者に頼ずいて、子羊の平等を求めたり、肥え太った豚共を妬んで少しでも家畜の餌にありつこうとする平等主義に囚われていては、いつまでたつても人間を超えることはできません。そんなことでは小さな物質的富に飾り立てられた家畜小屋での幸福しか手に入らないのです。」

「おお、それこそ望みだ。家族や隣人が肌を寄せ合い暖め合つて暮らせる蚤の幸福こそ、我々の望みなのだ。ほら坂本九も歌つていただろう。見上げてごらん、夜の星を。ぼくらのような小さな星がささやかな幸せを祈つて。』て、だから人間を超えようなんてラッパを吹き鳴らすのはやめてくれ。」

「そんな偉大さを追い求める幻想に騙されてついて行けば、それこそ恐ろしい苦難と戦争と没落が待ち構えているに違いない。」敬虔な紳士は大地に額つき、天上を見上げて十字を切つた。

「人間を真の生命から遠ざけてはなりません。人間の命の血を吸い取つて、衰弱させる蚤共は駆除しなければなりません。今こそ、人間の真の価値に目覚め、各々が自らの可能性の限界に挑戦できる生命力にあふれた時代を作り出さなければならぬのです。そうでないと現在の家畜状態から蚤状態へと墮落します。」

「この蚤状態の人間を私は末人と呼びます。末人の時代になれば、人間は環境の変化に対応できるだけの生命力すら喪失するでしょう。悲しいかな末人の時代が始まるうとしていくのです。」

「人間の限界を超えようとするれば、皆が暖かい飯にありつけ、幸福な家庭を築くことができる」と約束してくれるのか、ツアラトウストラ。」労働者風の男が食い下がってきた。

「安逸な道はありません。そうしなければ人類は衰退して滅びます。しかし人間の限界を超えるなんて、とても至難のことです。ほとんどすべての人がその途上で、矢がつき刃が折れ、傷ついて斃れるでしょう。でも己の可能性を限界まで追求した結果、没落したのなら納得できるじゃあないですか。せつかくこの世に生を享けたのに、持てる力を精一杯生きられなかつたら、悔しいじゃないですか。ですから限界に挑戦して没落すること、それこそ人間の本来の存在意義なのです。己の限界に挑戦もしないで、安逸を貪つていたって一体何の意味があるのですか。」

敬虔な紳士も反論した。「しかし皆が超人に成れないのだから。ごく少数の一人か数人の超人が現れたとしよう。すると彼らのために大部分の民衆は奉仕させられるだけの奴隷状態に陥るのではないのか、ツアラトウストラについて行けば、神や聖者の支配ではなく、恐ろしい狂人による支配が待つて

いるのではないのか。」

この意見こそ陽一が『ツアラトウストラはかく語りき』を読んだときの危惧でもあった。ニーチェは民衆に向上を呼びかけ、超人への橋梁であるべきだと説いている。しかし皆が超人になれるなどは思っていない。むしろ極少数の超人を生み出すためにこそ人類の存在意義があると考えているのである。陽一はツアラトウストラになっっている以上、この危惧を何とか解消する方向を示そうとした。

「それは超人を恐怖支配の権力者としてイメージするからです。たとえ一人でも、数人でも超人が生まれると言つことは素晴らしいことです。どうして自分より強い者、優秀な者、創造的な者、賢い者が存在することをそんなに恐れ、妬むのですか。」

「もちろん強者は弱者を強圧的に支配し、弱者を虐げ、酷使し、搾取し、収奪するからだ。これはこれまでの歴史が実証しているではないのか。」労働者も敬虔な紳士に加勢した。

「もちろん政治的には超人は強大な権力を打ち立てるかもできません。しかしそれは民衆の生命のエネルギーを最大限に活かしきつた時に実現するものですから、民衆は自らの力を最大限に解放されるのです。また超人が生み出す音楽は生命のエネルギーにあふれ、民衆はそれによって活力を与えら

れます。超人の生み出すあらゆる文化を民衆は享受して、最高の幸福を得るのです。民衆の生命力を衰弱させ、疲弊させ、精神的に萎縮させることしかできないで、どうして超人と呼ぶことができましょう。」

陽一はヒットラーがニーチェの熱狂的なファンだったことを思い出していた。ドイツ民族に自らの偉大さに目覚めさせ、活を入れたつもりが、恐ろしい世界大戦に導き、恐怖政治やユダヤ人へのホロコーストを実行した男は自らをどう捉えていたのだろうか。

「綱渡りについて聞くのはもうたくさんだ。それより綱渡りを見せてくれ！」民衆はどっと笑った。その時、綱渡り人は自分のことを言われたと思って綱渡りをはじめたのである。

六、綱渡り行く者

めくるめく奈落の上の一条の綱渡り行く没落願ひて

西洋の街中で行われる綱渡りは、日本のサーカスの綱渡りとは違っている。高い塔と塔との間に綱を張り渡して、その上を渡るのである。下に綱を張ってあったり、落ちたときに綱にぶら下がるような安全装置はついていないのだ。まさしく落ちたら死ぬのを覚悟で、命がけの綱渡りである。いか

に熟練をつんでいても突風に遭えばそれまでである。それで重心をとりやすいように長い棒を両手で持っている。

ツアラトウストラはこの綱渡りこそ人間の本质だと言いたいのだ。「人間は、獣と超人の間に張り渡された一本の綱なのです。下を見たら怖いですよ。綱は眩暈をするような深淵の上に張り渡されています。渡るのも、途上にあるのも、後ろを振り返るのも皆危うい。ビビッていると余計怖いし、立ち止まるのは一番落ちやすいのです。」民衆は綱渡りの方を見ている。おそらくだれも陽一の言葉に集中しているものはいないだろう。

「おそらく誰一人超人には成れないのかもしれませんが、私は好きですね、それでも己の可能性の限界に挑戦したい、たとえそのために没落するとわかっていてもそうせずにはおけない人。」

私は好きですね、既成の価値や道徳を侮蔑して、大いなる生命の意思に従おうとする人を、そういう人こそ超人にあげられ、一直線に人間を超えていこうとするからです。

そうです、没落して犠牲になろうとする人を私は好きなのです。決して、天上の幸福を約束してもらおうとして犠牲になるのではなく、自分たちの挑戦の積み重ねが、やがて超人を生む、そのことを信じて自ら犠牲になる人が好きなのです。

だから学問のための学問ではなく、人間の限界に挑戦するために学問をやっている、そういう人が好きなのです。そういう人は真に学問のために生き、学問のために死ぬ人です。

日々労働し、よりよいものを創り出そう創意工夫を重ねている人を私は好きです。その積み重ねにこそ、人間の可能性の限界への挑戦があるのですから。そういう人々が超人のために住む家や環境を整えているのです。

そして私は好きです、自分の特性を愛して、その特性をどこまでも伸ばし、そのために生きようとする人を。また自分の特性を伸ばそうとして、いかなる障害とも闘い、そのために傷つき死ぬようなことがあっても己を貫く人は素晴らしい。

人間は一つの特性のために生きればよいのです。たくさん特性をもっていますと、困難にぶつかると、どうしても安全な方に逃げてしまい、宿命にぶつかるといふことがありません。それでは人間の可能性の限界に挑戦することもできないわけです。

人から感謝されたり、お返しを期待して人に与えようとする人は好みません。何も報酬を求めないで、自己の能力を發揮して与えることを喜ぶ浪費家が好きなのです。自分のためにとつておく、儉約家は好みません。

自分の才覚によつてではなく、偶然によつて幸福になつたら、自分は不正の賭博者ではないかと恥ずかしく思う人が好きです。そういうひとこそ自分の運命を切り開くのです。私は不言実行の人より、有言実行の人の方が好きです。そういう人こそ、自分言葉に責任を取つて、その言葉のために没落することを願う人だからです。

未来の超人に意義を見出す人は、そのことによつて歴史を意義付け過去を救済することができなのです。そういう人は現在に安住できません。現在を乗り越えようと没落するので

す。

私は自由な精神と自由な心情を持つ人が好きです。そういう人にとっては知性はただ心情のため働く内臓なのです。そういう心情こそ、人間の限界を超えようとして没落するので

七、頭上を跳ぶピエロ

迫り来てヒラリ頭上を飛び越され墮ちいく先は地獄にあらざるや

ここで仰天すべき空前の椿事が起こる。綱渡人が塔と塔の半ばにさしかかった頃、塔の扉がまた開いて、五彩の衣をまとつたピエロが跳び出したのである。そして先ほど綱渡人が

慎重に一歩一歩ゆっくり歩んできた綱の上を足早に進んでいったのだ。

「進め、足萎え」とピエロは叫んだ。「この怠け者、お前の顔面は真青だ。とつとと進まない蹴つ飛ばすぞ。こんなところで何ぐずぐずしとるんじゃ。お前なんかあの塔に監禁されておけばよかつたんだ。お前より優れた者が行くのを邪魔するぐらいならな。」

みるみるピエロは綱渡人のすぐ後ろに迫つた。その時起こつた驚愕の出来事に、民衆はみんな口も利けなくなり、目はすわつたのだ。ひらりとピエロは綱渡人の頭上を跳び越して、前の綱の上に見事に降りたのである。綱渡人は気が動転してバランスを乱し、地上へとまっさかさまに落下したのである。

ニーチェは、しつかり張り渡された綱ならば地上の線上を歩くのと同じであると考へて、一直線上を踏み外さずに進めたら、落ちることはないと着想したかもしれない。地上十数メートルという高さを気にするから、動揺して落ちるのである。強靱な精神力と線上を踏み外さずに進む訓練で綱の上を走ることも、跳躍や宙返りをすることも可能だと考へたのだらう。

ともかくピエロは、先祖からの技術を受け継ぎ数十年間綱を渡り続けた綱渡人の綱渡技術をはるかに凌駕した。人間の

可能性の限界を超えて跳んだのである。ここに超人のイメージが示されたのではないかと思われる。とすると超人の出現によって、乗り越えられた既成の人間は奈落に落ちるしかないのか、超人を生むために生きてきた人間も、自らその役目を果たすや、自らが超人に成れない限り、没落する運命なのか。

しかし、この話の展開では、ピエロは超人ではないのだ。むしろ超人を目指せと唱えるツアラトウストラを排斥する側に立っている。だから超人の出現のイメージを否定的に示して、群集にツアラトウストラに敵対させようとしたのかもしれない。

綱渡人は真下の群衆の中へと落下して行ったので、民衆は大混乱して逃げ惑った。陽一のすぐ近くに綱渡人は落下して打ち砕かれた。息絶え絶えに綱渡人は語った。「俺はどうに知っていた。いつか悪魔が来て、俺の片足をすくうと。今、俺を悪魔が地獄へ引っ張っていこうとしている。これを阻んでくれ。」ツアラトウストラはきっぱりいう。「悪魔などいないし、地獄なんてないんだ。肉体が死んでも、霊魂は死なないなんて、全くの幻想だよ。肉体が滅びる前に霊魂が消滅するから、なにも恐ろしいことはないんだ。」

「もしあなたの言うことが真実なら、俺は失うものは何も無い。俺は少しばかりの餌と鞭によって踊らされてきた一匹

の獣に過ぎなかったのか？」陽一は首を振った。「断じてそうじゃない。あなたは危険を自分の職業にしてきたじゃないか？それだけでも大したものだ。今、あなたは自分の職業のために死のうとしていいる。だから私が自分の手であなたに敬意を表して埋葬したいんだ。」この死に逝く者への言葉に綱渡人も納得したのか、わずかに手を動かした。感謝の気持を表すためにツアラトウストラの手をとろうとしたのである。

八、向上へと導く超人

闇の中五彩を纏て囁けり吾生きて跳び汝死して落つ

どんなに恐ろしい事態であっても、時が経てば忘れてしまう。夕闇に市場が没する頃になると群衆は四散してしまった。陽一はつぶやいた。「オーオ、今日は豊漁だ。人間を釣ろうとして、屍一体とは。本当に人間存在とは不気味なものだな。何時だってそれ自体では意味がないのだ。一人のピエロが彼の運命になることだってある。」

私は人間に、人間存在の意義である超人について教えたいのだ。超人は、人間という不気味でそれ自体では無意味な存在を引き裂いて閃く稲妻なのだ。素晴らしい超人によって人間は大いなる生命において自分たちが何を目指し、何のために生きるべきかを知るだろう。だが、ピエロが超人をただ恐ろしいイメージだけで印象づけたので、全く群衆の心に語りか

けることはできなかった。私は彼らにとって奈落に突き落とす。ピエロと、ピエロに突き落とされた人間を超えようとする綱渡りの中間物にすぎないのだ。」

「ツアラトウストラよ、この市をから出て行け！」ピエロが近づいてきて脅かした。「この市ではみんなお前を憎んで敵視している、お前は既成の価値や道徳を侮蔑したからだ。そして敬虔な信仰者には神を冒瀆する危険人物とみなされている。とはいえお前は死体を伴侶して自らを賤しくしたが、せめてものの救いになった。今のうちにこの市から去れ、去らなければ、お前の頭上を越えて、お前を落下させるだろう。お前の命はないと思え。」

陽一は、ピエロとは一体何者だろう。ツアラトウストラを排除して、この市に居座り、民衆を恐怖に陥れて支配しようとするのだろうか。彼はおどけた五彩の服を着て、民衆に媚を売り、笑いを取りながら、時折ライバルの頭上を飛んでは、心胆を寒からしめて、民衆を思うように動かそうとするのかもしれない。

ツアラトウストラの目指す超人は、ピエロの目指すものとはどう違うのか。ピエロは民衆に向上の道を示さないで、自分だけが超人になろうとしている。そして民衆が超人に憧れ、進んで超人の生むために成長しようとさせないで、ただ超人に恐怖から従わせようとしている。その意味ではピエロの目

指すものは、愚衆に対する支配である。それに対してツアラトウストラは民衆を向上へと導く超人だ。

とはいえ、民衆をして超人への橋を渡らせることは至難である。それは民衆全員に綱渡りをさせようとすることである。大部分の民衆はツアラトウストラを民衆の敵とみなし、神と魂を汚すものとみなして殺そうとするだろう。

陽一は夜の帳の中で屍を森に運び、木の洞に埋葬して獣たちから守った。そして森で深い眠りのなかでツアラトウストラは悟った。「民衆に語りかけるのは危険だ。これからは自分に共鳴する同伴者に語りかけるべきだ。」ツアラトウストラはこれから本格的に運命愛や永劫回帰などの教説を展開するところだが、陽一は木の洞で眠っているうちに木の根の中にあつた空洞に落ちていった。

第十二話 青年マルクスの人間観をめぐって

1

目次

一、破壊されたわだつみ像	160
二、労働が先か思考が先か	161
三、アンサンブル規定	163
四、生産物からの疎外	164
五、労働からの疎外	166
六、非有機的身体	167
七、類的存在からの疎外	169
八、人間からの人間の疎外	170
九、私有財産の起源	171

第十二話 青年マルクスの人間観をめぐって

1

一、破壊されたわだつみ像

戦後なる時代は熟れてわだつみの像もろともに碎けし思ひ

一九七一年六月、京都の懐徳館大学のキャンパスである。大学紛争は収まりかけていたが、まだ時折全共闘の一団が学内に入り込み、ゲバ棒を持ってキャンパスをデモンストレーションして去っていく。学徒出陣した戦没学生の銅像が白いペンキをかけられ無残にも破壊された。「懐徳館民主主義」という似非民主主義の象徴であり、資本主義の管理体制を補完してきたと有罪宣告されたのである。

当時榊周次は大学院の一回生だった。懐徳館大学に様々な矛盾や問題があり、変革しなければならぬということとは当然だとしても、その怒りを戦没学生の銅像にまでぶつけるとは、とんだとぼちりだなと思った。榊はこの銅像に愛着があり、一回生の時から、毎日一度は銅像に語りかけてきた。それがいかに紛争中とはいえ、無残に打ち砕かれてしまったのである。自分自身の青春がこの銅像と共に碎け散ったような空しさに襲われた。

榊はマルクス哲学研究会のチューターをしていた。哲学専攻では自主ゼミナル運動がさかんで、大学院生をチューターにしていくなつかの研究会に分かれていた。マル哲研と呼ばれた研究会は週一回木曜日3時からたつぷり3時間をかけて行われていた。

マル哲研だけは、哲学専攻の枠に囚われずに他学部、他専攻の学生が多く参加していた。哲学専攻の学生の友人や活動家仲間がマルクスにはホットな関心を持って集まっていたのである。今日は「マルクスの人間観」に焦点を合わせてみんなで討論するという形をとっていた。この若き榊周次を演じているのが上村陽一なのである。

二、労働が先か思考が先か

労働と思考のいずれ根にありし鶏卵いずれ先立つ

まず経済学部三回生木村雄二が口火を切った。「マルクス主義の人間観は労働本質論です。『人間は考える葦である』とパスカルは言いました。考えるということに人間の特長があることは正しいのですが、それなら労働することにも特長があります。どちらがより根源的なのでしょう。観念論者のパスカルは思考に本質を認め、唯物論者のマルクスは労働に求めます。それは思惟が根源的か、物質が根源的という問題なのです。だから唯物論の立場に立てば、労働が本

質的だということになります。」当時はまだこのような唯物論対観念論という対立図式で論じる紋切り型の議論もさかんだった。

「質問していいですか？」法学部の一回生の田口幸蔵が発言を求めた。「私は哲学的なことは全く分からないのですが、労働の方が思考より根源的という意味が分かりません。思考ができれば労働はできませんよね。」

陽一演じる榊周次は口を挟んだ。

「今日の司会は決まっていますか？」

「はい、私です。」三輪智子が扮した哲学専攻の二回生寺田陽子である。

「田口さんは思考が労働の根源にあるのではないかというご質問ですね。木村さん、思考を根底に置かない労働というのはあるのですか？」

木村は「司会は一方の肩をもつような言い方はしないで下さい」と司会に注文をつけた。

寺田は反撥した。「そういうつもりじゃありませんよ。労働が思考より根源的のように言われたので、思考に基づかない労働というのはどういふものかなと思っただけです。」

木村は気を落ち着けて発言した。「労働は目的意識があつて対象を獲得したり、作り上げたりする活動ですから、当然思考を伴っています。でもあらゆる生活活動も人間は意識的に行っているわけです。」

でもじやあ衣食住や労働という物質的な活動と精神活動のどちらが根源的かといえは、まず『腹が減ったら戦はできぬ』でしょう。労働が基礎にあつて。その上で精神活動しているというように唯物論では説明しているのです。」

「それでは田口さんの質問に対する答えはどうなるのですか？」と寺田は聞き返した。「思考という活動があつて労働があるというのは間違ひじゃないのですが、逆に思考がどうして生じたのかと考えますと、これは労働から生じたわけです。」

労働といひましても人間の場合は起源においては群れとして共同で行つていましたので、コミュニケーションをとつて行く必要があつたのです。それで音声でいろいろ伝達をしているうちに、音節を区切つて言葉を伝え合うような言語になり、その中身が思考と呼ばれるようになったのです。ですから思考の根源に労働があるということですね。」

「それじやあ労働が先にあつて、労働の中から思考が生まれたという議論ですね。ということは思考なしの労働というのがあつたことになりませんが、それはどういふ活動ですか？」田口は食い下がつてきた。

「だから人に進化する前の猿の段階で狩猟や採取の活動で

はまだ人間的な思考は行つていなかったのです」と木村は応えた。

「ということは本能的な活動ということでしょう。それじやあ、目的意識的な対象変革活動という労働の定義とはあいませんね」田口はさらに突っ込みを入れた。

司会の寺田が口を挟んだ。「ストップ、司会が許可してないのに発言するのはやめてください。二人だけの議論になつて皆は分からなくなつては困りますからね。つまり思考と労働という相互に前提しあつてはいる活動があつて、その起源においてどちらが根源的かが問題になつてはいるわけですね。ここで別の人にこの問題に関する発言をしてもらつて、それらに対して木村さんから応答してもらつてということにしましょう。どなたか、はい山下里香さん。」

「日本史専攻の三回生山下です。私はマルクス主義の唯物史観にはある程度共感しています。経済的な土台の上に政治や文化が成り立つという考え方はなかなかリアルに現実を見ていると思つたのです。身分や階級から規定された意識というものにどうしても囚われて行動してしまふということですね。それでかなり科学的な歴史の捉え方ができると思ひます。でも思考と労働のどちらが根源的かなんて鶏と卵みたいな議論で、どちらでもいいような気がしますね。マルクスはそんなことは議論してないでしょうおそらく。」

「マルクスの盟友エンゲルスの『猿が人間になるについで労働の役割』という論文があります。そこでは労働が言語も含めて人間を形成したことを強調しています。」木村はそう応えて、おし黙ってしまっただ。

「寺田さん、少し口を挟んでもいいですか。收拾する意味で。」では、榊先輩の定番です「智子はニコツとしてチューターに振った。陽一は智子の笑顔に少し頬を赤らめたが、一呼吸おいて説明を始めた。

「マルクスが労働本質論を展開しているのは彼が二十六歳でパリにいた一八四四年の『経済学・哲学手稿』です。「疎外された労働」の論理が展開されているノートです。」

このノートはまだ唯物史観の確立以前なのです。それはもちろん思考と労働のどちらが根源的かなんて問題意識のものではありません。エンゲルスのいう労働というのは猿の採取や狩猟活動も萌芽としては含んでいますね。目的意識の対象変革活動というのはマルクスの『資本論』の労働過程論の用語でしょう。エンゲルスは手の延長としての道具を使った獲得行為を指しているわけで、猿が道具を使うようになって人間になったという論理です。その過程で言語的コミュニケーションが活発になり、思考が発達したと捉えたわけですね。」

三、アンサンブル規定

労働が諸関係へと移りたる本質論の切断ありや

寺田は「榊先輩のお話では、若きマルクスの疎外論には労働本質論があったということですが、北野大蔵さんの初期マルクス研究には年季が入っているようなので、そのあたりはどうですか。」北野大蔵は哲学専攻の四回生で大学院への進学を考えている。「ええ難しい問題ですね。ただ最近は一八四五年の『フオイエルバツハ・テーゼ』や『ドイチエ・イデオロギー』の段階では疎外論が払拭されたといわれています。労働本質論から人間の本质は、現実的には社会的諸関係の総和、つまりアンサンブルである。」といういわゆるアンサンブル規定に変わっているのです。」

寺田が北野の議論を受けて言った。「マルクスは『経済学・哲学手稿』では疎外論を展開したけれど、翌年ベルギーのブリュッセルに移って、そこで『ドイチエ・イデオロギー』を執筆することになって、疎外論を払拭して唯物史観を確立したという話でしょう。その際に人間の本质に対する捉え方もころつと変化して、労働が本質ではなく社会的諸関係の総和つまりアンサンブルが本質であるということになったというのですね。この見解に対して、どなたか異論ありませんか？ 榊山健太さんどうぞ。」

もぞもぞしながら社会学部四回生の樺山健太が発言した。「労働が人間の本质であるというような見解が、コロツと変わるというのはおかしいですね。人間の本质とは何かについての見解は簡単にはかわらないでしょう。」

北野は言った。「簡単に変わったのじゃなくて、大転換があつたということですね。切断という言葉で表現されています。アルチュセールはヒューマニズムから科学への転換と捉えていますし、日本でも廣松渉が疎外論から物象化論への転換として捉えているのです。」

樺山は反論した。「元々、若きマルクスの疎外論が克服されて唯物史観が確立したというように捉えられてきたので、アルチュセールや廣松の議論はその点では古くからの議論の蒸し返しです。」北野はすぐに切り返した。「だって疎外という用語は『ドイチェ・イデオロギー』ではほとんど使われていないし、彼の発想の転換は明白ですよ。」

寺田は手を叩いて制止した。「発言は、司会の許可を得てください。元々疎外論は唯物史観の確立以前の議論と呼ばれてきたわけですが、一九六〇年代になって若きマルクスの疎外論が大々的に市民権を得て、マルクス主義を現代ヒューマニズムの源流として見直す傾向が強くなったわけです。」

ところが最近、一九六八年の五月革命の挫折以降ですか、実存主義の退潮や現代ヒューマニズムの退潮があり、構造主義的な発想が強くなって、それがマルクス主義からヒューマニズムを払拭しようとする動きになったわけでしょう。それでマルクスの人間本質論も『疎外された労働論』の吟味から『アンサンブル理論』へと重点を移してきたわけですね。」

樺山は呆れた。「おいおい司会がしゃべり過ぎだよ。確かに北野さんの言うとおり疎外という用語の使用が激減するけれど、それは疎外論という視角からのアプローチを止めて、唯物史観からのアプローチに変わったからなんだ。それは疎外状態の批判から進んで、歴史的転換を目指すからだ。だから盛んに経済学批判を行うようになると疎外という用語がまた使われるようになる。」

「ややこしいわね。一回生の諸君には何がなんだか分からないでしょう。まだマルクスの本を読んだこともない人までいるんだから、そこでまず樺山さんから『疎外された労働』について解説してもらいましょうか。樺山さん、易しい言葉でお願いしますね。」

四、生産物からの疎外

作られし生産物が疎ましく作りし人を奇みしかな

「ヘーゲルやフオイエルバッハとの関連はカットします。『疎外された労働』について『四つの疎外』に限定して手短かに話します。労働している人がいるとします。労働というのは何らかの目的があつて生産物やサービスを生み出す労働行為なのです。そこで働く人は労働主体なのです。労働の仕上がりは主体のお頭の中にあるのですが、それを労働は自己の外部に出します。これを「外化」と言います。外化によつて事物やサービスとして対象的に作り上げます。対象というのは主観に対してあるものです。この対象として作り上げることを「対象化」というのです。」

疎外は対象化された労働の成果が、労働主体にとつて自分のものにはならないで、他者となつて労働主体から自立し、そして労働主体に対してよそよそしく敵対的に立ち向かつてくることをいうのです。つまり労働主体は自分たちが作り出した生産物によつて支配されているのです。これが先ず第一の疎外、『生産物からの疎外』です。」

「ストップ、はい、ここまででは分かりますね。山本義男さん、何か」と寺田は法学部一回生の山本義男が挙手したので当てた。

「労働の生産物が作った本人の外に対象化されるといふのは一般的にどんな労働でも言えますね。それが作った者のも

のにならないで、独立して敵対的に立ち向かうといふけれど、大なり小なり生産物は生産者の手を離れるわけです。そうでしょう、作った人はたいがいそれを消費しないのだから、するとこの『生産物からの疎外』というのは別段資本主義でなくとも起こるわけですね。」

「画家が自分の作品がいったん仕上がつてしまつと、もう自分とは別物であり、自分から独立して客観的に評価されま

すね。」
樺山が説明を始めた。「その意味では仰るとおりです。ただマルクスの場合は、『経済学・哲学手稿』で国民経済学批判として展開していますから、そういう一般的な意味ではなく、作った物が労働者のものにならないで、他人の所有になる場合に、労働主体に生産物が敵対的に立ち向かうという事態を問題にしているのです。たとえば労働者は巨大な資本主義の富を日々生み出しているのだけれど、彼の手に入るのは生きていくのにやっとで、彼が作り上げた富の集積によつて押しつぶされそうになっているという事態ですね。」

「寺田さん、いいですか？」樺が、発言を求めた。「文明自身が人間の生産物であり自己疎外であるとも言えます。ギリシア神話でプロメテウスはアテナイの女神から知恵を火の神へファイストスから火を盗んで人間に与え、人間は文明を築きますね。でもその罪を問われて岩に縛り付けられ、毎日鷲に内臓を抉られるという苦しみを味わうわけです。この神

話も文明がそれだけの苦しみを与える自己疎外だということ
を表現しているわけです。」

「マルクスは資本主義の疎外を問題にしたのでしよう。」
樺山が反論した。樺はこう応答した。「直接素材にしたのは
資本主義だけれど、生産物の疎外と言う意味では、広い意味
でも抑えておいたほうが応用が利きます。ソ連の御用哲学者
のオイゼルマンが『歴史的概念としての疎外』を発表して資
本主義批判としてしか疎外論を使えなくしてしまつた。せつ
かくソ連でもスターリン主義や官僚主義批判が盛り上がりつ
てきたわけだから、おおいに疎外概念を現存社会主義批判にも
使うべきなのです。」

樺山は頷いた。「それは言えますね。日本でも資本主義批
判だけでなく官僚主義批判や管理社会批判、さらには共産党
批判にも使えますね。」一瞬、研究会の中の共産党員たちが
気まずそうな表情になつたので、寺田がそれを察知して発言
した。「研究会ですから政治的な政党批判の場になつてかき
回されては困りますので、樺山さん第二の疎外の説明に入つ
てください。」

五、労働からの疎外

強いられし労働ならば作り出す物は吾が身に帰らぬものを

樺山は苦笑した。「あまり神経質にならないでください。
それこそ疎外ですよ。自由に批判したり反論したらいいので、
そういう討論があつたからといって、研究会が政争の場にな
つたという程のことはないと思います。」

では次に行きます。どうして生産物からの疎外が起こるか
といいますと、『労働からの疎外』が原因なのです。つまり
生産物からの疎外が起こるのは、生産物を作り出す労働とい
う活動が、それを行っている労働者自身の自己の能力の実現、
自己実現として感じられないからです。つまり身をすり減ら
し、ただ苦役としか感じられない強制された労働だからです。
これが第二の疎外つまり『労働からの疎外』です。」

山本が口を開いた。「勉強でも同じですね。受験体制の下
で、強制された勉強だと苦役で少しも楽しくないけれど、自
分が興味や関心があつて自発的に調べたり、トレーニングを
したりするのは自己実現で楽しいですからね。」

「それじゃあ第三と第四の疎外は北野大蔵さんに説明お願
いします。」と寺田は手持ち無沙汰にしていた北野にふつた。
「樺山さんがせっかくご機嫌で説明されていたのにいいので
すか？」樺山は平気な顔をして「いや助かります。どうぞ、
どうぞ」と返した。北野は「それじゃあ、やります」と深呼
吸した。

六、非有機的の身体

身体の器官としてはつながらぬされど吾が身よ抛りて立つ故

「第三が人間の本質とは何かに関わるのです。いわゆる『類的存在からの疎外です』類的存在というのは Gattungswesen の翻訳ですから、類的本質や種族の本質と訳してもいいのです。つまりなぜ労働が強制されたものに感じられるかということですね。それは人間が本質を喪失しているからなのです。ですからマルクスは明らかに労働を人間の特長として本質として捉えていたわけです。類的存在ということで共同性の意味で受け止められるかもしれませんが、労働疎外論の文脈ですから、そういうものも労働が共同で行われることに伴うものと受け止めたほうがいいでしょう。」

司会の寺田が確認した。「労働疎外論の文脈では人間の本質として労働が捉えられているということですね。その場合の労働はどのように定義されているのですか？」

「マルクスは人間と言う種族が生産的な生活するためには、彼がそのために必要とする非有機的自然、これは非有機的の身体とも捉え返されますが、それが他の動物よりも普遍的になっっていることを強調しています。」

寺田は得意げにオーバーアクションで「オツと、ストップ、ストップ。おかしな言葉が出てきたぞ、何それ？『非有機的自然』『非有機的の身体』？そういうのを聞き流すと何のことが全く分からなくなってしまう。北野さんは哲学プロバ―だから簡単かも知らないけれど、みんな分からないですよ、そういう用語は相手が中学生程度だと思つて説明してください。」

北野は頷いた。「なかなか難しい注文ですね。有機・無機というのは化学の用語ですが、ここでは自然は人間の物質性ですね。そこで『非有機的自然』を『生物的でない自然』とか、『非有機的の身体』を『生物的でない身体』の意味にとつたらいけません。有機的というのは器官的という意味なのです。つまり器官的には人間の身体とつながっていないし、人間の身体に含まれないけれど、それでも人間の自然に含まれると見なしてよい、人間の身体とみなしてよいという意味なのです。」

たとえば蓑虫の蓑は蓑虫ではないけれど蓑虫の物質性、蓑虫の身体とみなしてよいということです。貝などは貝殻で区別されますが、実は貝殻は器官的には貝ではないのです。でも貝殻を含めて貝ですよ。貝の身体だけだと貝とは分かりません。」

これが例えばビーバーなんかだとビーバードムや水中家屋もビーバーの自然、ビーバーの身体だということになります。同様に捉えますと、人間の非有機的自然や非有機的的身体は人間環境としての地球全体ということにもなりません。」

「それじゃあ生態系を重視するエコロジイの考え方は若きマルクスにも見られたということですね。」山本は感心して言った。「そうです」と北野は応えた。「マルクスは自然が自然科学や芸術の対象として存在するだけでなく、衣食住の素材としても存在するということです。つまり自然は精神的にも物質的にも人間の生命活動を構成している人間の非有機的的身体だとします。死なないためには絶えず交流しなければなりませんという意味で人間の身体だということです。それは自然と自然の交流でもあるということです。だって人間は自然の一部なのですから。だから人間の生命活動を自然から切り離して捉えてはいけないということです。」

寺田はくどくなってきたので口をはさんだ。「そのあたりマルクスはねちねちと展開していますが、人間は自然の一部であり、自然は人間の身体だと強調したうえで、その一体的な関係が、疎外よって感じられなくなってしまうということなのですね。それと労働疎外論との関連が分かりにくいのですが。」

「だから人間の場合は、自然との生命の代謝を生産活動として労働を通して行うわけですね。それは自然の大きな営みの一環として行われているのですが、人間にすれば労働は現実の疎外の中では、個人的なあるいはせいぜい家族の生活を維持するための活動としてしか意識されていないのです。つまり大いなる生命の活動という本来の類的生命活動である労働は、手段に貶められてしまっています。本来個人の生命や生活の維持は類的活動のためにあったのだけれど、それだけが目的になってしまったのです。」

「ハイ」田口幸蔵が拳手した。「個人の生活維持と類的な生活とどちらが目的で、どちらが手段などどうして判断するのですか？それぞれみんな自分の生活のために働いているわけでしょう。結果として類や自然を再生産しているかもしれないけれど。」

北野は頷いた。「疎外論を展開していた時のマルクスは、人類という普遍的立場で自然との関係を考えていたわけですが、しかしそれは哲学的な発想ですわね。現実社会の諸個人は田口君の言うように私的利益で動いている。現実社会に即して捉えるなら、哲学的な本来のあり方などに即して説明しても、相手にされないわけで、それで哲学的良心の清算が宣言されて、『フォイエールバッハ・テーゼ』にいくわけです。」

寺田は困った表情になった。「北野さん、四つの疎外の説明に集中願いませんか。疎外論を払拭したかどうか、いわゆる切断問題ですね、それはみんな関心あるので後でじっくりやるとして、四つの疎外をしっかりと踏まえておかないと中途半端になっちゃいますので。」

七、類的存在からの疎外

労働は糧得るための犠牲かは、己が力の発現ならずや

「ええ、仰るとおりです。」北野は少し恐縮した。「第三の疎外は『類的本質からの疎外』ですが、動物の場合生命活動から自分を区別しません。本能のまま行動して個体と種族の存続を図っているわけですね。ところが人間は意識的に自分の生命活動を対象化します。」

ところが疎外された状況では、彼は個人的な家庭生活の存続や私利私欲を目的として類的な生命活動を行うわけです。ですから当然、労働によって自然を再生産していても自然のことは手段に過ぎません。社会の分業を分担していても社会のことも自分の私利私欲のための手段になってしまっています。

ただ欲しいのは家族生活のための生活手段ですが、それは労働者の場合は賃金によって購入するしかないのです、結局食

いつなくための賃金を何とか手に入れようとする関心しなくなってしまうのです。本来なら人間の特長的な生命活動である意識的に自然を改造し、再生産するという労働を自己の類的本質存在として、自己実現として、つまり自分の能力が発揮できて自然を我が物とし、生産物を作り上げたことへの喜びとしては感じられないのです。」

「つまり大工さんは家を建てても、それでいくら収入になるかが問題であって、その家としての素晴らしさはただお金に換算されてのみ意味があるということですね。だから別に大工でなくてもいいわけで、散髪屋でも漁師でも、タクシーの運転手でもいいわけだ。より効率的に収入になるかだけに関心があるので、労働力が流動化しやすくなるのですね。」

「『資本論』では具体的有用労働には無関心になって抽象的人間労働がどれだけ積み上げられて価値になっているかだけにしか関心がなくなるといふ問題として展開されているようにですね。」

司会の寺田は少し焦っているようだ。「第三の類的存在からの疎外で人間は自然を疎外するとなってますが、自然と切断されるだけでなく、労働という類的本性から疎外されるといふことですね、労働が最大の目的であり喜びであったのが、金儲けのための手段であり、犠牲であるということになり、

結局苦役でしかないということになるのでしょうか。それで第四の疎外はどうなるのですか。」

八、人間からの人間の疎外

お互いを目的として結ばれしコミュニティにも疎外はありしか

「やはりどうして三つの疎外が起こったかと言うと、人間同士が本来は類的生命としてひとつの全体の中で結合している筈なのに、実際は疎外しあって相互支配の状態にあるからなのです。これを『人間からの人間の疎外』と呼んでいます。」

この場合の人間は個人の意味ですね。個人同士の関係としては互いに他者として対立し合い、疎外し合っているのです。これは市民社会を見れば分かります。市民社会は全体としては社会的分業で互いに補完しあって助け合っています。一人はみんなのために働き、皆は一人のために働いています。」

でも私有財産制の下では、どうでしょう。商品として生産物を所有し、交換によって必要な商品を手に入れていますから、それぞれ自分の労働は価値を入手するための犠牲であり、それは他人のための支配された労働なのです。逆に他人の労働を貨幣によって入手することで支配しているわけです。こうして現実には相互に支配しあっているわけですから、人間関

係は互いに目的ではなく手段でしかありません。これにはカントの倫理学の影響があるかもしれませぬ、神先輩。」

神は急に振られて少し驚いたが、すぐになじり合った。「それは同感ですね。カントは近代市民社会を互いの人格を手段にし合う『手段の王国』だと見なしていました。でも人間は他の人格や自己の人格を手段にし合うだけではないのです。自己及び他者の人格を同時に目的としても扱えなくては人間の尊厳はないのです。」

商品経済では互いに手段にし合うだけで目的とし合うことはなくなっているのです。それでも互いに助けが必要になったり、いざと言うときには、欲望に流されずに義務に従うことができなくてはならない、カントに言わせれば、そこに道徳性があるというのです。」

そこで自律的に行動できなければ人格は成り立たないとしたわけです。カントは資本主義のなかでこそそれができなければならぬとしたのですが、マルクスは互いを手段とし合っている私的所有の市民社会を変革して、互いを目的にし合う社会を形成しなければならぬと考えたのです。」

九、私有財産の起源

疎外生むその根源が私有なら私有の起源は如何に説きしや

寺田はほつと一息ついた。「一応四つの疎外が出揃ったところで、疎外が起こる原因ですね、それは私的所有が原因だということでしょう。しかしその私的所有はどうして起こったのか、その原因についてはどうですか？」

北野が拳手した。「それが循環論法ですね。つまり歴史的起源から説き起こした議論じゃなくて、資本主義の疎外の現実から、疎外の下では労働が強制的になり、生産物も他者のものになって主体を圧迫する。だから疎外されるのだということですね。それで視点を変えて唯物史観から私的所有の発生を問題にせざるをえなくなります。すると疎外論自体も使えなくなるのです。」

樺山も発言を求めた。「人間論という意味だね。疎外論では人間を協同で労働する主体として捉えているのです。協同存在という意味で類的本質をもっていて、労働によって類的能力を発揮し、自然を変革し、再生産するわけです。その意味で自然全体が人間の生命の何たるかを示している人間の自然です。自然というのはNaturですから本性ということでもあるわけです。自然が人間の身体だという表現もそういう人間とは何かを知りたければ自然を知らんなさいということな

のです。疎外論はその自然が私的所有の下では人間の他者として現れ、人間によそよそしい、ある場合には公害だらけで健康にも悪い、機械や自動車などとして凶器にもなっている、そういう事態を告発するものでもあるわけです。」

神は感心して言った、「樺山さんなかなか現代的な問題意識で迫ってますね。大学院は哲学専攻に来てくださいよ。北野さんと樺山さんがくれば懐徳館の哲学科の大学院は最強ですよ。」

寺田はおもむろに言った。「大変白熱してきましたね。いよいよ疎外論から唯物史観への視点変更、アルチュセールにいわせればヒューマンイズムから科学への切断の問題へ入ります。『フォイエルバッハ・テーゼ』ですね。ここで休憩を取ります。まだまだ続きますよ。」

第十三話 青年マルクスの人間観をめぐって

2 『フオイエルバッハ・テーゼ』目次

一、『フオイエルバッハ・テーゼ』とは何か？	172
二、対象（事物）が主体の実践とは	173
三、物質の根底に実践を置くとは	174
四、事物も人間の姿である	175
五、第一義的存在は何か	176
六、社会的諸関係のアンサンブル	176
七、本質規定は関係規定か	177
八、事的人間論の可能性	178
九、図式主義からの脱却	179
十、哲学の止揚か、変革の哲学か	181

第十三話 青年マルクスの人間観をめぐ

つて 2 『フオイエルバッハ・テーゼ』

一、『フオイエルバッハ・テーゼ』とは何か？

遅れたる意識変えなば新しき世は来たれるかゲルマンの地に

十五分程休憩をとってまた白熱の研究会が再開である。司会の寺田が再開を宣言した。「『フオイエルバッハ・テーゼ』の検討を通して、マルクス人間観に根本的な転換があったか、なかったかという問題を中心に議論していきたいと思いますが、異議はありますか？」特に発言はなかったので、「異議なしと認めて議論を進めたいと思います。ではそもそも『フオイエルバッハ・テーゼ』とは何かについて北野大蔵さんから説明願いますか。」

「人間学的唯物論の哲学者であるフオイエルバッハについての覚書ですね」と言って北野は少し腕組みした。「実はフオイエルバッハを含めてドイツの青年ヘーゲル派の哲学者たちを大上段から批判する『ドイチェ・イデオロギー』の執筆をエンゲルスやモーゼス・ヘスと計画していたのです。そのフオイエルバッハの部分執筆に当たったメモだった

と思われます。」

寺田は補足するように言った。「フオイエルバッハや青年ヘーゲル派は、哲学や思想の変革すれば、つまり意識の変革をすれば、それで社会が変革できるかのように捉えていたのでしょうか。それではだめだというわけですね。」

北野は頷いた。「まあそういうことですね。疎外論に対して唯物史観を対置するのも意識変革には違いなのですが、意識やイデオロギーというものが生じ、変化し、消滅するのはどうしてかということが分かってないとだめだということです。既成の哲学を超越する新しい哲学、既成のイデオロギーを乗り越える別のイデオロギーではまた新しいもの乗り越えられてしまうのです。マルクスが目指したのはそういう哲学やイデオロギー自体を批判し、超越することだったのです。」

「ということはマルクスの哲学とかマルクス主義イデオロギーということ自体、マルクスの本意ではないことになりますね。」と寺田は確認した。

「当然ですね。マルクスは既成の哲学に対して新しい哲学を対置したのではないのです。哲学そのものを乗り越えようとしたのです。ところがマルクスはヘーゲル哲学を転倒させて観念論的弁証法を唯物論的弁証法にしたとか、弁証法的唯物論の哲学を構築したとされますが、そういうのは後の人々

が勝手に読み取ったにすぎません。彼は哲学者をやめてしまっているのです」北野は応答した。

「北野さんそりやあまずいよ。」榊はおもわず口を挟み、挙手した。「これから哲学専攻の大学院を受験するのに、反哲学では厳しいな。なにしろうちの大学院でも哲学科の教授連はドイツ観念論中心だからね。」

それはさておき既成の哲学が現実を解釈し、理屈づけるだけだったことに対して、マルクスが強く反撥していたことは事実だろうね。しかし既成の哲学のあり方を根底から問い直すということがまさしく哲学に他ならないんで、そういう意味での哲学解体の試みは、ソフィストやソクラテス、ペーコン、コントなどでも見られます。でも彼らは大哲学者として位置づけられているわけです。」

榊山が挙手した。「そのことも念頭に入れて、テーゼの内容分析に入った方が建設的ですね。まず1から訳してみましよう。」

二、対象（事物）が主体の実践とは

眼に入る桜もヒルも客体が吾が行ひの姿ならずや

これまでであったあらゆる唯物論、それにはフオイエルバッハのものも含まれます。その主要な欠点は、対象や現実や感性が**客体**あるいは**直観**という形式のもとでしか捉えられていなかったことです。つまり**人間的な感性的活動**、すなわち**実践**として、**主体的**には捉えられていないということです。それで、**活動的側面**は、**唯物論**とは対立している、**観念論**によって**抽象的に展開**されてきたにすぎません。観念論ではもちろん**現実の感性的な活動**そのものを知ることができませんから。

フオイエルバッハが欲しているのは**感性的な客体**です。つまり**思考の客体**から**現実**に**区別**された客体を欲しているのです。しかし彼は**人間的活動自身**を**対象的な活動**としては捉えていません。それゆえ、彼は『キリスト教の本質』の中では、**ただ理論的な振る舞い**だけが**本来の人間の活動**とみなされていて、**実践**はその**さもしユダヤ人的な現象形態**でのみ捉えられ、**固定化**されているのです。したがって、彼は「**革命的な**」「**実践的・批判的な**」**活動の意義**を**把握**していないのです。

寺田は唸った。「ウーム、これは手ごわいぞ。対象や現実や感性を客体や直観の形式でなく、人間の感性的な活動である**実践**として**主体的**に捉え返しなさいということでしょう。『対象が**実践**だ』ということがまず**チンプンカンプン**ですね。樺山さんの**訳**し方に**問題**は無いのですか。」

山下が発言した。「私は日本史でドイツ語は分かりませんが、ポイントは何事もただ**客観的に存在**する**事物**や**現実**として**観照**の対象にするのではなくて、**主体的な実践**の**契機**として捉え返すことが大切だということなのでしょう。」

三、物質の根底に実践を置くとは

物質の底に実践置きたらば唯物論は崩れ落つるや

北野が手を上げた。「実はこの部分の**訳**しかた次第で**弁証法的唯物論**は一挙に崩壊するのです。東ドイツでは『**弁証法的唯物論**』という呼び方をやめて『**実践的唯物論**』にしようという人もいるのです。」

対象 Gegenstand は要するに 対して立つ だから感性の対象である**事物**のことなんです。それらを**主体の実践**として捉え返しているのです。ということは、**事物の根源**に**実践**をおいていることになります。要するに**実践**を**第一義的な存在**と捉えて、**客体**もあくまで**実践の姿**として**主体的**に捉え返しているのです。」

山本義男は驚いて言った。「**唯物論**なのに**物質**を**根底**に置かないで**実践**を**根底**に置くのですか、そりゃあ納得いかないな。実践をするには**主体**や**客体**が必要だし、その際に**主体**も**客体**も**物質的な土台**の上に存在していないと、**実践**にならな

いでしょう。」

北野は首を振って、腕まで大きく振ってジェスチャーで否定した上で言った。「主体も客体も、物質も観念も人間が実践するから、その契機として始めて問題になる力テゴリーです。生きる営み、生活実践、その上に生産や流通や消費などの経済的な実践があり、それらの土台の上に政治的実践があります。」

山本は食い下がった、「そんなことは分かりきっていることです。実践を通して観念が形成されるのですから、しかし唯物論という物質が土台だという意味を取り違えていると思います。うまく説明できませんが。」

司会の寺田が、自分の出番だとばかり発言した。「たしかにすれ違いがあるようですね。唯物論というのは世界観です。我々は目的意識的な活動である実践をするから、世界を知るわけですが、だから実践が世界の根底にあるとは考えないで、逆に世界の中で実践していると考えます。そして世界を構成している諸現象や諸事物の根底に何かあるかですね、それを推理するわけです。その推論の結果として到達したのが物質ですね。タレスなら水ですよ。何らかの物質に求めるのが唯物論です。プラトンならばアイデアですからプラトンは観念論なのです。神の意思を根底に置く人もいますでしょう。」

北野はすこしうんざりのような表情を見せて反論した。「物質を根底に置いたらどうしてそういう物質が生じたのかということになります。そこで第一質料をアリストテレスは考えただけですね。しかしそういうのは頭の中で考えられた形而上学的な存在に過ぎないのです。実証のきかない実在概念ですから、結局独断論でしかありません。それに対して実践は実践している以上、日々実証されています。そしてそこから主体も客体も導き出されているのですから、物質の代わりに実践を置くのはごく自然だと言うことですね。」

四、事物も人間の姿である

実践を事物と思い込みしなら事物も人の姿ならすや

榊は興奮ぎみに発言を求めた。「マルクス解釈としては、問題があるかもしれませんが、人間論としてはおもしろいですね。」

実践という人間の活動がすべての存在の大本だと言うことでしょう。ところが我々は、それを人間とは別の客体として捉え、眺めているわけです。疎外論の延長線にあるとしたら、独立して主体とは別物になってしまっています。

しかしマルクスはそれを己の実践として主体的に捉え返せというわけでしょう。ということは桜の花をぼんやり眺めて

いたり、紅葉を愛でたりしているけれど、元々そういう観光的な自然風景も長年の実践によって作り上げてきたわけですね。

放っておくと、それも破壊されてしまうわけです。実は人間の実践の姿だったということなんです。こうして人間は、単なる身体的存在に限定されずに、客体と思われているものも含んでいるということなのです。」

五、第一義的存在は何か

物質を土台に置きし人ならばそのなお底に実践認むや

「樺山さんはどうお考えですか。」寺田は北野の解釈は危険な要素があると感じたのか、樺山に何とか反論を期待した。

「北野さんの解釈はなかなか鋭いのですが、この時期にマルクスはエンゲルスと協同して唯物史観を形成中なわけですね、唯物史観というのは政治的、イデオロギー的なもの土台に経済的な関係を見出し、その土台から説明しようとするものでした。」

ですから物事を実践として主体的に捉える必要を強調したからと言って、事物の根底に実践をおいたり、実践を物質の

代わりに第一義的実在と捉えたというのは読み込みすぎではないでしょうか。

実際、我々は毎日社会的実践、政治的实践、学問的实践、生活実践をしているわけですが、実践に際して常に考慮しなければならぬものとして、実践の土台になっている経済的な諸条件ですね。この土台をしっかりと踏まえ、土台の改革まで視野において実践しなければならぬという理論が唯物史観です。」

北野はこの問題にこだわるのは時間の無駄だと悟ったようだ。「『実践的唯物論とはなにか』については、また論点を整理してゆっくり時間をかけてやりましょう。テーゼの2から5は、人間論の検討という本日の主旨から考えて、時間の関係から割愛して、6の『アンサンブル規定』に直接入った方がいいと思いますがどうですか、寺田さん。」

「私もそれを提案しようと思っていたところです。異議ありませんか。では北野訳でいきましょうか。」北野は意気込んで応えた。「わかりました。では訳します。」

六、社会的諸関係のアンサンブル

巨大なる類的能力疎外して神たてたるや絆なきゆえ

フョイエルバツハは宗教的本質を人間的本質に解消します。しかし、人間的本質は個々の個人に内住する抽象物ではないのです。現実には、それは社会的な諸関係の総和(アンサンブル)なのです。

フョイエルバツハは、「この現実的な本質の批判に携わろうとはしないのです、それゆえ無理矢理に」

- 1 歴史的経過を捨象し、宗教的心情をそれ自身にたいして固定化し、抽象的な・孤立した・人間的個人を前提とし
- 2 本質を、単に「類」としてのみ、内的な、無言の、多くの個人をただ自然に結びつける普遍性としてのみとらえることができるのです。

寺田はプリントを指差しながら尋ねた、「フョイエルバツハは宗教的本質を人間的本質に解消します。」ということはどういう意味なのか。

北野が応えた。「フョイエルバツハは神を人間の類的能力を疎外したものと捉えたのです。つまり人間は一人ひとりでは一つのことしかできないわけですが、皆合わせた類としては巨大な文明を築き上げています。ところが個々人はそれを自分のものとはできないし、人類全体を自己と感ずることもできません。それでこの類的性格を他者として神として疎外したのです。ですから神という宗教的本質は実は人間の類的本質の疎外態だというわけです。そこで人間の類的本質こそ信仰の対象にすべきだという人間教に行き着きました。」

七、本質規定は関係規定か

個々人の内にはあらめ本質は、人と結べる関わりこそあれ

寺田はちよっと首を傾げて、「本質は dem einzelnen Individuum innewohnendes Abstraktum 個々人に内住する抽象物」というのはどういう意味でしょうか、人間の**本質**は例えば労働能力としては身体に備わっているということですか、マルクスはそれを否定しています。ということは**現実**には機械を使ったり、雇用されて工場で働いたりしなければ発揮できないので、人間の**本質**は**社会関係**だということですか。」

北野は神に向かって言った。「この箇所の解釈は大変微妙なので、神先輩にお願いしますよ。」神は振られて戸惑った。

「いや、北野さんや樺山さんの方がしつかり解釈されるのではないかな、ここではやはりフョイエルバツハは人間の**本質**について個と類の関係で論じているので、個々人に内属する**類的能力**の集合として**類的本質**・**類的存在**が扱われてしまっわけです。」

たしかにキリスト教を批判するだけならそれでもいいでしょうが、マルクスにすれば、そういう**抽象的な議論**に止まっ

ていても仕方がないということでしょう。個々人が神に類的能力を疎外しなければならぬのは、実は社会的分業や商品関係あるいは資本関係によって、ばらばらの孤立した個人になり、社会的諸関係に取り込まれて規定されているからなのです。それが問題なのだから、人間の本質も現実的に捉える場合は、社会的諸関係の総和として捉えるべきだということですね。」

北野はすぐに反論してきた。「それならフォイエルバッハの捉え方を否定していることになりませんか、社会批判の視点にたった時に諸関係の総和が問題になるということですから。マルクスは本質が事物に内在するという捉え方に反対しているわけです。」

人間は本能的な存在ではないので、予め本質はないのです。本質を社会的な関わりによって生じる関係として捉え返すべきだとしているわけです。これは個物を実体として捉え、個物である実体に内属するものとして本質を捉えてきた既成の捉え方に転換を迫っているのです。」

樺山が発言を求めた。「人間の本質が内在するという場合、その代表的な思惟や言語や労働のどれをとっても、そういう能力を保持しているという意味では内在しているわけですが、どれも社会関係の中で生じるものです。つまりコミュニケー

ションの中で発達してきたのですから、その意味では個人に内在するという言い方はふさわしくありません。」

ヘーゲルも本質規定を他者との関係を反省することで生じると考えています。フォイエルバッハも類的能力は分業によって発達したと考えていることは伺えます。」

ただマルクスにとって不満なのは、フォイエルバッハが神として疎外していたのを人間に取り戻せばすむかにいって、肝心の人間の現実の社会的諸関係を問題にしていないうことです。社会的諸関係の変革こそが問題なのだという事ですね。関係面を問題にしていけないので、本質を内在的にしか捉えていないというように感じたのでしょうか。」

八、事的人間論の可能性

人なるは身にあらざりて行ひや、関わりとして事ぞ連ねる

北野はじれったい表情になった。「人間を個体的身体という実体として捉えるべきではないと言いたいのです、マルクスは。つまり実体としての身体に本質が内在しているのではないというのは、人間はそういう実体的な存在ではなく、社会的諸関係の総和、言い換えれば社会的諸関係の網の目の結節として存在していると捉えるべきだとマルクスは主張しているのではないですか。」

寺田は頷いた。「なるほどね。でも身体なしには存在できません。身体が衣食住などの自然との物質代謝を行うことを土台としているんな社会関係も取り結ばれるのですから。」

北野はもどかしそうな表情でいった。「こうして研究会で議論をしたり、バイト先で働いたり、家庭で食事をしたり、様々な関係行為をしていますね、そうした関係の積み重ねとして人間は存在しています。」

そしていろんな関係の網の目の結節として我々は存在しているわけです。もちろん関係を取り結ぶものとしての身体は存在しますが、それは行為や関係を反省したときにそれをしていたのは、この身体だというように後から反省されるわけです。だから身体は第二義的存在なのです。」

榊が口を開いた。「実践という関係行為を存在の根底に置いたので、身体という物よりも事や関係を第一義的に捉えようという構えですね。最近廣松渉が盛んに『思想』や『情況』などに展開しています。」

ただマルクスの場合、事から世界を構成する事的世界観という哲学にたつて、統一的に論じているわけではありません。とはいえ、一つの読み方として参考にはなるでしょう。

それに人間論としては大変活き活きしたものになりますね。事的人間論だと常に実践の積み重ね、事件の連続として人間は展開します。そして事から世界を見ますと、意識と世界が一体ですから、世界がそのまま人間だということになりますね。」

九、図式主義からの脱却

音たてて崩れ行きしは何なるや吾が囚われし迷妄ならんや

寺田は腕を組んだ。「ウーム、パニックになってきたぞ、既成の弁証法的唯物論が音を立てて崩れてゆく、崩壊感覚ですね。」

榊山はあきれていった。「寺田さんすっかりしてください。世界の見方というのは一つが正しいというわけではありません。事物の集まりと見る見方もあれば、事や事態の連続や函数関係として見る見方もあります。マルクスを事的世界観で解釈できる箇所があつても、対立物の統一や闘争という弁証法的唯物論が大活躍している箇所もあるわけです。」

それにマルクスの生涯は一つの世界観で単色だったということでもなくていいのです。それより問題は、マルクスの叙述から何を学び、自分の世界観や人間論をいかに形成する

かです。」

榊は頷いた。「もし寺田さんが弁証法的唯物論が正しいと思っていたのなら、マルクスが弁証法的唯物論とまるで違う哲学を説いていたと分かったら、それに乗り換えるというのはおかしいですね。」

マルクスが正しいから弁証法的唯物論が正しいのではなくて、弁証法的唯物論が正しいと思われるから、それを唱えていたマルクスが偉大だった筈ですね。」

北野はにやりとして言った。「僕は元々スターリン、ミーチンのな弁証法的唯物論はどうもマルクスとは違うなという狙いをつけて読んでいましたから、マルクスが弁証法的唯物論とは違うほうがマルクスには共感をもてるのです。」

日本史の山下が発言した。「私たちは毛沢東の『矛盾論』が最も歴史の分析にぴったりしていたものですから、マルクスがそれから程遠いというのなら、マルクスが批判の対象です。もっとも毛沢東だって文革期以降は左翼小児病の典型です。」

榊山が榊に訊ねた。「ところで榊さん、マルクスや廣松は世界がそのまま人間だというような人間論を展開しているのですか。」

榊は首をふった。「マルクスの『人間の自然』という発想はそれに近いですね。廣松さんにはそういう人間論的な展開はないですね。ただ主観・客観認識図式を超越して、第一次的存在である事や事態から世界や諸事物や諸個人などをその構成要素として第二次的存在として検討するものですから、世界と人間は第一次的には区別されないことになりません。もっともその段階ではまだ人間という概念はでてこないから、世界が人間だというのもしびつたりこないかもしれません。」

榊山はさらに続けた。「むしろマルクスたちは、人間を理念的に捉えるのではなく、現実的諸個人として捉えなければならぬと考えていました。それをフォイエルバッハは類的存在としたり、ブルーノ・パウワーは自己意識としたりしたので、それらに反撥して社会的諸個人のアンサンブルだと捉え返したのがマルクスだったわけですね。だからむしろ社会的諸関係を取り結んでうごめいている身体的諸個人こそ、マルクスの間像だったわけですから、多分に実体的なものです。関係や事に還元する廣松の解釈ははやとちりですね。」

寺田は感心して言った。「榊さん、今日は冴えわたっていますね。北野さんの廣松説にさらわれそうになりましたが、今のお話ですっきりしたようです。身体的諸個人に基礎をおいたというのは説得力を感じます。さかんに『ドイチエ・イデオロギー』では衣食住生殖を土台に展開していますものね。」

この問題は今日一日で決着つきそうにありませんから、次に行きましよう。」

十、哲学の止揚か、変革の哲学か

様々に論じるだけでは暇つぶし、いざ起ちて言えヴナロード（人民の中へ）と

「哲学者たちは世界を様々に解釈してきたにすぎません。肝心なことは世界を変革することなのです。」

寺田は自分で訳して、パチパチと手を叩いた。「この言葉が一番素敵ね。実に単純明快だしね。でもこの言葉が、『経済学・哲学手稿』の疎外論という哲学的立場からの切断宣言だという解釈が出てきているわけですね。」

山下が手を挙げた。「たしかに既成の哲学には現実をあれこれ解釈して合理化する観念論的な哲学が多かったわけですから、哲学者たちを批判しても、哲学の放棄だと解釈する必要は全くないでしょう。」「同感です。」「樺山が加勢した。」「この場合の哲学者たちというのは『ドイチェ・イデオロギ』の青年ヘーゲル派の人々を一番念頭に置いているのですから、揶揄しているのです。」

つまり本来の哲学者だったら解釈ばかりしてはだめで、根底的に捉え返し、批判し、変革するものでなければならぬのです。マルクスはギリシア哲学に親んでいましたから、知ることと行うことは一つであるというソクラテスの立場を最も哲学的だと思っていたでしょうから。」

「問題はその青年ヘーゲル派の中にマルクス自身の『経済学・哲学手稿』の疎外論の立場が入っているのではないかということですよ。」「寺田は心配そうに言った。木村雄二が発言した。「もちろん資本主義の疎外構造を分析し、批判するというのは様々な解釈の一つにはいるでしょうね。肝心なことはそれを変革することだというわけです。そのためには唯物史観が必要だったのでしょうか。」「

寺田は怪訝な顔をした。「ということは、マルクスは以前のマルクスを青年ヘーゲル派として批判し、疎外論を卒業したということですか。」「

木村は頷いた。「唯物史観だって新しい観方ですが変革の必然性とその主体が労働者階級であることを自覚させる論理になっっているのです。古い生産様式生産力の発展に対応できなくなると、生産関係が変革されて新しい生産関係が生まれとしました。資本主義も労働者を搾取し、窮乏化していくと、生産力の発展と矛盾するようになり、生産過剰から恐慌が起こり、必然的に変革されると説いています。」「

高橋友也が反論した。「疎外論だつて疎外を告発して変革の必要性を説いているのですから、変革志向の実践の議論でしょう。」木村が応答する「もちろんそうです。やはり疎外状況を告発することに力点があります。どのように疎外を克服するのかという歴史法則的な展望はありません。」

他方唯物史観の成立によつて、労働者階級ははじめて最も無力で惨め自分たちが歴史変革の主体としての歴史的使命を担っていることを自覚できたのです。」

田口幸蔵が訊ねた。「それじゃあ木村さんも北野さんと同じように疎外論を払拭して唯物史観を確立したという立場ですか。」

しばらく木村は考え込んだが、「唯物史観がいったん確立すると、その方が反応がよかつた。惨めなだけだつた労働者階級が歴史変革の主体としての自覚にめざめたからです。」

疎外論はあまり使えないと感じたのでしようね。でも後の本格的に経済学批判を行う段になると、疎外の現実を見据えることも必要だし、労働者に訴える力もあると考えたのでしよう。『経済学批判要綱』や『資本論』では『疎外』という用語が用いられています。」

寺田はじれつたい表情になつた。「ではマルクスはこの時期にはいったん疎外論を批判して哲学を離れ、後期になつて哲学に復帰したのですか？」と問いただした。

北野は自信ありげに言つた。「後期のマルクスは疎外という言葉を使っていますが、それは疎遠な関係を示すだけで、初期のように社会構造を疎外構造として展開したものはないでしょう。」

それに疎外論に代わつて唯物史観というのは誤解のもとです。唯物史観は生産力と生産関係の矛盾を動力に歴史が発展すると言つ歴史観ですね。疎外論は歴史観ではありません。自分の労働の産物が労働主体を圧迫してくると言つ労働の構造認識ですね。これに取つて代わるのは、人間関係が物と物の関係に置き換えられ、物の属性となつたり、社会制度になつて人間から自立し、人間たちを拘束するとする物象化論です。」

寺田はお手上げのジェスチャーをした。「今日とはともその廣松渉の物象化論の検討までは入れません。『フオイエルバツハ・テーゼ』の段階ですから。北野さんはマルクスが物象化論を展開している箇所をきつちりリストアップして資料集をつくつて発表してくださいね。今日の議論としては疎外論と唯物史観が矛盾するかどうかです。」

矛盾しないとしたらたとえ一時的に疎外論のアプローチが見られなくなっても払拭と決め付けなくてもいいでしょう。まして哲学を捨てたというほどのことはないでしょう。」

山下里香が発言した。「唯物史観自体が疎外論だという人がいましたよ。というのが日々人民は生産力によって生産関係を作り上げていて、それに支配されているのだからこれは疎外論の言い換えだということです。だから表現を変えただけで払拭と言わなくてもいいという意見ですね。」

樺山は苦笑した。「それは面白い解釈ですね。それはともかく北野さんは廣松理論を信奉しているようですが、実は廣松さんは、疎外論は払拭しても、哲学は捨ててません。彼の物象化論も事的世界観に基づく哲学なのです。一方マルクスの表現には哲学者一般に対する批判や、哲学者に分かる言葉で言えば『疎外』と言ったりしています。哲学自体を批判しているように見えます。」

北野ははにかんで言った。「実はそうなんです。そこが廣松理論の限界かなと思います。アルチュセールのように『イデオロギーから科学』と言った方がすっきりするのですが。」

榊は「アツハツハツハ」と笑った。「そのアルチュセールも最近『資本論』批判を始めたそうです。つまりヘーゲル哲学の影響があるのがご不満らしい。それに『疎外』というタ

ーム（用語）が意外に多くあるのも気に食わないらしいのです。それでレーニンや毛沢東に関心が移っているのです。私は哲学を批判していると言っても、実際は既成の哲学に対する批判になっていると思います。それ自体新しい哲学の展開なのです。本人がどう考えていたかは綿密に調べないと分かりませんが、客観的にはマルクスは物事を根源的に捉え返す営みである哲学から外に出られないのです。」

寺田がこの発言を受けて言った。「そろそろ時間切れになりそうですが、要するに『哲学』の定義の問題でもありません。マルクスの哲学定義を調べる必要がありますね。マルクスが主観的に哲学を捨てたと思っても、我々の哲学定義からは哲学を捨てたことにならないということもいえるかもしれません。疎外論の払拭の議論につきましても、『ドイチェ・イデオロギー』や経済学関係のマルクスの著作から『疎外』の使用例をすべてリストアップする必要がありますね。これはマルクス研究会として共同で取り組む必要があるでしょう。それから最後に、この『解釈だけでは駄目で変革しなければ』という言葉の人間論的意義はどうなるのですか？」

榊が語った。「スタンダーだったかな『恋愛と革命のために人生はあるのだ』というような言葉があったと思います。が、ともかく人間として生きるということは、感じて生きるということでしょう。美しいものに感動し、世の不合理や矛盾に憤る。人民が塗炭の苦しみに喘いでいるのに自分は安閑

として無意味な時を過ごしている、これでは何のために生まれてきたのかということ。今、人類が抱えている、我々の前に提起されている問題は十分に認識されているはず。今変革に立ち上がらなくては、いつやるのですか。というように人間を道義的な存在として捉えたときに、この言葉はすごく重みがありますね。」

本書は大学講義用テキストとして十年ほど前から使用してきたものです。

二〇一〇年三月二十五日にPDF版に仕上げました。全く文字だけで画像が入っていないので、物足りない感もありますが、いざ改定するとして一応こつこつ教材で講義している見本として示しました。参考にしていただければ幸いです。